秋田県文化財調査報告書第222集

国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI

—— 上野遺跡 ——

1992・3

秋田県教育委員会

国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI

—— 上野（うわの）遺跡 ——

1992・3

秋田県教育委員会

序

秋田県には、私達の祖先が営々として築きあげてきた貴重な文化遺産が数多く残されています。

このたび、大館市を通る国道103号道路改良事業に係わり上野遺跡が発掘調査の対象となりました。

調査の結果、縄文時代前期～後期の竪穴住居跡、袋状・フラスコ状土坑からなる集落跡、及び該期の土器、石器が検出・出土したほか、本県では例の少ない擦文土器が平安時代の竪穴住居跡から出土しました。擦文土器は、その分布の中心を北海道におくものであり、当時の文化交流を考えるうえでも一級の資料と思われます。

本書は、これらの成果をまとめたものであり、地域の歴史や文化を学習・研究する資料として、多くの方々に御利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査及び報告書作成に際し、御協力いただきました秋田県土木部、北秋田土木事務所、大館市教育委員会、はじめ関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成４年３月10日

秋田県教育委員会

教育長　橋本　顕信

例　言

1　本報告書は、国道103号道路改良事業に係る上野遺跡の発掘調査報告書である。

2　自然科学的分析は、炭化材の同定を、パリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託し、その報告を掲載した。また鉄製品の分析を新日本製鐵ＴＡＣセンターに委託し、その顕微鏡写真等を巻末に掲載している。

3　調査ならびに本報告書の刊行にあたって、次の方々から指導・助言を賜った。（順不同）板橋範芳（大館市教育委員会）、秋元信夫・藤井安正（鹿角市教育委員会）、越田賢一郎（財団法人北海道埋蔵文化財センター）、久保　泰（松前町教育委員会）、宮　宏明（余市町教育委員会）、大島秀俊（小樽市教育委員会）、三浦圭介・岡田康博・羽柴直人・木村高（青森県埋蔵文化財調査センター）、大澤正己（たたら研究会、新日本製鐵株式会社）

4　本報告書の執筆は、高橋　学が行い、石川真一、小山内透、藤岡光男の協力を得た。

5　調査に係わる総ての資料は秋田県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

1　本報告書に収録した遺構実測図に付した方位は国家座標第Ｘ系による座標北を示す。

2　本報告書に収録した遺構実測図の縮尺は1/40を原則とし、適宜1/20、1/60縮尺も加え、それぞれスケールを付している。

3　本報告書に収載した遺物実測図の縮尺は、縄文土器・磨製石器・礫石器は1/4、平安時代の遺物及び土器拓影は1/3、剥片石器は1/2であり、それぞれにスケールを付している。

4　本報告書挿図中に使用した土色表記法は、農林省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。

5　挿図中の遺物実測図には器種を問わず通し番号を付した。それらは図版中の遺物写真の番号とも対応する。

6　土層註記は基本層位にローマ数字を用い、遺構埋土にはアラビア数字を用いた。

7　遺構番号は検出順に連番としたが、精査過程において欠番となったものもある。

8　遺構の種別を表す略号は以下の通りである。

ＳＤ……溝状遺構　　ＳＩ……竪穴住居跡

ＳＫ……土坑、フラスコ状土坑　　ＳＮ……屋外炉、焼土遺構

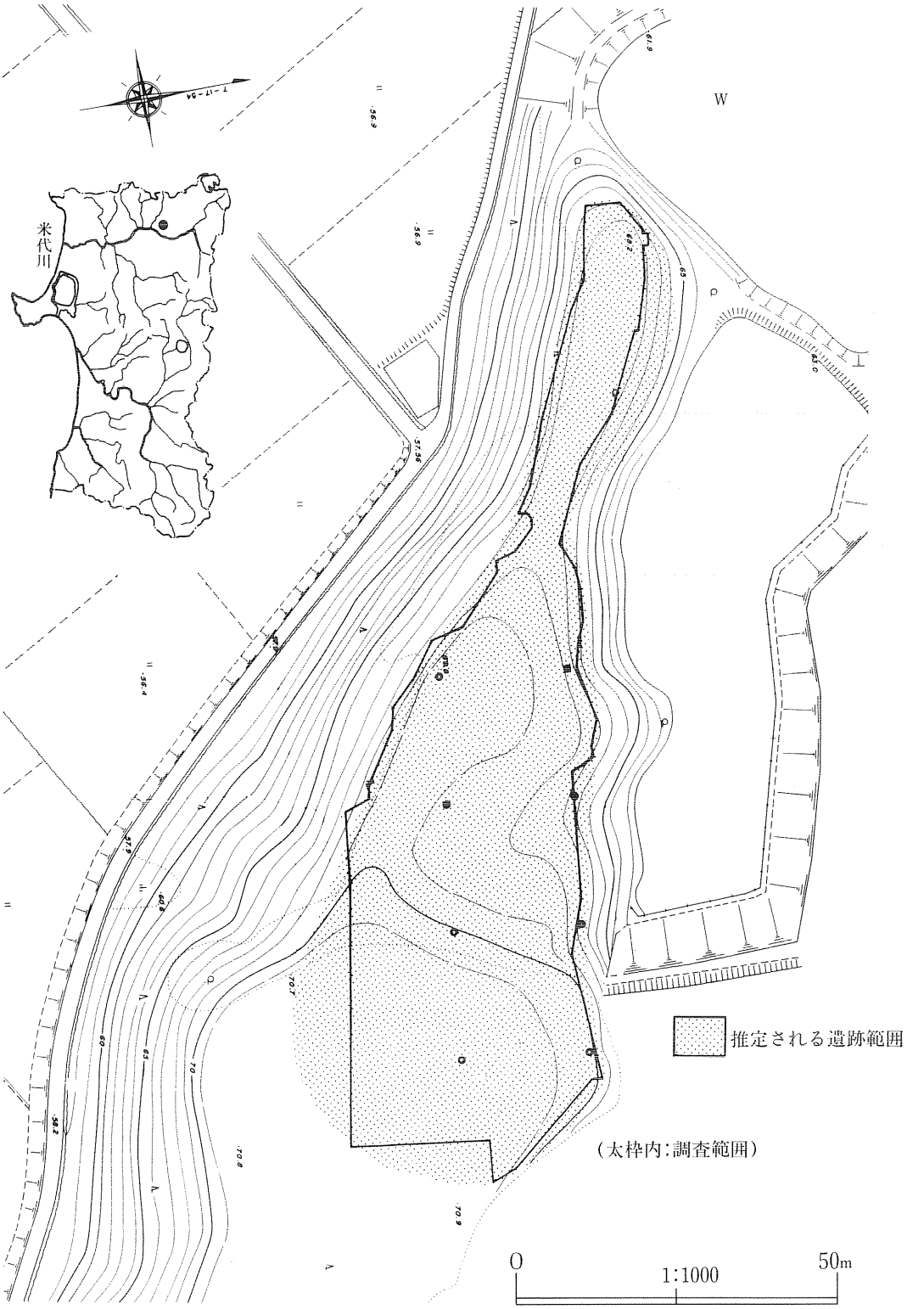
9　挿図中に使用したマーク、スクリーン・トーンは以下の通りである。その他については、個々に凡例を示してある。

地山　　焼土　　炭化物　　○土器　●石器

目　次

序
例言
凡例
目次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　発掘調査に至るまで …… 1
　第２節　調査の組織と構成 …… 1
第２章　遺跡の立地と環境 …… 2
　第１節　遺跡の位置と立地 …… 2
　第２節　周辺の遺跡 …… 2
第３章　発掘調査の概要 …… 6
　第１節　遺跡の概観 …… 6
　第２節　調査の方法 …… 8
　第３節　調査経過 …… 8
第４章　調査の記録 …… 12
　第１節　検出遺構と出土遺物 …… 12
　第２節　遺構外出土遺物 …… 70
第５章　自然科学的分析 …… 84
　第１節　炭化材同定 …… 84
第６章　まとめ …… 87
図版１～30



第1図　遺跡周辺地形図

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

国道103号道路改良建設事業（通称大館南バイパス）は、大館市山館～十二所間が既に終わり供用されているが、大館市片山～山館間の全長7,677ｍについては未開通である。この予定線は、山館から萩野台までは奥羽山脈から大館市東部に延びる山地から連なる台地上を通り、萩野台より北西部では市街地を避けて沖積地を通って片山の台地上に通ずるものである。路線のうち山館から萩野台に至る間は、標高70～90ｍの段丘縁辺部にあたり、昭和60年度の分布調査で８遺跡の存在が判明している。このうち昭和61年度は、上ノ山Ⅰ・上ノ山Ⅱ・餌釣・山王岱遺跡の４ヶ所について範囲確認調査が行なわれた。これを受け、昭和62年度に上ノ山Ⅰ遺跡、上ノ山Ⅱ遺跡、及び山王岱遺跡の一部（東側部分、第１次調査）の発掘調査が実施され、翌年に調査報告書・概報を刊行している。昭和63年度に入り、同改良事業の計画変更が、拡幅という形で示され、昭和62年度に発掘調査を終了した３遺跡（調査区）の周辺部調査の必要が生じることとなった。このため、平成元年５月から上ノ山Ⅱ遺跡を、同年７月より山王岱遺跡の第２次調査を実施した。同年山王岱遺跡と池内遺跡間の詳細分布調査が実施され、池内遺跡よりの台地縁辺部に縄文時代の遺跡が所在すことを確認した。小字名から上野遺跡と命名された。調査対象範囲が不明確であったため、平成２年に再度範囲確認調査を実施、路線内では2,830㎡がその対象となることが明らかとなったものである。

第２節　調査の組織と構成

所　在　地　　秋田県大館市池内字上野270外
調査期間　　平成３年８月19日～11月22日
調査目的　　国道103号道路改良事業に係る事前調査
調査面積　　２，８３０㎡
調査担当者　　高橋　　学（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
　　石川　真一（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
総務担当者　　佐田　　茂（秋田県埋蔵文化財センター主査）
　　佐々木　真（秋田県埋蔵文化財センター主任）
調査協力機関　　秋田県土木部北秋田土木事務所、大館市教育委員会社会教育課

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と立地

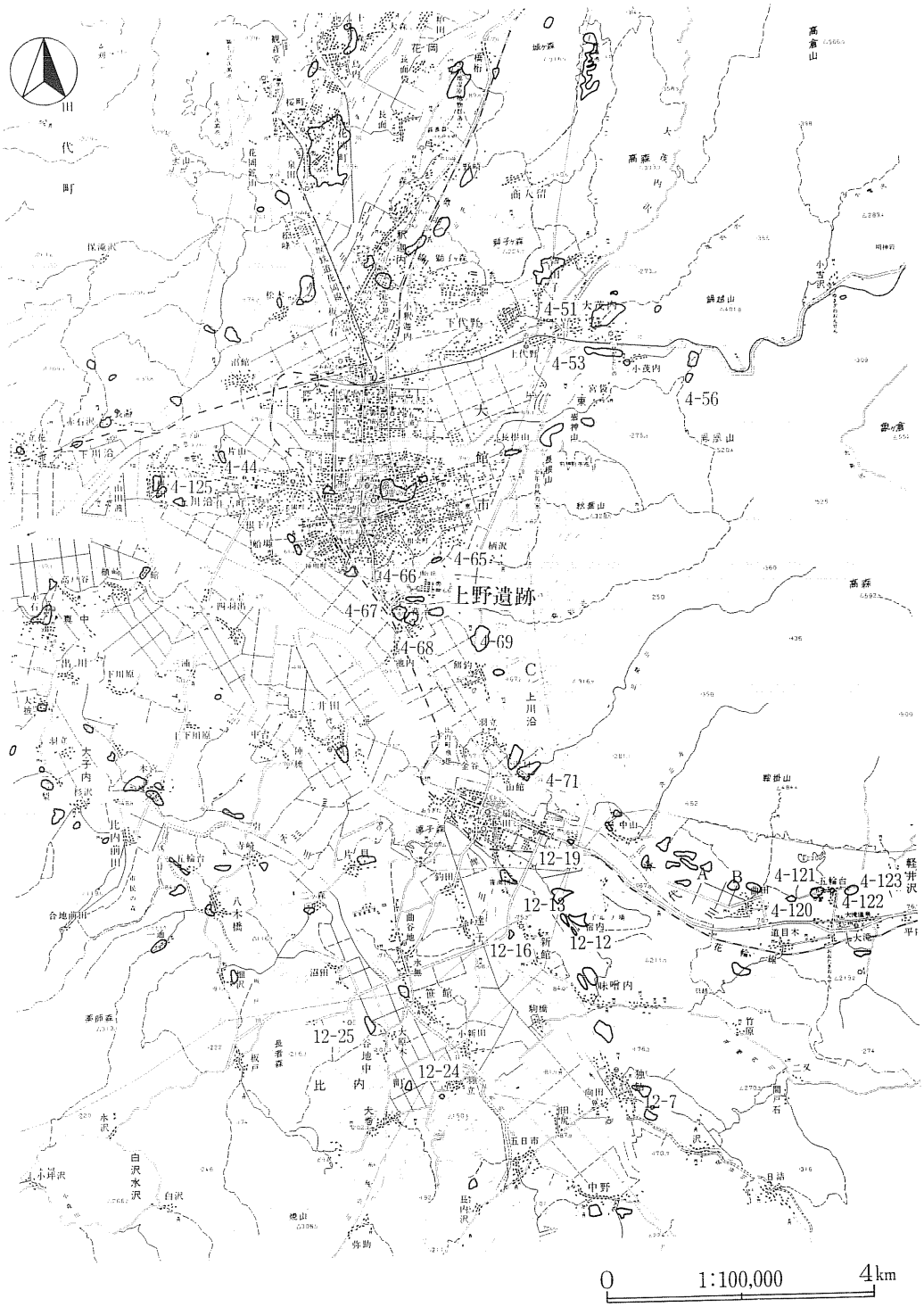
上野遺跡は、秋田県北東部の大館市池内に所在する。位置は、北緯40°15'15"、東経140°34'30"、ＪＲ奥羽本線大館駅の南南東約3.8㎞である。遺跡の占地する上野地区は、大館市東部に位置する高森（海抜593ｍ）を中心とする山地の西縁にあたる。この山地には大小の沢が形成されており、本遺跡に係わる沢として西から東に切れ込む餌釣沢が南限を画し、餌釣沢ほど発達は示していないものの、北限には柄沢が位置する。２つの沢に画された台地は必然的に東西に長く延びる。遺跡はこの台地の南西端にあたり、標高は70ｍ前後である。台地の前面（南面）には沖積地が広がり、その比高差約15ｍである。

遺跡は、地質的には第四系火山噴出物からなる関上段丘面に立地する。土壌図から読み取ると、本遺跡ののる段丘面は、黒ボク土壌（鯉渕統）からなる。

第２節　周辺の遺跡

第２図に示した本遺跡を中心とする東西約13.5㎞、南北約18.5㎞の図幅中には、縄文時代～中世・近世の遺跡が124ヶ所周知されている。この内、本節では過去に発掘調査された遺跡、上野遺跡周辺の遺跡に限って一覧表として掲載する。なお地図の番号は、1991年刊行の『秋田県遺跡地図（県北版）』に載せられている登録番号であり、頭の４は大館市を、12は比内町であることを示す。Ａ～Ｃは、遺跡地図刊行後に周知された遺跡であり、Ａ、Ｂは1991年に曲田地区農免農道整備事業に伴う発掘調査が実施された上聖遺跡、家ノ後遺跡であり、Ｃは1990年に上野遺跡同様国道103号道路改良事業に伴い発掘された餌釣遺跡である。

なお『遺跡地図』によると、周知の遺跡「餌釣館」（４－69）には、大館市で調査を行った山王台遺跡、秋田県が調査を行った山王岱遺跡が含まれている。


上野遺跡
4-44
4-51
4-53
4-56
4-65
4-66
4-67
4-68
4-69
4-71
4-120
4-121
4-122
4-123
4-125
12-10
12-12
12-16
12-19
12-24
12-25
12-7
A
B
C
D
0
1:100,000
4km

第２図　周辺遺跡分布図

第１表　上野遺跡周辺の主な遺跡一覧

大館市

番号	遺跡名	所在地	時代・時期	備考
A	上聖	曲田字上聖	縄文（前～晩）	
B	家ノ後	曲田字家ノ後	縄文（中～晩）	
C	餌釣	餌釣字館	縄文、平安、中世	文献1
4－13	福館橋桁野	福館橋桁野	縄文（前・中・晩）、平安	文献2
4－44	片山館コ	片山３丁目	続縄文、中世	文献3
4－51	諏訪台Ｃ	大茂内字諏訪台	縄文、弥生、平安	文献4
4－53	塚ノ下	茂内字塚下	縄文（前・中）、平安	文献5
4－56	玉林寺跡	茂内字鬼ケ台	縄文（中）、中世	文献6
4－65	扇田道下	字扇田道下	縄文（中・後）	
4－66	萩ノ台Ⅰ	小館花字萩ノ台	縄文（中・後）	
4－67	萩ノ台Ⅱ	小館花字萩ノ台	縄文（前・中）	
4－68	池内	池内字上野	平安	文献7
4－69	餌釣館 （山王岱・山王台）	餌釣字山王岱、 柄沢字山王台	縄文、平安、 中世	文献8
4－71	山館上ノ山	山館字上ノ山	縄文（早～晩）、平安	文献9
4－120	沢口	曲田字沢口	縄文（後）	文献10
4－121	鳶ケ長根Ⅱ	軽井沢字鳶ケ長根	縄文（晩）	文献10
4－122	鳶ケ長根Ⅲ	軽井沢字鳶ケ長根	縄文（晩）	文献10
4－123	鳶ケ長根Ⅳ	軽井沢字鳶ケ長根	縄文（早、前、後、晩）、弥生	文献10
4－125	芋堀沢	餅田字根下戸道下	縄文（前、中）	文献11

比内町

12－7	大日堂前	字大日堂前	縄文、平安	文献12
12－12	袖ノ沢	字宿内袖ノ沢	平安	文献13
12－13	横沢	字扇田字横沢	縄文（早、中）、平安	文献13
12－16	真館	真館字真館	平安	文献14
12－19	本道端	扇田字本道端	縄文（早～中、晩）	文献15
12－24	谷地中館	谷地中字谷地中	縄文（前、後、晩）、平安	文献16
12－25	細越	笹館字細越	平安	文献17

文　献

1　『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書III－餌釣遺跡－』秋田県教育委員会　1991（平成３年）

2　『福館遺物包含地、橋桁野竪穴住居址発掘調査概報』大館市　1973（昭和47年）

3　『大館市片山「館コ」発掘調査報告書　第１次』大館市編さん委員会　1973（昭和47年）

『大館市片山「館コ」発掘調査報告書　第２次』大館市編さん委員会　1974（昭和48年）

『片山館コ遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会　1990（平成２年）

4　『諏訪台Ｃ遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会　1990（平成２年）

5　『塚ノ下遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会　1979（昭和54年）

6　『王林寺跡発掘調査報告書』大館市教育委員会　1986（昭和61年）

7　『池内遺跡』大館桂高校社会部　1973（昭和48年）

8　『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査概報－山王岱遺跡－』秋田県教育委員会　1988（昭和63年）

『大館市山王台遺跡発掘調査報告書』大館市教育委員会　1990（平成２年）

9　『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－上ノ山Ⅰ・上ノ山II遺跡－』秋田県教育委員会　1988（昭和63年）

『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発堀調査報告書II－上ノ山II遺跡第２次調査－』秋田県教育委員会　1990年（平成２年）

『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV－上ノ山Ⅰ遺跡第２次調査－』秋田県教育委員会　1991（平成３年）

10　『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会　1981（昭和56年）

11　『芋堀沢遺跡発掘調査報告書』大館市教育委員会　1972（昭和47年）

12　『大日堂前遺跡発掘調査報告書』比内町教育委員会　1982（昭和57年）

13　『味噌内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－袖ノ沢・横沢遺跡－』秋田県教育委員会　1989（平成元年）

14　『真館緊急発掘調査報告書』比内町教育委員会　1973（昭和48年）

15　『本道端遺跡発掘調査報告書』比内町教育委員会　1973（昭和48年）

16　『谷地中館遺跡発掘調査報告書』比内町教育委員会　1978（昭和53年）

17　『細越遺跡緊急発掘調査報告書』比内町教育委員会　1976（昭和51年）

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

上野遺跡は、東から西に延びる台地の舌状部先端に位置する。調査前の観察及び範囲確認調査において、調査対象区のほぼ中央に北から南に向かって開析されている小さな沢（沢１と仮称）の存在を確認していた。調査の結果、この沢は二又に分かれていることが明らかとなった（沢頭が南に向く部分を沢１Ａ、東に向く部分を沢１Ｂとする）。調査前の観察では見いだせなかったが、沢１の西約50ｍにも堀切り様の小規模の沢が形成されていることが判明した（沢２と仮称）。ちょうど台地端部が馬背状に細くなる根本の部分にあたる。２つの沢により調査区は三分された形となる。調査後の沢の位置は、第４図遺構配置図を参照いただきたい。沢１を含む東側を調査区東部、沢１と沢２の間を調査区中央部、沢２以西を調査区西端部とする。沢部以外はほぼ平坦であり、西端部で標高68～68.5ｍ、中央部で68.5～69.5ｍ、東部で69.5～70.3ｍを計測する。沢の現地表面から底部までの深さは、沢１Ａで1.85ｍ、沢１Ｂで２ｍ、沢２は約1.5ｍである。

ところで、上野遺跡の調査範囲（第１図太枠内）は、そのまま遺跡の範囲としてほぼ認定できると考えている。それは範囲確認調査等によって調査範囲の東側には遺構・遺物の分布が認められず、北・西・南西端は地形的に画されていること、南東端は、遺構・遺物の分布が極めて粗いことから第１図網点部分を遺跡推定範囲として把えることができる。

遺跡の現況は、その全域が杉林、雑木林となっている。

遺跡基本層位は、東西を51ライン、南北をＭＪラインに土層観察用ベルトを設定し、ここで観察を行った。第３図には、沢１に係る部分を図示した。これに従うと以下のようになる。

Ⅰ－ａ層：黒褐色土（10YR2/2）表土。締まりあり。

Ⅰ－ｂ層：黒　色　土（10YR2/1）締まり上位ほどあり、下位で平安時代の遺構・遺物確認できる。

Ⅱ－ａ層：褐　色　土（10YR4/4）浮石を多量に含む層。

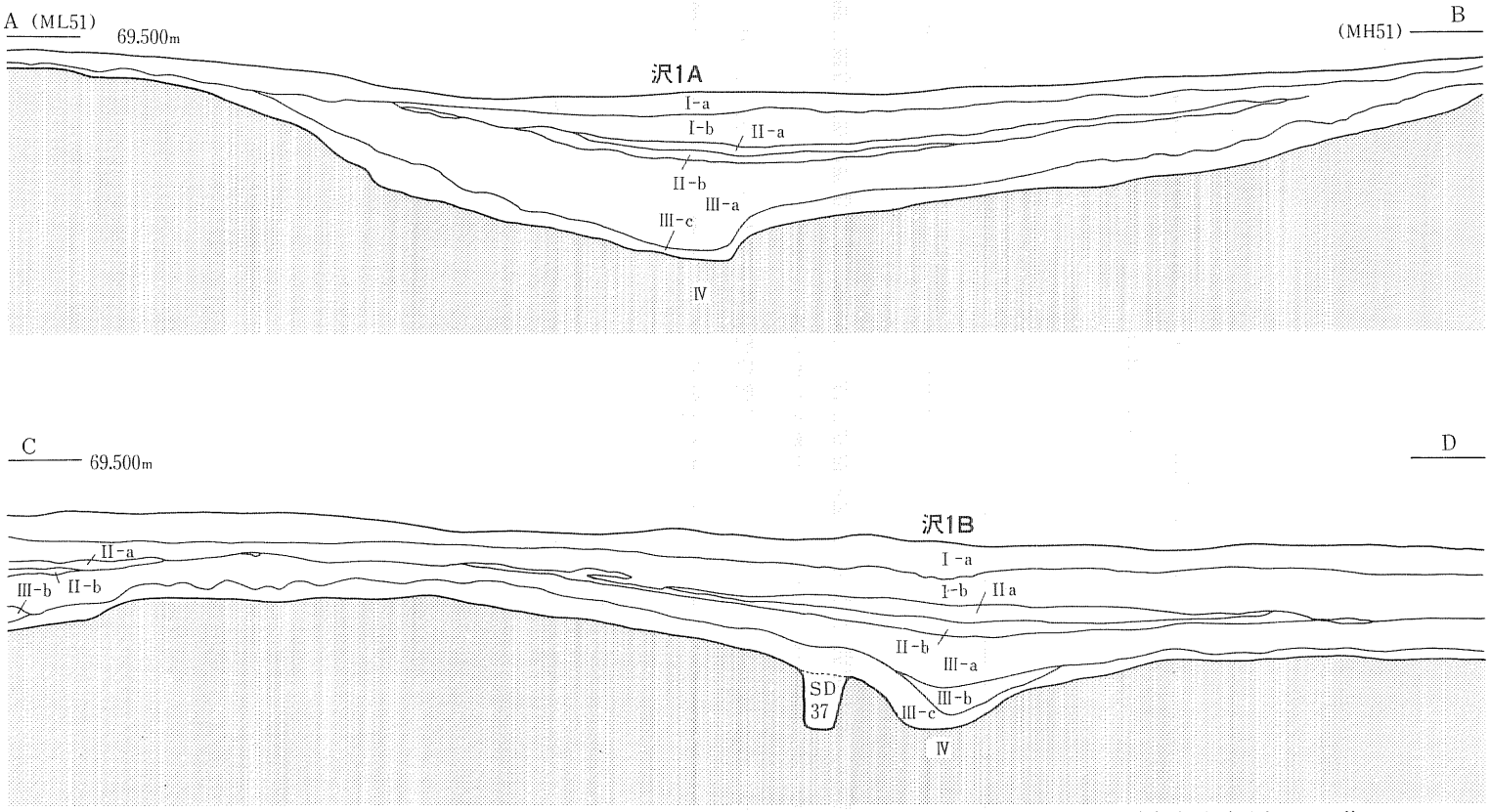
Ⅱ－ｂ層：明黄褐色土（10YR6/6）浮石を主とする層。純層に近い。層厚は沢１Ｂで18cm。

Ⅲ－ａ層：黒　色　土（10YR1.7/1）粘性あり、混入物ほとんどなし、縄文中～後期の土器出土。層厚最深80cm（沢１Ａ）。

Ⅲ－ｂ層：黒褐色土（10YR3/2）締まりはａ層よりややあり、地山粒子を斑状に少量含む。

Ⅲ－ｃ層：暗褐色土（10YR3/3）地山漸移層。地山粒子・小ブロックをｂ層より多く含む。

Ⅳ　　層：にぶい黄橙色土（10YR6/4）～明黄褐色土（10YR6/6）地山土、砂質粘土。



（基本層位観察地点A～Dは第52図に明示）

0 1:80 2m

第3図　基本層位図

また台地平坦面では、全体的に表土（Ⅰ層）から地山面（Ⅳ層）までの層厚がなく20～40cm程である。間層は沢部のⅢ－ｃ層に相当する地山漸移層１枚である。

第２節　調査の方法

発掘調査は、道路計画路線の中心杭No.143を基点とし、これと中心杭No.145を結んだ線を仮の東西基線とし、これに直交する線を南北基線とし、４ｍ×４ｍの方眼杭を打設してのグリッド法に拠った。方眼杭には、東西方向に東からＭＡ・ＭＢ・ＭＣ－－－－ＭＳ・ＭＴ・ＮＡとアルファベットの組み合わせをあて、南北方向には、南から北に向かって昇順となる連続した２桁の数字をあて、その両を組み合わせて各グリッドを呼ぶこととした。方眼杭に囲まれたグリッドの名称は、その南東隅に位置する杭のアルファベット・数字の組み合わせをあてている。基点であるNo.143中心杭をＭＡ50とした。なお南北基線は、座標北から東に７°17'54"偏している。

検出した遺構は、その種別を問わず一連の番号を付している。番号登録の後、遺構と断ずる事のできなくなったものについては、これを欠番としている。

遺構の実測は、４ｍ毎のグリッド杭を利用しての簡易遣方測量を用いている。その他、写真などの調査の記録方法については、秋田県埋蔵文化財センターで実施している方法に準拠している。

遺物の取り上げについては、現場で遺物１点あるいは１個体の平面位置（Ｘ・Ｙ座標）、垂直位置（標高）を台帳に記入しておき、整理作業時にパーソナルコンピュータを利用して「遺物出土地点図」を作成した。作成に使用したプログラムは、吉田真氏作製の『遺物管理プログラムver1.0』である。

第３節　調査経過

８月19日、調査開始。以下は調査日誌からの抜粋である。現場で発掘作業に従事してくださる方々へ作業の手順などの説明を行う。午後より調査区内の下草刈り、雑木等の撤去を実施。20日、委託事業であるグリッド杭打設が始まる。22日、調査区北東部より粗掘り開始する。基本層位観察用ベルトを設定する。グリッド杭打設完了。29日、調査区中央部南側でも粗掘りに入る。ＭＨ46グリッドⅠ層下面で弥生土器と思われる破片出土。30日、ＭＫ48グリッドで竪穴住居跡と思われる円形プラン確認、ＳＩ01とする。

９月２日、調査区中央部～東部（沢１を除く）全域で粗掘りの手が入る。調査区東部は剥片

の出土多い。３日、MM48グリッド周辺にて長さ10ｍ以上の溝あり、ＳＤ02とする。５日、ＳＤ02は16ｍ以上ありそうである。粗掘り続行。９日、沢１掘り下げ、沢底面より縄文土器出土する。10日、大館神明社のお祭り。粗掘りと並行して遺構確認のための精査を実施。沢底面より石匙２点出土。11日、51ライン以南の粗掘り終了。

17日、MH54グリッドII層上面で白色粘土と焼土を検出。ＭＡ54グリッドＩ層下面で石組炉と思われる遺構確認する。19日、雨のため沢部以外の粗掘りを行う。24日、稲刈りのため欠勤多い。17日に確認していた石組炉は２組あることが明らかとなり、住居が少なくとも２軒は重複しているようである（ＳＩ18・19)。25日、沢１Ｂ底面で焼土の分布（ＳＮ24）あり、周辺より内外面に縄文が施文されている土器片出土。

28日土曜日、本日明け方５時頃、台風19号通過に伴う強風のため、プレハブ造りの事務所兼器材収納庫及び作業員休憩所の２棟が土台ごと吹き飛ばされる。強い南風を受け、北側の沢内（高低差約10ｍ）にもプレハブの部材、器・機材など一面に散乱する。台風の去った午後より出勤簿、図面などの重要書類のみ引き上げる。ロッカーに入っているカメラ、レベルなどの器材は鍵が行方不明であることと、二次災害の恐れがあるためそのままの状態で放置する。翌週30日、プレハブは原形を留めない状態であり、危険で近づくこともできない。周辺に散乱している各自の雨具などを回収する。事務所にあった机は脚が折れ、ロッカーに入っていたカメラ、交換レンズ、レベルなどは全滅、ガステーブルは折れ曲がり、未使用のフイルムも水没し使用不可である。

10月１日、昨日に続き台風災害の後かたづけ。電話線も切断され使用できない。３日、未だに調査に入れず、調査区内に倒れ込んできた杉木、枝葉の除去を実施。４日、本日より調査再開。有り合わせの材料で機材収納の小屋を建てる。プレハブ再建の目処はつかない。

10月14～16日は、鹿角市天戸森遺跡の範囲確認調査のため、本遺跡の調査は一時中断する。この間に同じ場所にプレハブが再建される。22日、再び電話が使えるようになる。23日、沢１大湯浮石層直上で把手付土器、刀子片出土する。この周辺ほぼ同一レベルで焼石、炭化材などもあり、何らかの遺構がありそうである。24日、焼土、焼石、炭化材のまとまりは３箇所あり、ＳＸ38・39・40とする。ＳＸ38ではヘラ書き文様のある土師器出土（後日、擦文土器であることが判明)。25日、ＳＸ39・40は沢の窪地を利用して竪穴状の掘り込みを伴うようである。

28日、調査区中央部東端（沢１寄り）で竪穴状の遺構確認、ＳＫＩ43とする。ＳＩ10掘り下げ、石囲炉あり、廃棄時に石の半分は抜き取られたようである。29日、沢１内のＳＮ39は竪穴（ＳＩ40と改称）の石組のカマドであることが判明。30日、ＳＫＩ43は、石囲炉確認を受け、小規模な竪穴住居跡となり、記号をＳＩとする。31日、鹿角市教育委員会秋元・藤井氏ら来跡、縄文時代の竪穴住居跡についての教授を得た。

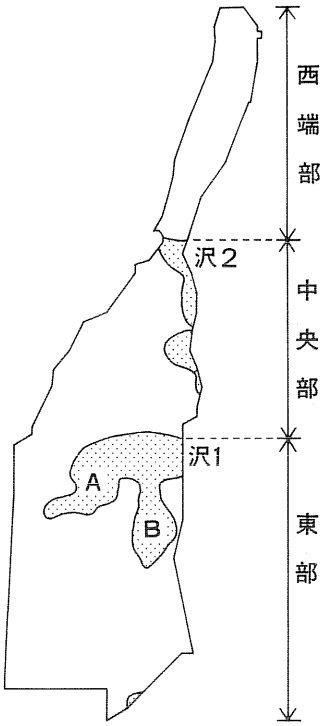
11月１日、本日までの遺構数は61。ＳＩ40カマド脇で甕形土器出土、擦文土器のようである。５日、ＳＩ10・43炉の写真撮影を行う。ＳＩ10はプラン不明確ながら壁溝巡る。この北側に別の溝あり、別の竪穴住居跡か。本日より立木伐採などの関係で調査に入れないでいた西端部の粗掘りにようやく取り掛かる。６日、初霜降りる。ＳＩ40出土の鉄製品など1/10平面図作成の後、取り上げる。７日、ＳＩ10の主柱穴は４本であることが判明。

11日、一時雪模様。調査区西端部粗掘り完了、ジョレンがけして遺構を確認する。対象面積の割りには遺構数多い。12日、本日までの遺構数88。西端部確認面の写真撮り次第掘り下げに入る。ＳＫ70から番号を付す。13日、雨の中、フラスコ状土坑掘り下げを続行する。14日、ＳＩ40完掘写真後、大湯浮石層を除去する。浮石下の黒色土から石囲炉（ＳＮ65）と焼土遺構（ＳＮ66）検出。本日までの遺構数92。15日、曇り一時雪。調査区中央～東部の遺構精査ほぼ終了し、全力を西端部精査に傾ける。18日、全景写真撮影を行う。地元新聞社２社取材のため来跡。19日、調査区西端部遺構掘り下げ、新聞社４社取材で来跡。20日、遺構数112となる。21日、地形図作成に入る。22日、調査区西端部ＳＫ123の精査終了を以て上野遺跡の現地での調査を完了した。

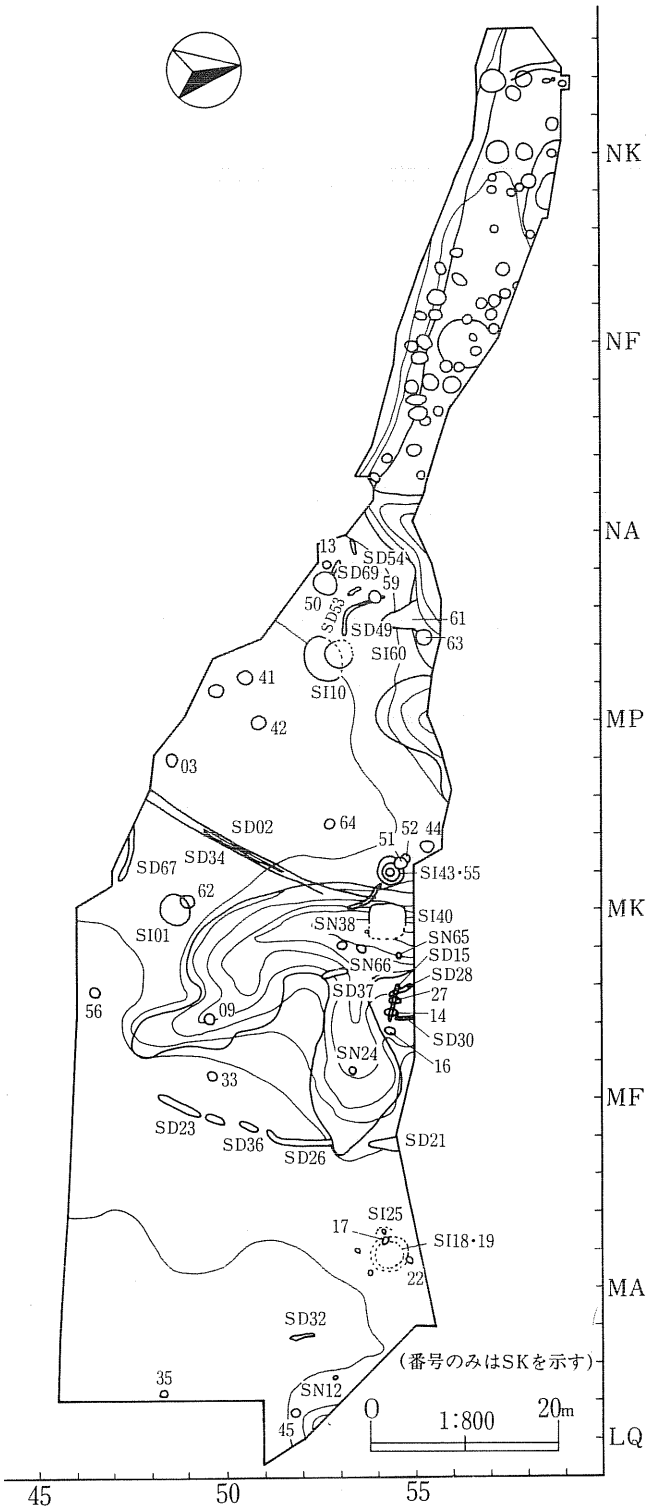
写真右上に人々が
立っている場所に
プレハブは建っていた

写真左が事務所
右が作業員用の
プレハブだった

台風19号に伴う強風で倒崩したプレハブ



調査区区分図



第４図　遺構配置図

第４章　調査の記録

第１節　検出遺構と出土遺物

上野遺跡で検出した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡13軒、屋外炉２基、焼土遺構３基、土坑・フラスコ状土坑73基、溝状遺構１条、平安時代の竪穴住居跡１軒、焼土遺構１基、及び所属時期不明の焼土遺構１基、溝状遺構17条の計112遺構である。

遺構の分布は、調査区南東側を除くほぼ全域に認められるが、縄文時代のフラスコ状土坑は、沢２以西の舌状台地先端部に集中して構築されている。また平安時代の遺構は、沢１内に構築されるという特異な立地を示している。

以下、遺構の記述における検出位置は、沢１を含む東側を調査区東部、沢１と沢２の間を調査区中央部、沢２以西を調査区西端部とする（第４図左上参照）。

１　縄文時代の遺構と遺物

該期の遺構は、全体として見れば調査区西端部に集中しているが、地形図と重ねてみれば、台地の縁辺部に集中し、中央よりには粗い分布を示す。竪穴住居跡だけに目を向けると、ほぼ同一箇所で重複している例が多いものの、それぞれの竪穴住居跡は20～40ｍ程の間隔を保って位置している点を特徴として挙げることができる。

（１）竪穴住居跡（第６～14図、図版５～11）

竪穴住居跡は、調査区東部で３軒、中央部で６軒、西端部で４軒の計13軒を検出した。

ＳＩ０１竪穴住居跡（第６図、図版５）

調査区中央部、ＭＪ48・49グリッドⅠ層下面で確認した。北側でＳＫ62と重複しており、新旧関係は（旧）ＳＫ62→ＳＩ01（新）となる。

規模は、径2.8ｍの円形を呈する。北側で一部プランが不明確なのは根による攪乱を受けているためである。確認面から床面までの深さは10cm前後である。床面は平坦で堅く締まっている。推定床面積は、5.78㎡である。柱穴状のピットは、住居内外から４本確認しているが上屋を想定し得る配列にはならない。

炉は、住居東側の壁に接する位置で確認した。いわゆる石囲複式炉の形態を示す。「Ｕ」字状の掘り込みは長さ1.05ｍ、幅0.65ｍ、床面からの深さは３～８cmと浅い。東端部に２本のピット（Ｐ２・３）が取り付く。石囲部は西端部で現位置を保っているが、北・東側は不明瞭で、石囲が「ロ」の字形となるのか「コ」の字形となるのか明らかではない。石囲部と掘り込み部

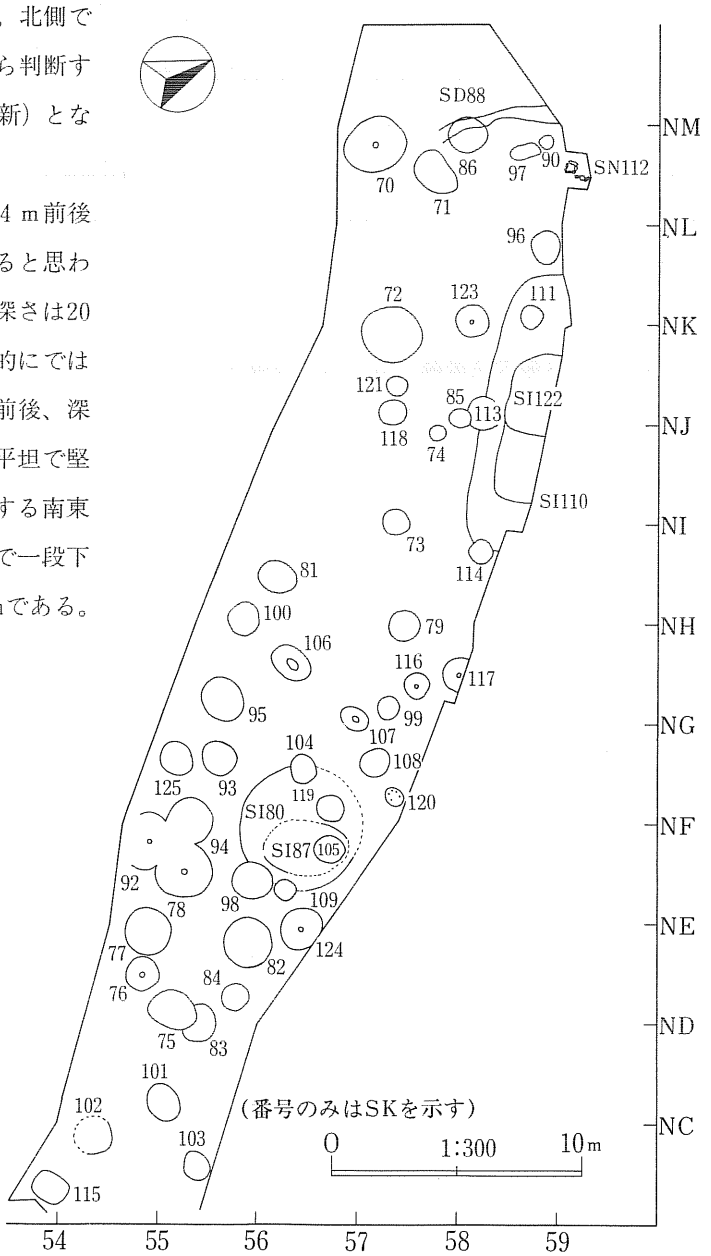
の底面のレベルは同一で段差は認められない。石は河原石を用い、火熱のため赤変しているが、床・壁面は肉眼上ではその痕跡は確認できなかった。

遺物は、床面直上より縄文土器（第16図２）、石器（第19図29）が出土している。

ＳＩ１０竪穴住居跡（第７・８図、図版６・７）

調査区中央部、ＭＱ52・53、ＭＲ52グリッドⅠ層下面で確認した。北側でＳＩ60と重複し、確認状況から判断すると、(旧) ＳＩ60→ＳＩ10（新）となるようである。

規模は、径あるいは一辺が４ｍ前後の円ないしは隅丸方形を呈すると思われる。確認面から床面までの深さは20～28cmとなる。周壁には部分的にではあるが溝が巡る。その幅８cm前後、深さは３～８cmである。床面は平坦で堅く締まっているが、炉の位置する南東側は長さ２ｍ、幅1.7ｍの範囲で一段下がっている。その差は５～６cmである。この部分は特に堅く締まる。



第５図　調査区西端部遺構配置図

床面上には柱穴が４本（Ｐ１～４）並ぶ。１本あたりの径あるいは一辺は25cm前後の円・楕円形を示し、床面からの深さはＰ４の34cmからＰ１の52cmまで、しっかりした掘り込みである。柱穴間の距離は、Ｐ１－２とＰ３－４間で2.5m、Ｐ２－３とＰ４－１間が2.3mと規則的である。

炉は、床面中央東側で確認した。一辺65cmの略方形の石囲炉である。西・北側の石は抜き取られていたが、残存する石は砂岩系の石を長方体状に加工していた。火熱のため赤変し、ボロボロの状態であった。炉と東側の壁の間には立石を伴うピット（Ｐ８）と壁を切り込む形で楕円状のピットが２本（Ｐ５・６）配されている。立石は床面からの高さ22cm（石の長さ29cm）で石頭部は赤変していた。これら立石とピットの位置関係から炉に伴う施設であった可能性が考えられ、そうすると、立石を伴う石囲複式炉と言えるかもしれない。

遺物は炉の南側、Ｐ２と炉の間に比較的多く出土している。第16図３は、炉の南側から一括で出土した深鉢形土器である。

ＳＩ６０Ａ・Ｂ竪穴住居跡（第７図、図版６・７）

調査区中央部西側、ＭＱ52・53、ＭＲ52・53グリッド地山面（Ⅳ層）で確認した。ＳＩ10と重複し、これより旧い。また本住居跡も２時期あり、（旧）ＳＩ60Ｂ→ＳＩ60Ａ（新）となる。規模は、残存する壁溝よりＡ住居跡が東西長2.4m、Ｂ住居跡が東西長約2.8m、南北長2.4m以上の円ないしは楕円形を呈すると見られる。溝は幅５～８cm、確認面からの深さ４～７cmであるが、Ａ住居跡の西端部のみ18cmと深くなっている。

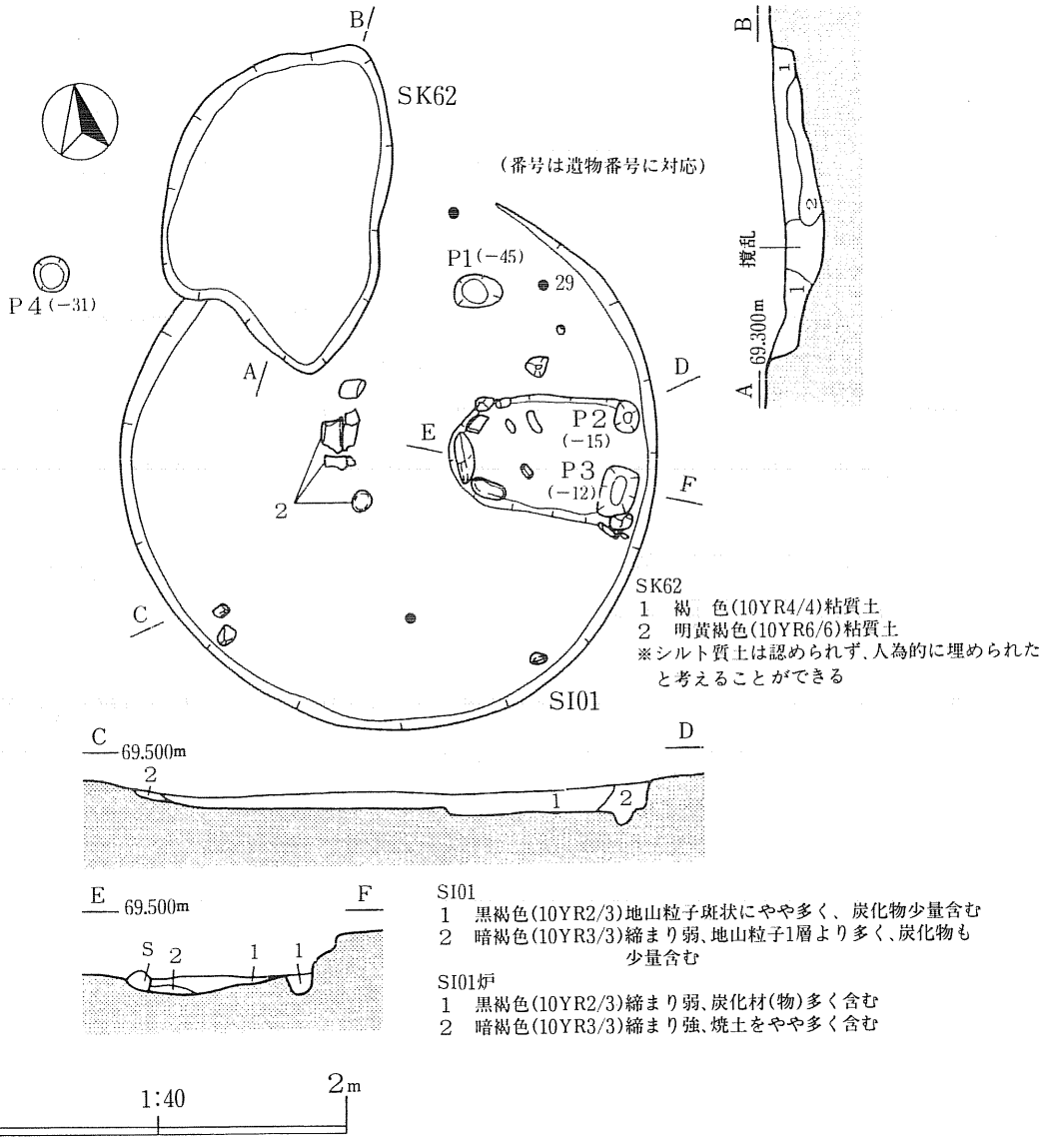
これらの住居跡については、柱穴、炉などは一切検出されず、ＳＩ10構築に際して削平されたと想定できる。溝内から遺物は出土しなかった。

ＳＩ１８竪穴住居跡（第９・10図、図版７・８）

調査区東部、ＭＡ53・54、ＭＢ53・54グリッドⅠ層下面で確認した。ＳＩ19とＳＫ17、ＳＫ22と重複しており、確認状況から、（旧）ＳＩ18→ＳＩ19→ＳＫ17・ＳＫ22（新）となる。また本住居跡の西側にＳＩ25が重複する位置関係で存在するが、その新旧は不明である。

規模は、柱穴と一部残存する壁溝から判断して、南北長4.1m、東西長4.6mの略円形を呈すると見られる。推定される床面積は約14㎡である。本住居に伴うと考えられる柱穴はＰ５～Ｐ16の12本である。Ｐ11～15は近接しているが、他は１～1.9mの間隔をおいて廻っている。基本的に、Ｐ５と６、Ｐ７と14、Ｐ８とＰ11～15の内の１本、Ｐ９と10の４対８本が主柱を構成していたと考える。各柱穴はその径あるいは一辺が15～32cmの円・楕円形であり、床面からの深さの平均は29.6cmである。壁溝は、その幅５～８cm、深さ３～５cmにすぎない。

炉は、住居中央やや南側に位置する。「ロ」の字形を呈する石囲炉である。北・西側の石は抜き取られていた。大きさは東西にやや長く、長さ73cm、幅63cmの長方形となる。石は棒状の河



第６図　ＳＩ01竪穴住居跡、SK62土坑

原石を用い、南側の石は２段に積まれていた。炉内に向く石面は火熱で赤変しているが、底面は肉眼では顕著な赤変は認められない。

炉を構成する石には本来の機能を果たした後に転用されているものも含まれている。第21図34の台石は、炉東面の石として再利用されていたものである。

ＳＩ１９竪穴住居跡（第９・10図、図版７・８）

調査区東部、ＭＡ53・54、ＭＢ53・54グリッドⅠ層下面で確認した。ＳＩ18、ＳＫ17・22との新旧関係は前述の通りである。

規模は、柱穴と一部残る周壁と壁溝から、南北長約3.5ｍ、東西長約3.2ｍの略円形を呈すると想定できる。推定床面積は、8.95㎡である。柱穴はＰ１～４が該当しそうであり、径15～20㎝の円形を示す。床面からの深さはＰ１が６㎝、他は22～36㎝であることと柱穴配置から主柱は、Ｐ２～４の３本であった可能性もある。なおＰ17は本住居に伴うのか、ＳＩ18に伴うのか明らかにできなかった。壁溝は幅６㎝前後、深さ３～５㎝である。

炉は推定される南東側の壁よりに位置する。現状で「ニ」字形を示す石囲炉である。原形状は不明であるが、抜き取られた石の存在と炉下の掘り込みの形状から北側に開口部をもつ「コ」字形の石囲炉であった可能性がある。

遺物は、ＳＩ18・19いずれに属するか明らかではないが、住居北東側、ＳＫ22と重複する周辺でややまとまって出土した。接合の結果、ほぼ１個体に復元できた。第16図５は、推定口径20㎝の深鉢形土器である。文様の施文順序は、粘土紐貼付→円形刺突→ＬＲ縄文→沈線→磨消となる。内面は丁寧なミガキである。色調は明褐～褐色を呈す。また第21図33は西面南側の炉石として利用されていた凹石である。

ＳＩ２５竪穴住居跡（第９図、図版７）

調査区東部、ＭＢ53・54グリッド地山面で確認した。ＳＩ18・19、ＳＫ17と重複する位置関係にあるが、その新旧は明らかではない。ただこれらと重複する箇所で壁溝などを一切検出できなかったことから、ＳＩ18・19構築に際して削平された結果と判断することもできよう。

本住居は、西側の壁溝の一部と地床炉を検出したに留まり、規模は不明である。炉が住居の西端に取り付く形態と見られる。溝は、幅６㎝前後、深さ５㎝前後、炉は、長さ70㎝、幅58㎝を計測する。遺物の出土はない。

ＳＩ４３・５５竪穴住居跡（第11図、図版８・９）

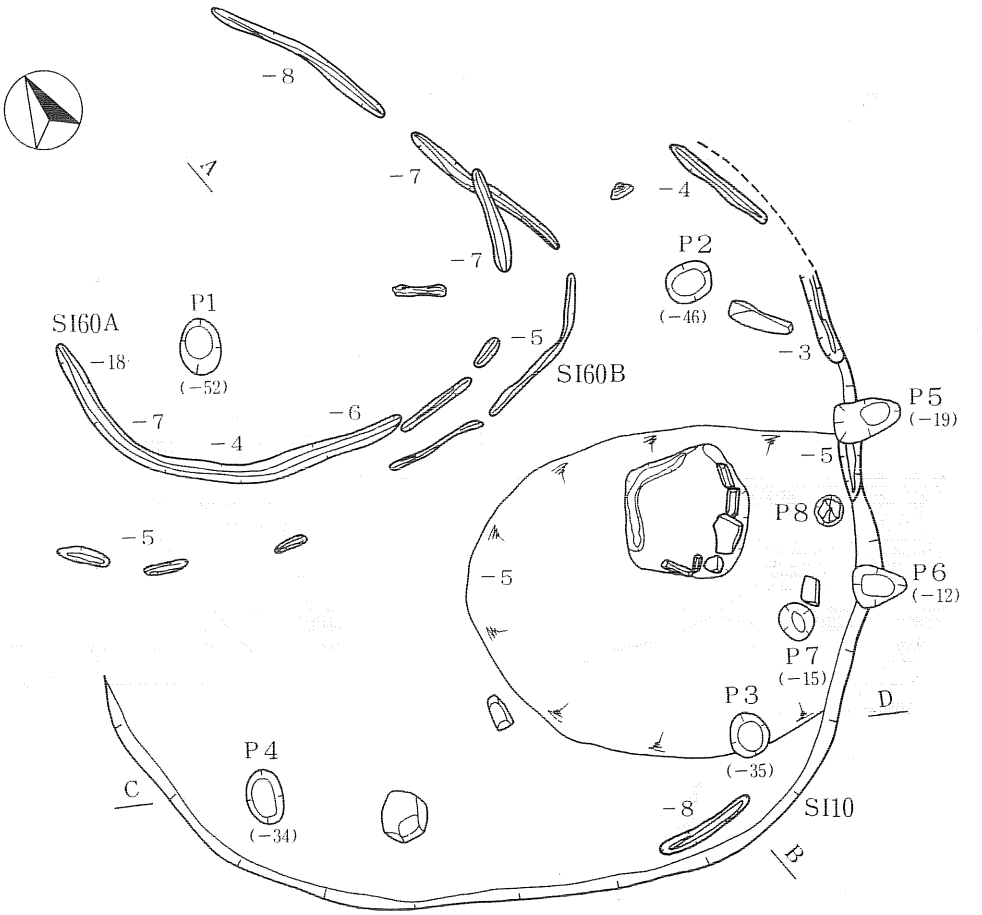
調査区中央区北東部、ＭＫ・ＭＬ54グリッドＩ層下面で確認した。ＳＩ43・55と重複しているＳＫ51・52の新旧関係は、（旧）ＳＩ55→ＳＩ43・ＳＫ52→ＳＫ51（新）である。

ＳＩ43は、径1.85～1.95ｍの円形を呈している。床面積は2.57㎡となる。確認面からの深さは36㎝である。床面ほぼ中央部に長さ1.3ｍ、幅1.15ｍの略円形の土坑様の掘り込みを行う。その深さは14㎝である。これはＳＩ43と別の遺構（竪穴）ではなく両者一連の施設－２段構造の床面－と理解している。一段下がった床面の東よりに石囲炉を構築している。

石囲炉は一辺が60㎝前後の方形を呈する。他の炉に比べて抜かれている石の割合は低い。石は河原石を用い、西側のみ30㎝近くの棒状の石を、他は拳大の石を使用している。それぞれの石は火熱を受け赤変している。

遺物は、埋土中より磨石が２点（第21図35、36）出土したのみである。

ＳＩ55は、北壁を根の攪乱により失われているが、南北長約2.9ｍ、東西長2.4ｍの隅丸方形



SI10

1　黒　色(10YR2/1)地山粒子・小ブロックごく少量含む

2　黒褐色(10YR2/2)地山粒子・小ブロック斑状に多く、炭化物やや多く含む

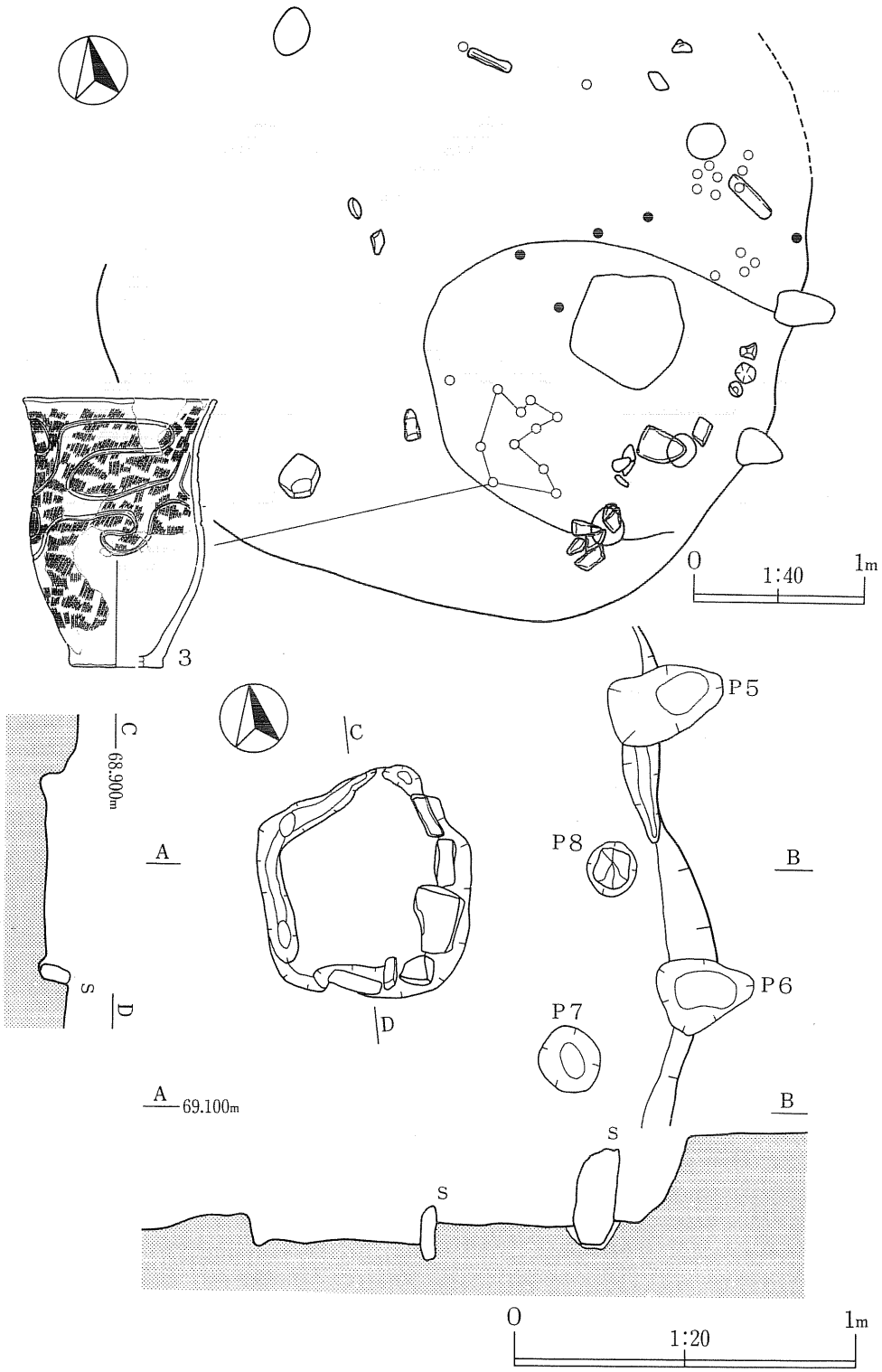
3　黒褐色(10YR3/2)地山粒子多く含む

4　暗褐色(10YR3/4)地山粒子２層より多く、炭化物少量含む

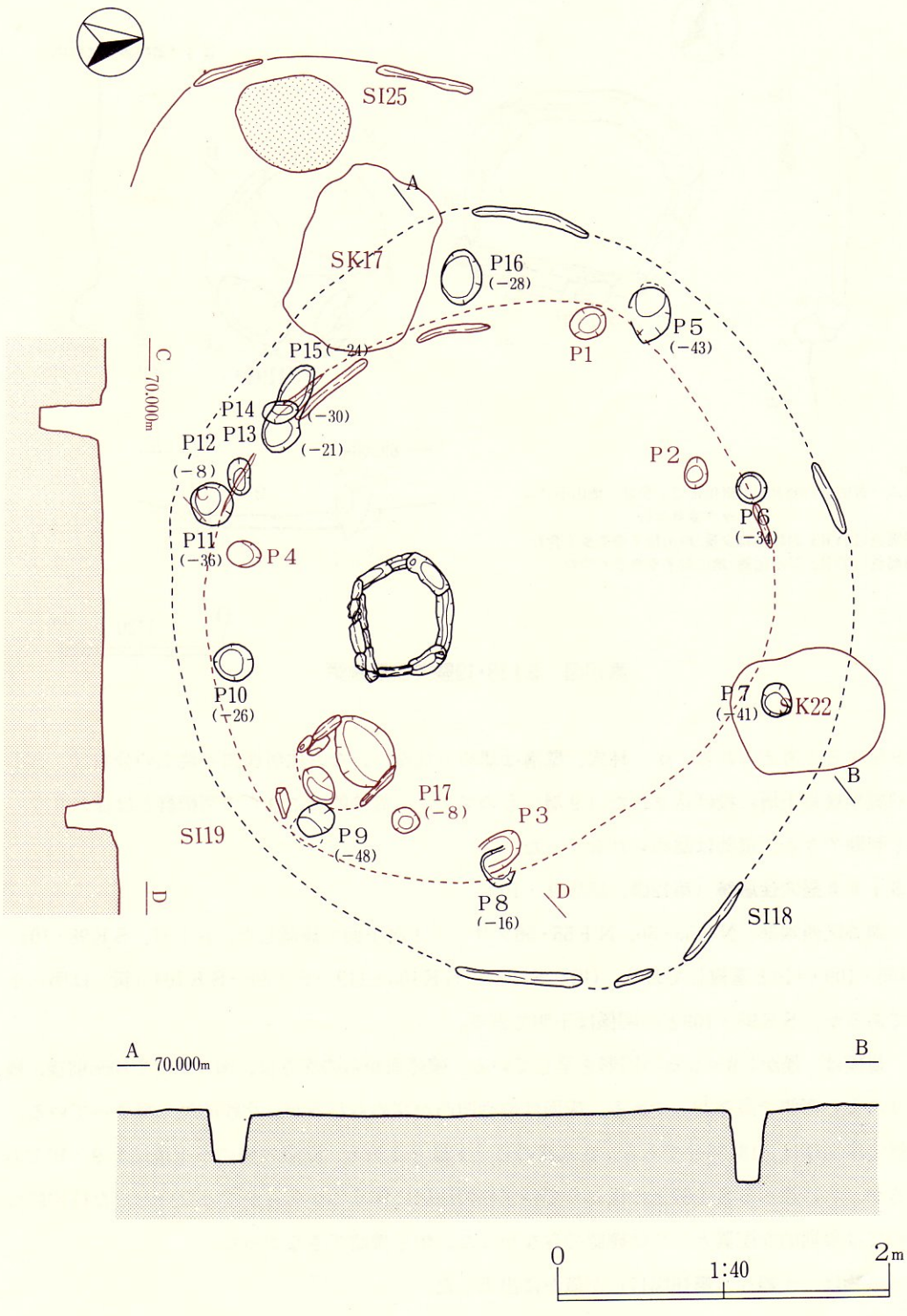
※４層土は竪穴の南側に、３層土は北側に分布堆積している

0　1:40　2m

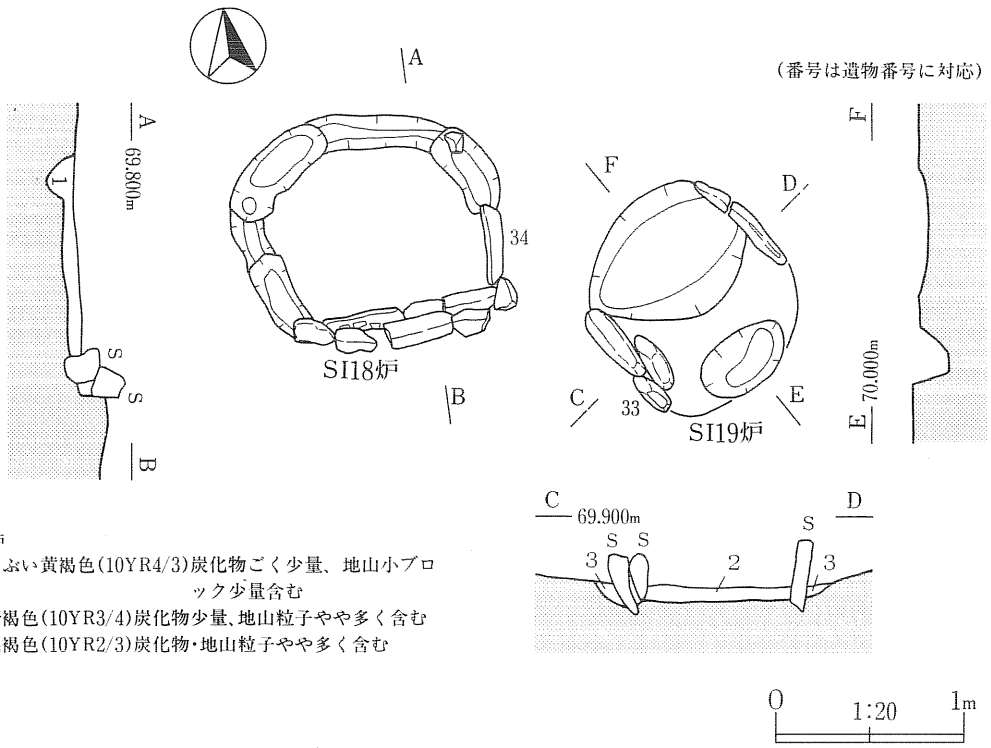
第７図　ＳＩ10、ＳＩ60Ａ・Ｂ竪穴住居跡



第８図　ＳＩ10竪穴住居跡遺物出土地点図及び炉



第９図　ＳＩ18・19竪穴住居跡



第10図　ＳＩ18・19竪穴住居跡炉

を呈すると考えられる。炉、柱穴、壁溝は認められない。なお住居西側の焼土の分布は、ＳＩ43廃棄後最上層に投げ込まれた（９層）ものであり、直接的にこれらの遺構群とは係わりないと判断できる。遺物は認められなかった。

ＳＩ８０竪穴住居跡（第12図、図版９・10）

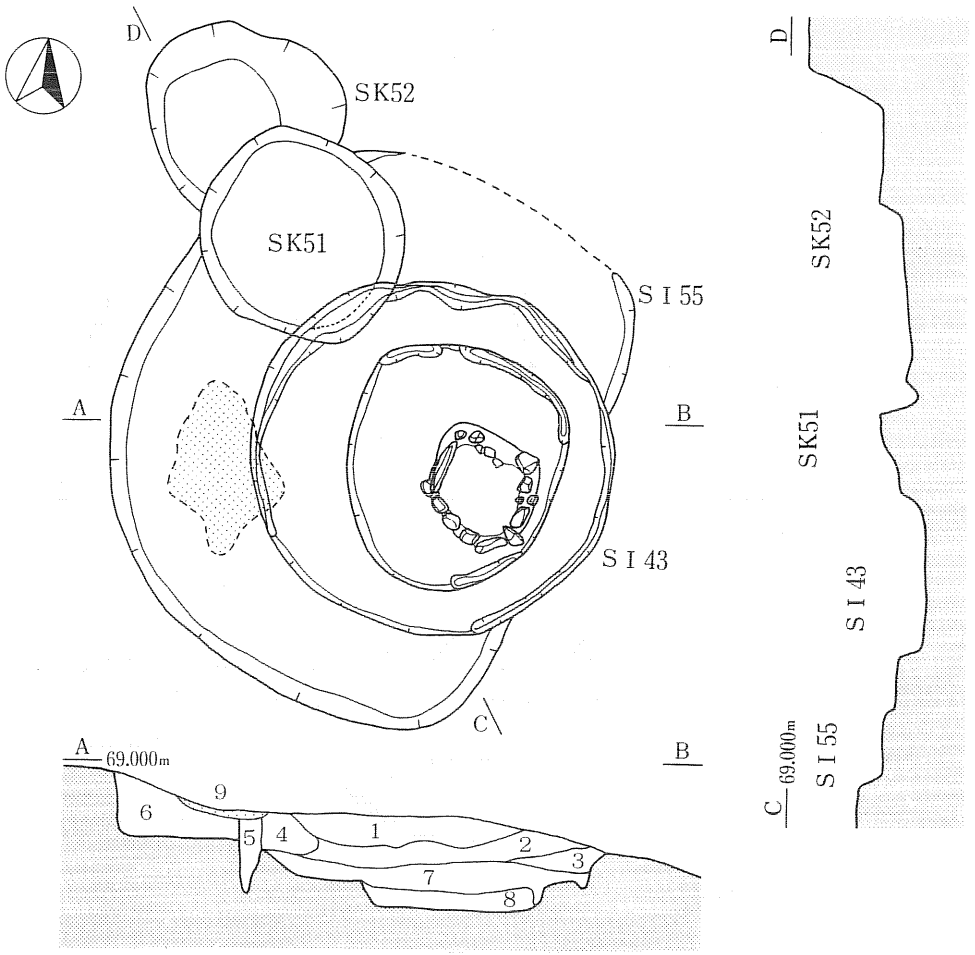
調査区西端部、ＮＥ55・56、ＮＦ55・56グリッドⅠ層下面で確認した。ＳＩ87、ＳＫ98・104・105・109・119と重複しており、（旧）ＳＩ87、ＳＫ105・119→ＳＩ80→ＳＫ104（新）は明らかであるが、ＳＫ98・109との関係は不明である。

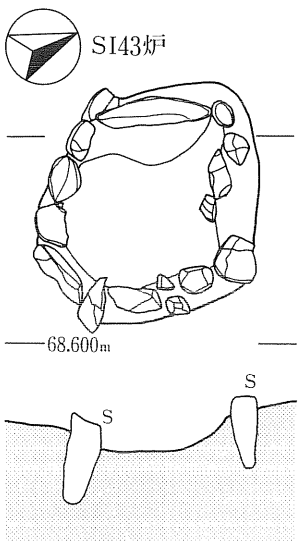
規模は、径が4.8～５ｍの円形を呈している。確認面からの深さは、南・東側で10cm前後、残りのよい西側で最深38cmである。床面はやや凹凸が認められるが、比較的堅く締まっている。推定床面積は、18.36㎡である。柱穴状のピットはＰ１～８、貯蔵穴様の小土坑はＰ９・10であるが、次に述べるＳＩ87との係わりでいずれの住居に伴うのか明らかではない。ただ柱穴については規則的な配置としては確認できなかった。炉も確認できなかった。

遺物は、土器片（第16図11）が僅かに出土した。

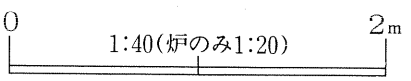
ＳＩ８７竪穴住居跡（第12図、図版９）

調査区西端部、ＮＥ・ＮＦ56グリッドＳＩ80床面で確認した。確認状況からＳＩ80構築に際

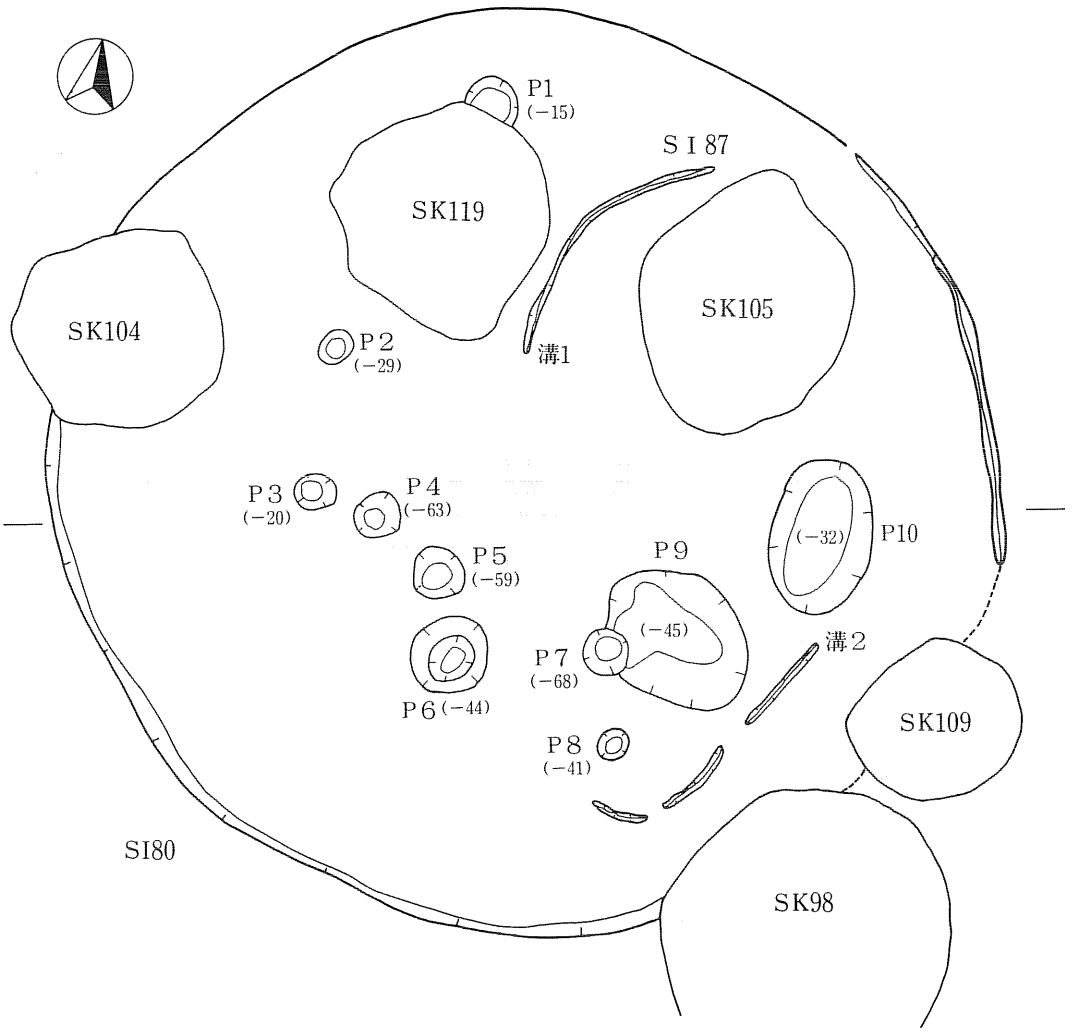


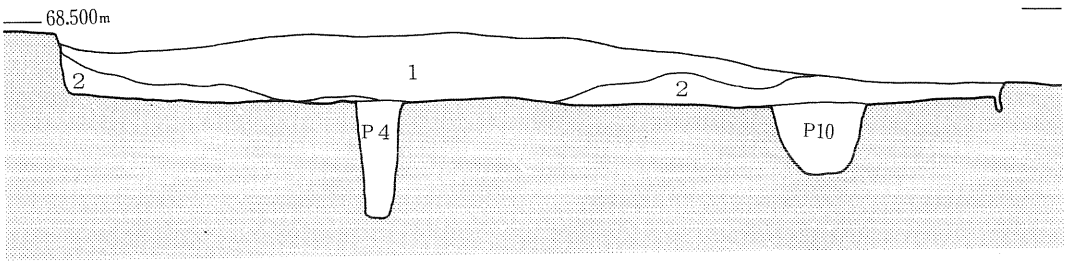


SI43
1　黒　色(10YR2/1)炭化物少量、地山粒子斑状にやや多く含む
2　暗褐色(10YR3/3)地山粒子斑状に多く含む
3　褐　色(10YR4/4)炭化物少量(1層より多い)、地山粒子斑状に多く含む
4　黒褐色(10YR2/3)締まり強、地山粒子多く含む
5　黒褐色(10YR2/3)締まり弱、地山粒子少量含む
6　褐　色(10YR4/4)地山小ブロック・粒子を斑状に多く含む、炭化物も少量含む
7　黒褐色(10YR2/3)
8　褐　色(10YR4/4)人為的埋土
9　褐　色(7.5YR4/6)焼土



第11図　ＳＩ43・55竪穴住居跡、SK51・52土坑





1　黒　色(10YR2/1)締まり弱、地山粒子・小ブロック少量含む
2　黒褐色(10YR2/3)締まり弱、地山粒子1層よりやや多く含む

0　1:40　2m

第12図　ＳＩ80・87竪穴住居跡

して上部を削平されたと思われる。

溝１と溝２が一連の壁溝を構成していたとすれば、その規模は南北長が約3.4ｍ、東西長が約２ｍの楕円形を呈していたと推定できる。溝は幅４cm前後と細く、深さは３～５cmである。柱穴、炉については不明である。溝内より遺物は出土しなかった。

ＳＩ１１０・１２２竪穴住居跡（第13・14図、図版11）

調査区西端部、ＮＩ～ＮＫ58グリッド地山面で確認した。竪穴の北半分は調査区外に延びる。重複する遺構との新旧関係は、（旧）ＳＩ122→ＳＩ110→ＳＫ113・114（新）となり、住居の南西隅に位置するＳＫ111は、ＳＩ110と同時期かこれより新しいと見られるが、不明確である。

ＳＩ122は、ＳＩ110床面精査中に検出した。規模は、東西長3.6ｍ、南北長1.85ｍ以上の（長）方形基調のプランを呈すると見られる。ＳＩ110床面からの深さは、７～15cmである。ほぼ平坦な床面上には９本の柱穴状ピット（Ｐ１～９）が掘り込まれているが、その配置は明らかではない。焼土、炉、遺物は一切確認できなかった。

ＳＩ110は、東西長11.2ｍ、南北長2.8ｍ以上の隅丸長方形あるいは楕円形を示すいわゆる大型住居跡である。壁は緩く立ち上がり、確認面からの深さは最深で29cmである。床面上には一段下がる掘り込みが認められ、埋土の状態から判断して別の遺構（竪穴）ではなく、ＳＩ110に伴う施設と考えている。これはＳＩ122を埋めて、この南壁を東に延長させるようにして掘り込んでいるものであり、その規模、東西６ｍ、南北1.85ｍ以上の隅丸長方形を示すようである。この掘り込みの深さは７～11cmである。二段構造あるいはベンチ状施設を伴う住居と言えよう。本住居には西側を中心に柱穴状のピットが数多く存在するが、その配置は明確ではなく、後述のＳＫ111に伴うであろうピットも混在しているようである。

遺物（第17図19・21）は、平面的にはＳＩ122上で比較的多く分布しているが、これはＳＩ122を埋めた後の一段下がったＳＩ110埋土出土である。床面あるいは直上出土の遺物はなく竪穴の構築時期推定を困難にしている。

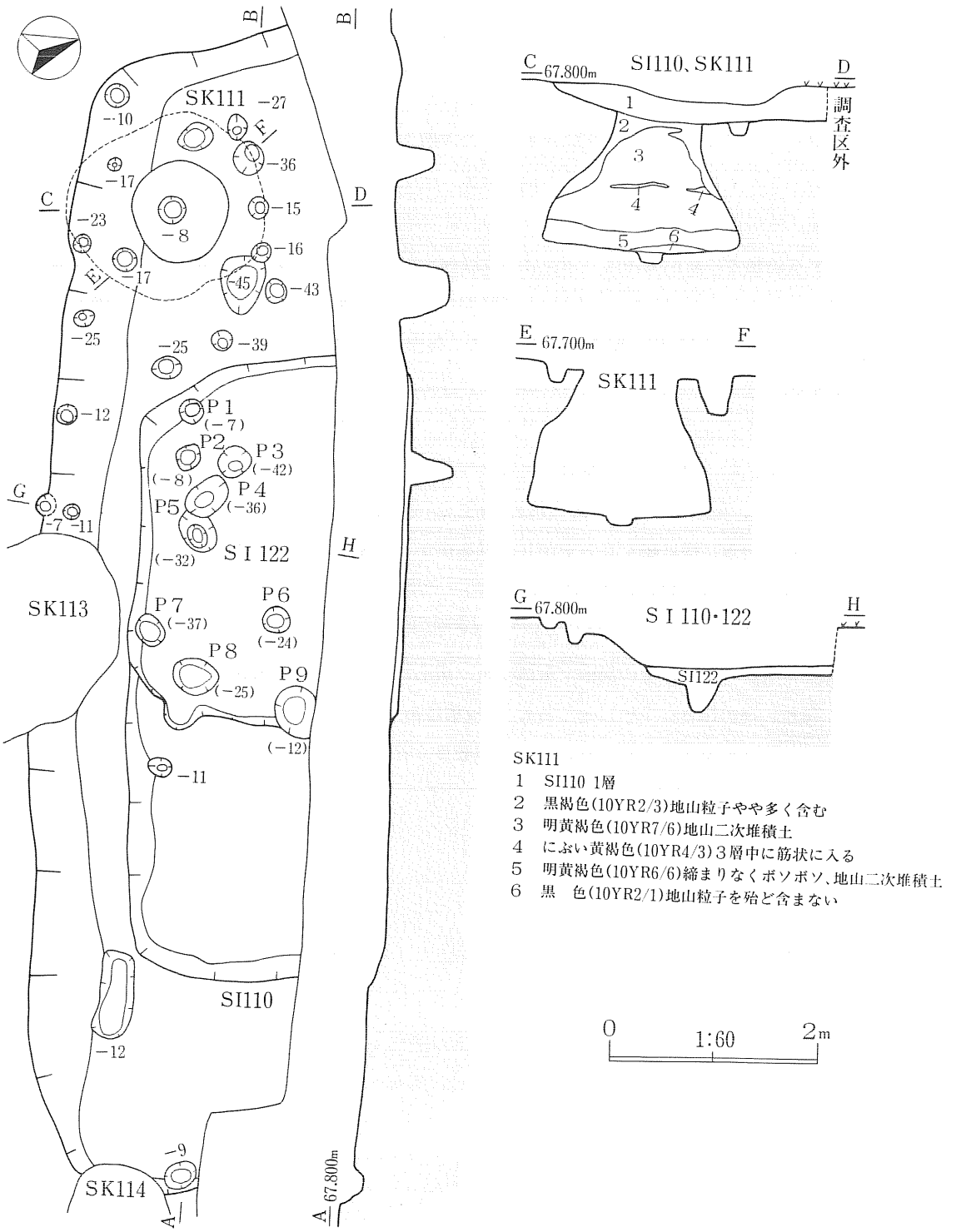
（２）屋外炉（焼土遺構）（第15図、図版12）

調査区内には、竪穴住居跡に伴う炉以外に、単独で存在する石囲炉や焼土遺構が５基ある。各遺構の周辺を精査した結果、これを取り囲む明確な上屋施設－柱穴、壁溝など－を確認できなかったことによるもので、屋外炉として報告する。

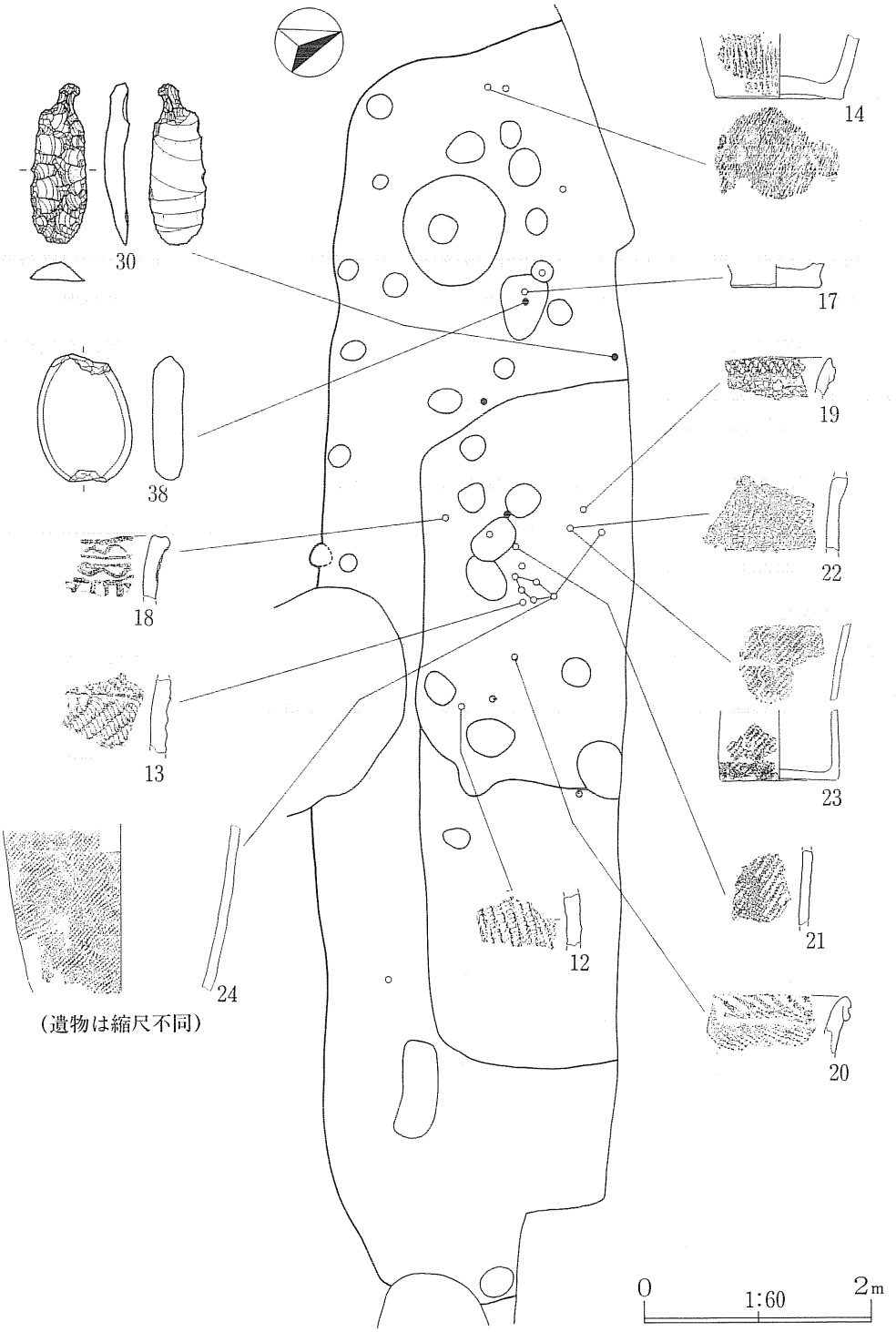
ＳＮ６５屋外炉（第15図、図版12）

調査区東部沢１内、ＭＩ54グリッドⅢ層中で石囲炉を確認した。

炉は、拳大から長さ27cmまでの板状の河原石を14個用い、これを長さ63cm、幅50cmの長方形に組んでいる。最も大きい石は西面に使用されている。炉内には、口縁～胴上半部を欠く縄文土器が正立状態で埋められていた。組石と土器は火熱を受け赤変しているが、炉底面は、Ⅲ層



第13図　SI 110・122竪穴住居跡、SK111土坑



第14図　ＳＩ110遺物出土地点図

黒褐色土（シルト質土）であるためか焼面は認められない。

埋設土器(1)は、底径6.8cm、現存高11.9cmで、内面には帯状に煤状炭化物が付着している。器面にはＬＲ縄文回転施文されている。その他の遺物は出土しなかった。

ＳＮ１１２屋外炉（第15図、図版12）

調査区西端部、ＮＬ58・59グリッドIII層中で石囲炉を確認した。

炉は、魔大から長さ38cmまでの棒状、板状の河原石を８個用い、これを長さ50cm、幅46cmの方形に組んでいる。最も大きい石はＳＮ65同様西面に使用されている。石の赤変度合いはＳＮ65に比較すると低い。石組炉に隣接して３個の河原石も認められる。これが現位置を保っているのか否か不明であるが、南側のＳ９は棒状の磨石（第21図40）、真ん中のＳ10は明らかに台石（同41）としての機能を有している。

ＳＮ１２屋外炉（第15図）

調査区東部、ＬＲ52グリッドＩ層下面で焼土の分布を確認した。

焼土は、長さ42cm、幅38cmの範囲に分布している。焼土の厚さは４cm、遺構底面はIII層中に収まり、やや凹凸している。

ＳＮ２４屋外炉（第15図）

調査区東部沢１内、ＭＦ53グリッド地山面で焼土の分布を確認した。検出位置は、沢１Ｂ底面であり、沢が形成されて腐食土等があまり堆積していない段階で営まれたと見られる。

焼土は、長さ50cm、幅42cmの範囲に分布し、その厚さ８cmである。火熱の影響で地山が赤変している。

ＳＮ６６屋外炉（第15図、図版12）

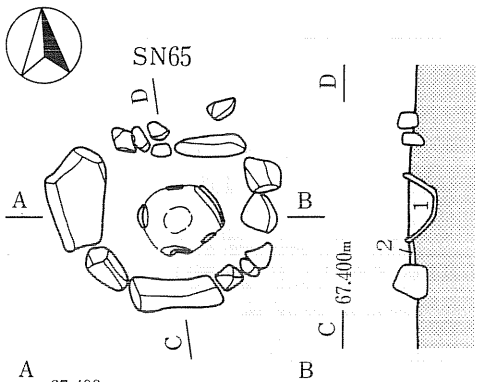
調査区東部沢１内、ＭＩ・ＭＪ53グリッドIIIａ層で焼土の分布を確認した。ＳＮ66は、ＳＮ65（石囲炉）の南約４ｍに位置しており、検出レベルも近似することから、時期的な開きは大きくないと思われる。

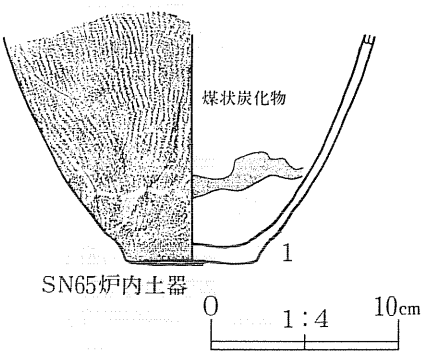
焼土は、長さ70cm、幅60cmの範囲に分布している。焼土の厚さは15cmある。

（３）土坑（第23～43図、図版12～18）

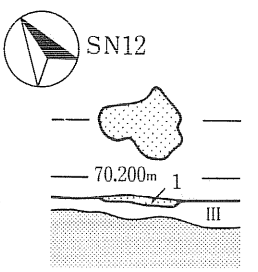
本項に該当する土坑は、調査区東部で11基、中央部で14基、西端部で48基の計73基を数える。土坑内出土の遺物は、遺構検出基数と比較して極端に少ない。僅か10遺構から数える程しか出土していない。この点で土坑の構築時期を推定する材料は乏しいと言わざるを得ない。

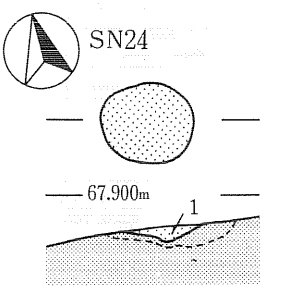
これら土坑を、その規模、形状、出土遺物の有無等について以下の表で示すこととする。

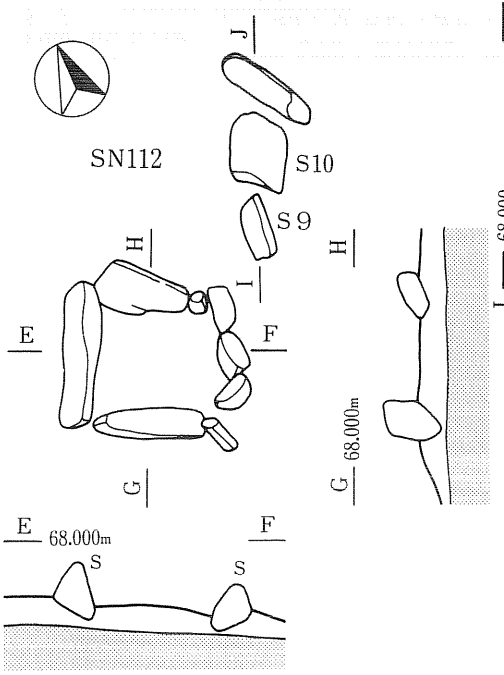


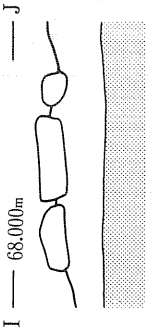


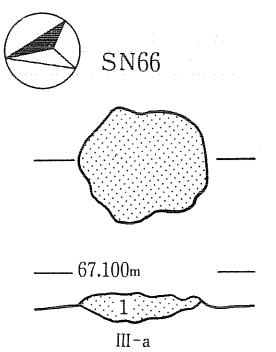
1　黒　色(10YR2/1)炭化物やや多く含む
2　黒褐色(10YR2/2)炭化物少量含む
3　褐　色(7.5YR4/4)焼土











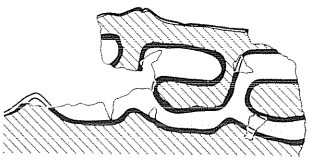
SN12
1　暗褐色(7.5YR3/4)焼土

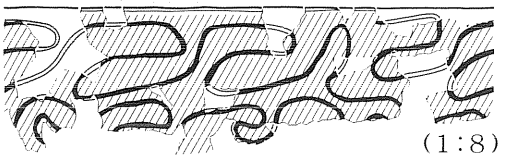
SN24
1　褐　色(7.5YR4/6)焼土
2　火熱で地山が変色した部分

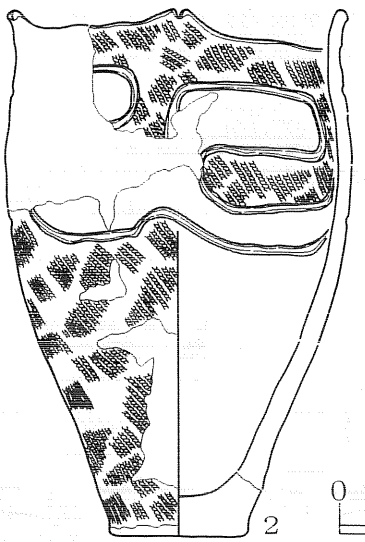
SN66
1　褐　色(7.5YR4/6)焼土

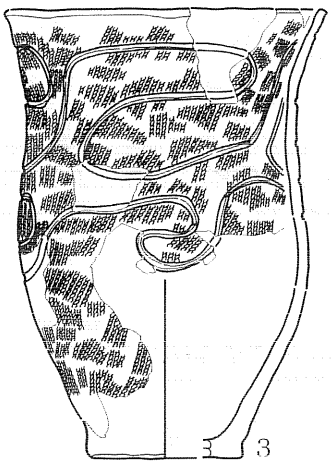
0　1:40(SN65・112は1:20)　2m

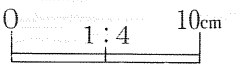
第15図　屋外炉(石囲炉、焼土遺構)



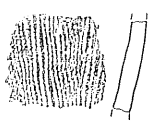


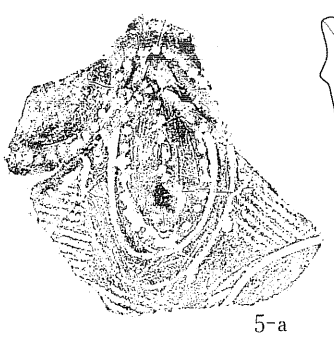


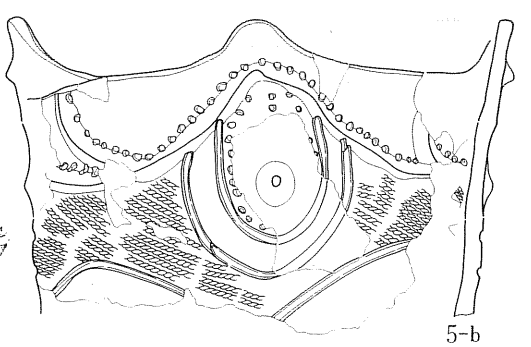


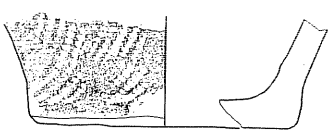


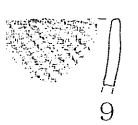
番号	出土位置	種別・器種	口径	底径	器高	文　様・調　整	備　考
1	SI01p1・10	縄文・深鉢	17.3	7.2	27.8	刻みをもつ波状口縁、(外)LR縄文→沈線→磨消、(内)ミガキ、(底)ナデ、煤状炭化物	色調(内外)暗褐～明褐 二次火熱
2	SI10p1・4～7・10・30	縄文・深鉢	16.6	8.0	23.8	平縁、(外)RL縄文→沈線、(内)ミガキ (底)網代痕、煤状炭化物、二次火熱	色調(内外)暗褐～明褐

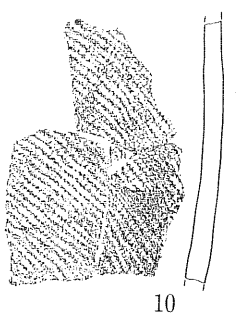


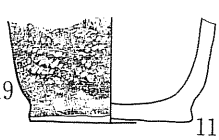


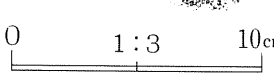






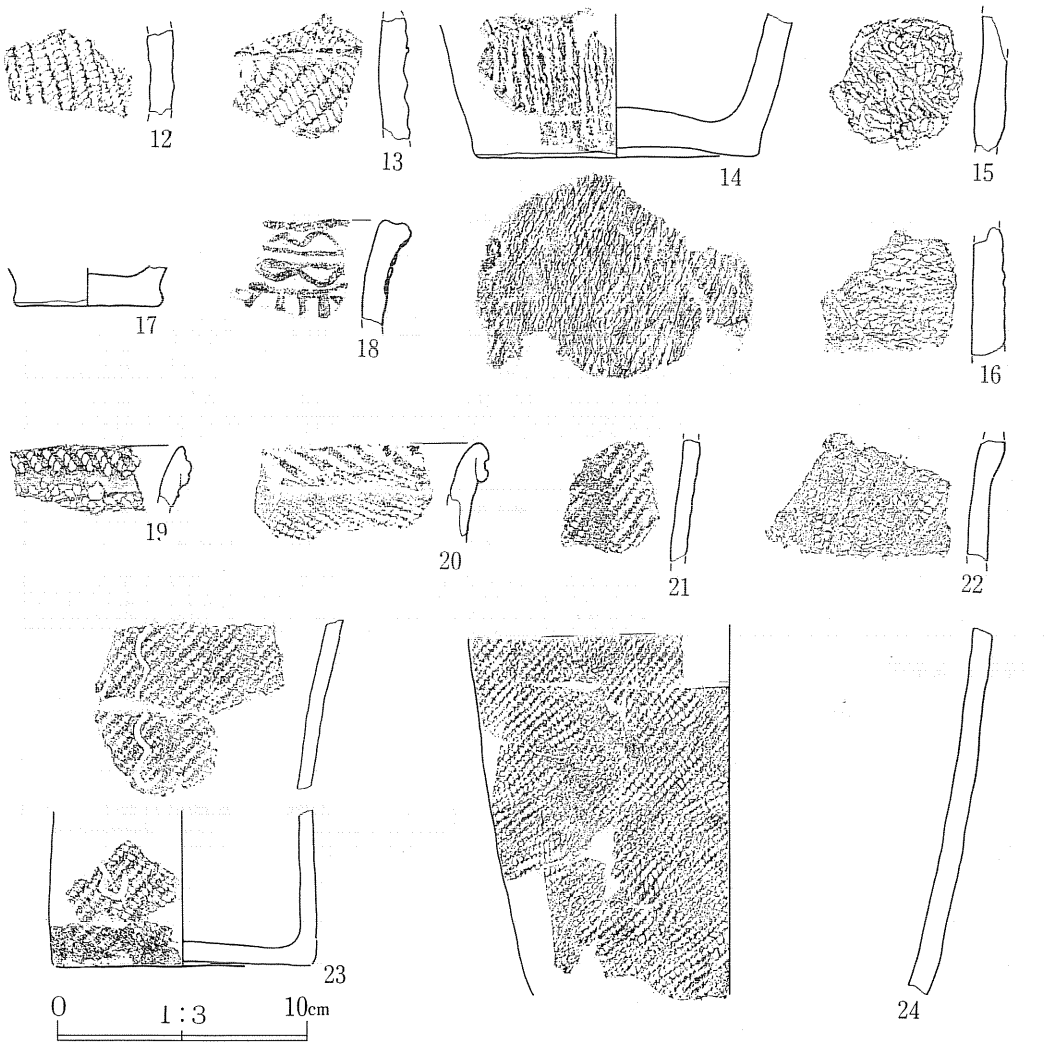






4・7　:SI10
5・6
8～10:SI18・19
11　:SI80

第16図　竪穴住居跡出土土器(1)SI01・10・18・19・80



第17図　竪穴住居跡出土土器(2) SI110

①調査区東部

遺構番号	検出位置	重　復	規　模（cm）			平面	断面	出土遺物
			開口部	坑底部	深さ		(底面状況)	
ＳＫ０９	ＭＨ49	なし	80×75	70×60	25	略方	筒状(a)	なし
ＳＫ１６	ＭＧ54	なし	130×102	120×90	10	楕円	皿状(a)	なし
ＳＫ１７	ＭＢ54	＞ＳＩ18･19	110×80	96×68	10	隅長	皿状(a)	炭化材
ＳＫ２０	ＭＡ53	なし	84×76	78×68	20	円形	筒状(a)	なし
ＳＫ２２	ＭＡ54	＞ＳＩ18･19	92×73	78×80	25	楕円	袋状(a)	なし
ＳＫ２７	ＭＨ54	＜ＳＤ15	120×82	96×65	24	楕円	鍋底(a)	なし
ＳＫ２９	ＭＡ･ＭＢ53	なし	78×70	60×50	14	略円	皿状(a)	なし
ＳＫ３３	ＭＦ49	なし	114×100	90×78	25	略円	鍋底(a)	なし
ＳＫ３５	ＬＲ48	なし	86×78	－	22	略円	鍋底(a)	なし
ＳＫ４５	ＬＱ51	なし	78×63	62×48	22	楕円	筒状(a)	縄文土器
ＳＫ５６	ＭＨ･ＭＩ46	なし	88×88	90×85	28	円形	袋状(a)	なし

②調査区中央部

遺構番号	検出位置	重　復	規　模（cm）			平面	断　面	出土遺物
			開口部	坑底部	深さ		(底面状況)	
ＳＫ０３	MN･MO48	なし	110×108	100×100	18	円形	皿状(a)	なし
ＳＫ０７	MP･MQ49	なし	140×115	120×108	28	隅長	筒状(a)	なし
ＳＫ１３	ＭＴ52	なし	100×100	90×86	16	円形	皿状(a)	なし
ＳＫ４１	ＭＱ50	なし	168×154	196×168	100	円形	フラ(e)	なし
ＳＫ４２	MO･P50･51	なし	122×120	196×196	146	円形	フラ(a)	なし
ＳＫ４４	ＭＬ55	なし	110×102	98×88	22	略円	鍋底(a)	なし
ＳＫ５０	MS･MT52	＜ＳＤ69	160×158	202×192	152	円形	フラ(c)	なし
ＳＫ５１	ＭＬ54	＞ＳＩ43、ＳＫ52	110×104	92×90	55	円形	筒状(a)	なし
ＳＫ５２	ＭＬ54	＜ＳＫ51	102×90～	50～×62	40	円形	筒状(a)	なし
ＳＫ５９	ＭＳ53･54	＜ＳＤ49	92×78	190×180	122	円形	フラ(f)	なし
ＳＫ６１	MR･S54･55	なし	長さ４ｍ以上、幅1.6ｍ		170	溝状	——	なし
ＳＫ６２	MK48･49	＜ＳＩ01	175×118	162×112	20	不楕	鍋底(a)	なし
ＳＫ６３	ＭＲ55	なし	198×178	220×214	132	円形	フラ(a)	なし
ＳＫ６４	MM52･53	なし	112×90	155×152	86	楕円	フラ(a)	凹石、磨石

③調査区西端都

遺構番号	検出位置	重　復	規　模（cm）			平面	断　面	出土遺物
			開口部	坑底部	深さ		(底面状況)	
ＳＫ７０	NL･M56･57	なし	260×210	234×220	140	円形	フラ(c)	剥片
ＳＫ７１	ＮＬ57	なし	202×152	162×124	90	不整	鍋底(a)	なし
ＳＫ７２	NJ･NK57	なし	242×218	228×220	176	円形	フラ(a)	なし
ＳＫ７３	NH･NI57	なし	120×96	104×92	82	円形	筒状(a)	なし
ＳＫ７４	NI･NJ57	＜ＳＫ85	72×64	142×138	176	円形	フラ(e)	なし
ＳＫ７５	NC･ND55	＞ＳＫ83、ＳＫ76	204×170	238×192	116	楕円	フラ(a)	なし
ＳＫ７６	ＮＤ54･55	ＳＫ77	140×136	190×190	110	円形	フラ(c)	なし
ＳＫ７７	ND･E54･55	ＳＫ76	200?×178	192×190	88	円形	フラ(a)	なし
ＳＫ７８	ＮＥ55	ＳＫ92･94	230×220	208×208	136	円形	筒状(c)	縄文土器
ＳＫ７９	NG･NH57	なし	140×120	208×208	166	楕円	フラ(a)	なし
ＳＫ８１	ＮＨ56	なし	155×124	160×160	104	楕円	フラ(a)	縄文土器
ＳＫ８２	ＮＥ57	なし	214×198	222×202	134	円形	フラ(a)	土器、磨石
ＳＫ８３	NC･ND55	＜ＳＫ75	160×120～	158×100～	64	円形	筒状(a)	なし
ＳＫ８４	ＮＤ55	なし	113×110	206×180	112	円形	フラ(a)	なし
ＳＫ８５	NI･J57･58	ＳＫ74、113	100×88	180×168	178	楕円	フラ(a)	なし
ＳＫ８６	NL･M57･58	＜ＳＤ88	170×140～	140×128～	70	円形	筒状(a)	なし
ＳＫ９０	ＮＬ58	なし	58×52	65×56	35	円形	袋状(a)	なし
ＳＫ９２	NE･F54･55	ＳＫ78･94	240×？	234×180～	52	円形	フラ(c)	なし
ＳＫ９３	ＮＦ55	なし	152×138	143×132	90	円形	筒状(a)	なし

SK94	NE･NF55	SK78･92	186×180～	190×180	118	円形	フラ(a)	なし
SK95	NG55	なし	174×170	220×208	140	円形	フラ(d4)	台石
SK96	NK58	なし	140×112	160×124	48	楕円	袋状(a)	磨製石斧2
SK97	NL58	なし	122×62	112×52	26	楕円	筒状(a)	なし
SK98	NE55･56	なし	172×152	172×158	140	円形	斜形(a)	なし
SK99	NF･NG57	107･108･116	95×90	210×195	154	円形	フラ(a)	土器､石器
SK100	NG･NH55	なし	132×120	140×124	32	円形	袋状(a)	なし
SK101	NC54･55	なし	160×134	164×150	40	円形	袋状(a)	なし
SK102	NB･NC54	なし	180×76～	110～×168	68	円形？	フラ(a)	なし
SK103	NB55	なし	124×108	84×72	48	不方	鍋底(a)	なし
SK104	NF56	＞SI80	108×104	88×86	56	隅方	筒状(a)	なし
SK105	NE56	なし	144×115	200×182	92	楕円	フラ(a)	なし
SK106	NG56	なし	162×124	205×190	138	楕円	斜形(f)	なし
SK107	NF･G56･57	SK99･108	115×86	192×180～	124	楕円	フラ(f)	なし
SK108	NF56･57	SK99･107	162×142	216×200～	150	円形	フラ(cf)	なし
SK109	NE56	SI80	90×86	154×140	122	円形	フラ(a)	なし
SK111	NJ･NK58	SI110	98×90	190×180	140	円形	フラ(c)	なし
SK113	NJ58	SK85､SI110	162×155	202×195	98	円形	フラ(a)	なし
SK114	NH58	＞SI110	98×94	110×108	66	円形	袋状(a)	磨石
SK115	NB53･54	なし	180×130	195×124	78	不楕	斜形(a)	なし
SK116	NG57	SK99	105×102	164×142	136	円形	フラ(c)	なし
SK117	NG58･59	なし	142×84～	94×70～	96	円形	逆台(b)	なし
SK118	NI･NJ57	＜SK121	110×106	150×150～	86	円形	フラ(a)	なし
SK119	NF56	＜SI80	116×116	130×124	60	円形	袋状(a)	なし
SK120	NF57	なし	94×68	188×172	158	楕円	フラ(d5)	なし
SK121	NJ57	＞SK118	82×82	164×160	94	円形	フラ(a)	なし
SK123	NJ･K57･58	なし	142×130	170×166	102	円形	フラ(c)	なし
SK124	ND･NE54	なし	204×166	223×184	154	楕円	フラ(c)	なし
SK125	NF55	なし	158×140	158×96	88	不円	不整(a)	なし

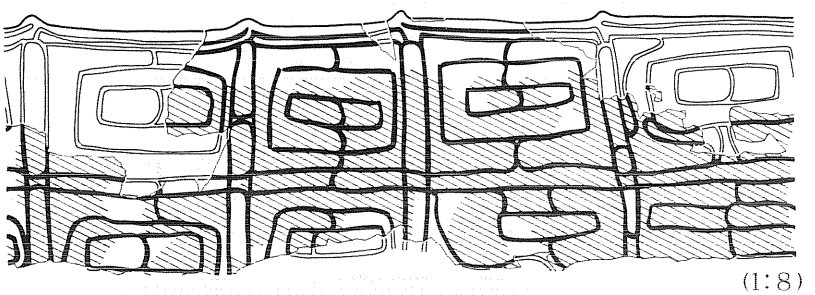
《凡例》

「重複」は、重複関係にある遺構を列記、遺構名だけは新旧不明、「＞」は左に記した遺構が新しく、逆に「＜」は、旧い。

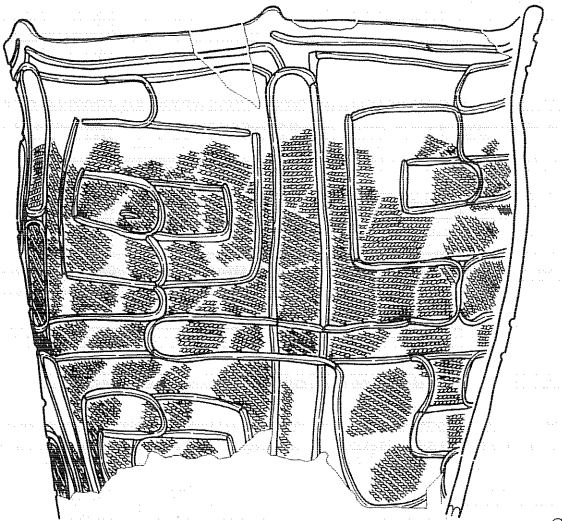
「平面」は、略方＝略方形、略円＝略円形、隅長＝隅丸長方形、隅方＝隅丸方形、不楕＝不整楕円形、不整＝不整形

「断面」は、フラ＝フラスコ状、斜形＝半分フラスコ状、半分筒状に掘り込まれる、逆台＝逆台形、筒状、鍋底＝鍋底状（底面から丸みをもって立ち上がる、深さ20cm以上）、皿状＝深さ20cm未満）、不整＝不整形（底面が凹凸している）

「(底面状況)」は、坑底面からの掘り込みの有無、その形態について記載している。(a)～(f)までの分類基準は、第６章まとめと模式図（第20図）に示してある。



(1:8)



25

0　1:4　10cm

番号	出土位置	種別・器種	口径	底径	器高	文　様・調　整	備　考
25	SK78p1～9	縄文・深鉢	27.0		(27.0)	小波状口縁４単位、(外)LR縄文→沈線、煤状炭化物付着、(内)ミガキ、ナデ	色調(外)暗褐～明褐 (内)明褐

26

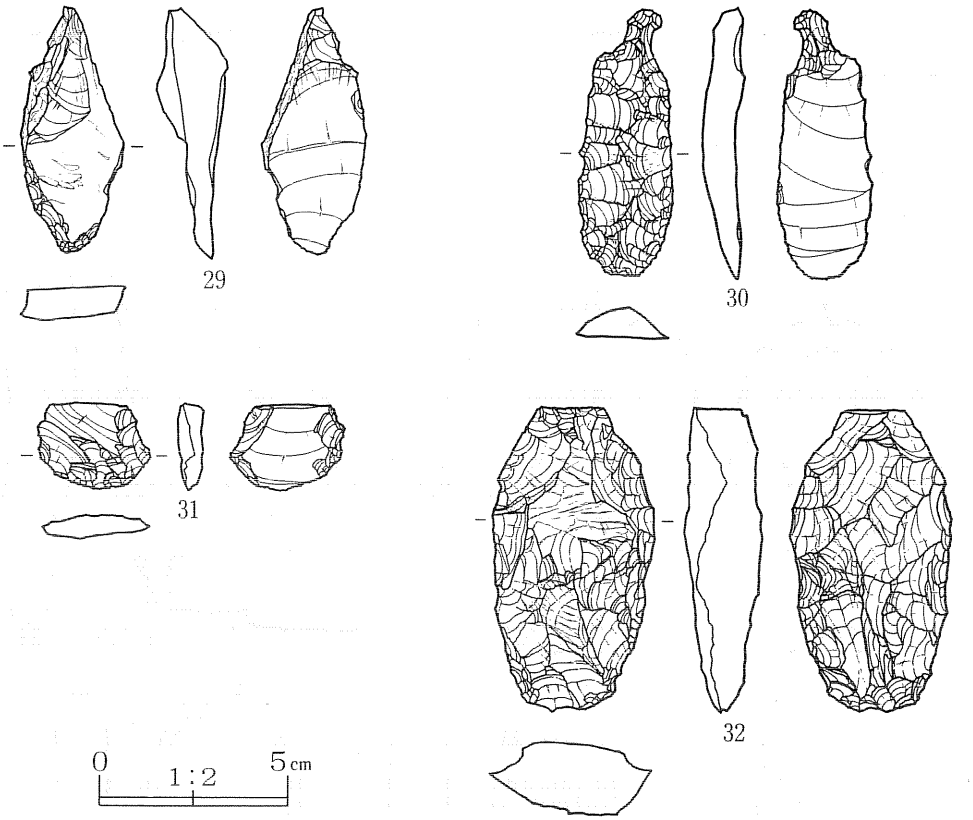
27

26:SK81
27:SK82
28:SK99

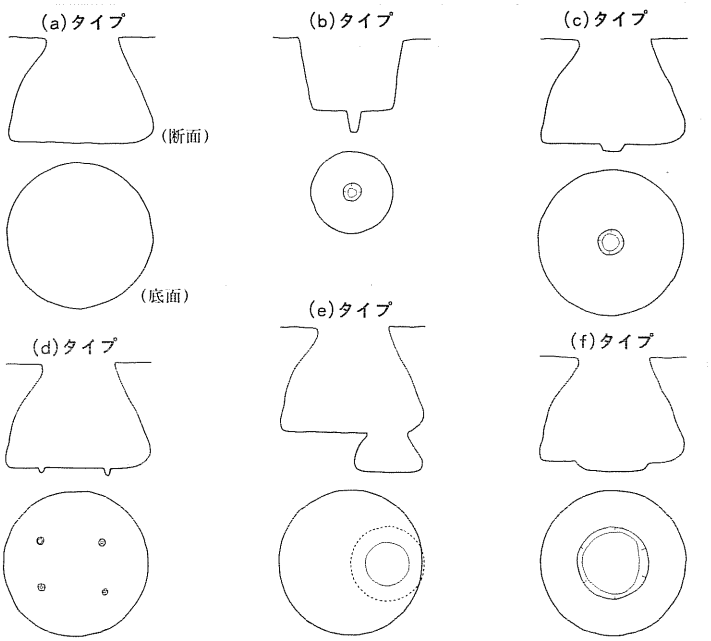
28

0　1:3　10cm

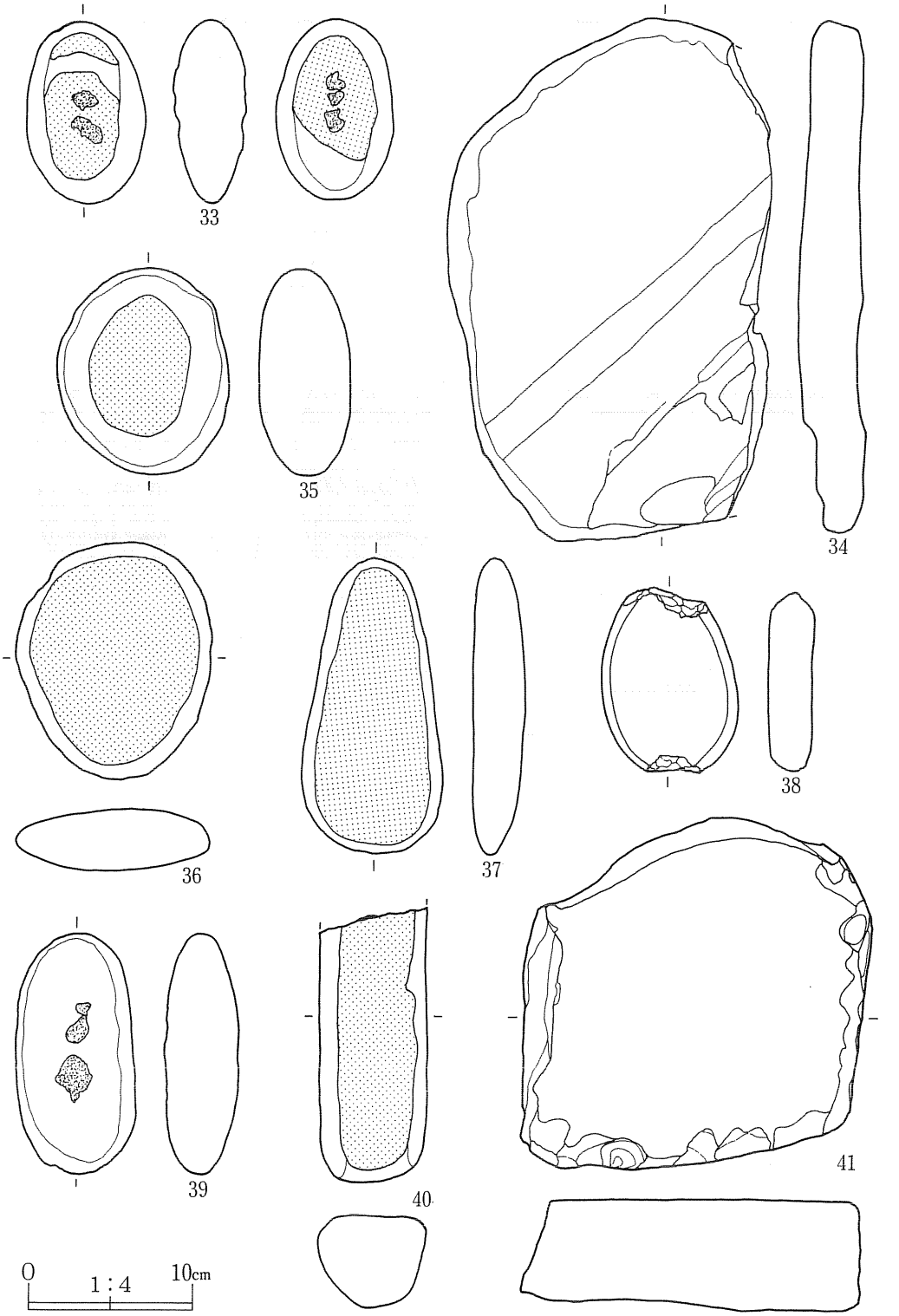
第18図　土坑内出土土器



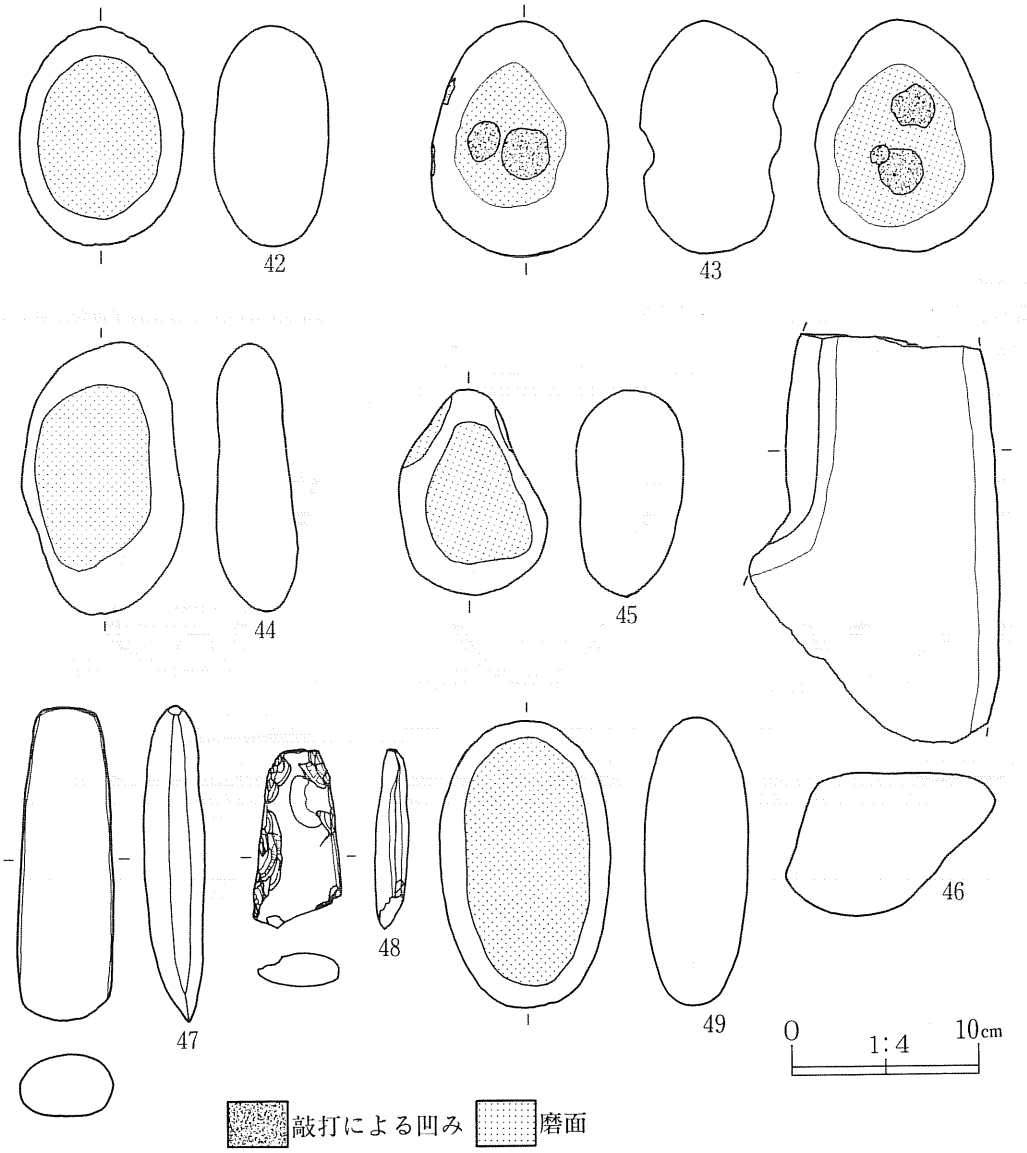
第19図　遺構内出土石器(1)



第20図　土坑底面形態分類図

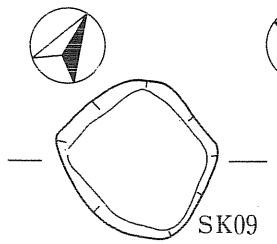


第21図　遺構内出土石器(2)

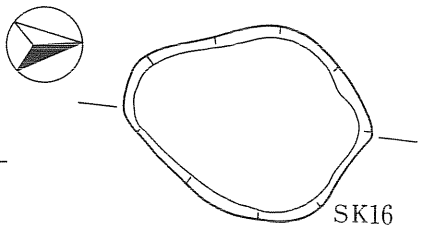


番号	出土遺構	長さ	幅	厚さ	重　量	番号	出土遺構	長さ	幅	厚さ	重　量
33	SI19炉石Q1	11.0	7.3	4.5	414.53	41	SN112S-10	21.7	21.3	6.9	5120
34	SI18炉石	31.9	19.7	4.1	3267	42	SK64Q1	11.5	8.6	6.1	760.85
35	SI43Q2	12.5	10.5	5.6	1001.44	43	SK64Q2	12.2	9.5	7.5	1220.40
36	SI43Q3	14.5	11.7	3.7	933.36	44	SK82Q1	14.3	8.6	4.3	620.28
37	SI80	17.9	8.7	3.1	631.62	45	SK82Q2	10.9	7.9	5.8	611.37
38	SI110Q4	11.2	8.5	3.9	407.65	46	SK95	(21.6)	13.3	7.6	(2474.8)
39	SI110	14.6	7.2	4.5	694.45	47	SK96Q2	16.5	5.0	3.2	429.77
40	SN112S-9	(16.7)	6.6	5.6	(1114.84)	48	SK96Q1	(9.4)	4.7	1.8	(101.60)
						49	SK114Q1	15.1	9.1	5.4	1160.8

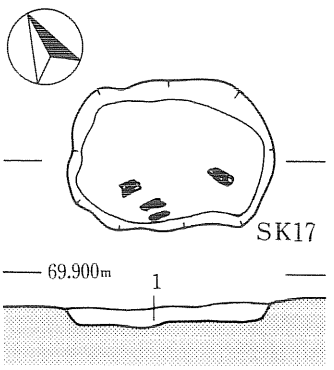
第22図　遺構内出土石器(3)



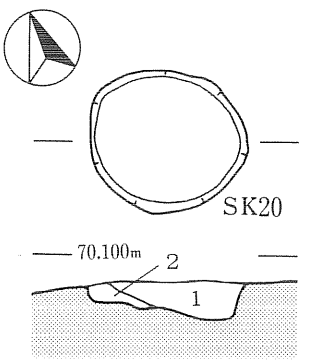
SK09
1　黒　色(10YR1.7/1)締まり弱、地山粒子少量含む



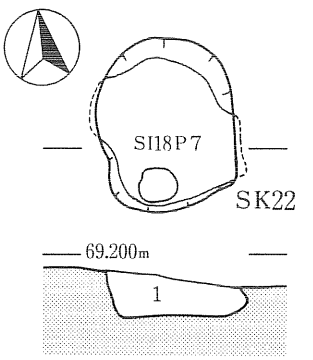
SK16
1　暗褐色(10YR3/4)地山粒子斑状に多く含む



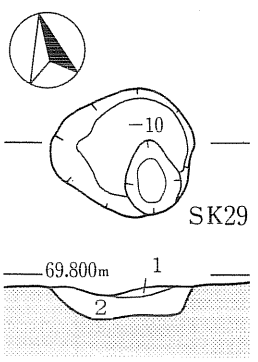
1　黒　色(10YR2/1)炭化材(物)多量に含む



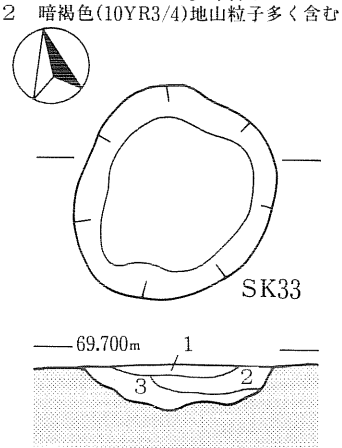
1　黒褐色(10YR2/3)地山粒子・小ブロック多く含む
2　暗褐色(10YR3/4)地山粒子多く含む



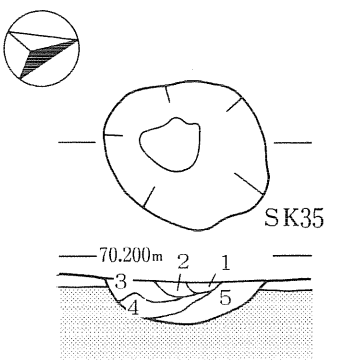
1　黒褐色(10YR2/3)地山粒子
下位ほど多く含む



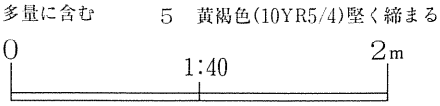
1　黒褐色(10YR2/2)締まり強、
地山粒子ごく少量含む
2　暗褐色(10YR2/3)締まり強、地山小ブロックやや多く含む



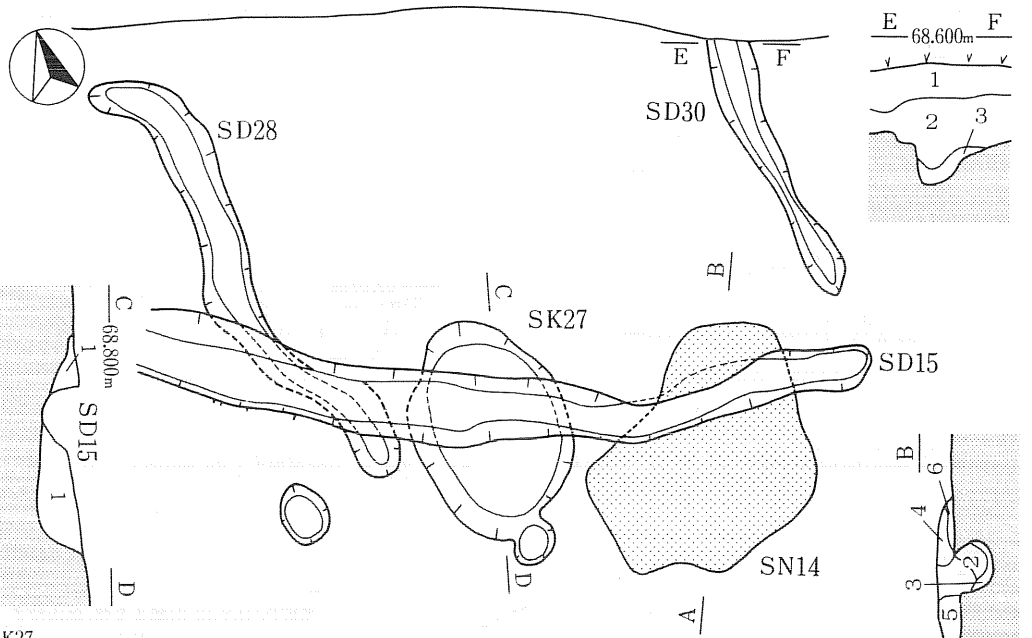
1　黒褐色(10YR2/2)締まり弱、地山粒子をやや多く含む
2　黒　色(10YR2/1)混入物殆ど含まず
3　黒褐色(10YR3/2)締まり弱、地山粒子多量に含む



1　黒褐色(10YR2/2)締まり強
2　黒　色(10YR1.7/1)地山粒子殆ど含まない
3　黒褐色(10YR2/2)地山粒子やや多く含む
4　暗褐色(10YR3/3)地山粒子少量含む
5　黄褐色(10YR5/4)堅く締まる、地山二次堆積



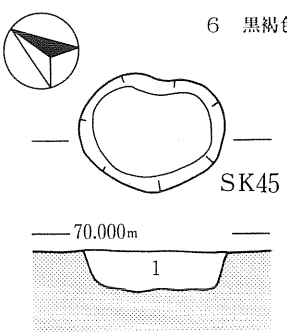
第23図　調査区東部　土坑(1)

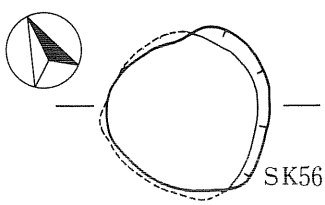


SK27
1　暗褐色(10YR3/4)地山粒子・小ブロック
　斑状にやや多く含む

SN14・SD15
1　黒褐色10YR2/2)下位ほど地山粒子多く含む
2　黒　色(10YR2/1)地山粒子少量含む
3　明黄褐色(10YR6/6)地山二次堆積土
4　にぶい黄橙色(10YR7/3～7/4)白色粘土、一部焼けている、堅く締まる
5　にぶい黄褐色(10YR5/4)～褐色(10YR4/4)白色粘土、焼土、炭化物少量混じる
6　黒褐色(10YR2/3)基本層位Ⅰb層に相当

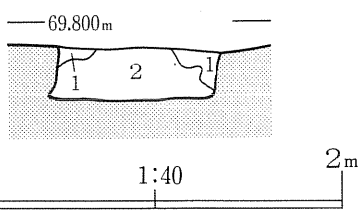
SD30
1　黒褐色(10YR2/2)基本層位Ⅰ層
2　黒　色(10YR2/1)地山粒子少量含む
3　暗褐色(10YR3/3)締まり弱、地山粒子多く含む



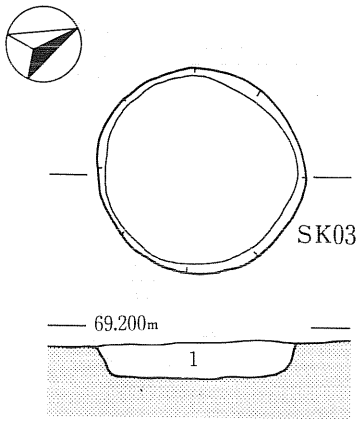


SK45
1　暗褐色(10YR3/4)締まり強、炭化物・地山粒子ごく少量含む

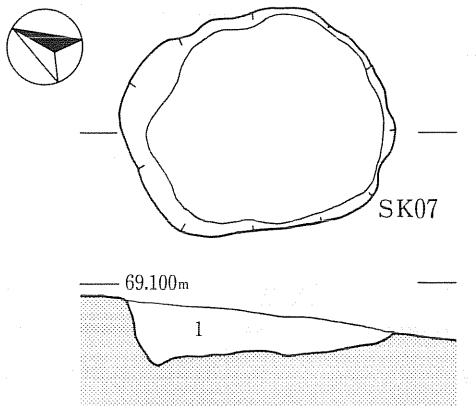
SK56
1　暗褐色(10YR3/3)地山粒子を多く含む
2　黒褐色(10YR2/2)締まり強、地山粒子は殆ど含まない



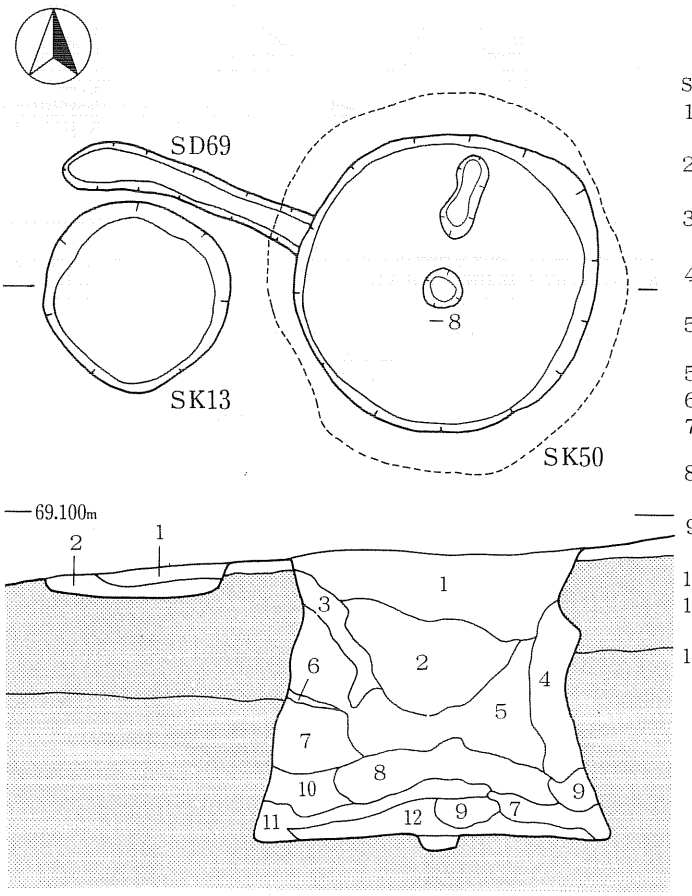
第24図　調査区東部　土坑(2)



1　黒褐色(10YR2/3)地山粒子・小ブロック少量含む



1　黒褐色(10YR2/3)締まり強、地山粒子・小ブロック少量含む

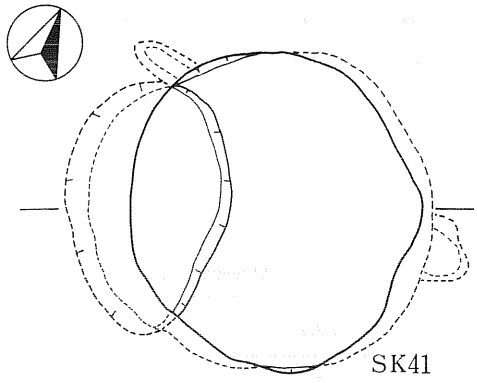


SK50
1　黒褐色(10YR2/2)締まり強、地山粒子少量含む
2　黒褐色(10YR2/3)地山粒子・小ブロックやや多く含む
3　黒　色(10YR2/1)地山粒子・小ブロックやや多く含む
4　黒褐色(10YR2/2)締まり弱、地山粒子少量含む
5　黒褐色(10YR3/2)地山小ブロックやや多く含む
5′　5層に類似、含有物は5層より多い
6　暗褐色(10YR3/4)地山粒子少量含む
7　明黄褐色(10YR7/6)締まり弱、地山小ブロック多量に含む
8　黒　色(10YR2/1)締まり強、地山小ブロックやや多く含む
9　褐　色(10YR4/4)締まり弱、地山ブロック
10　黒褐色(10YR2/2)地山粒子多く含む
11　黒褐色(10YR3/2)締まり強、地山粒子斑状に多く含む
12　黒　色(10YR2/1)締まり強、地山粒子ごく少量含む

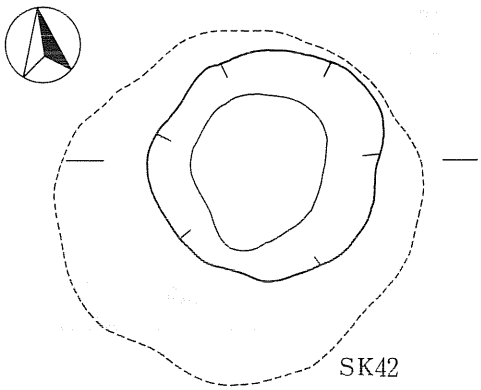
SK13
1　黒褐色(10YR2/3)締まり弱
2　暗褐色(10YR3/3)1層との境不明瞭

0　1:40　2m

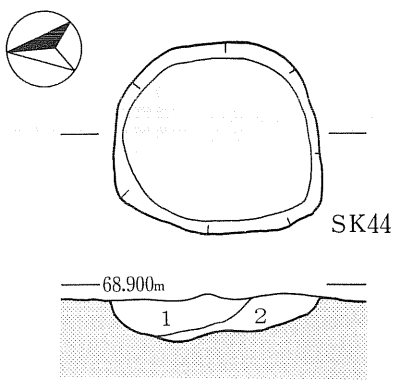
第25図　調査区中央部　土坑(1)



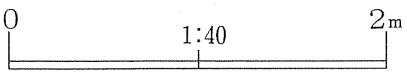
1　黒　色(10YR2/1)地山粒子やや多く含む
2　黒褐色(10YR2/2)炭化物少量、地山粒子多量に含む
3　黒褐色(10YR2/3)地山粒子少量含む
4　黒　色(10YR2/1)混入物を殆ど含まない
5　暗褐色(10YR3/3)地山粒子多量に含む
6　暗褐色(10YR3/4)粘土質、締まり弱、地山ブロックを主体
7　黒褐色(10YR2/2)締まり強、基本的に２層と同、２層より混入物少ない
8　黒褐色(10YR2/2)締まり弱、地山粒子を多量に含む
9　黒褐色(10YR2/2)締まり強、基本的に２・７層と同、２・７層より混入物の粒径小さい
10　黄橙色(10YR7/8)砂質粘土層、締まり弱



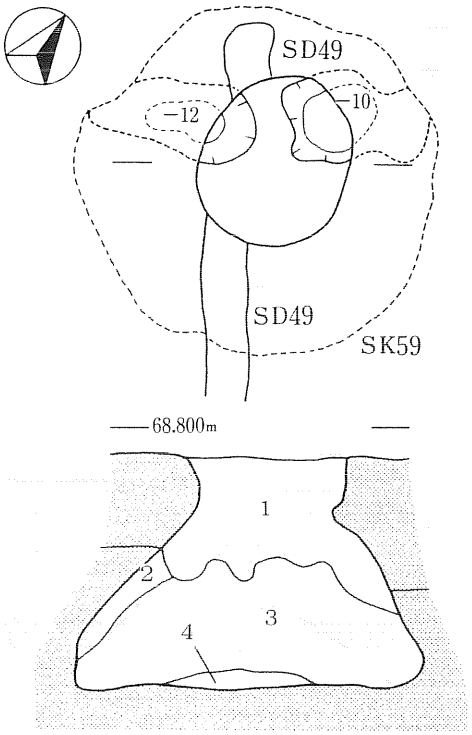
1　黒褐色(10YR2/2)植物根多い
2　黒褐色(10YR3/2)締まり強、地山粒子やや多く、炭化物ごく少量含む
3　黒褐色(10YR2/3)下位ほど地山砂をやや多く含む
4　黒褐色(10YR3/2)地山粒子少量含む
5　橙　色(7.5YR7/6)砂質粘土層
6　黒褐色(10YR2/2)５層土が少量混じる
7　明黄褐色(10YR6/8)非常に堅く締まる、粘土質



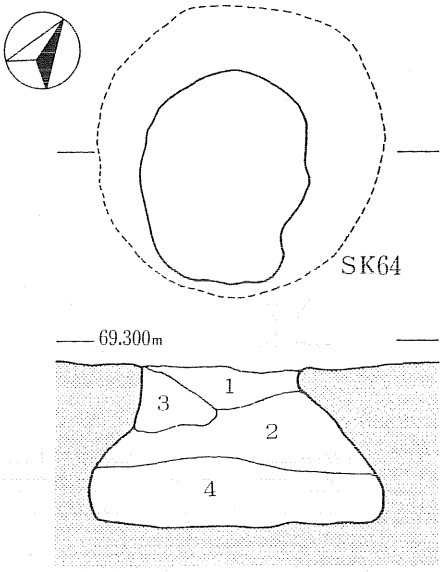
SK44
1　黒褐色(10YR2/2)炭化物少量含む
2　黒褐色(10YR2/3)～暗褐色(10YR3/3)地山粒子・小ブロックを斑状に多く含む



第26図　調査区中央部　土坑(2)



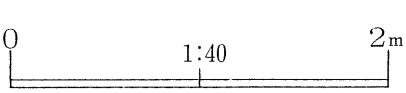
1　黒褐色(10YR2/3)地山粒子やや多く含む
2　褐　色(10YR4/6)締まり弱、地山粒子多く含む
3　明黄褐色(10YR7/6)締まり弱、地山二次堆積土
4　褐　色(10YR4/6)基本的に２層と同
※1・３層の層境は不明瞭



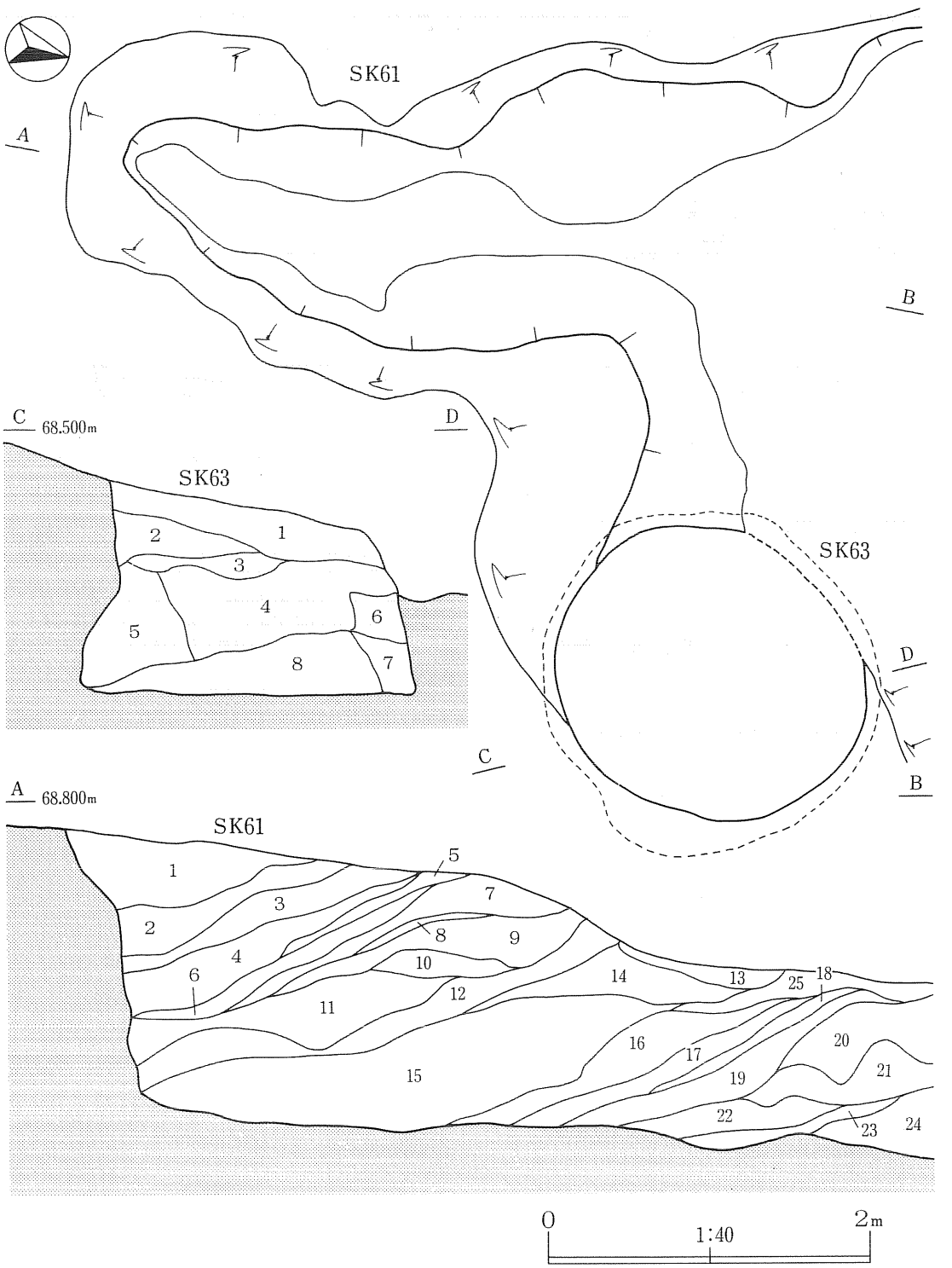
1　黒褐色(10YR2/2)地山粒子少量含む
2　黒褐色(10YR2/3)地山粒子少量含む
3　暗褐色(10YR3/3)地山粒子・小ブロックをやや多く含む
4　黒褐色(10YR2/3)地山粒子ごく少量含む
※1・２・４層の層境は不明瞭

SK61
1　黒褐色(10YR2/2)混入物殆どない
2　褐　色(10YR4/4)
3　黒　色(10YR2/1)
4　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
5　にぶい黄褐色(10YR5/3)灰色を呈する粘質土
6　にぶい黄褐色(10YR4/3)５層と同質
7　褐　色(10YR4/4)６層と４層の混合土
8　にぶい黄褐色(10YR5/4)４層に類似
9　にぶい黄褐色(10YR4/3)６層に類似
10　にぶい黄橙色(10YR6/3)白色を呈する砂質粘土
11　にぶい黄褐色(10YR5/4)締まり弱、ボソボソ
12　暗褐色(10YR3/3)
13　黄褐色(10YR5/6)地山を主とする
14　黒褐色(10YR2/3)地山小ブロック少量含む
15　褐　色(10YR4/4)地山を主とする土
16　黒褐色(10YR2/3)14層に類似、地山14層よりやや少ない
17　黒褐色(10YR3/1)地山小ブロック少量含む
18　黄褐色(10YR5/6)13層と同質
19　黄褐色(10YR5/6)地山二次堆積土
20　明黄褐色(10YR6/8)締まり弱、砂質粘土の二次堆積
21　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質粘土の二次堆積
22　黒褐色(10YR2/3)16層と同質
23　にぶい黄褐色(10YR5/6)砂質粘土の二次堆積
24　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質粘土の二次堆積
※４～11層地山土の二次堆積、４～７は水性堆積と見られる、全体に締まりなくボソボソしている、20層以下は人為的に埋められている

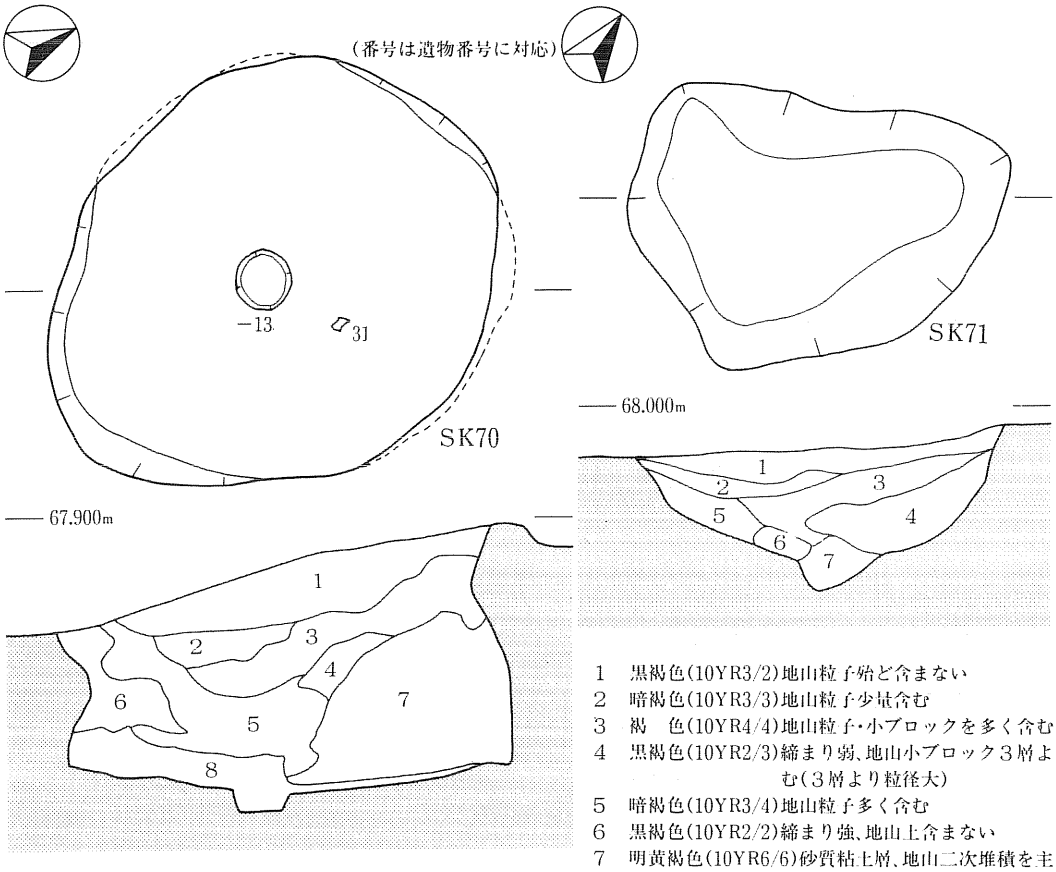
SK63
1　黒褐色(10YR2/3)地山小ブロックをやや多く含む
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)締まり弱、地山小ブロック多く含む
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)締まり２層より弱、地山小ブロックは２層よりやや少ない
4　明黄褐色(10YR6/8)地山二次堆積土
5　明黄褐色(10YR6/8)地山二次堆積土、粒径は４層より大
6　暗褐色(10YR3/4)シルト質土と粘質土が互層に入る
7　にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質粘土、締まり弱、地山二次堆積
8　褐　色(10YR4/4)土質は６層に類似



第27図　調査区中央部　土坑(3)



第28図　調査区中央部　土坑(4)

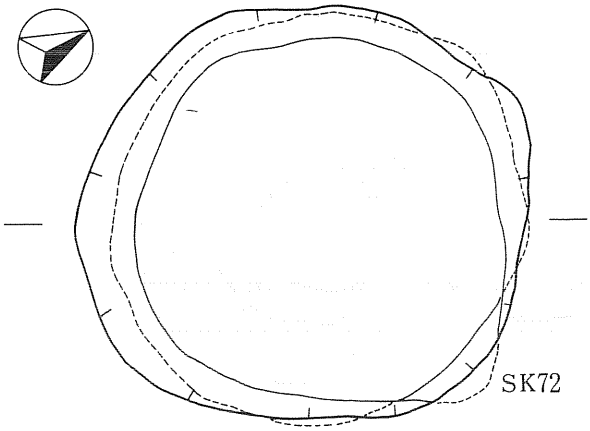


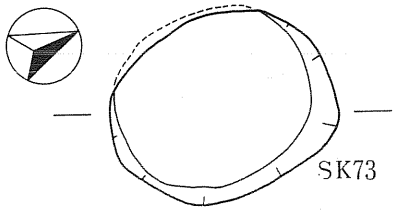
1　黒　色(10YR2/1)地山粒子殆ど含まない
2　黒　色(10YR2/1)地山粒子少量含む、締まり1層より弱
3　黒褐色(10YR2/3)地山粒子・小ブロックを斑状に多く含む
4　黄褐色(10YR5/6)砂質粘土、基本的に７層と同
5　黒褐色(10YR2/2)３層に類似、３層より地山多く含む
6　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質粘土、地山二次堆積を主とする
7　明黄褐色(10YR6/6)砂質粘土、地山二次堆積土(人為的)
8　黒　色(10YR2/1)地山粒子ごく少量含む

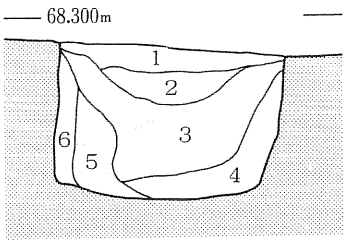
1　黒褐色(10YR3/2)地山粒子殆ど含まない
2　暗褐色(10YR3/3)地山粒子少量含む
3　褐　色(10YR4/4)地山粒子・小ブロックを多く含む
4　黒褐色(10YR2/3)締まり弱、地山小ブロック３層より多く含む(３層より粒径大)
5　暗褐色(10YR3/4)地山粒子多く含む
6　黒褐色(10YR2/2)締まり強、地山上含まない
7　明黄褐色(10YR6/6)砂質粘土層、地山二次堆積を主とする

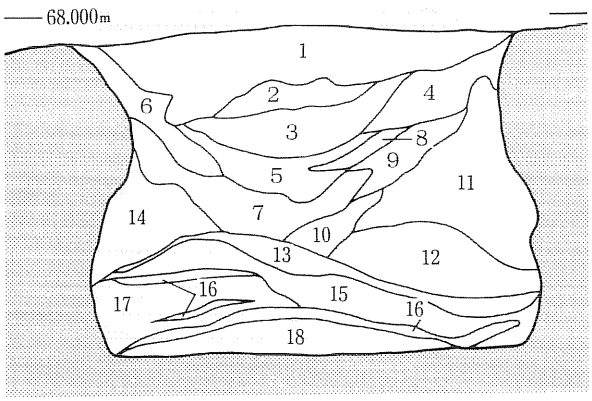
0　1:40　2m

第29図　調査区西端部　土坑(1)







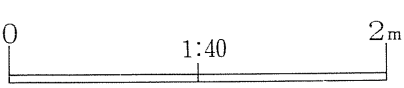


1　黒　色(10YR1.7/1)締まり弱、地山粒子ごく少量含む
2　暗褐色(10YR3/3)地山粒子多く含む
3　黄褐色(10YR5/8)地山二次堆積を主とする土
4　暗褐色(10YR3/3)基本的に２層と同
5　黒褐色(10YR2/3)地山小ブロックを斑状に多く含む
6　褐　色(10YR4/4)地山二次堆積を主とする土
7　褐　色(10YR4/6)地山小ブロックを多量に含む(５層より粒径大)
8　明黄褐色(10YR6/8)地山二次堆積を主とする土
9　褐　色(10YR4/6)７層と同、地山土の含有は７層より少ない
10　明黄褐色(10YR6/6)９層と同質
11　明黄褐色(10YR6/8)地山二次堆積土、シルト質土は含まない
12　明黄褐色(10YR6/8)11層と同、黒褐色シルト質土を筋状に含んでいる
13　褐　色(10YR4/6)７層に類似
14　明黄褐色(10YR6/6)10層と同質
15　暗褐色(10YR3/4)地山小ブロックを多く含む
16　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質粘土層、堅く締まる
17　明黄褐色(10YR6/6)14層に類似、14層より白っぽく見える
18　暗褐色(10YR3/4)15層に類似、地山土は15層よりやや少ない
※1･18層以外全体的に比較的堅く締まっている

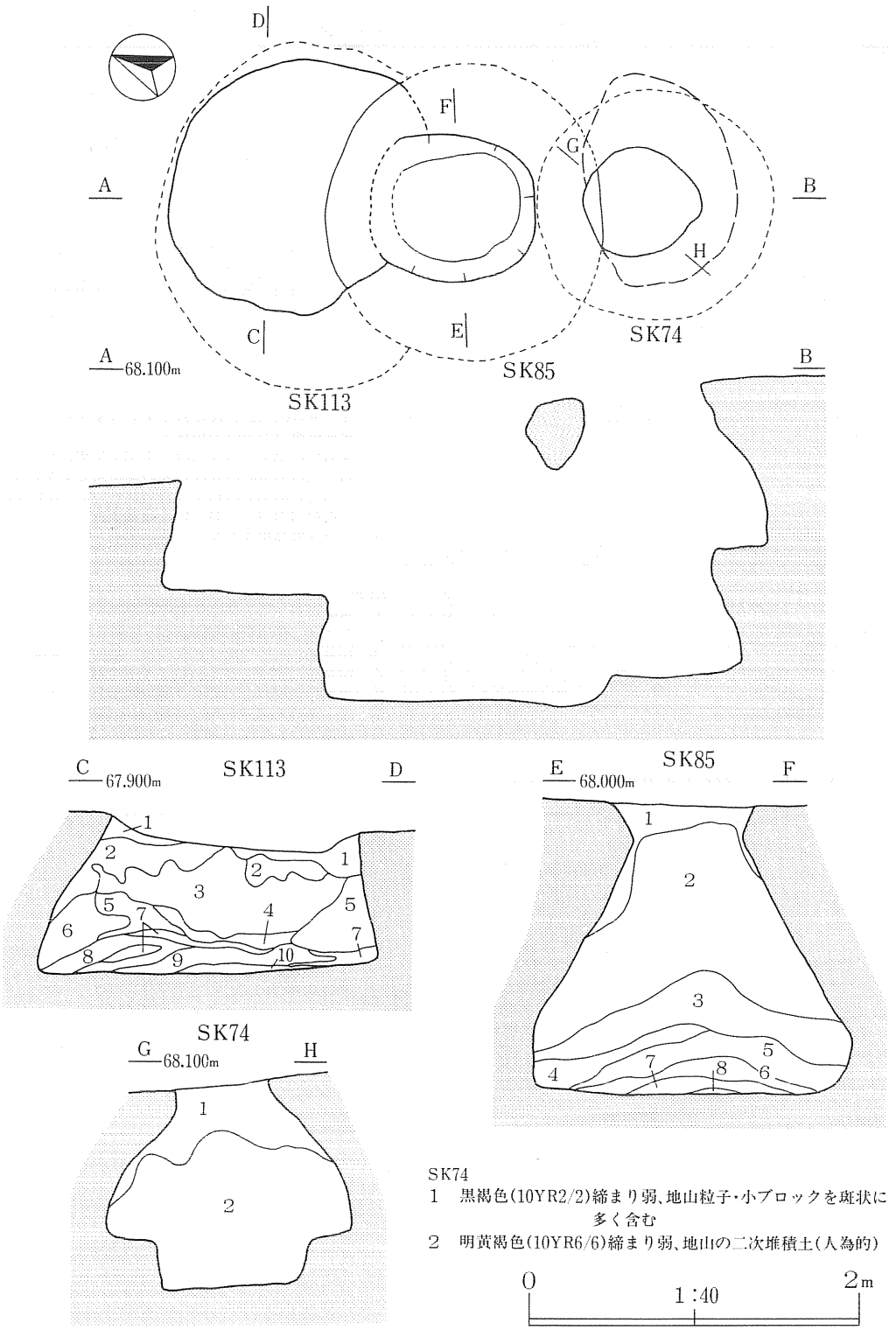
1　黒　色(10YR2/1)地山粒子殆ど含まない
2　明黄褐色(10YR6/6)粘質土
3　黒褐色(10YR2/2)地山粒子斑状に少量含む
4　褐　色(10YR4/6)赤みの強い地山土を多く含む
5　黄褐色(10YR5/6)締まり強、黄みの強い地山土を主体とする。
6　暗褐色(10YR3/3)地山粒子を殆ど含まない
※1～３･６層は締まり弱

SK85
1　黒褐色(10YR2/2)地山粒子少量含む
2　黄橙色(10YR7/8)締まり強、地山を主とする土
3　明黄褐色(10YR6/8)締まり弱、地山二次堆積土
4　暗褐色(10YR3/3)地山粒子少量含む
5　黒褐色(10YR3/2)締まり強、地山粒子少量含む
6　黒　色(10YR2/1)締まり強、地山粒子ごく少量含む
7　暗褐色(10YR3/4)締まり強、４層に類似
8　黒褐色(10YR2/3)締まり強、地山粒子ごく少量含む

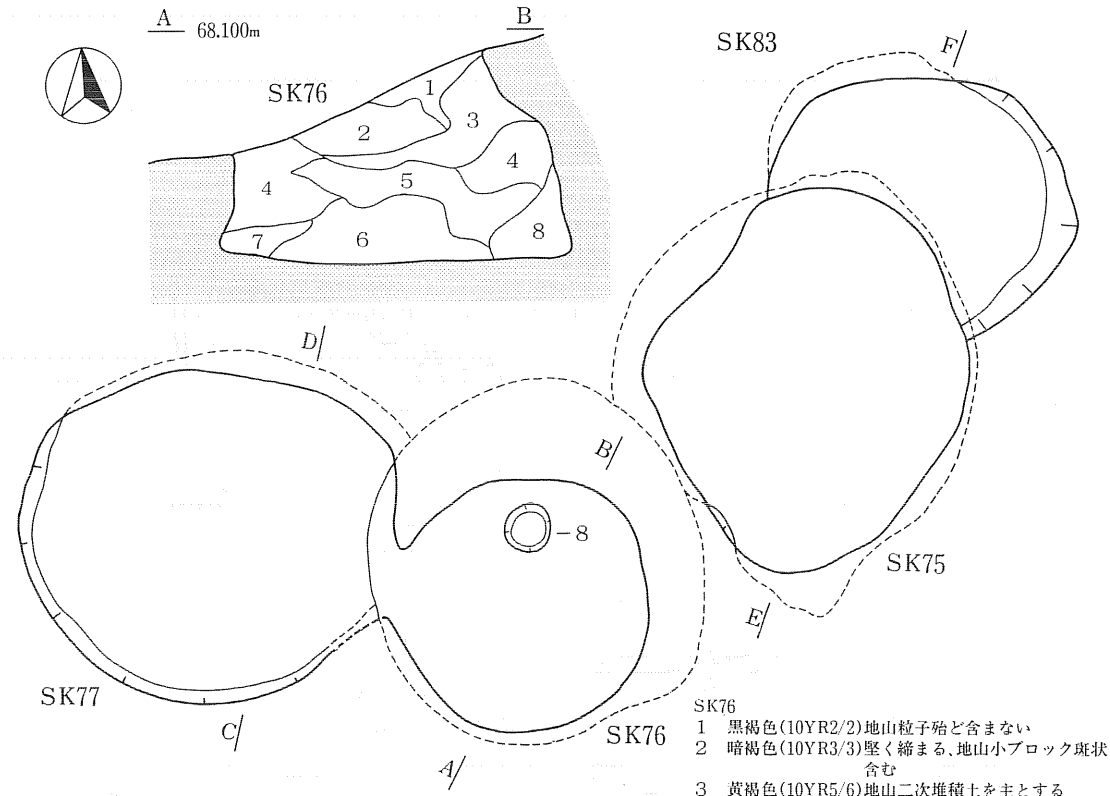
SK113
1　黒　色(10YR2/1)締まり強、地山小ブロック･粒子少量含む
2　黒褐色(10YR2/3)締まり強、地山小ブロック少量含む
3　黄褐色(10YR5/8)地山土を主とする
4　黒褐色(10YR2/2)地山粒子少量含む
5　明黄褐色(10YR7/6)締まり弱、地山土を主とする
6　明黄褐色(10YR6/6)地山土を主とする、シルト質土をごく少量含む
7　にぶい黄褐色(10YR7/4)締まり弱、砂質粘土とシルト質土の混合
8　明黄褐色(10YR6/8)地山土を主とする
9　黒褐色(10YR2/3)地山粒子やや多く含む
10　黒　色(10YR2/1)締まり弱、地山粒子ごく少量含む

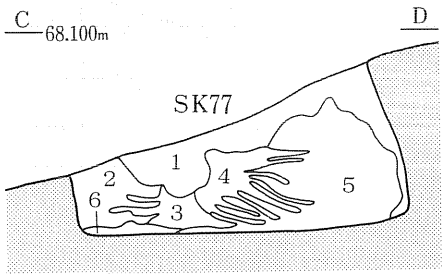


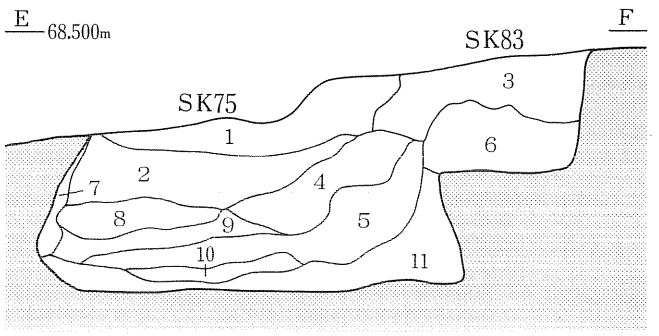
第30図　調査区西端部　土坑(2)



第31図　調査区西端部　土坑(3)



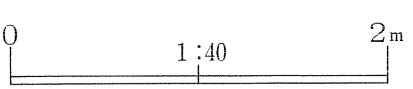




SK76
1　黒褐色(10YR2/2)地山粒子殆ど含まない
2　暗褐色(10YR3/3)堅く締まる、地山小ブロック斑状に多く含む
3　黄褐色(10YR5/6)地山二次堆積土を主とする
4　黄褐色(10YR5/6)基本的に３層と同
5　黒褐色(10YR3/1)地山小ブロックを斑状にやや多く含む
6　黒　色(10YR2/1)地山小ブロック少量含む
7　暗褐色(10YR3/4)地山小ブロックを多量に含む
8　暗褐色(10YR3/3)基本的に７層と同

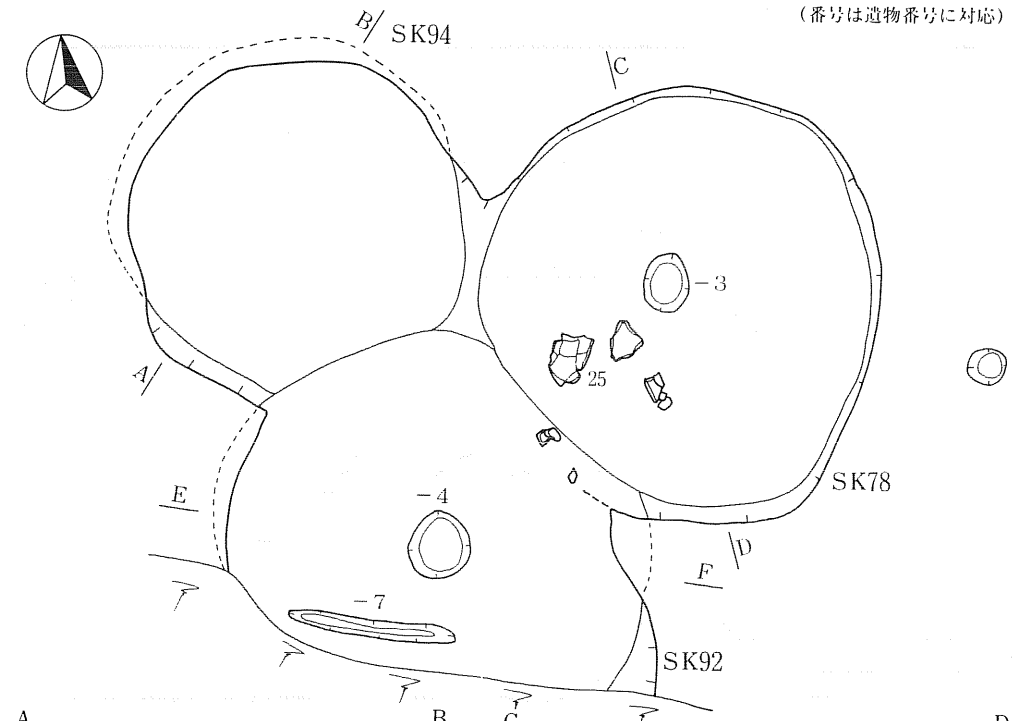
SK77
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)締まり弱、地山小ブロックを斑状にやや多く含む
2　黄褐色(10YR5/6)地山二次堆積を主とする土
3　暗褐色(10YR3/3)地山小ブロックを斑状に多量に含む
4　褐　色(10YR4/4)1層に類似、地山小ブロックを少量含む
5　明黄褐色(10YR6/6)砂質粘土、地山二次堆積土
6　黒褐色(10YR2/3)地山粒子を含まない

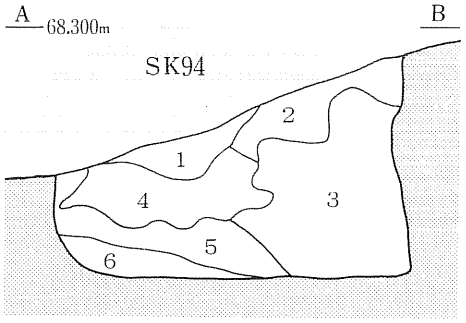
SK75・SK83
1　黒褐色(10YR2/2)地山小ブロック少量含む
2　黒褐色(10YR2/3)地山小ブロックやや多く含む
3　にぶい黄褐色(10YR5/4)地山小ブロックを多く含む
4　黄褐色(10YR5/6)３層に類似
5　黄褐色(10YR5/8)粘質土、地山二次堆積土
6　明黄褐色(10YR6/6)砂質粘土、地山二次堆積土(人為的)
7　黄褐色(10YR5/8)５層と同
8　黄褐色(10YR5/6)４層と同
9　明黄褐色(10YR6/6)６層と同
10　黒褐色(10YR3/2)締まり弱



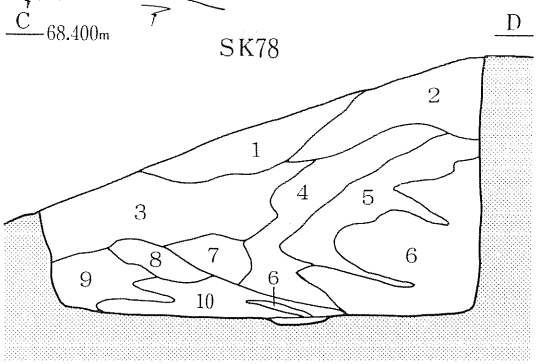
第32図　調査区西端部　土坑(4)

（番号は遺物番号に対応）

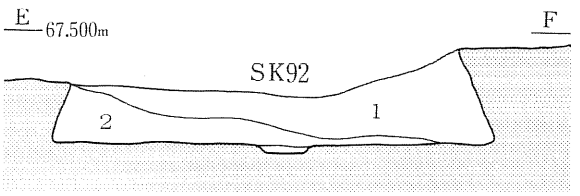




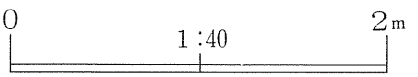
1　黒褐色(10YR2/3)地山小ブロック少量含む
2　暗褐色(10YR3/4)締まり弱
3　褐　色(10YR4/6)地山二次堆積土
4　黒褐色(10YR3/2)地山小ブロックを斑状に多く含む
5　褐　色(10YR4/4)地山小ブロック４層より多く含む
6　黒褐色(10YR3/1)地山粒子・小ブロック少量含む



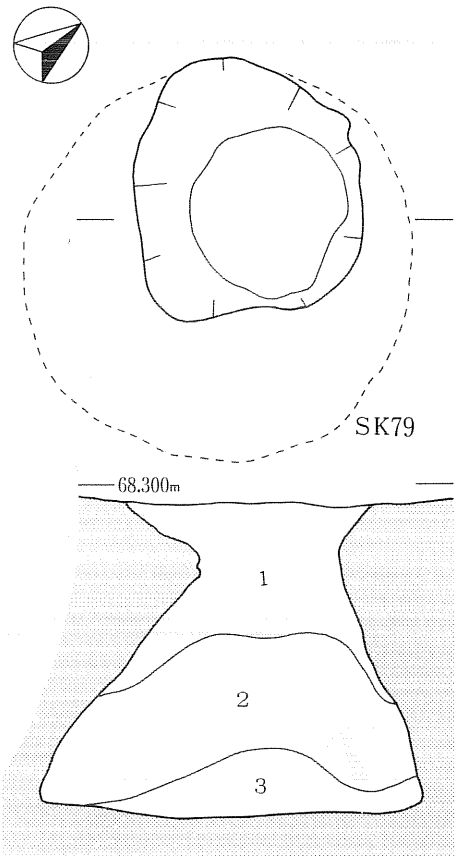
1　黒褐色(10YR2/2)地山小ブロック少量含む
2　暗褐色(10YR3/3)地山粒子やや多く含む
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)地山小ブロックを斑状に多く含む
4　明黄褐色(10YR7/6)粘質土、地山二次堆積土
5　黄褐色(10YR5/6)砂質粘土、地山二次堆積土
6　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質粘土、地山二次堆積土
7　黒褐色(10YR3/2)３層に類似
8　にぶい黄橙色(10YR6/4)６層と同
9　明黄褐色(10YR7/6)４層に類似
10　暗褐色(10YR3/4)地山粒子を斑状にやや多く含む
※４～６層は地山の二次堆積土でシルト質土を殆ど含んでいない、人為的に埋めたものと考えられる



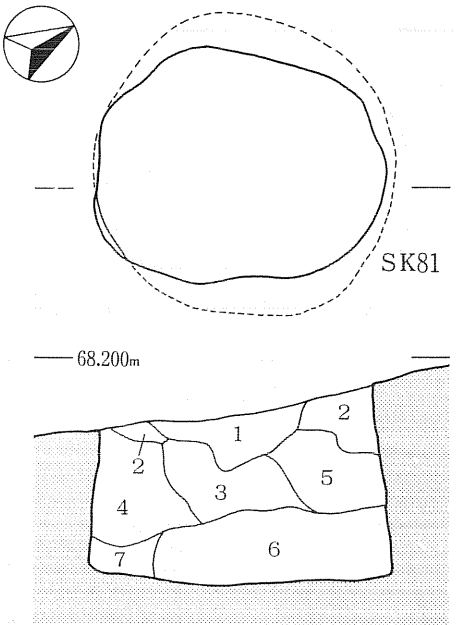
1　暗褐色(10YR3/3)地山小ブロック多く含む
2　明黄褐色(10YR4/3)締まり弱、地山土を主とする



第33図　調査区西端部　土坑(5)



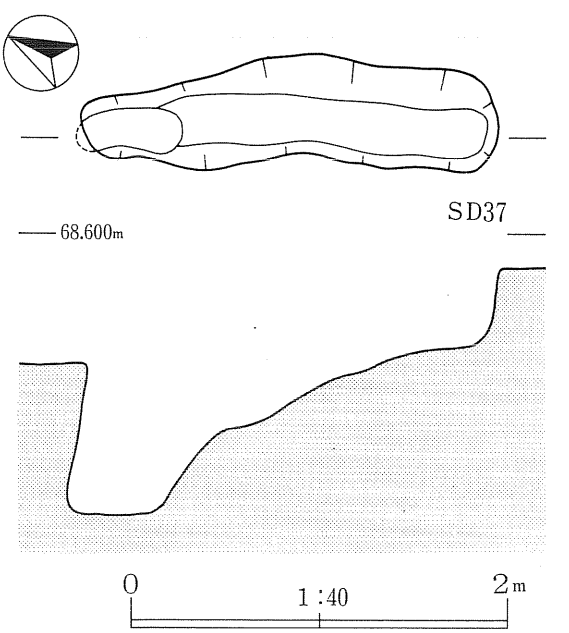
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)地山粒子斑状に多く含む
2　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質粘土、地山二次堆積土
3　暗褐色(10YR3/3)締まり弱、地山粒子少量のみ含む



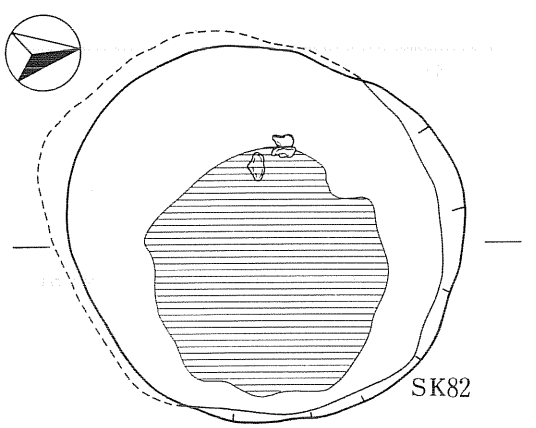
1　黒褐色(10YR2/2)締まり弱、地山小ブロック・粒子少量含む
2　黒褐色(10YR2/3)地山小ブロックやや多く含む
3　暗褐色(10YR3/3)地山小ブロック斑状にやや多く含む
4　黄褐色(10YR5/6)砂質粘土、地山を主とする土
5　褐　色(10YR4/4)基本的に４層と同
6　黒　色(10YR2/1)地山粒子・小ブロックを少量含む
7　黒褐色(10YR2/2)基本的に６層と同、地山粒子・小ブロックは６層より多く含む

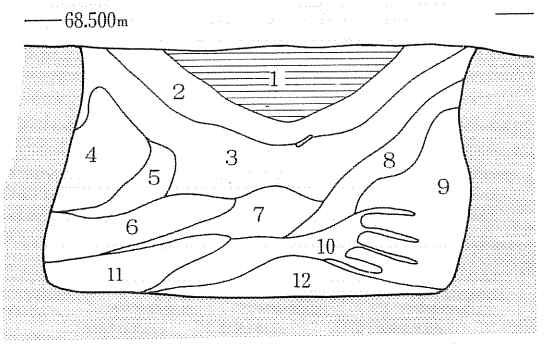
（４）ＳＤ３７溝状遺構（第34図）

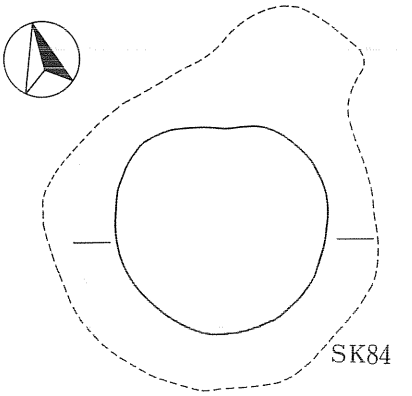
調査区東部沢１北西向きの緩斜面、ＭＩ52・53グリッドⅢ層下面で検出した。長さ2.25ｍ、幅0.35～0.55ｍの規模をもち、確認面からの最深は、0.8ｍである。溝内より遺物の出土は認められなかったが、溝が完全に埋没した後に大湯浮石層が形成されていることから、下限時期は平安期以前となり、周辺出土の遺物から、縄文期の構築と考えている。

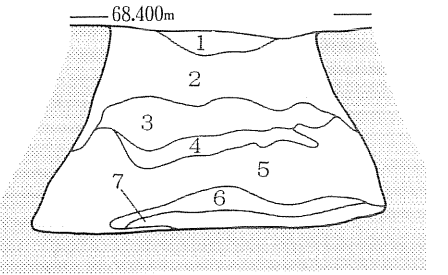


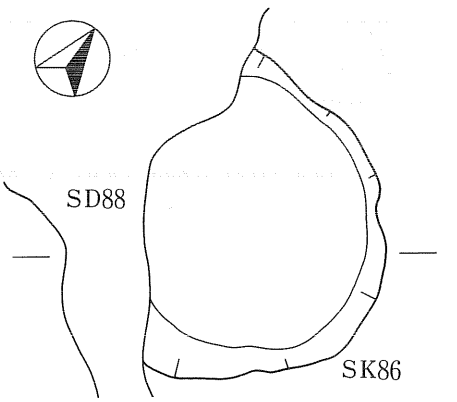
第34図　調査区西端部　土坑(6)

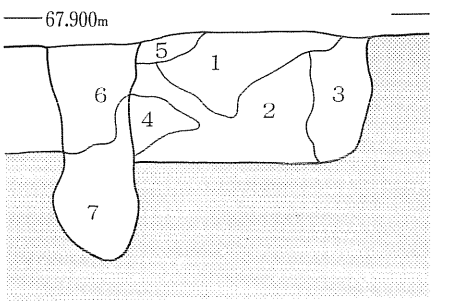










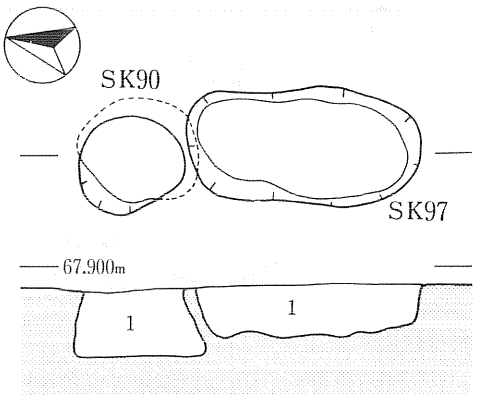


1　明黄褐色(10YR6/6)地山土を人為的に埋めた層
2　黒褐色(10YR2/2)地山粒子少量含む
3　黒褐色(10YR2/3)地山粒子２層よりやや多く含む
4　黄褐色(10YR5/6)地山土を主とする(壁崩落土)
5　暗褐色(10YR3/3)基本的に３層と同、３層より地山多い
6　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質粘土、地山二次堆積土
7　黒褐色(10YR3/2)地山小ブロック３層より多く含む
8　暗褐色(10YR3/3)５層に同
9　明黄褐色(10YR7/6)砂質粘土、シルト質土を筋状に含む
10　黒褐色(10YR2/3)３層に類似、締まり弱
11　明黄褐色(10YR6/6)砂質粘土、地山二次堆積土
12　黒褐色(10YR2/2)地山粒子殆ど含まない
※全体として締まり弱い

SK84
1　明黄褐色(10YR6/6)砂質粘土、地山二次堆積土
2　黒褐色(10YR2/3)締まり弱、地山粒子少量含む
3　明黄褐色(10YR7/6)砂質粘土、シルト質土を少量含む
4　褐　色(10YR4/4)地山粒子・小ブロック多く含む
5　明黄褐色(10YR7/6)砂質粘土、シルト質土は含まない
6　暗褐色(10YR3/4)地山粒子・小ブロック多く含む
7　黒褐色(10YR3/2)地山粒子殆ど含まない

0　1:40　2m

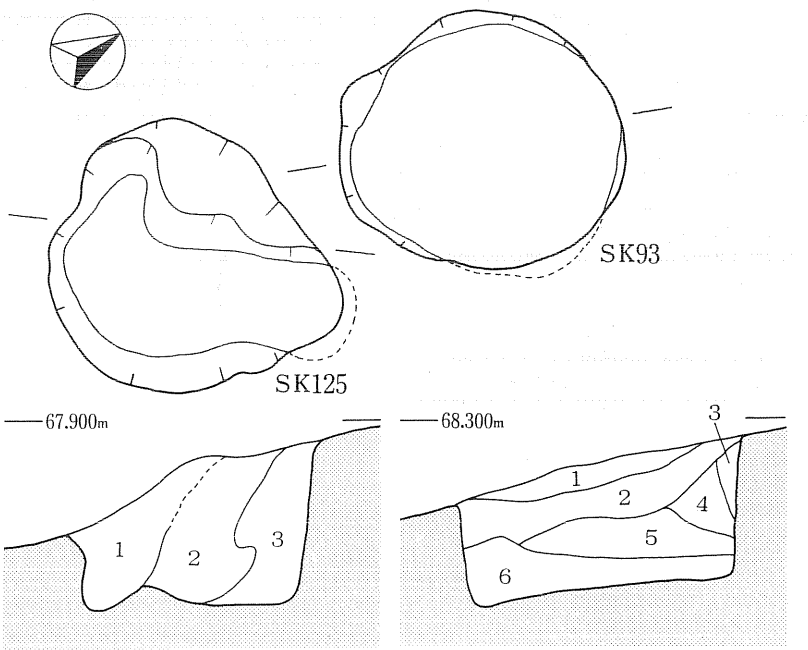
第35図　調査区西端部　土坑(7)



SK86
1　黒　色(10YR2/1)締まり強、地山粒子少量含む
2　暗褐色(10YR3/3)地山小ブロックやや多く含む
3　黄褐色(10YR5/6)地山土の二次堆積
4　明黄褐色(10YR6/8)地山土(ブロック状)
5　黄褐色(10YR5/6)３層と同
6　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質粘土、地山二次堆積
7　明黄褐色(10YR6/6)地山二次堆積

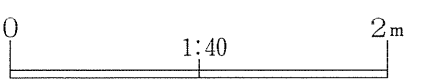
SK90
1　黒褐色(10YR3/1)締まり弱、地山粒子少量含む

SK97
1　黒褐色(10YR3/2)地山粒子多く含む

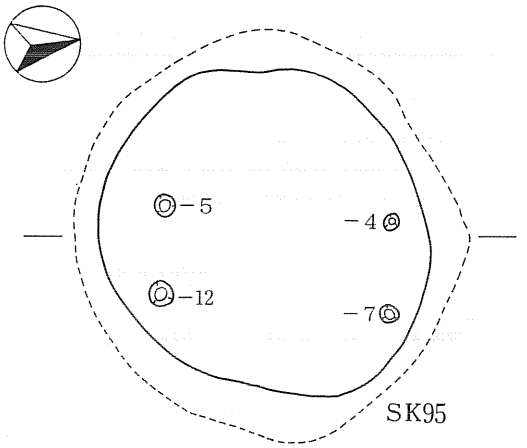


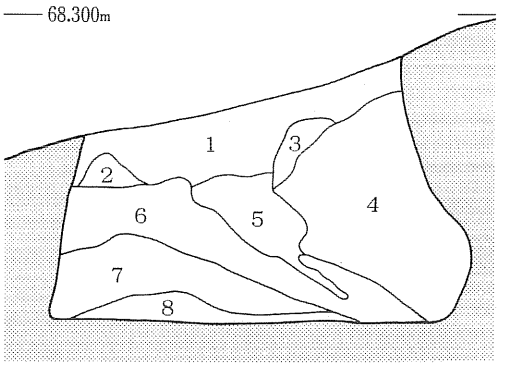
1　暗褐色(10YR3/3)地山粒子・小ブロック斑状に
2　明黄褐色(10YR6/8)地山土を主とする
3　黒褐色(10YR3/2)地山粒子をやや多く含む

1　暗褐色(10YR3/3)締まり弱、地山粒子殆ど含まない
2　暗褐色(10YR3/4)地山粒子少量含む
3　褐　色(10YR4/4)
4　黄褐色(YR5/6)地山二次堆積土(壁崩落土)
5　黒褐色(10YR3/2)地山小ブロック少量含む
6　明黄褐色(10YR7/6)砂質粘土、地山二次堆積土



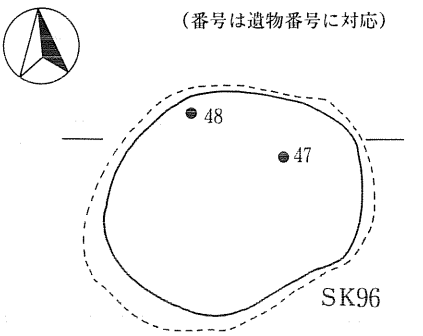
第36図　調査区西端部　土坑(8)

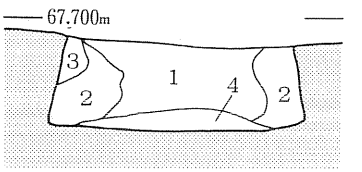




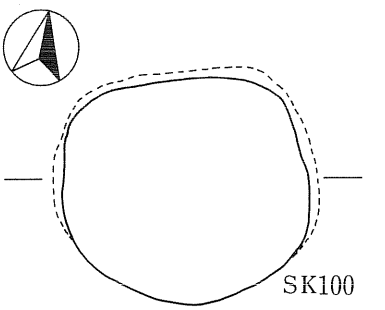
1　黒褐色(10YR2/2)地山粒子少量含む
2　黄褐色(10YR5/6)地山二次堆積土(ブロック状)
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)地山二次堆積を主とする
4　明黄褐色(10YR6/6～6/8)砂質粘土、地山二次堆積土、シルト質土を含まない
5　黒褐色(10YR3/2)地山小ブロック(４層)を多量に含む
6　明黄褐色(10YR7/6)砂質粘土、地山二次堆積土
7　黄褐色(10YR5/6)地山を主とする、シルト質土を筋状に含む
8　黒褐色(10YR2/3)地山小ブロックをやや多く含む

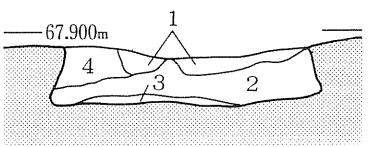
（番号は遺物番号に対応）





1　黒褐色(10YR3/2)炭化物・地山粒子少量含む
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)地山粒子・小ブロック少量含む
3　明黄褐色(10YR6/6)地山二次堆積土(壁崩落土)
4　黒褐色(10YR2/2)炭化物・地山粒子少量含む

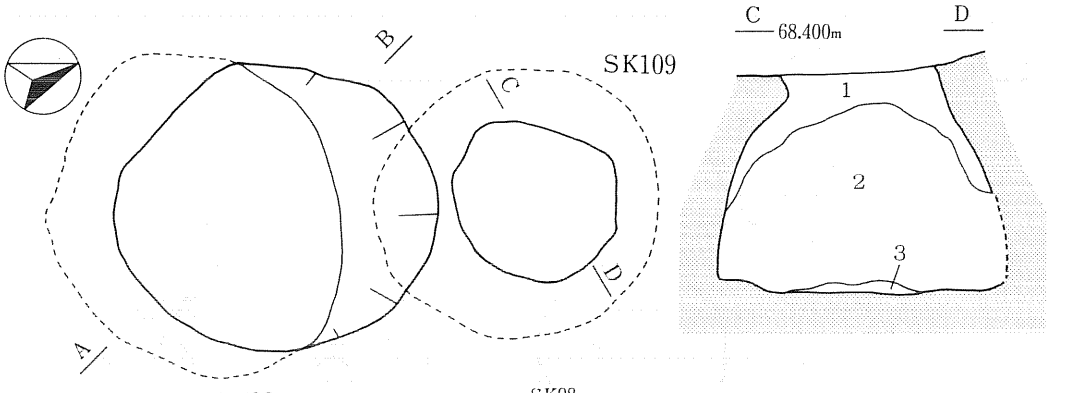


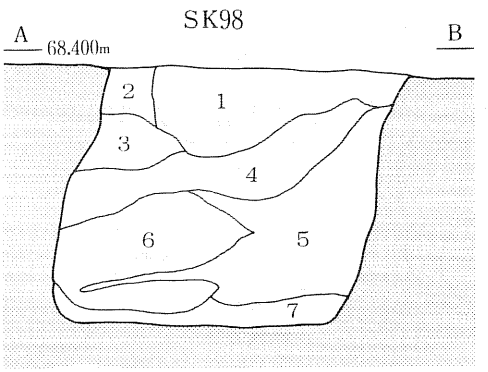


1　暗褐色(10YR3/3)締まり弱、地山粒子少量含む
2　黄褐色(10YR5/6)地山土を主とする
3　黒褐色(10YR2/3)地山粒子殆ど含まない
4　暗褐色(10YR3/3)締まり1層より弱

0　1:40　2m

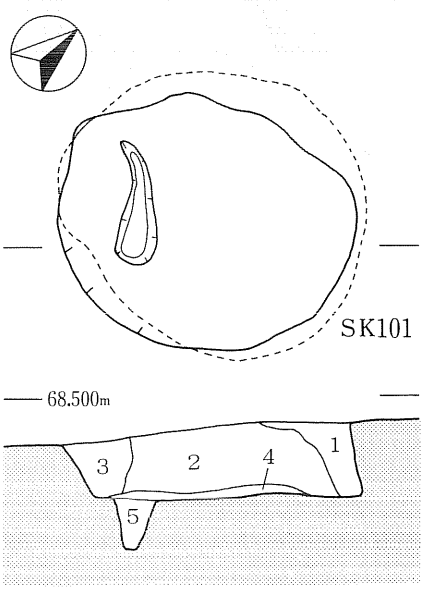
第37図　調査区西端部　土坑(9)

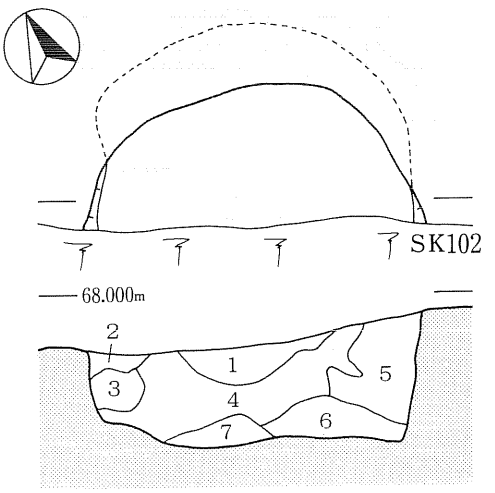




SK98
1　黒褐色(10YR2/2)地山小ブロック少量含む
2　褐　色(10YR4/4)地山を主とする土
3　明黄褐色(10YR6/8)砂質粘土、地山二次堆積土
4　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質粘土、地山二次堆積土
5　黒褐色(10YR2/3)地山小ブロックをやや多く含む
6　明黄褐色(10YR6/8)砂質粘土、３層と同
7　にぶい黄褐色(10YR4/3)締まり弱、地山粒子(４層)多く含む

SK109
1　黒褐色(10YR2/3)地山粒子少量含む
2　明黄褐色(10YR6/6)地山二次堆積土
3　暗褐色(10YR3/4)地山粒子少量含む



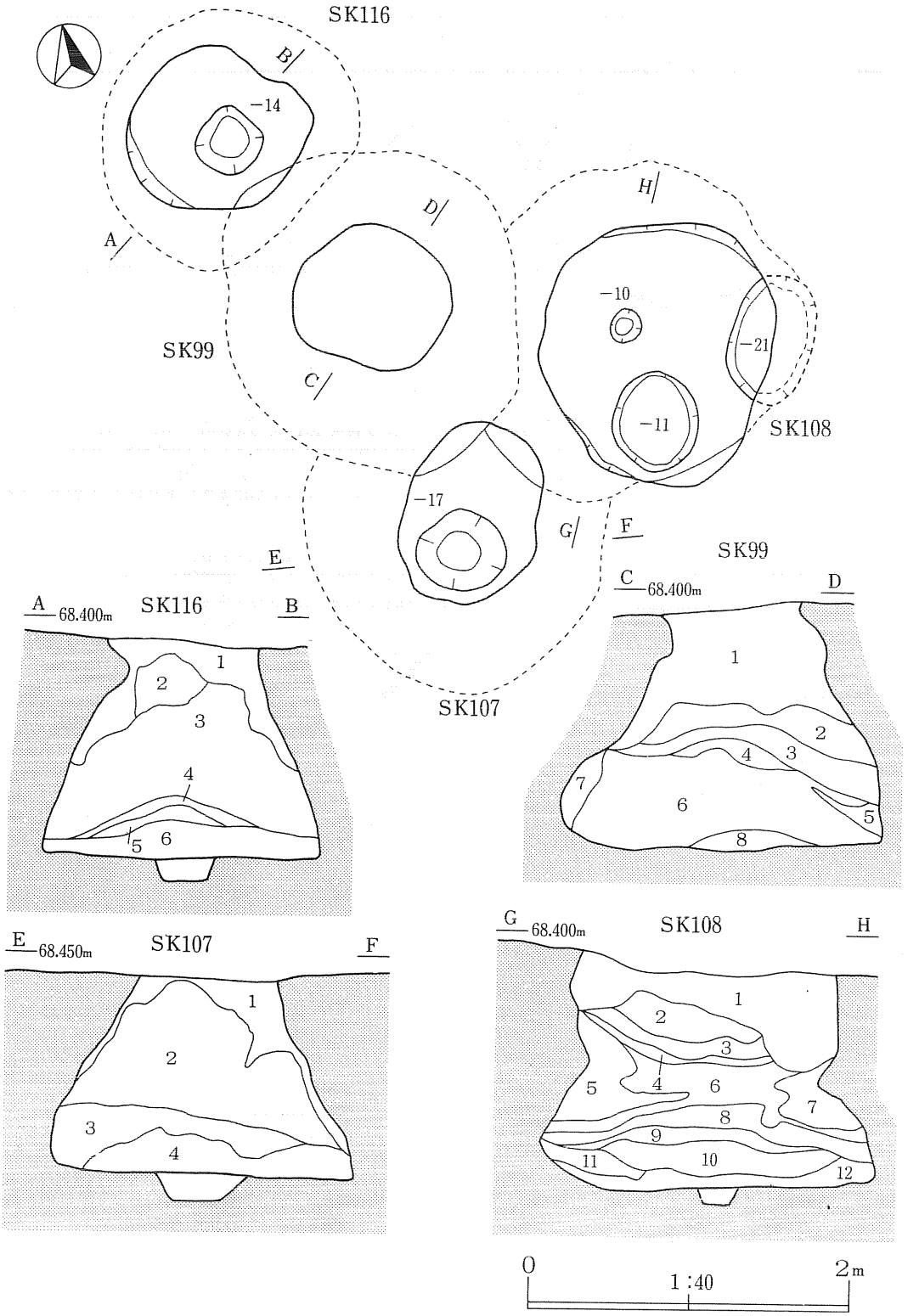


1　褐　色(10YR4/4)地山粒子少量含む
2　明黄褐色(10YR6/6)砂質粘土、締まり弱、地山二次堆積土
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)
4　暗褐色(10YR3/3)地山粒子殆ど含まない
5　にぶい黄褐色(10YR4/3)

1　黒褐色(10YR3/1)地山粒子少量含む
2　黒　色(10YR2/1)
3　明黄褐色(10YR6/6)地山二次堆積土(壁崩落土)
4　黒褐色(10YR3/2)地山粒子多く含む
5　明黄褐色(10YR6/8)地山二次堆積土(壁崩落土)
6　暗褐色(10YR3/3)地山粒子４層より多く含む
7　黒褐色(10YR3/1)1層に類似

0　1:40　2m

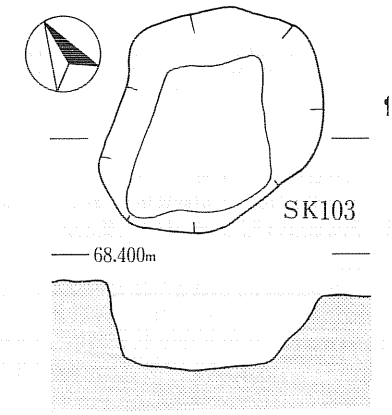
第38図　調査区西端部　土坑(10)

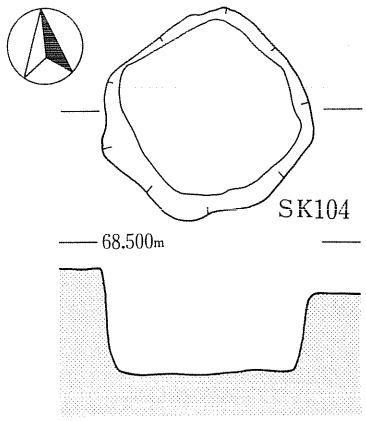


第39図　調査区西端部　土坑(11)

SK99
1　黒褐色(10YR2/2)地山粒子少量含む
2　にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質粘土、地山二次堆積土、シルト質土は含まない
3　黒褐色(10YR2/3)地山粒子少量含む
4　明黄褐色(10YR6/6)地山を主とする土
5　黒褐色(10YR2/3)基本的に３層と同、地山粒子含まない
6　明黄褐色(10YR6/6)砂質粘土、２層と同質
7　にぶい黄橙色(10YR6/4)６層と同質
8　黒褐色(10YR2/3)３・５層と同

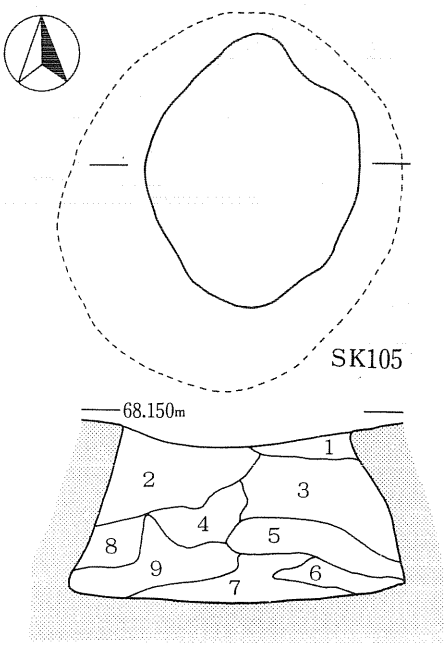
SK107
1　暗褐色(10YR3/3)地山粒子少量含む
2　明黄褐色(10YR7/6)砂質粘土、地山二次堆積
3　黄褐色(10YR5/6)地山を主とする土
4　黒褐色(10YR2/2)地山粒子少量含む



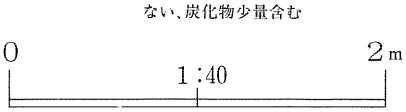


SK108
1　暗褐色(10YR3/3)地山土を斑状にやや多く含む
2　明黄褐色(10YR6/6)地山二次堆積土
3　暗褐色(10YR3/3)基本的に1層と同
4　明黄褐色(10YR6/6)基本的に２層と同
5　明黄褐色(10YR6/8)地山二次堆積土を主とする
6　黒　色(10YR2/1)締まり弱、地山粒子少量含む
7　明黄褐色(10YR6/8)５層と同
8　明黄褐色(10YR6/8)５層と同
9　暗褐色(10YR3/3)1層に類似、地山粒子は1層より多い
10　黒褐色(10YR2/3)地山粒子多く含む
11　明黄褐色(10YR6/6)２層と同
12　暗褐色(10YR3/3)９層に類似、締まり弱

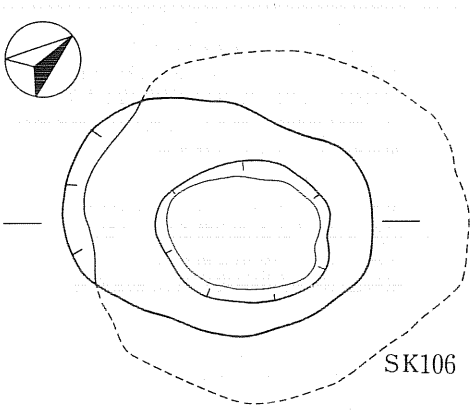
SK116
1　黒褐色(10YR2/3)地山小ブロック斑状に多く含む
2　明黄褐色(10YR6/8)地山を主とする土、シルト質土含まない
3　明黄褐色(10YR6/8)地山二次堆積土、シルト質土含まない
4　黒　色(10YR2/1)地山土を含まない
5　黄褐色(10YR5/6)締まり弱、地山を主とする土
6　黒　色(10YR2/1)４層に類似

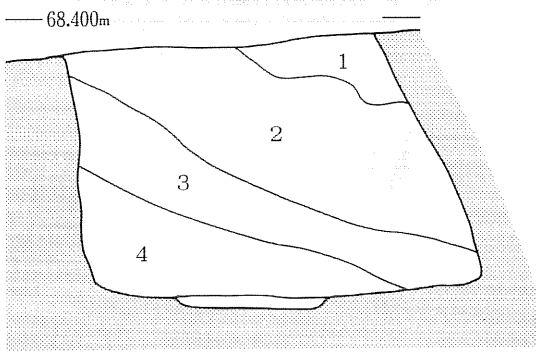


SK105
1　黄褐色(10YR5/8)地山の二次堆積土、上面ほど堅く締まる、SI80構築に際して埋められたと見られる
2　褐　色(10YR4/6)地山小ブロック多量に含む
3　黒褐色(10YR2/3)地山小ブロックやや多く含む
4　褐　色(10YR4/6)地山小ブロックの含有は２層よりやや少ない、炭化物少量含む
5　明黄褐色(10YR6/8)砂質粘土、地山二次堆積
6　明黄褐色(10YR 6/8)砂質粘土、地山二次堆積、シルト質土を筋状に含む
7　黒褐色(10YR3/2)締まり弱、地山粒子殆ど含まない
8　明黄褐色(10YR7/6)砂質粘土、地山二次堆積(壁崩落土か)
9　褐　色(10YR4/6)地山小ブロックは４よりやや少ない

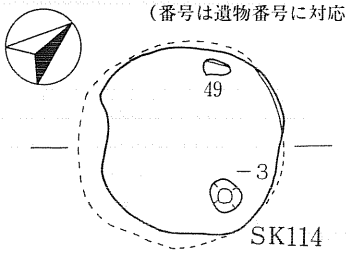


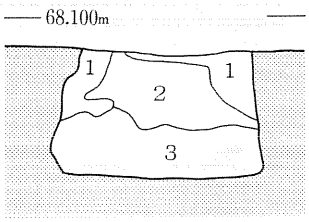
第40図　調査区西端部　土坑(12)





（番号は遺物番号に対応）

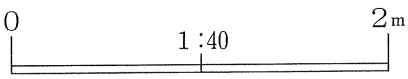


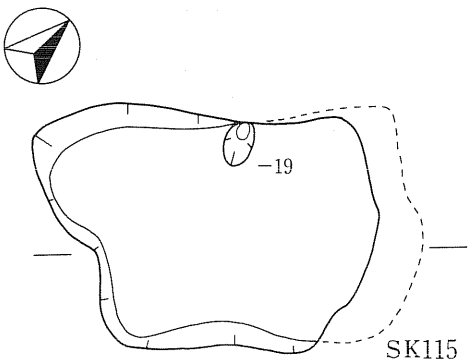


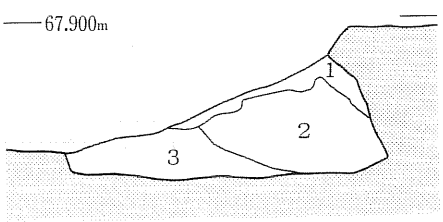
SK114
1　暗褐色(10YR3/4)締まり弱、地山粒子やや多く含む
2　明黄褐色(10YR6/6)砂質粘土、地山二次堆積
3　黒褐色(10YR2/2)地山粒子少量含む

SK106
1　暗褐色(10YR3/3)締まり弱、地山粒子やや多く含む
2　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質粘土、地山二次堆積土
3　明黄褐色(10YR6/6)砂質粘土、地山二次堆積土、２層より赤み強い(２・３層はシルト質土を含まない)
4　黒褐色(10YR3/2)地山粒子少量含む
※締まりは全体に弱い

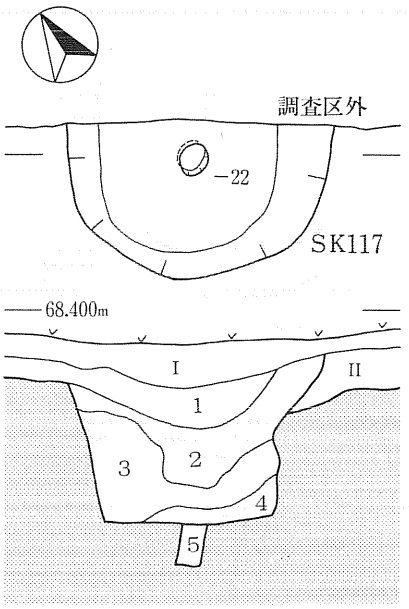
SK115
1　褐　色(10YR4/4)地山粒子少量含む
2　明黄褐色(10YR6/6)地山を主とする土
3　褐　色(10YR4/4)基本的に1層と同、地山粒子は1層より多く含む

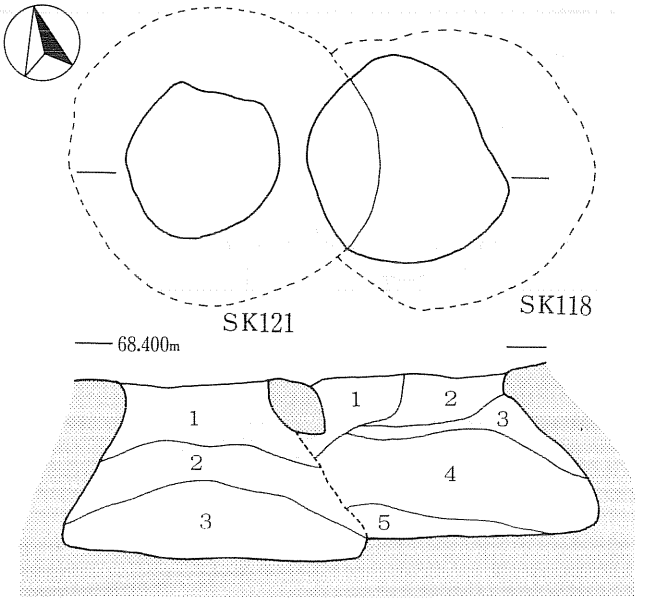






第41図　調査区西端部　土坑(13)

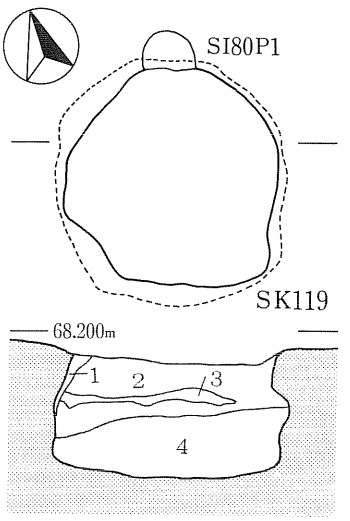




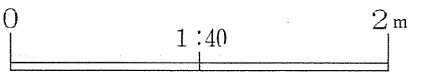
I　基本層位Ｉ層(黒褐色10YR3/1)
II　基本層位II層(黒色10YR2/1)
1　褐　色(10YR4/4)地山粒子多量に含む
2　暗褐色(10YR3/4)地山粒子・小ブロックやや多く含む
3　にぶい黄褐色(10YR3/4)地山粒子２層よりやや多く含む
4　暗褐色(10YR3/3)締まり強、地山粒子少量含む
5　黒褐色(10YR2/3)締まり弱

SK118
1　暗褐色(10YR3/3)締まり弱、地山小ブロック斑状に少量含む
2　明黄褐色(10YR6/6)締まり弱、地山二次堆積を主とする
3　黒褐色(10YR3/2)地山土殆ど含まない
4　明黄褐色(10YR6/8)締まりなくボソボソ、地山二次堆積
5　褐　色(10YR4/4)地山粒子少量含む

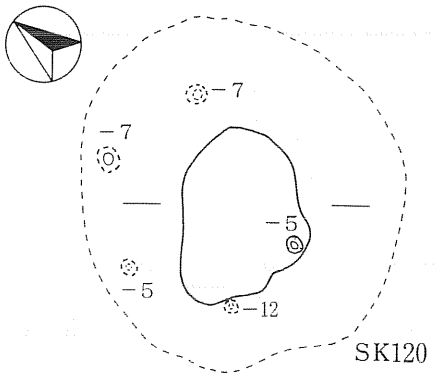
SK121
1　明黄褐色(10YR6/6)地山二次堆積を主とする
2　黒褐色(10YR3/2)地山を殆ど含まない
3　明黄褐色(10YR7/6)地山二次堆積土

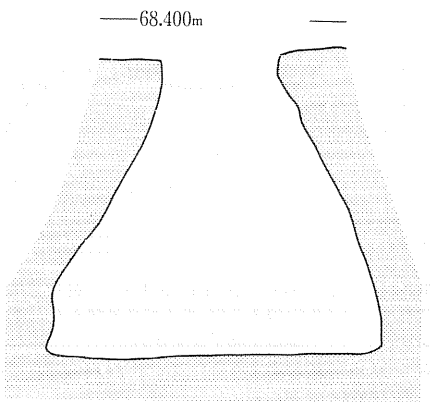


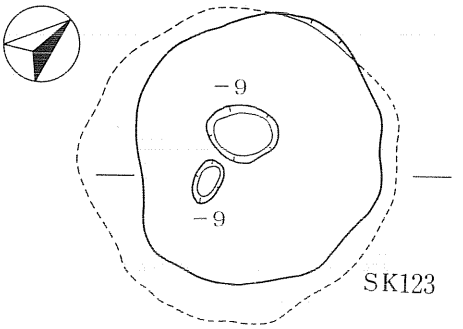
SK119
1　黒褐色(10YR2/3)
2　明黄褐色(10YR6/8)粘質土、上面ほど締まり強、SI80構築に際して埋めた土と見られる
3　褐　色(10YR4/4)２層中に筋状に入る
4　黒褐色(10YR2/3)地山粒子やや多く含む

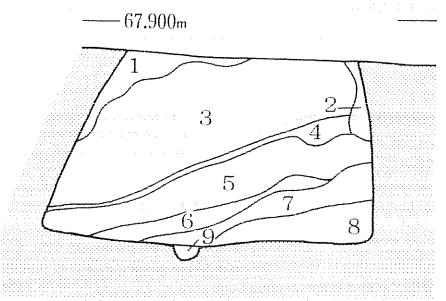


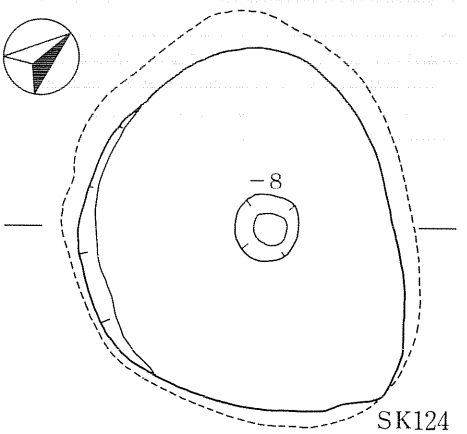
第42図　調査区西端部　土坑(14)

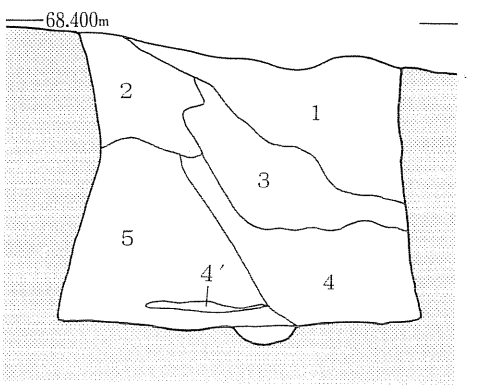






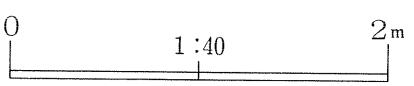






SK123
1　暗褐色(10YR3/3)締まり弱、地山粒子・小ブロック少量含む
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)地山粒子・小ブロック少量含む
3　明黄褐色(10YR7/6)地山二次堆積土、人為堆積か
4　黒褐色(10YR3/1)筋状に入る
5　明黄褐色(10YR6/8)３層と同質
6　にぶい黄褐色(10YR4/3)締まり弱
7　黒褐色(10YR3/1)地山粒子・小ブロック少量含む
8　黒褐色(10YR2/2)地山粒子・小ブロックやや多く含む
9　黒褐色(10YR2/3)地山粒子８層より多く含む

SK124
1　黒褐色(10YR3/2)地山粒子殆ど含まない
2　黄褐色(10YR5/6)地山小ブロック多く含む
3　明黄褐色(10YR6/6)砂質粘土、地山を主とする、シルト質土少量含む
4　明黄褐色(10YR6/6)砂質粘土、基本的に３層と同
5　明黄褐色(10YR6/8)締まり弱、基本的にシルト質土が筋状に見られる(4′層)以外シルト質土は含まれない



第43図　調査区西端部　土坑(15)

２　平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は、調査区東部沢１内に限定される。また該期の遺物も遺構外を含めてもほぼこの沢内に収まる。従ってここでは、平安時代の遺構・遺物とともに周辺出土の遺物についても併せて報告する。

（１）竪穴住居跡

ＳＩ４０竪穴住居跡（第44～46図、図版19～21）

沢１内、ＭＪ・ＭＫ54グリッドを中心とする位置で確認した。遺構確認面は大湯浮石層直上（Ｉ－ｂ層、第44図では４層）である。同層を精査中に焼土、炭化物（材）、焼石等の検出を受け、当初焼土遺構との認識で調査を行っていた。その後、沢１西辺に並行するように壁面（西壁）が確認され、竪穴住居跡と再認識した経緯がある。

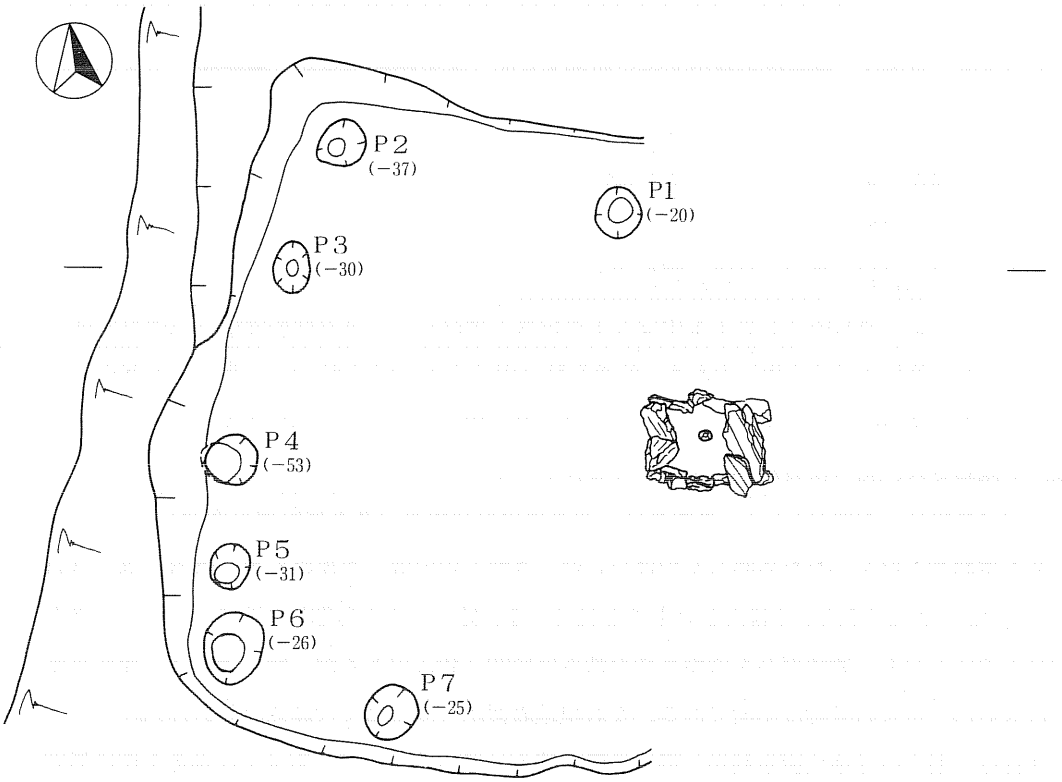
竪穴の規模は、南北長3.5ｍ、東西長は床面東半分が黒色土（基本層位III－ａ層）上にあり、東壁を確認できなかったため明らかではないが、カマドの位置、大湯浮石層の堆積状況（第44図15層）からおよそ3.2ｍは越えないものと見ている。従って平面形態は、南北にやや長い隅丸方形と考えられる。確認面から床面までの深さは約20～40㎝であるが、竪穴掘り込み面が明確ではないので本来の壁高は不明である。なお現地表面から床面までの深さは1.2ｍある。

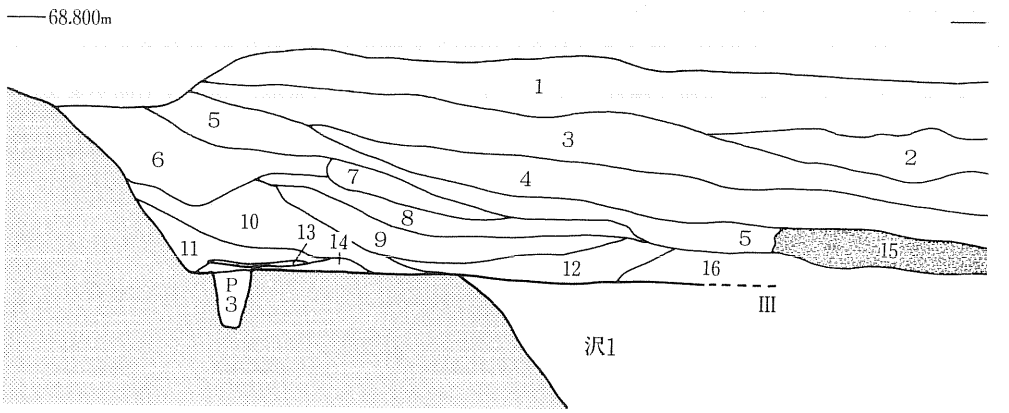
床面は、西半分は地山面を利用し平坦で堅く締まっている。一方の東半分は黒色土中に形成され、堅く締まっているようには見えない。柱穴状ピットは、西壁沿いに５本（Ｐ２～６）、北壁沿いに１本（Ｐ１）、南壁沿いに１本（Ｐ７）の計７本検出した。柱穴配置を考えれば各隅に柱が配列しそうであるが、西壁の隅柱（Ｐ２、Ｐ６）に対応する東側の柱穴は不明である。この部分は黒色土中に柱穴が掘り込まれている可能性が高い箇所であり、その存在の有無を確認することは難しい。唯一Ｐ１を検出したが、他には確認できなかった。

床面上、もしくは床面直上より多量の焼土、炭化物（材）が検出された。炭化材は床面北西部に集中的に認められ、またカマド南脇では茅状の炭化物が広がっており、焼失家屋であることを物語っているようである。炭化材の２点を材同定した結果、マメ科イヌエンジュ属の一種（No.1）、カツラ（No.2）との報告を受けた（第５章第１節参照）。

カマドは、推定東壁ほぼ中央に位置する。石組のカマドである。袖にあたる部分には、厚さ５㎝前後の板状の石をそれぞれ３枚ずつ立て、長さ65㎝前後にする。石下部は黒色土中に埋め込んでおり、押さえとしての粘土はあまり使用していないようである。袖を跨ぐように長さ45～55㎝、幅15～20㎝の板状の石を２枚乗せている。燃焼部中央には長さ18㎝の棒状の石を埋め込み支脚としている。

遺物（第48～50図）はカマド周辺、特にカマド北側で集中的に確認できた。器種には、擦文土器（甕）、土師器（甕、把手付土器）、鉄製品（小刀、刀子、穂摘具様製品など）、石製品（砥

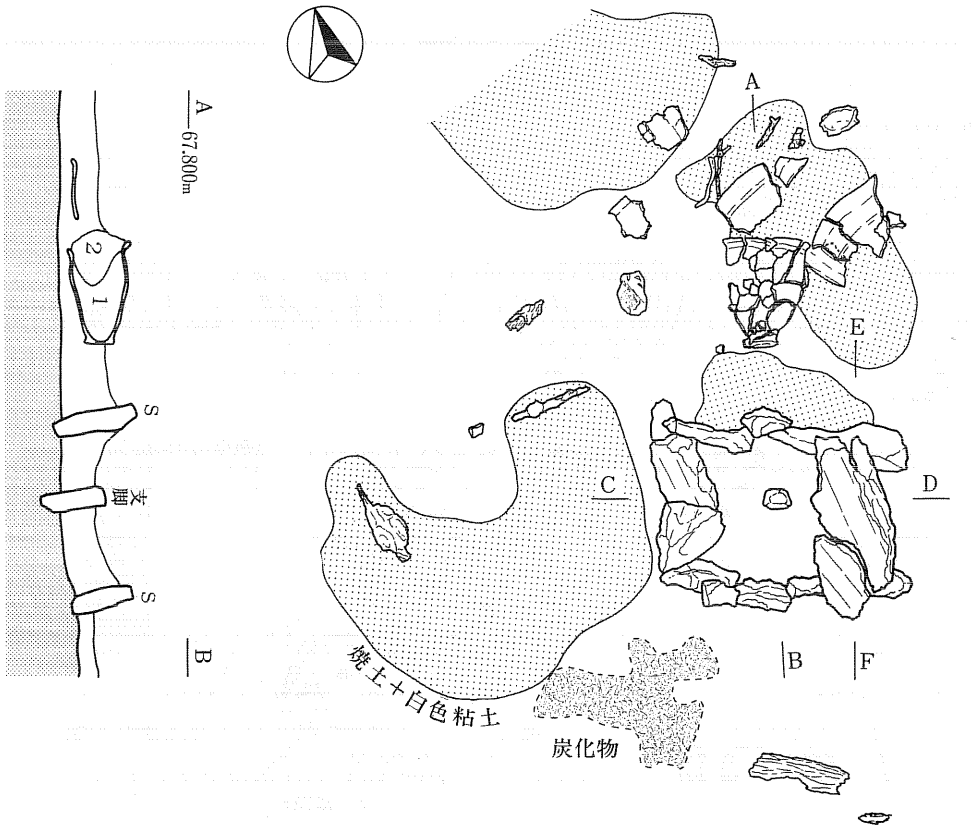




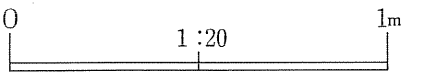
1　黒褐色(10YR2/3)1～４層基本層位Ⅰ層に相当
2　暗褐色(7.5YR3/3)1層よりやや赤みあり
3　黒褐色(10YR2/2)
4　黒褐色(10YR3/2)地山粒子斑状にやや多く含む
5　黒褐色(10YR2/2)３層に類似、地山粒子３層より多い
6　黒褐色(10YR2/2)地山粒子５層より多い
7　にぶい黄褐色(10YR4/3)地山二次堆積(ブロック状)
8　暗褐色(10YR3/3)地山粒子多く含む、４層より粒径小
9　黒　色(10YR2/1)締まり弱、地山粒子少量含む
10　暗褐色(10YR3/4)地山粒子・小ブロック斑状に多く含む
11　褐　色(10YR4/4)地山を主とする土
12　黒褐色(10YR2/2)焼土を多く、地山粒子少量含む
13　黒　色(10YR1.7/1)炭化物層
14　褐　色(7.5YR4/4)焼土層
15　明黄褐色(10YR6/6)浮石層、基本層位Ⅱ層
16　黒褐色(10YR3/2)基本層位Ⅲ層

0　1:40　2m

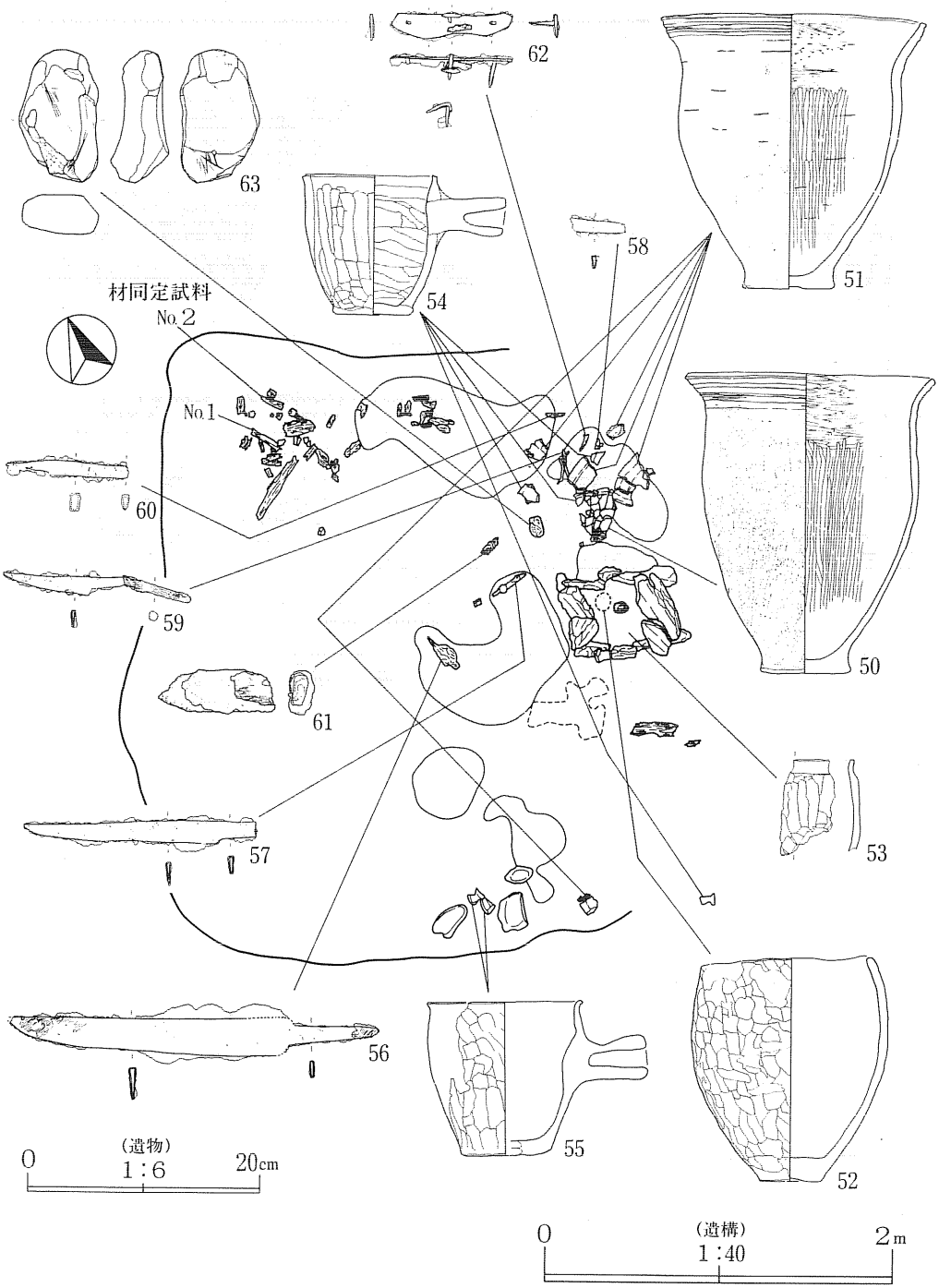
第44図　ＳＩ40竪穴住居跡(1)



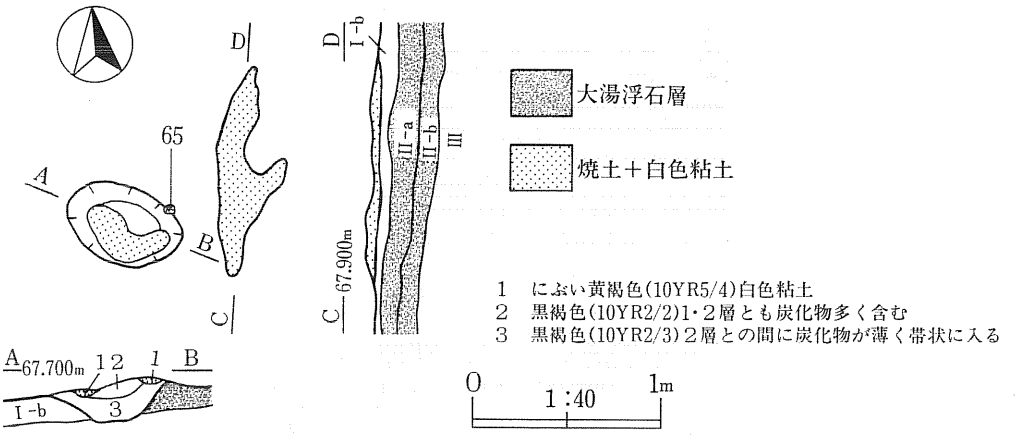
1　黒褐色(10YR2/3)締まり弱、地山粒子やや多く含む
2　暗褐色(10YR3/3)焼土ブロック、地山小ブロック少量含む
3　黒褐色(10YR2/3)焼土・地山粒子少量含む
3　は３層より焼土多く含んでいる
4　暗褐色(7.5YR3/3～3/4)焼土を主とする
5　褐　色(7.5YR4/4)焼土を主とする



第45図　ＳＩ40竪穴住居跡(2)　カマド



第46図　ＳＩ40竪穴住居跡(3)　遺物出土地点図



第47図　SN38焼土遺構

石）などがある。それぞれの出土状態については第46図を参照いただきたい。擦文土器は２個体がほぼ並んで口縁部を北に向け横倒しの状態で出土した。

また、カマド周辺の土を篩にかけたところ、少量ながら鍛冶作業に際して生じる鍛造剝片（スケル）を検出できた。なお、鉄滓は認められなかった。

（２）焼土遺構

ＳＮ３８焼土遺構（第47図、図版21）

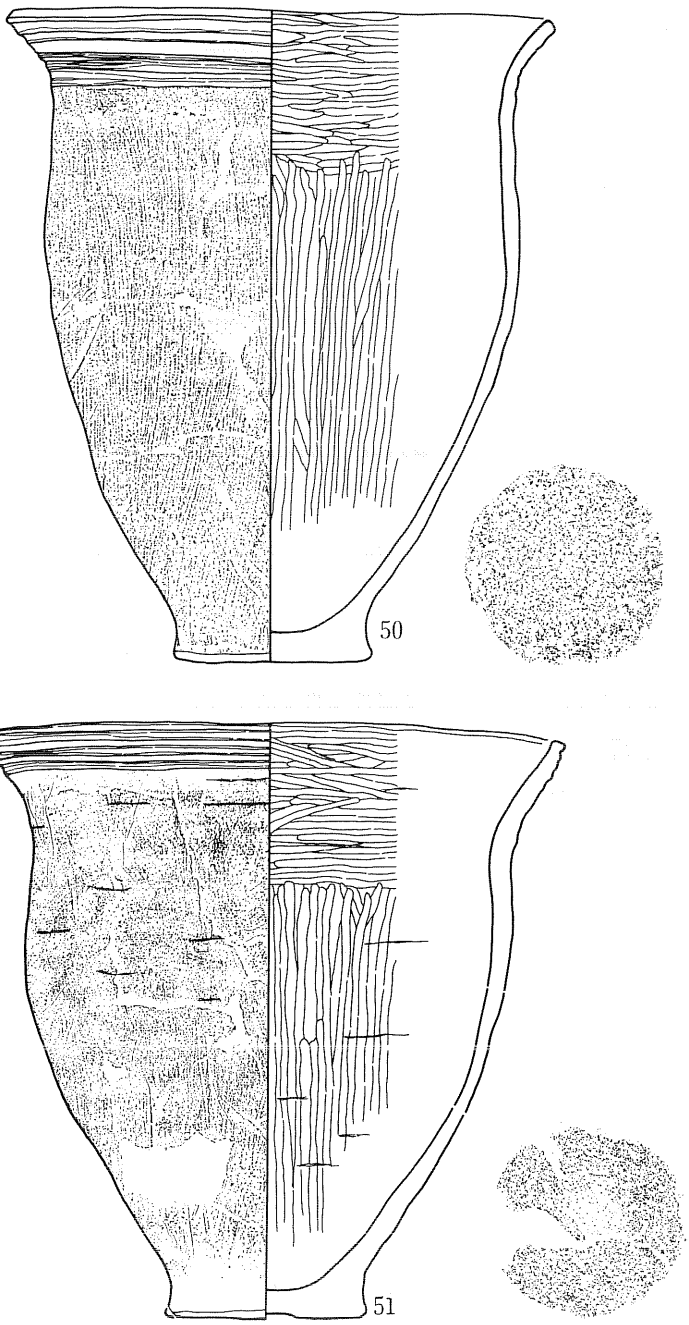
沢１内、ＭＪ53グリッドで確認した。ＳＩ40の南東約3.5ｍに位置する。遺構確認面は、ＳＩ40同様、基本層位Ｉ－ｂ層下である。焼土、白色粘土の分布と、浅い掘り込みからなる。掘り込みは長さ62㎝、幅40㎝の楕円形を示し、深さ22㎝、壁は緩く立ち上がっている。底面はIII－ａ層上面である。この掘り込み部と東側の２箇所に白色粘土を主とする分布が認められる。東側の白色粘土の分布は、長さ1.1ｍ、最大幅0.38ｍである。この粘土の下４～６㎝の間層（Ｉ－ｂ層）を挟んでII層大湯浮石層である。

遺物は、擦文土器、土師器甕（第51図66～68）がそれぞれ破片で出土した。擦文土器（65）は、掘り込み面上で確認した。甕の口縁部と見られ、擦文土器に特有の鋸歯状の刻文が施されている。周辺から、この破片に接合できる資料は認められなかった。

（３）遺構周辺出土遺物（第50図64、第51図69～75、図版24）

平安時代の遺物は、遺構内外を問わずほぼ沢１内に収まる。遺構外出土の遺物も、ＳＩ40とＳＮ38周辺に集中し、沢１Ａ方向に幾らか点在する。出土層位は全てII層大湯浮石層直上のＩ－ｂ下層である。

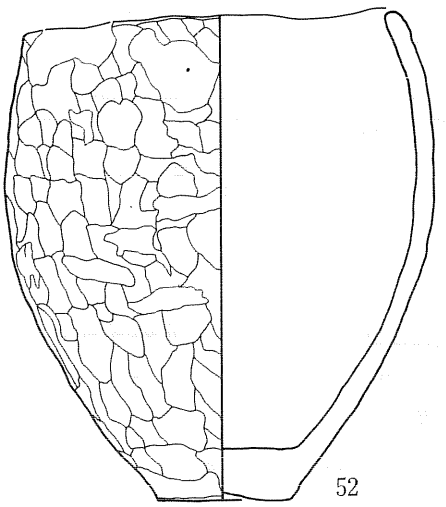
種別・器種は、土師器（坏、甕）、鉄製品（刀子か）、土製品（羽口）がある。75の須恵器壺は、表採資料である。坏（69、70）は、遺構内では確認できなかった。

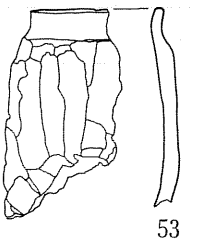


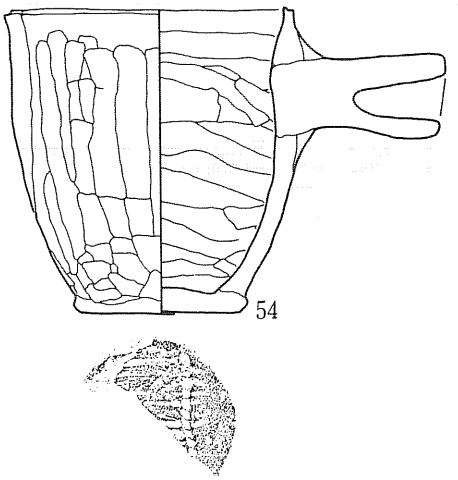
番号	出土位置	種別・器種	口径	底径	器高	文　様・調　整	備　考
50	SI40P10	擦文土器・甕	21.1	7.9	25.9	(外)縦位刷毛目→口縁部に4～5条の沈線 (内)口縁部横位・胴部縦位ミガキ(底)砂底	色調(外)明褐～灰褐(内) 灰褐、二次火熱、煤付着
51	SI40P11・ 12・26・28・ 32・37・49	擦文土器・甕	22.3	8.0	23.5	(外)縦位・斜位ナデツケ状刷毛目→口縁 部に3条の浅い沈線、(内)横位・縦位ミガキ (底)砂底、内外に積み上げ痕跡明瞭	色調(内外)赤褐～灰褐 二次火熱、煤付着 1・2とも焼成良好

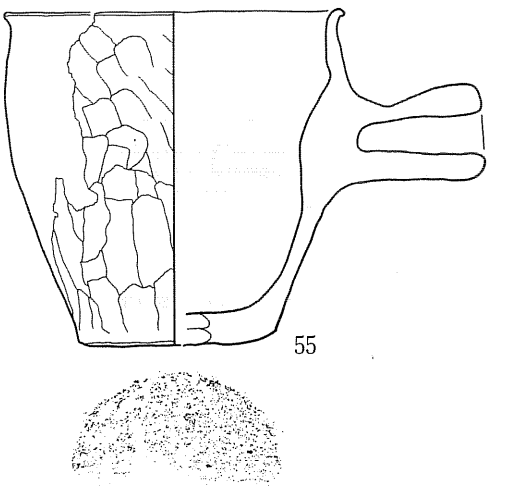
0　1:3　10cm

第48図　ＳＩ40竪穴住居出土遺物(1)





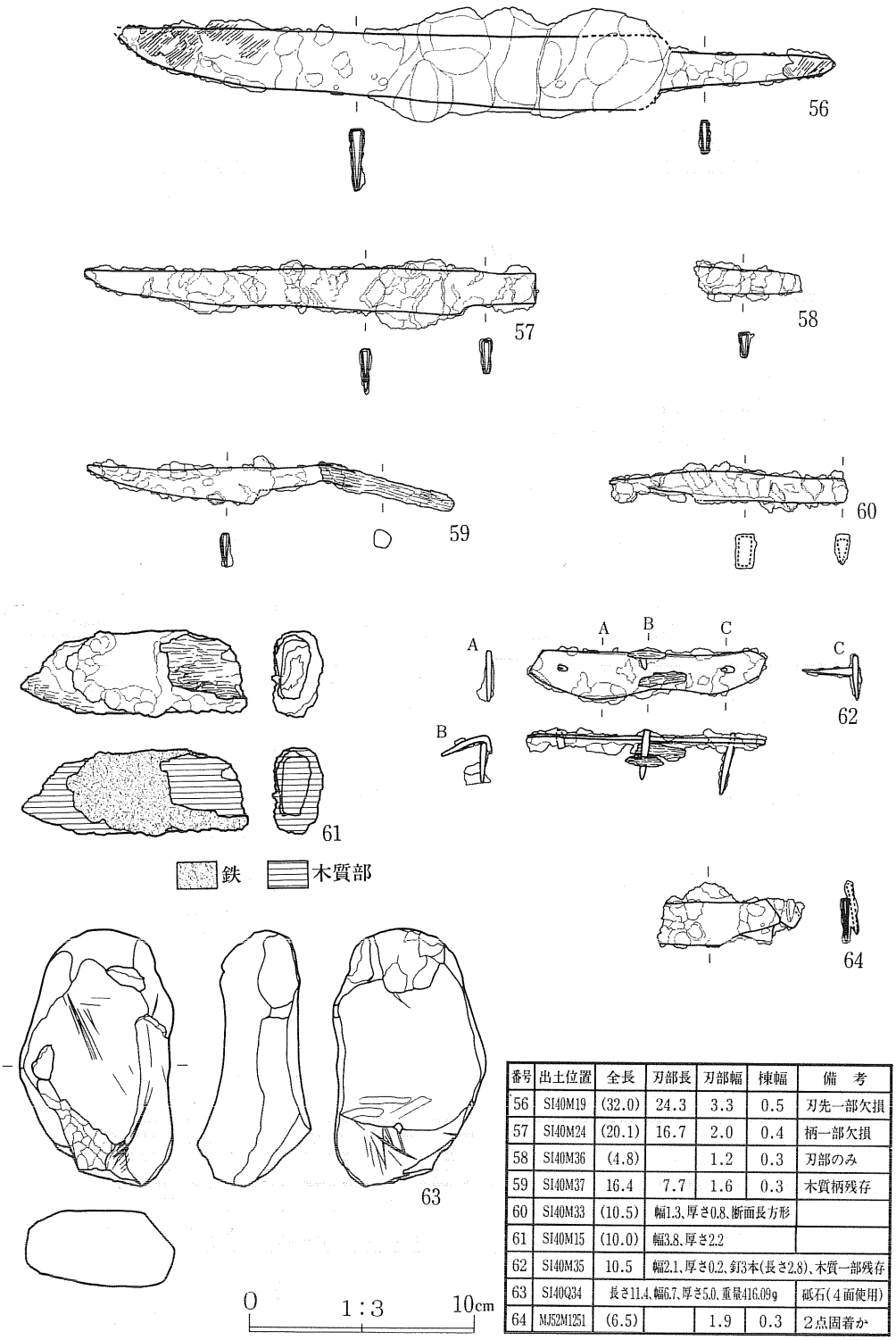




番号	出土位置	種別・器種	口径	底径	器高	文　様・調　整	備　考
52	SI40P51	土師器・甕	14.5	5.2	19.2	(外)縦位ケズリ、(内)横位ヘラナデ (底)ナデ、焼成良好、二次火熱	3~5㎜の砂粒多く含む 色調(内外)暗赤褐~暗褐
53	SI40カマド	土師器・甕				(外)縦位ケズリ、(内)横位ヘラナデ	色調(内外)明褐、砂粒多
54	SI40P20~ 23・25・29	土師器・把手 付土器	10.9	6.3	12.0	(外)縦位ケズリ、(内)横位・斜位ヘラナデ (底)簾状圧痕、把手中空・断面円形	色調(内外)明褐 二次火熱
			把手長(約6)、径3.3				
55	SI40P1・2	土師器・把手 付土器	13.0	7.7	13.2	(外)縦位ケズリ、(内)ナデ、(底)砂底 把手中空・断面円形、5より作り雑描	色調(内外)黒褐~暗褐 煤・タール付着
			把手長(約5.5)、径3.8				

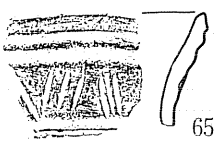
0　1:3　10cm

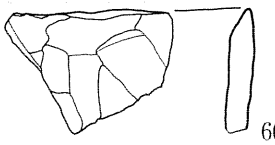
第49図　SI 40竪穴住居跡出土遺物(2)

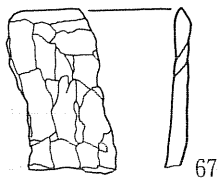


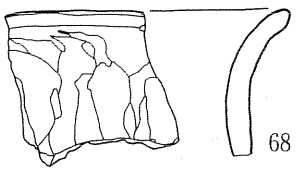
番号	出土位置	全長	刃部長	刃部幅	棟幅	備　考
56	SI40M19	(32.0)	24.3	3.3	0.5	刃先一部欠損
57	SI40M24	(20.1)	16.7	2.0	0.4	柄一部欠損
58	SI40M36	(4.8)		1.2	0.3	刃部のみ
59	SI40M37	16.4	7.7	1.6	0.3	木質柄残存
60	SI40M33	(10.5)	幅1.3、厚さ0.8、断面長方形			
61	SI40M15	(10.0)	幅3.8、厚さ2.2			
62	SI40M35	10.5	幅2.1、厚さ0.2、釘3本(長さ2.8)、木質一部残存			
63	SI40Q34	長さ11.4、幅6.7、厚さ5.0、重量416.09g				砥石(４面使用)
64	MJ52M1251	(6.5)		1.9	0.3	２点固着か

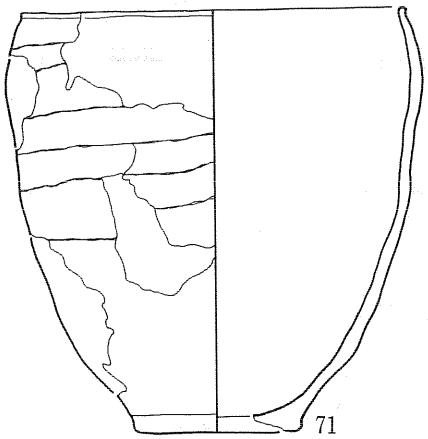
第50図　ＳＩ40竪穴住居跡出土遺物(3)（64を除く）

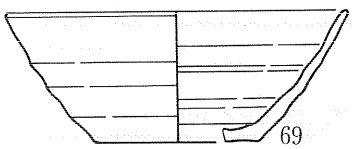


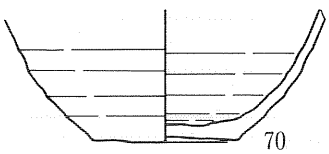


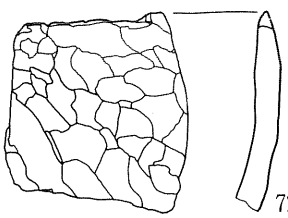


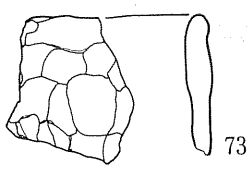


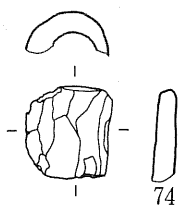


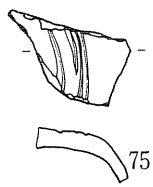








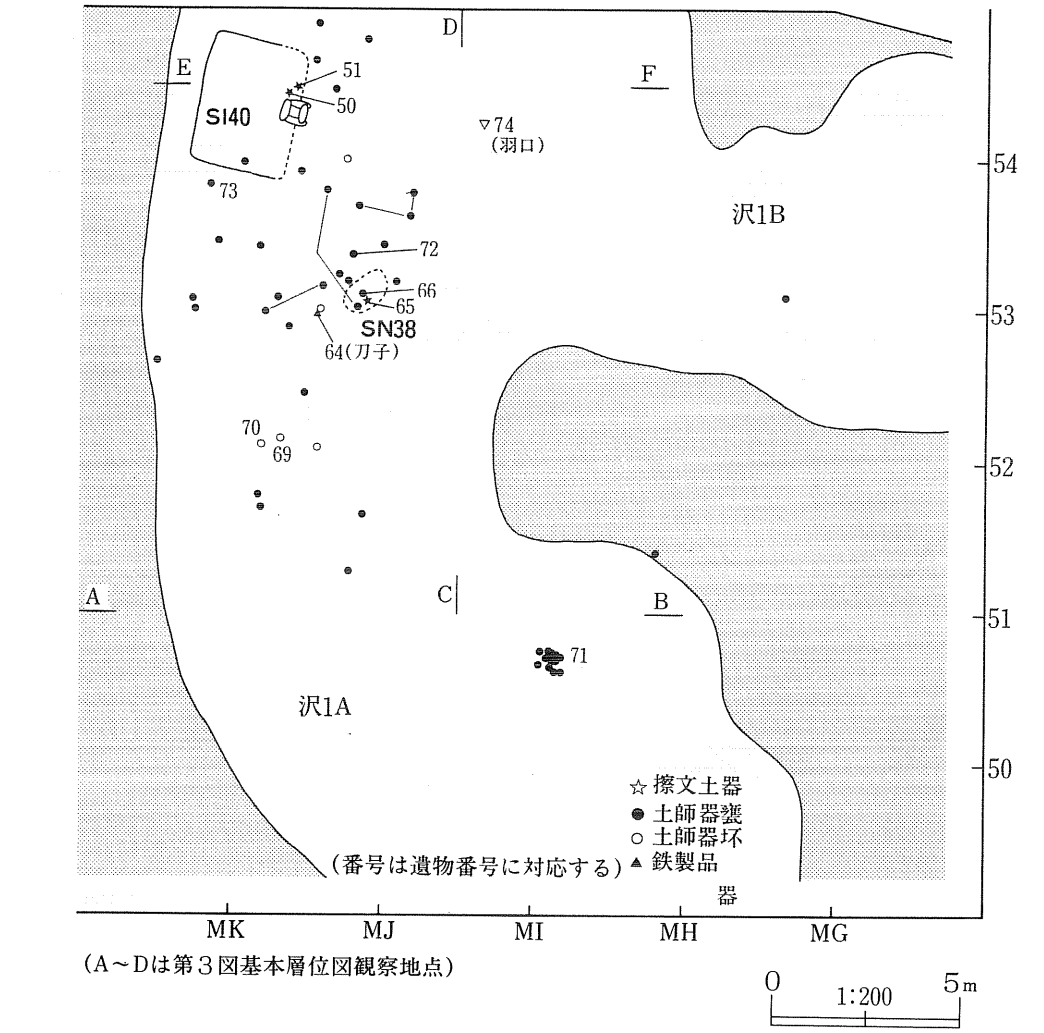


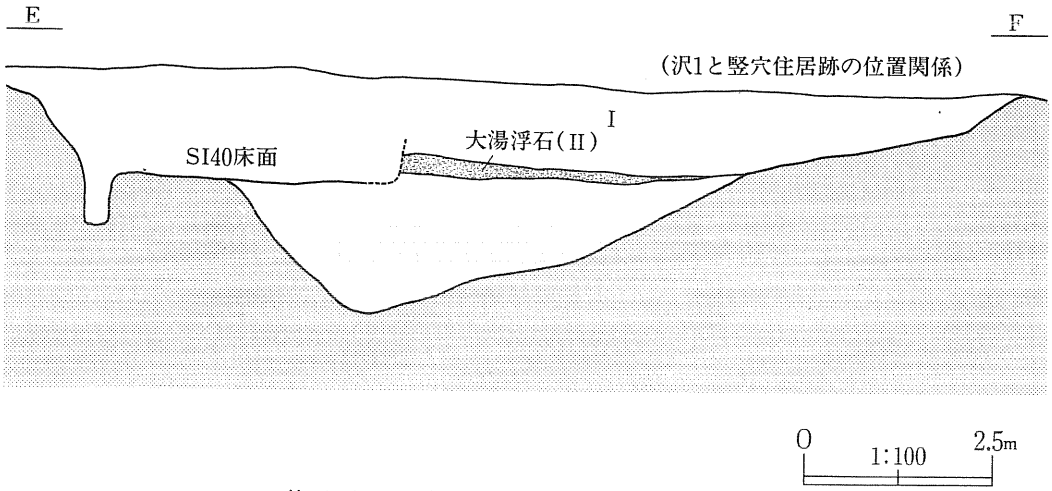


番号	出土位置	種別・器種	口径	底径	器高	文　様・調　整	備　考
65	SN38P01	擦文土器・甕				(外)3本1組みの鋸歯状刻文(内)横位ミガキ	色調(内外)赤褐
66	SN38P1243	土師器・甕				(外)ケズリ、(内)横位ナデ、二次火熱	色調(内外)赤褐
67	SN38	土師器・甕				(外)ケズリ、(内)ナデ、焼成やや不良	色調(内外)褐～明褐
68	SN38P1243	土師器・甕				(外)横ナデ→縦位ケズリ、(内)ナデ	色調(内外)明褐
69	範疇トレンチ	土師器・杯	13.4	6.3	5.2	(内外)ロクロ、(底)回転糸切り	色調(内外)明褐～赤褐
70	範疇トレンチ	土師器・杯		5.8	(5.2)	(内外)ロクロ、(底)回転糸切り	色調(内外)明褐～赤褐
71	P1327	土師器・甕	15.0	6.5	16.7	(外)幅1.5前後の粘土紐積み上げ→ナデ？ (内)ナデ、(底)砂底	色調(内外)褐～暗褐 二次火熱、煤付着
72	P1250	土師器・甕				(外)斜位ケズリ、(内)軽いナデ	色調(内外)赤褐
73	P839	土師器・甕				(外)ケズリ、(内)ナデ、二次火熱	色調(内外)明褐
74	P838	土師質・羽口？	外径3.3、内径1.7			(外)ケズリ、(内)ナデ、二次火熱	色調(内外)赤褐
75	表採	須恵器・壺？				肩部破片、(外)浅い沈線、(内)筋状の横ナデ	色調(内外)青灰

0　1：3　10cm

第51図　SN38焼土遺構及び周辺出土遺物





第52図　沢1内における平安時代の遺物分布図

3　時期不明の遺構

所属時期の不明な遺構は、焼土遺構１基、溝状遺構17条である。遺構の確認面はⅠ層中か下面であり、遺構底面はＳＤ02・34、ＳＤ21・23・26・36を除き、地山漸移層面である。いずれの遺構とも遺物は出土しなかった。

（１）ＳＮ１４焼土遺構（第24図）

調査区東部北西側、ＭＨ54グリッドで焼土と白色粘土の分布を確認した。ＳＤ15と重複し、これに切られる。長さ1.3ｍ、幅1.1ｍ程の不整形を示す。焼土の厚さは12cmである。

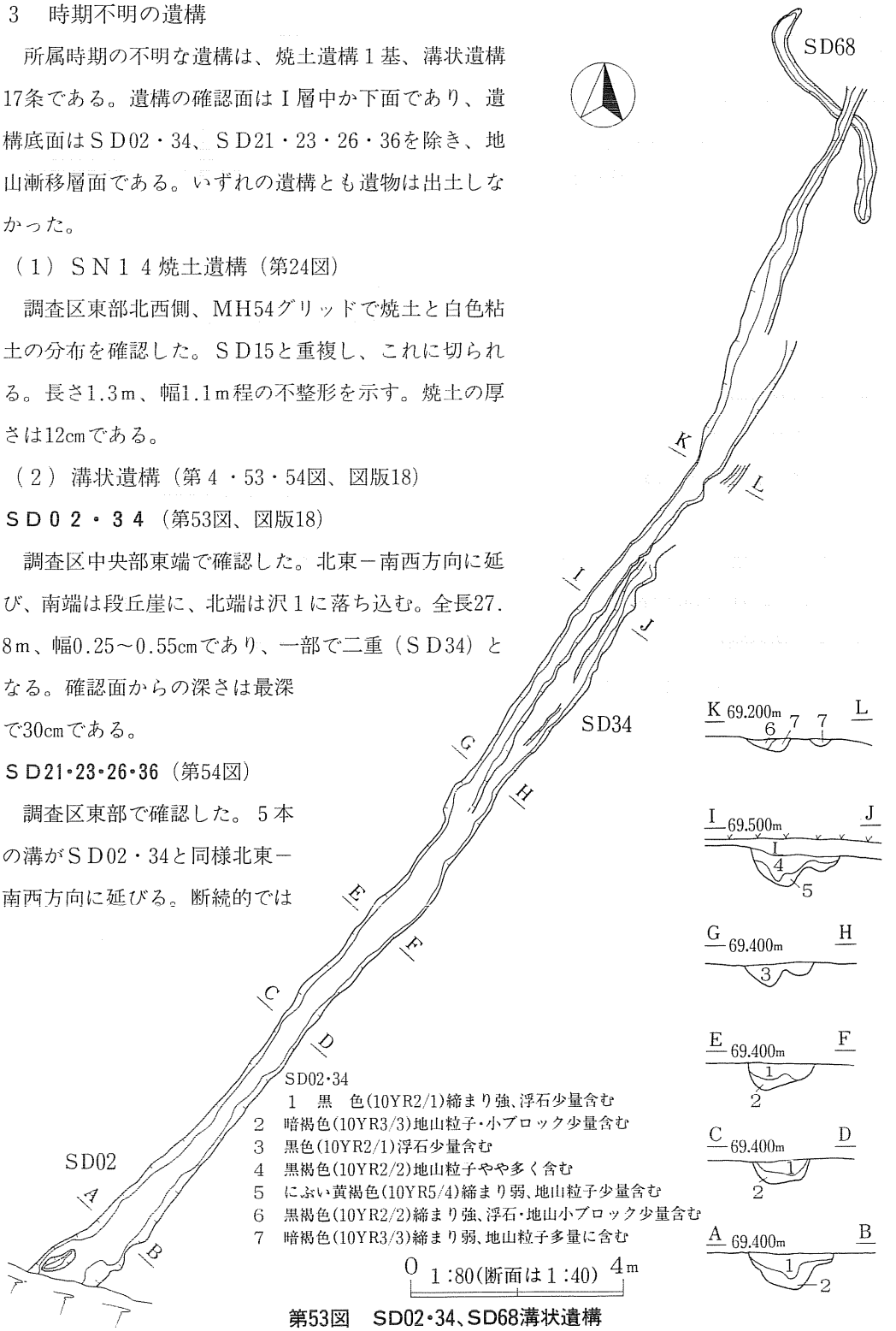
（２）溝状遺構（第４・53・54図、図版18）

ＳＤ０２・３４（第53図、図版18）

調査区中央部東端で確認した。北東－南西方向に延び、南端は段丘崖に、北端は沢１に落ち込む。全長27.8ｍ、幅0.25～0.55cmであり、一部で二重（ＳＤ34）となる。確認面からの深さは最深で30cmである。

ＳＤ21・23・26・36（第54図）

調査区東部で確認した。５本の溝がＳＤ02・34と同様北東－南西方向に延びる。断続的では



第53図　SD02・34、SD68溝状遺構

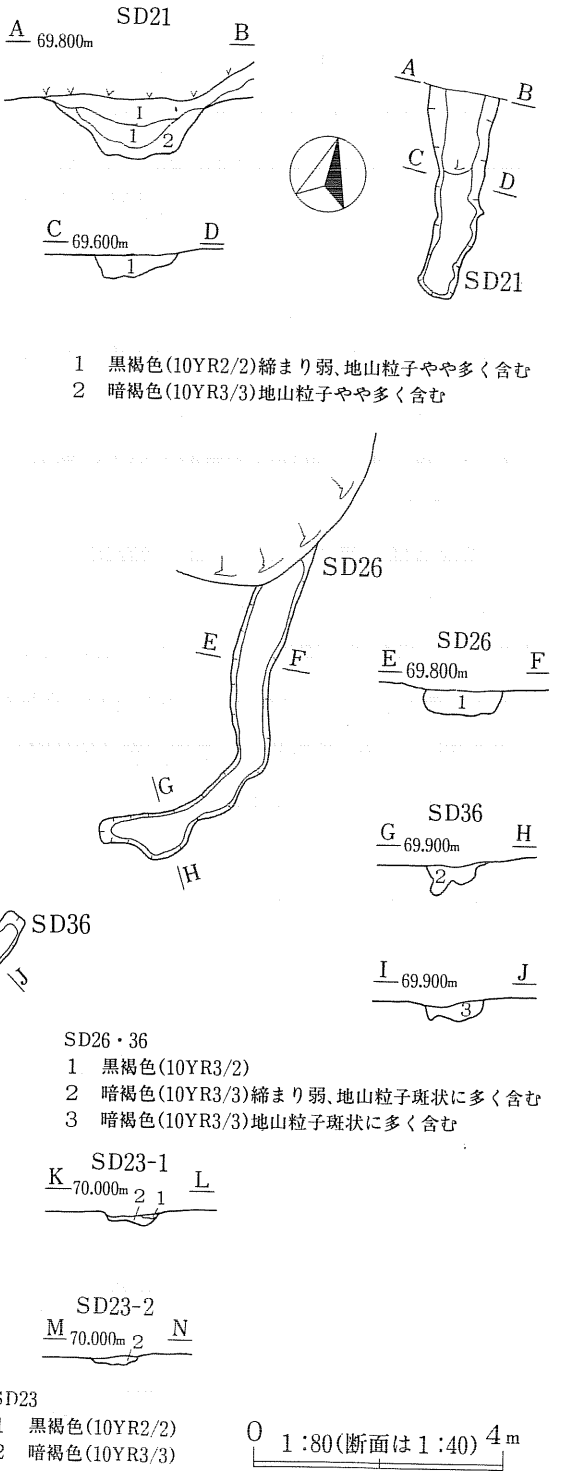
あるが一連の施設と考えられる。各溝の法量は、北からＳＤ21で長さ3.3ｍ、幅0.55～1.1ｍ、深さ0.3ｍ、ＳＤ26で長さ6.5ｍ、幅0.35～0.73ｍ、深さ20cm、ＳＤ36で長さ1.35ｍ、幅0.4ｍ、深さ0.18ｍ、ＳＤ23－１で長さ1.85ｍ、幅0.45ｍ、深さ0.1ｍ、ＳＤ23－２で長さ3.65ｍ、幅0.4～0.55ｍ、深さ0.13ｍである。

ＳＤ１５（第24図）

調査区東部北西隅、ＭＨ・ＭＩ54グリッドで確認した。ＳＤ28、ＳＫ27、ＳＮ14と重複し、それぞれを切っている。東西方向に延び、長さ5.3ｍ、幅0.25～0.5ｍ、深さ0.25ｍである。

ＳＤ２６（第24図）

調査区東部北西隅、ＭＨ54グリッドで確認した。ＳＤ15と重複し、これよ



第54図　SD21・23・26・36溝状遺構

り旧い。ＳＤ30同様南北方向に延び、長さ2.6ｍ、幅0.2～0.25ｍ、深さ0.3ｍである。

ＳＤ３０（第24図）

調査区東部北西隅、ＭＨ54グリッドで確認した。南北方向に延び、北端は調査区外に至る。確認できる長さ1.3ｍ、幅0.1～0.25ｍ、深さ0.17ｍである。

ＳＤ３２（第４図）

調査区東部東側、ＬＳ51・52グリッドで確認した。南北方向に延び、長さ２ｍ、幅0.2～0.35ｍ、幅0.15ｍである。

ＳＤ４９（第４・27図）

調査区中央部西側、ＭＲ53、ＭＳ53・54グリッドで確認した。端々を結んだ直線距離は６ｍとなるが、北端から南に約4.2ｍ延び、ここから東に向きを変え2.9ｍで東端に至る。幅は0.2～0.3ｍ、深さ0.18ｍである。北端部でＳＫ59と重複しこれを切る。

ＳＤ５３（第４図）

調査区中央部西側、ＭＳ53グリッドで確認した。北西－南東方向に延び、東側に隣接するＳＤ49と一部併行する。長さ1.6ｍ、幅0.25～0.35ｍ、深さ0.32ｍである。

ＳＤ５４（第４図）

調査区中央部西側、ＭＴ53グリッドで確認した。東西方向に延び、長さ1.6ｍ、幅0.25～0.35ｍ、深さ0.15ｍである。

ＳＤ６７（第４図）

調査区中央部南側、ＭＫ～ＭＭ47グリッドで確認した。東西方向に延び、長さ5.4ｍ、幅0.35～0.55ｍ、深さ0.2ｍである。

ＳＤ６８（第53図）

調査区北東部、ＭＫ53・54グリッドで確認した。ＳＤ02と交錯するが新旧は不明である。およそ東西方向に延び、緩い「Ｓ」字状を示す。長さ4.9ｍ、幅0.2～0.33ｍ、深さ0.3ｍである。南東端は沢１に落ち込む。

ＳＤ６９（第25図）

調査区中央部西側、ＭＴ52グリッドで確認した。ＳＫ50と重複し、これを切っている。東西方向に延び、確認できる長さ1.35ｍ、幅0.15～0.28ｍ、深さ0.05ｍである。

ＳＤ８８（第５・35図）

調査区西端部、ＮＬ・ＮＭ57、ＮＭ58グリッドで確認した。ＳＫ86と重複し、これを切る。およそ南北方向に延び、北端は調査区外に及ぶ。確認できる長さ約６ｍ、幅0.25～0.7ｍ、深さ1.15ｍである。

第2節　遺構外出土遺物

上野遺跡で出土した遺構外の遺物は、縄文土器、石器、弥生土器、土師器、須恵器などがある。この内、平安時代の遺物については、前節で検出遺構と共に紹介をしてあるので、本節では縄文～弥生時代の土器、石器について報告する。

1　土器（第56～59図、図版26・27）

本遺跡では、600点余りの縄文～弥生時代の土器片が得られている。これら土器を一覧して、胎土、文様等から大きく3つに大別できる。

第Ⅰ群土器：縄文時代前期初頭～前葉の土器。

第Ⅱ群土器：縄文時代中期後葉～後期前葉の土器。

第Ⅲ群土器：弥生時代後期の土器。

いずれの資料も破片であり、全体の形状を復元できるものはない。各群の出土比率は、第Ⅰ群と第Ⅱ群で、約6：4、第Ⅲ群は1個体（2片）のみである。

第Ⅰ群土器（第56図76～第57図106、図版26）

縄文時代前期の土器群である。基本的に胎土には繊維を含む。内面にはD類を除き、過半数の個体に煤状炭化物の付着が認められる。

A類（76～82）は、内外面に縄文が施されている土器である。口縁部資料76～78は、口唇部にも同一原体による圧痕が認められる。78、79は、口縁部に横走する縄文を、胴部には縦走する縄文を配している。76～79は器厚が比較的薄く、暗褐色系の色調を呈している（1種）。80～82は、1種に比較するとやや厚手で、赤褐色系の色調を呈する（2種）という相違がある。縄文原体は81がRL、他はLRである。

B類（83～85）は、外面が縄文、内面が条痕をもつ土器である。原体はLR、胎土にはA類より多くの細砂粒を含み、A類1種に似る。色調は外面赤褐色、内面暗褐色を示す。

C類（86～95）は、外面にのみ縄文が施されている土器である。86は外面、口唇部の施文手法からA類1種に近似する。92、93は胎土に多量の金雲母と少量の繊維を含んでいる。95は、底部近くの破片であり、丸底を呈すると思われる。92、95の内面には煤状炭化物がびっしり付着している。本群土器の中では出土量が最も多い。

D類（96～106）は、外面に撚糸が施文されている土器である。A～C類より多く繊維を含んでいるように見える。縄文原体は105、106がR、他はLである。口唇部はほぼ平らに面取りされ、施文方向を変えることによる口縁部文様帯が形成されている。100～104と105、106はそれぞれ同一個体と思われる。色調は、灰褐～灰白系を示す。

以上第Ⅰ群土器は、沢１Ｂ（Ｄブロック、第54図による、以下同）とこの東側Ｂブロックの２箇所でやや集中している。調査区中央部では全く分布せず、西端部ＮＩ58グリッドに数点認められるのみである。類別では、Ａ類が沢１内のＤブロックにその分布が限られる。Ｃ類はＤ・Ｂ－１ブロックで、Ｄ類はＢ－２ブロックに集中し、Ｄブロックと西端部ＮＩ58グリッドにも少例分布する。

第Ⅱ群土器（第57図107～第59図140、図版27）

縄文時代中期～後期の土器群である。

Ａ類（107～114）は、隆線を多用する土器である。107は、大型の弁状突起に円孔を持つ。隆線上には篦状工具による細かい刻みが、隆線間には連続する刺突が加えられる。108は、隆線上に縄文圧痕（ＲＬ）が密になされている。109～111は、同一個体の可能性がある。112の内面には楕円形の盲孔がある。地文（ＲＬ＋ＬＲ羽状）に隆線を貼付しており、口唇部の隆線上にのみ半截竹管による「Ｃ」字状の刻目が入れられる。

Ｂ類（115～125）は、沈線を多用する土器である。115は、山形突起に小さなボタン状の貼付がなされ、口唇部にも細い隆線が付される。基本的に２本１組みの沈線で文様を構成している。119は、折り返しの口縁部上に縄文（ＬＲ）圧痕がなされている。123は、頂部がやや窪む小さな突起をもつ土器である。無文の地に２本１組みの沈線が描出されている。124と125は地文（ＬＲ）上に平行する沈線が６段以上見られる。

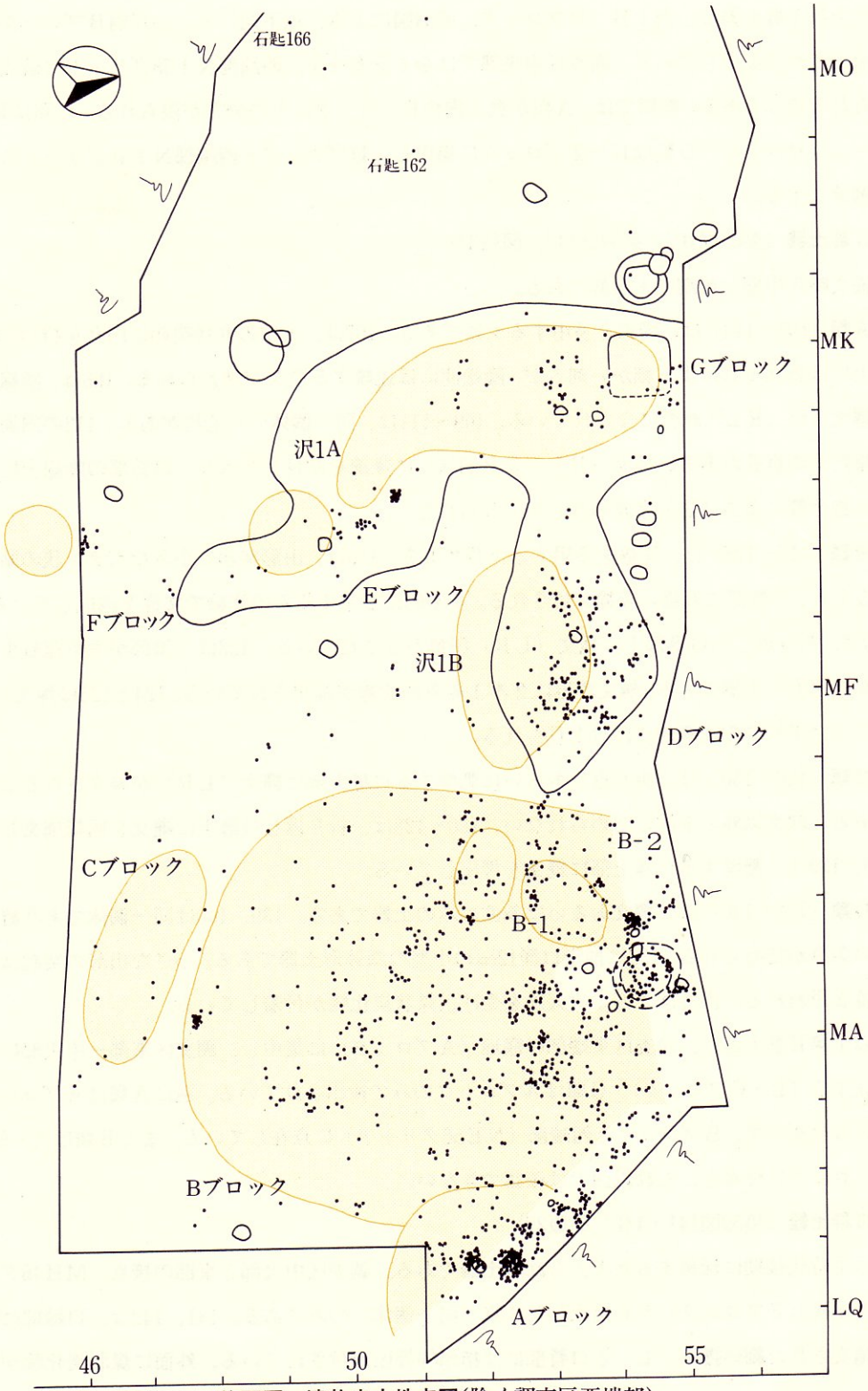
Ｃ類（126～130）は、折り返しあるいは肥厚する口縁上部に縄文（ＬＲ）が施文される土器である。縄文以外の手法は認められない。126～128は、折り返し口縁上に縄文を回転施文し、129、130は、肥厚する口縁上部に縄文を押圧している。

Ｄ類（133～140）は、縄文あるいは条痕のみの土器である。139、140は同一個体であり縦方向の条痕が認められる。133は推定口径12㎝の小型の深鉢形土器である。小さな山形の突起は４単位と思われる。内外面とも二次火熱を受け、煤状炭化物が付着している。

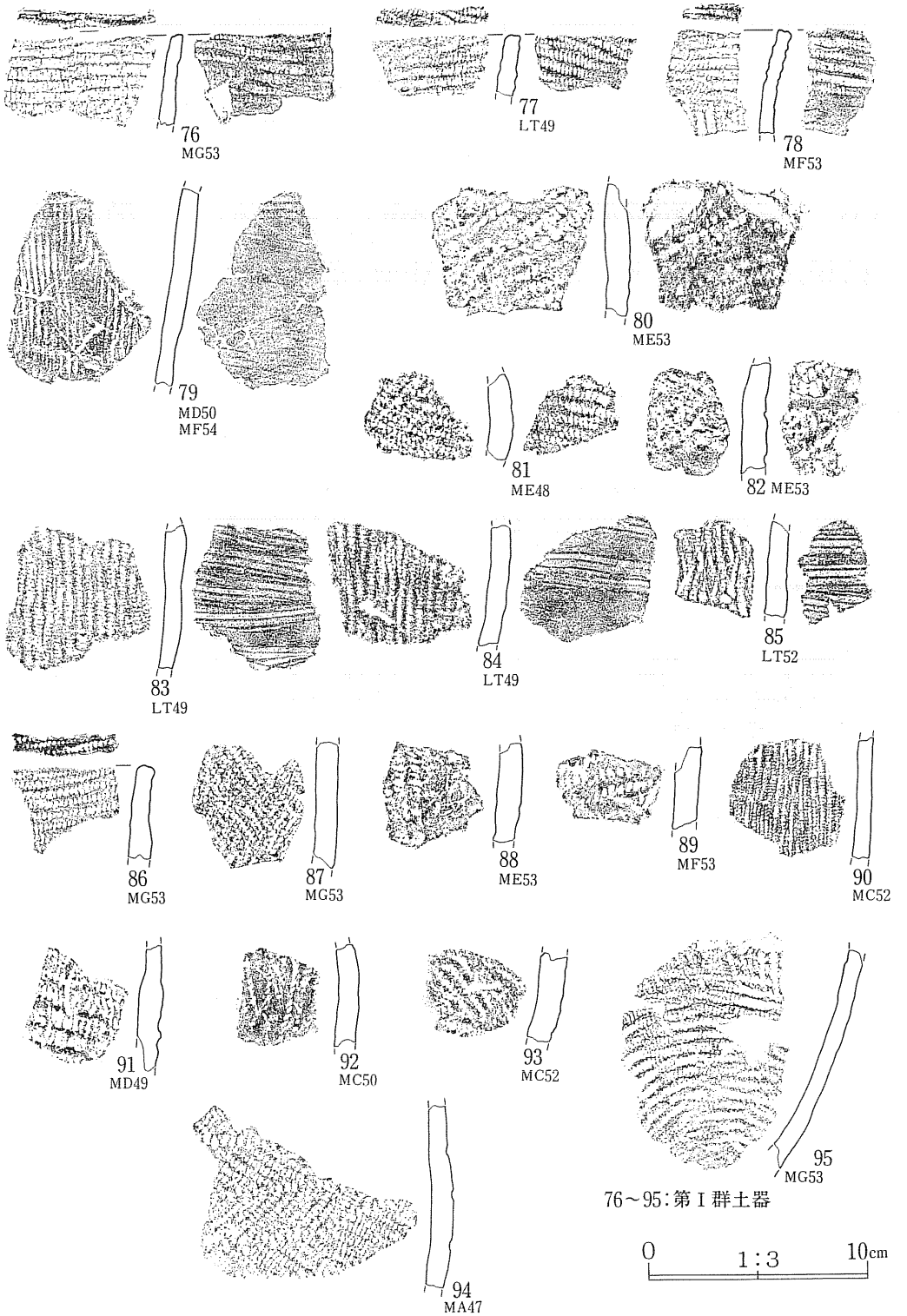
以上第Ⅱ群土器は、調査区東端部の窪地（Ａブロック）に集中し、調査区東部～中央部にも点在する（Ｂ・Ｃブロック）。Ｃ類はＡブロックのみで検出されている。逆にＡ類はＡブロック内には分布せず、Ｂブロックと西端部（ＮＥ56グリッド）に点在している。またＢ類はＡ・Ｂ・Ｄブロックに分布し、これ以西では確認できない。

第Ⅲ群土器（第59図141・142、図版27）

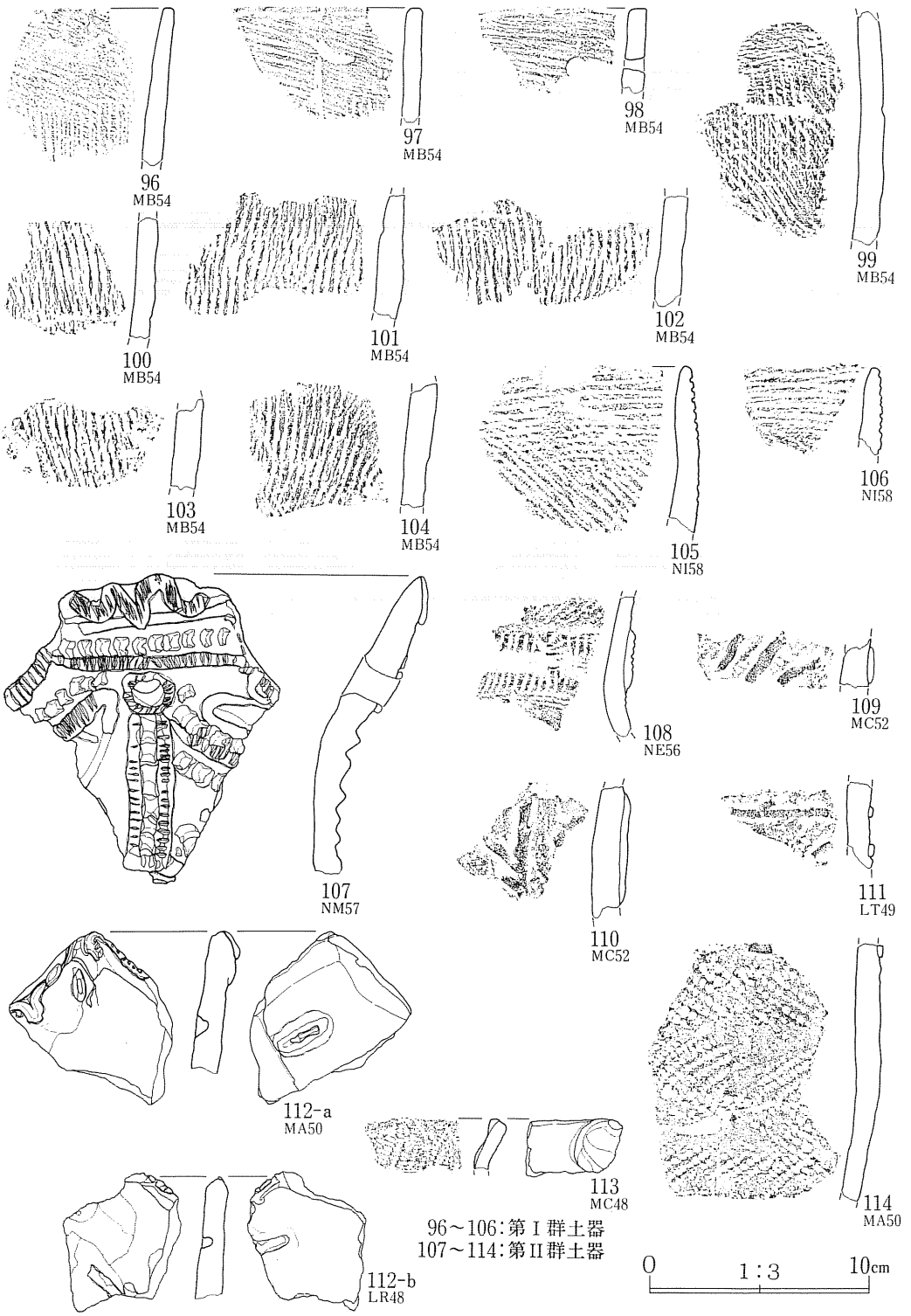
弥生時代後期に帰属すると考えられる土器である。調査区中央部と東部の接点、ＭＨ46グリッドⅠ層（Ｆブロック）から出土した２点（同一個体）のみである。141、142は、口縁部に縦位施文された細い撚糸（Ｌ）と口唇部には指頭様押圧が付されている。外面に煤状炭化物が付着している。



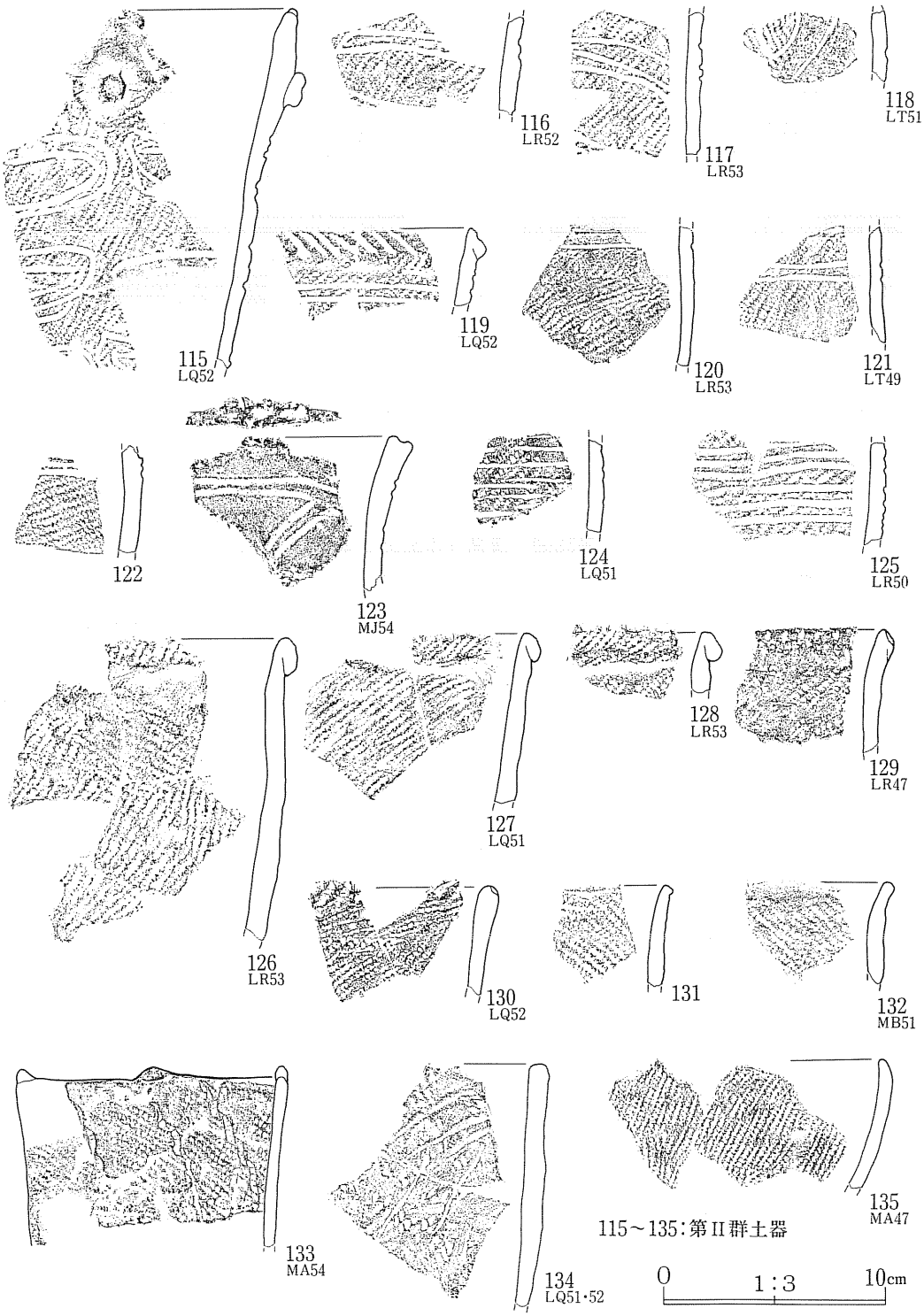
第55図　遺物出土地点図(除く調査区西端部)



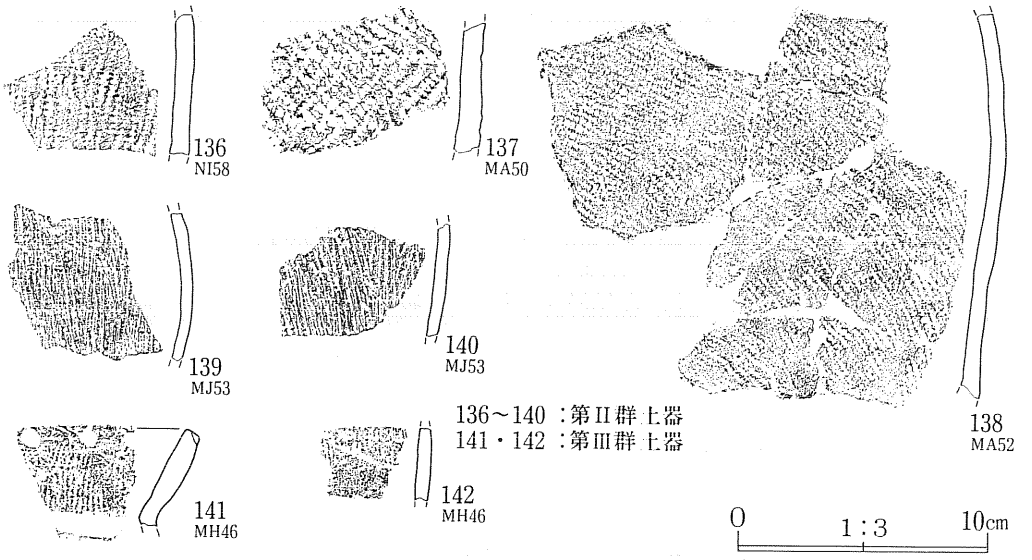
第56図　遺構外出土土器(1)



第57図　遺構外出土土器(2)



第58図　遺構外出土土器(3)



第59図　遺構外出土土器(4)

２　石器

本遺跡で出土した遺構外の石器類は680点余りである。この内、剥片の占める割合が多く全体の約86％を占める。定形的な剥片石器、礫石器の出現率はそれぞれ約７％である。

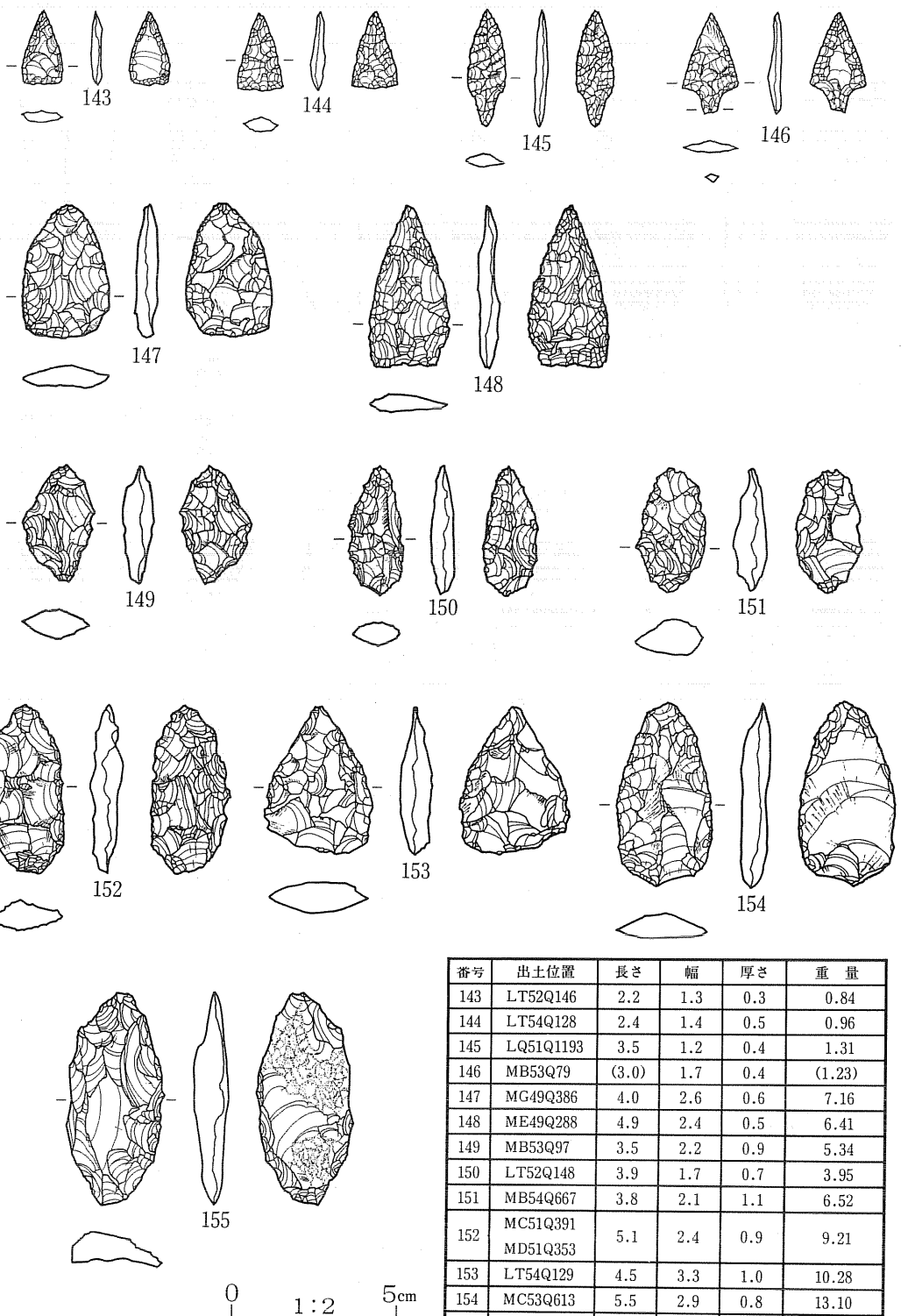
石器の分布は調査区東部に集中しており、中央部、西端部には極めて疎らに点在するのみである。

（１）剥片石器（第60～64図、図版28）

定形的と見られる剥片石器には、石鏃（143～148）、尖頭器（149～155）、石槍（156）、石匙（157～173）、石篦（174～178）、掻器・削器など（179～185）がある。石質は、石鏃144、石匙165がチャート、石匙162が玉髄である以外は、頁岩である。175、179、183は緑色を呈する頁岩のようである。

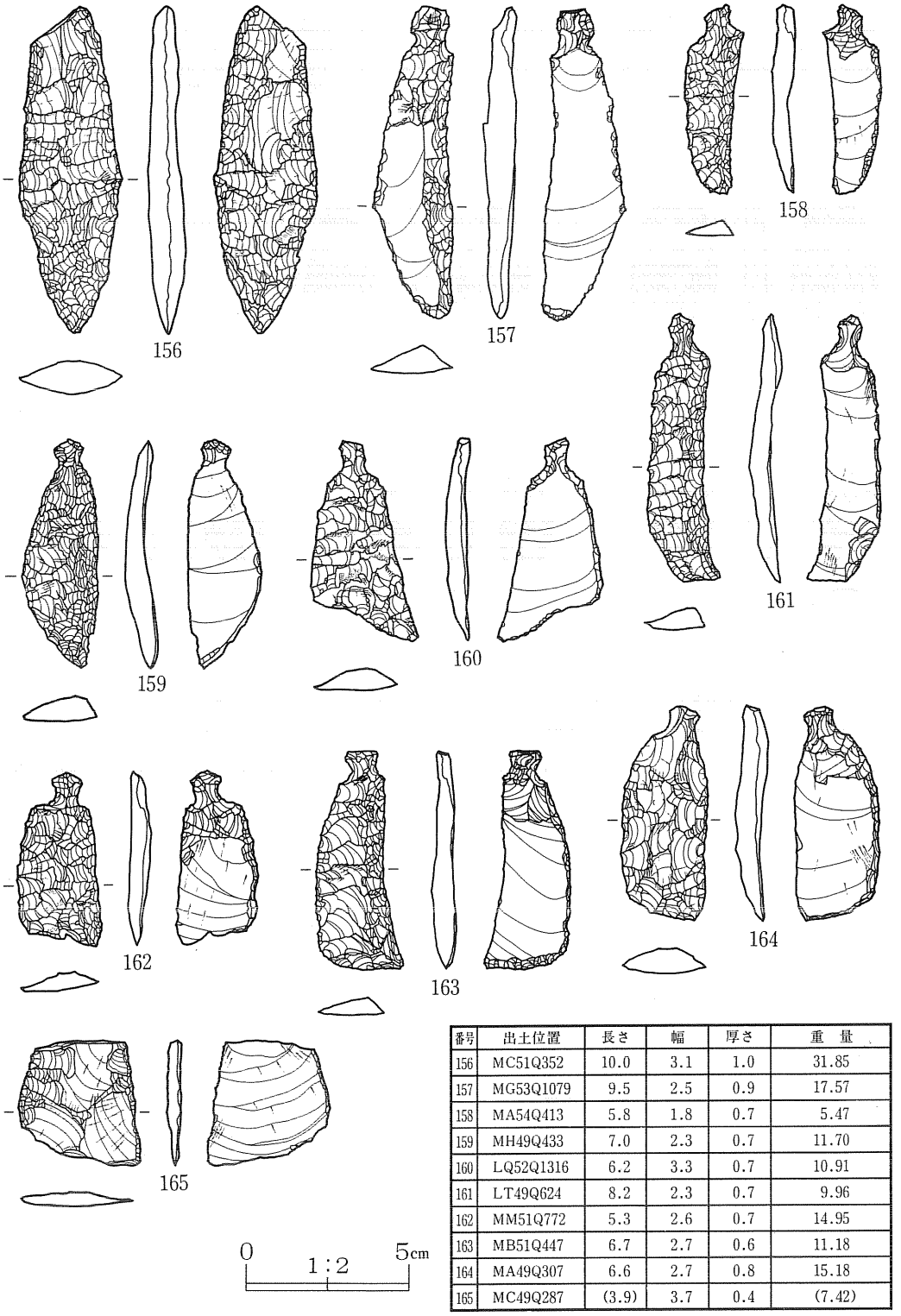
石匙は、定形的な石器の内で最も検出点数が多い。17点出土している。形態的には全て縦形である。いずれも同様な調整剥離技法によって製作されたと見られる。正面の稜線は中央より右よりに位置し、調整剥離の傾斜度が異なることを示している。また背面は素材面を大きく残していることも共通項として挙げることができる。

剥片石器の分布は、石鏃、尖頭器、石槍は、およそ調査区東部Ｂブロック内にに限定されるのに対し、石匙はこれらより広く分布している。調査区東部（Ｂブロック８点、Ａブロック２点）を中心に置くものの、沢１内（Ｄ・Ｅブロック５点）、中央部（２点、第55図上162・166）にも分布が認められる。沢１出土の５点は、いずれも沢底面か直上（III－ｃ層）で検出されている。



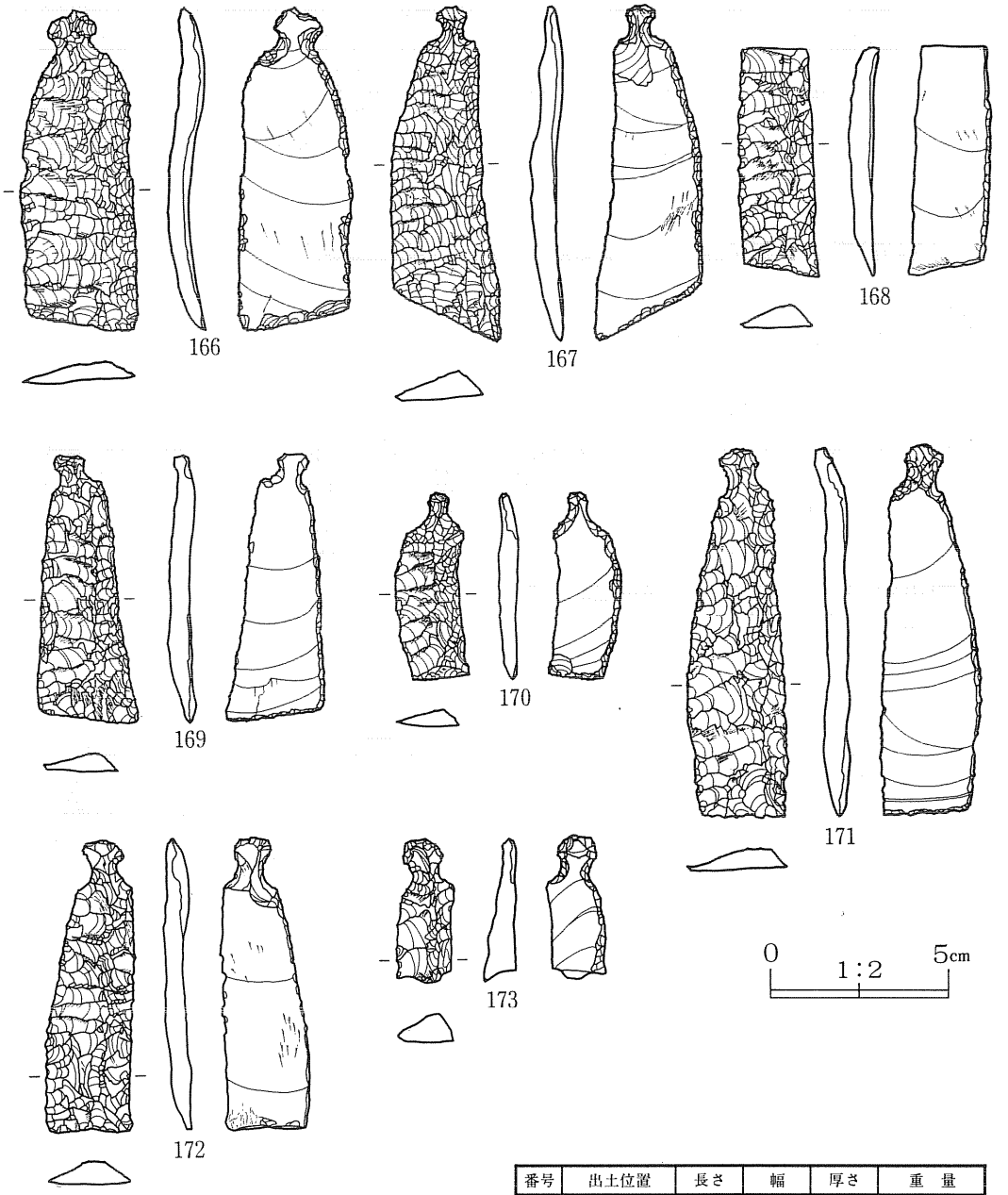
番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重　量
143	LT52Q146	2.2	1.3	0.3	0.84
144	LT54Q128	2.4	1.4	0.5	0.96
145	LQ51Q1193	3.5	1.2	0.4	1.31
146	MB53Q79	(3.0)	1.7	0.4	(1.23)
147	MG49Q386	4.0	2.6	0.6	7.16
148	ME49Q288	4.9	2.4	0.5	6.41
149	MB53Q97	3.5	2.2	0.9	5.34
150	LT52Q148	3.9	1.7	0.7	3.95
151	MB54Q667	3.8	2.1	1.1	6.52
152	MC51Q391 MD51Q353	5.1	2.4	0.9	9.21
153	LT54Q129	4.5	3.3	1.0	10.28
154	MC53Q613	5.5	2.9	0.8	13.10
155	MA51Q364	6.4	3.0	1.1	16.28

第60図　遺構外出土石器(1)



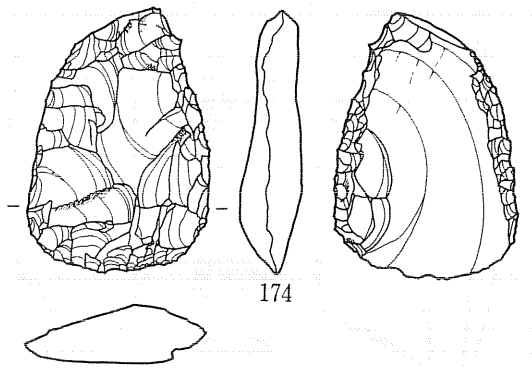
番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重　量
156	MC51Q352	10.0	3.1	1.0	31.85
157	MG53Q1079	9.5	2.5	0.9	17.57
158	MA54Q413	5.8	1.8	0.7	5.47
159	MH49Q433	7.0	2.3	0.7	11.70
160	LQ52Q1316	6.2	3.3	0.7	10.91
161	LT49Q624	8.2	2.3	0.7	9.96
162	MM51Q772	5.3	2.6	0.7	14.95
163	MB51Q447	6.7	2.7	0.6	11.18
164	MA49Q307	6.6	2.7	0.8	15.18
165	MC49Q287	(3.9)	3.7	0.4	(7.42)

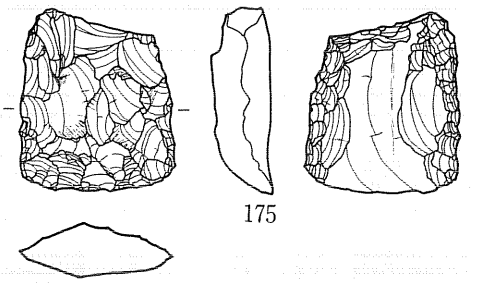
第61図　遺構外出土石器(2)

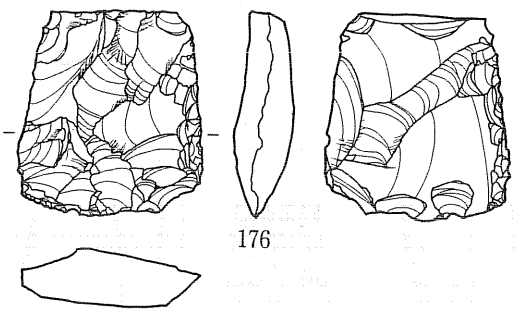


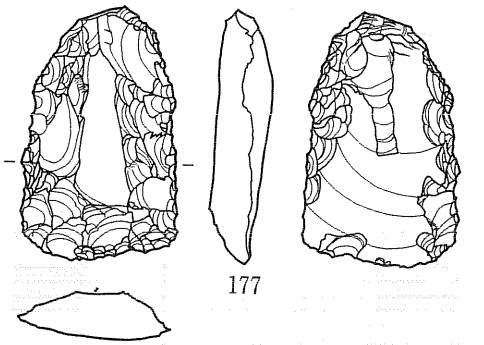
番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重　量
166	MO49Q239	9.0	3.3	0.7	21.14
167	MH50Q434	9.3	3.1	0.8	18.44
168	MA50Q297	(6.4)	2.3	0.6	(11.96)
169	MB53Q921	7.5	2.9	0.8	13.43
170	LQ52Q1318	5.2	2.1	0.5	6.02
171	ME53Q883	10.4	2.9	0.7	22.63
172	LS51Q1144	8.2	2.6	0.7	14.95
173	MG53Q1070	(4.0)	1.6	0.8	(4.65)

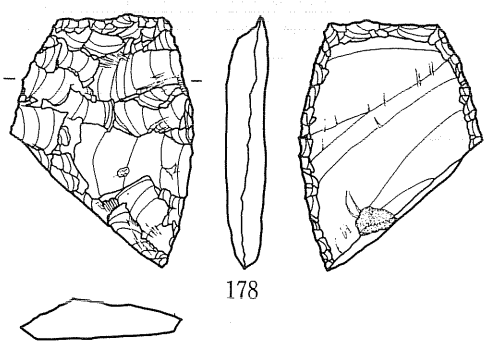
第62図　遺構外出土石器(3)

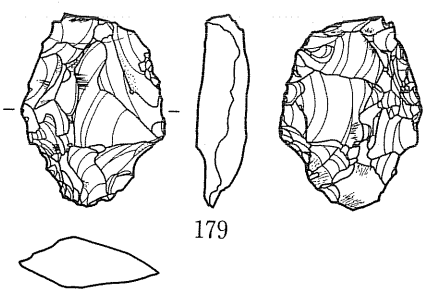


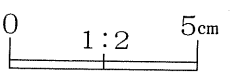


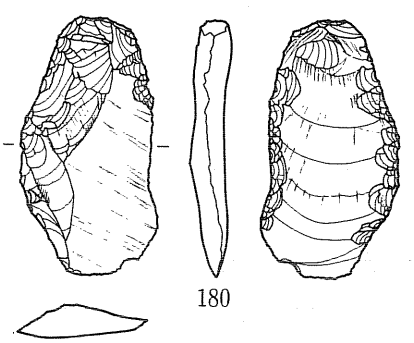






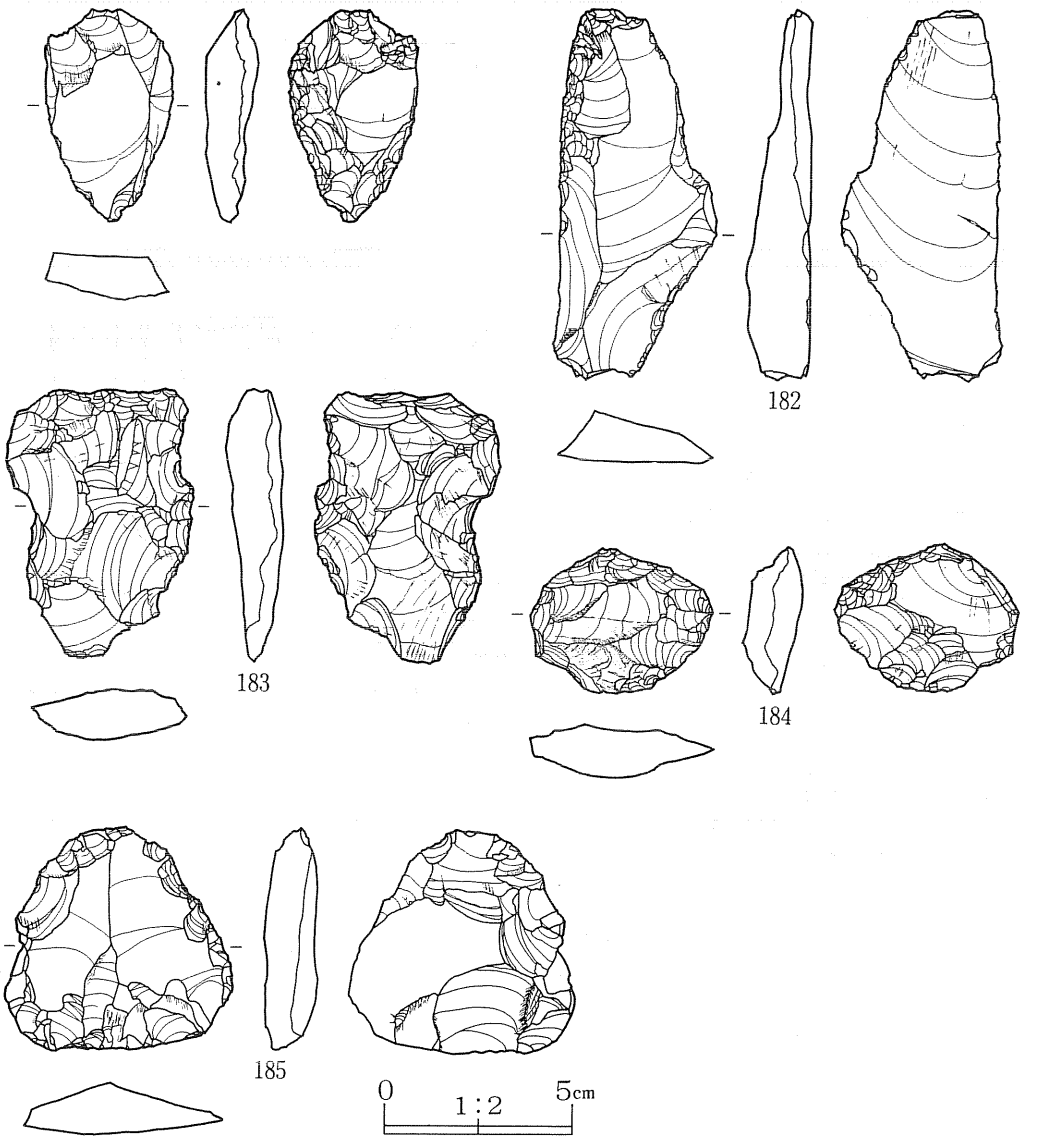






番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重　量
174	MC51Q724	7.0	4.9	1.6	56.55
175	NL59	4.8	4.1	1.7	33.93
176	MB53Q83	5.5	5.0	1.5	46.72
177	ME52Q1075	6.7	4.2	1.7	44.64
178	MG49Q429	(6.6)	4.9	1.1	(37.31)
179	LS54Q572	5.1	3.8	1.3	26.25
180	MI50Q387	6.8	3.7	1.0	23.17

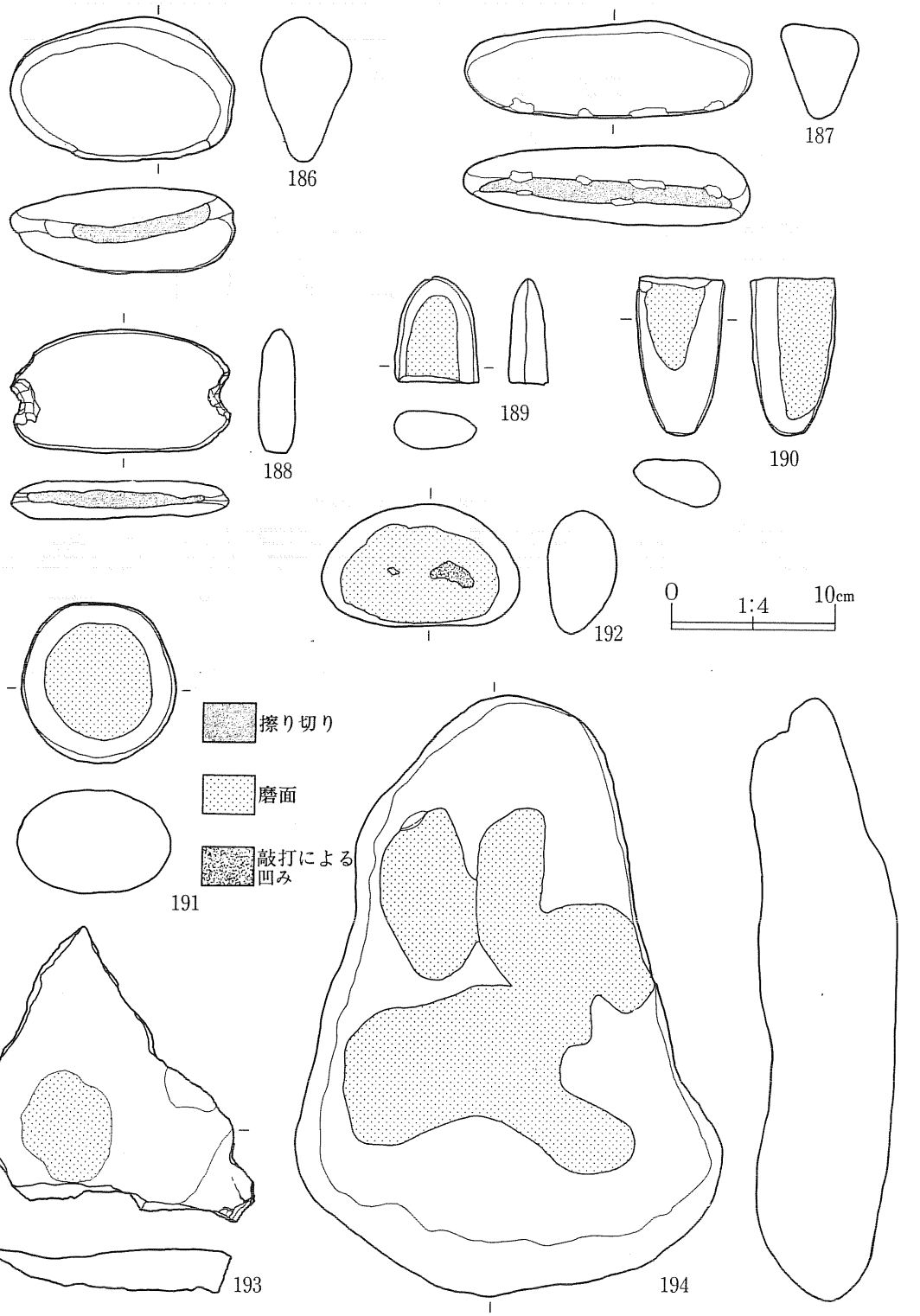
第63図　遺構外出土石器(4)



番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重　量
181	MA53Q９	5.6	3.4	1.4	25.75
182	MG54Q900	9.8	4.3	1.7	54.04
183	MA52Q476	7.2	4.9	1.6	51.73
184	LS53Q199	4.8	3.9	1.4	26.30
185	MD52Q619	6.0	5.9	1.4	49.04

番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重　量
186	MA53Q497	13.7	8.7	5.8	855.21
187	MI51Q1254	17.5	5.7	4.9	632.28
188	NL58Ⅲ	13.3	7.7	2.3	338.86
189	MH50Q1341	(6.4)	5.2	2.3	(114.77)
190	MD48Q252	(9.8)	5.2	2.9	(226.02)
191	MB54Q912	9.7	9.5	6.4	864.49
192	MB54Q700	12.1	7.4	4.2	542.51
193	MC51Q522	17.9	16.3	2.5	619.75
194	LQ52Q1162	37.0	26.2	9.0	9450.00

第64図　遺構外出土石器(5)



第65図　遺構外出土石器(6)

（２）礫石器（第65図）

出土した礫石器には、擦石（186～188）、磨石（189～191）、石皿・台石類（193、194）がある。192は、磨石と凹石の両要素をもつ。

これら礫石器の分布は、188を除き調査区東部に限られる。186、187は沢１内（Ｅブロック）出土であり、187は底面直上から得られている。なお擦石、磨石の区別については、協和町上ノ山Ⅱ遺跡の報告書における礫石器類の項（下巻Ｐ293）を参照いただきたい。

（３）遺物の分布と遺構との関係

該期の遺物の分布範囲と遺構の配置を見ると、必ずしもそれが合致していないことに１つの特徴があろう。すなわち遺構は、調査区中央部から西端部に集中するのに対し、遺物は遺構分布の希薄な沢１を含む調査区東部にその中心を置いている。このことは、「縄文時代の上野」の性格を推定していく上で大きな意味をもつ反面、土坑等の構築時期を不明瞭にしている。

土器から見た時期は、大きくは前期前葉と中期後葉にピークをもつ。第55図の遺物出土地点図を見ると、前者は沢１及びそれ以東（Ｂ・Ｄ・Ｅブロック）を中心として広く粗く分布し、一方後者は東端部（Ａブロック）に集中し、Ｂ・Ｃブロックにも点在しているが、沢１内には殆ど入り込んでいない。このように両者の分布の関係は一部、Ｂブロックでの重複が認められるが、大略的には時期的な分布の偏りと読み取ることができるかもしれない。

これに石器の分布範囲を重ねてみると、石鏃、尖頭器、石槍類は１点（石鏃145）を除いてＢ・Ｅブロック内で出土し、石匙はＢブロックに中心を置くものの沢１内、調査区中央部でも出土している。中期の土器が集中するＡブロックでは、これらの石器が殆ど確認できないことから、礫石器（特に擦石）を含めてその帰属は、前期前葉の可能性が高い。

定型的な石器の中で、点数の多い石匙については、その製作にあたって同じ調整剥離技法が採用されている。この様な技法をもつ石匙は「松原型石匙」とも呼ばれ、「早期最終末の一型式から前期前葉までの数型式の短期間に北海道から東北地域の広範囲にわたって分布している」とされている。先に述べた石匙等の帰属時期の可能性を高める裏付けとなろう。この技法をもつ石匙は上野遺跡の周辺でも、山王岱遺跡（第３次）や上聖遺跡で出土例がある。

またＢブロックでは、500点以上の石器が確認されているが、その大半は剥片で占められている。一般的な考え方では、この場（Ｂブロック、径約25ｍ）で石器の製作がなされたと推定できよう。一方で明確な石核が存在しないことから、ここでの機能が停止した段階で石核を他所へ運び出したと思われる。

註１　秋田県教育委員会「上ノ山Ⅱ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』1988（昭和63年）

註２　秦　昭繁「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙－松原型石匙の分布と製作時期について－」『考古学雑誌』第76巻第４号　Ｐ22　1991（平成３年）

第５章　自然科学的分析

第１節　炭化材の樹種同定報告

１．試料

上野遺跡は、大館市池内字上野の沢の途中に舌状に張り出した平坦部に位置する。遺跡からは、平安時代に属する焼失した竪穴住居跡が１軒検出された。試料は、この竪穴住居跡から出土したNo.１（2UN　ＳＩ40　ＲＣ28 911031）とNo.２（2UN　ＳＩ40　ＲＣ44 91107）の炭化材２点である。出土状況から住居の構築材と考えられている。

２．方法

試料を乾燥させたのち木口・征目・板目の３断面を作製、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。同時に電子顕微鏡写真図版（図版１）も作製した。

３．結果

試料はNo.１がイヌエンジュ属の一種、No.２がカツラに同定された。試料のおもな解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は以下のようなものである。なお、一般的性質などについては「木の辞典第１巻、第３巻」（平井、1979）を参考にした。

・カツラ（Ceridiphyllum japonicum）カツラ科

散孔材で、管孔は単独または２～３個が複合、分布密度は高い。晩材部へ向かって管径を漸減させる。横断面では多角形、管壁は薄い。同管は階段穿孔を有し、段（bar）数は20以上、放射組織は異性II型、１～２細胞幅、１～30細胞高。柔組織は散在状。年輪界はやや不明瞭。

カツラは北海道から九州に自生する落葉高木である。カツラ属にはこのほか、本州北中部の亜高山帯に分布するヒロハカツラ（C. magnificum）がある。カツラの材はやや軽軟で、割裂性は大きく、加工は容易、強度・保存性は低い。大径木が多く、欠点が少ないため、各種の道具・器具・木地・家具・建築・彫刻材などに用いられる有用材の一つである。

・イヌエンジュ属の一種（Maackia sp.）マメ科

環孔材で、孔圏部は１～４列、孔圏外でやや管径を減じた後、多数の道管が集まって接線方向、斜方向に複合し、木口面で帯状の模様をつくる。道管は単穿孔を有している。小道管は階

層状に配列し、内壁には螺旋肥厚が認められる。放射組織は異性III型～同性、１～８細胞幅、１～80細胞高。軸方向柔組織は、周囲状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

イヌエンジュ属には、シマエンジュ（M. tashiroi）・イヌエンジュ（M. amurensis var. buergeri）・ハネミイヌエンジュ（M. floribunda）の３種が含まれる。いずれも落葉低木～小高木で、シマエンジュは本州（和歌山）・四国・九州・琉球、イヌエンジュは北海道・本州（中部地方以北）、ハネミイヌエンジュは本州（中部地方以西）・四国・九州に分布する。このうち、イヌエンジュの材は、重硬で強度が大きく耐久性も高い。加工はやや困難であるが、床柱・農具等の柄・漆器・彫刻・薪炭材等幅広い用途がある。

４．考察

出土した建築材は、イヌエンジュ属とカツラであった。イヌエンジュ属の建築材としての報告は全国を見てもほとんど知られていないが、材の強度等を考えるととくに問題のある用材ではない。カツラは、県内からの出土例は知られていないが、本遺跡に比較的近い青森県黒石市の板留遺跡では一つの住居跡から出土した丸太材や角材の半数近くがカツラという報告がある（嶋倉、1980）。青森県内では多くの遺跡で建築材等の同定が行われているがカツラが多く出土しているのは板留遺跡だけで、他はクリやコナラ節、スギ等の樹種が多く用いられているようである。

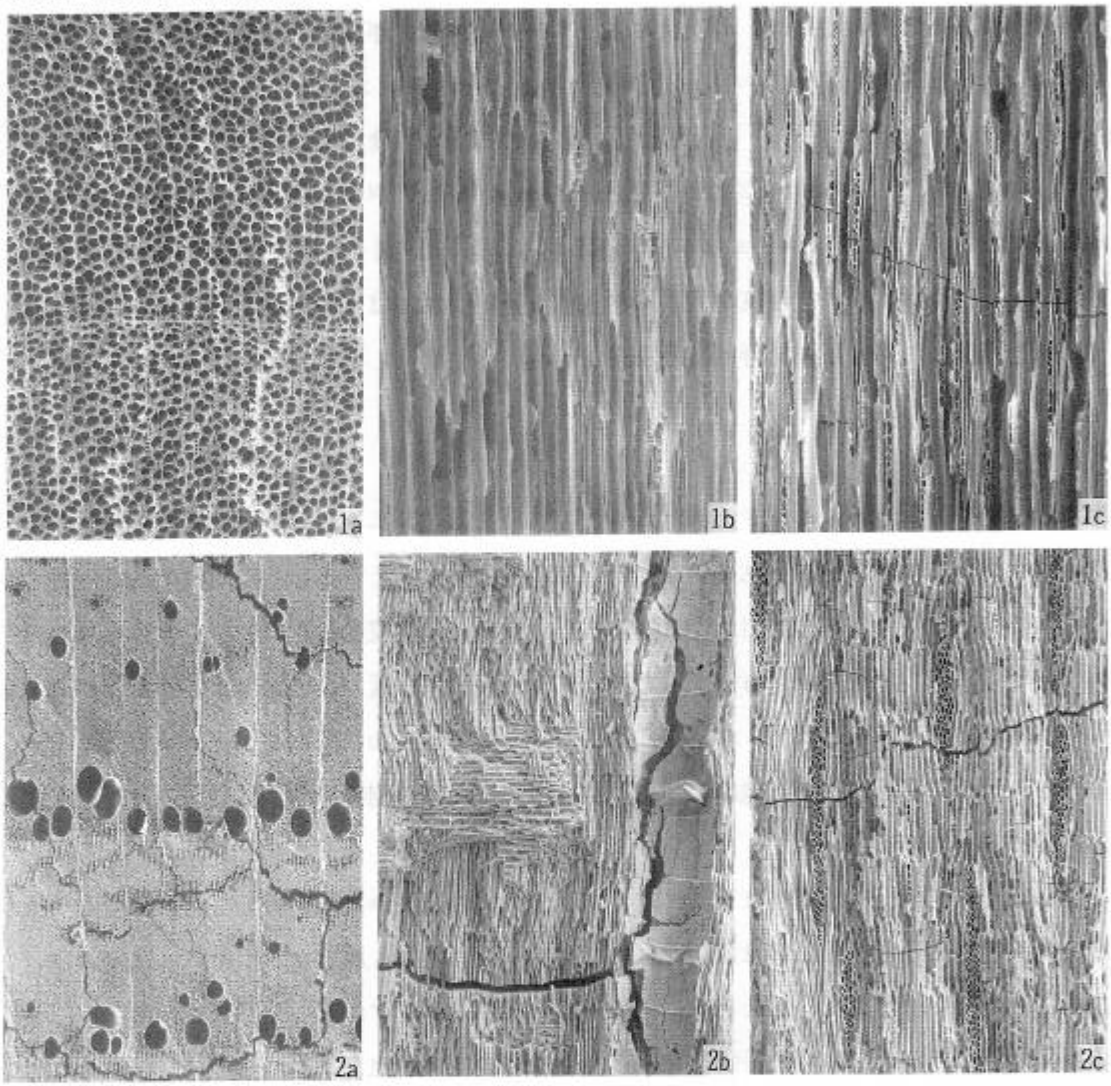
本住居址で同定を行った試料は２点のみであり、今回の結果から本住居址の用材の傾向や他遺跡の結果との比較を行うことはできない。また、イヌエンジュ属とカツラという強度に違いがある２種の材が出土していることは、材の強度による使い分けがあった可能性もあるが、今回の結果からはわからない。平面図を見ると、他にも炭化材が出土しているので、今後これらの炭化材についても同定を行いさらに資料を増やす必要がある。

文献

平井信二（1979）木の辞典　第１巻、第３巻．かなえ書房

嶋倉巳三郎（1980）板留(2)遺跡から出土した炭化材の樹種．「板留遺跡　発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第59集，付編Ｐ．１－２．青森県教育委員会．

図版1　炭化材の顕微鏡写真



1.カツラ(No2)　a（木口）　x35，b（柾目)x70，c（板目）x70
2.イヌエンジュ属の一種(No1)　a　x35,b　x70，c　x70

第6章　まとめ

上野遺跡の発掘調査で得られた資料は、遺構として、縄文時代の竪穴住居跡13軒、屋外炉（焼土遺構）５基、土坑・フラスコ状土坑73基、溝状遺構１条、平安時代の竪穴住居跡１軒、焼土遺構１基、及び時期不明の焼土遺構１基、溝状遺構17条の計112遺構である。また遺物は、縄文時代前期～後期・弥生時代の土器・石器（剥片石器、礫石器、磨製石器）、平安時代の土師器（甕、坏、　把手付土器）、須恵器（壺）、鉄製品（小刀、刀子、穂摘具様の手鎌など）、石製品（砥石）、土製品（フイゴ羽口）、及び擦文土器（甕）が出土している。本章では縄文時代と平安時代の遺構と遺物について若干のまとめを行い、本報告を終了することとしたい。

１．縄文時代の遺構と遺物

（１）竪穴住居跡の時期と類例

竪穴住居跡は、床面あるいは床面直上出土土器からＳＩ01、ＳＩ10、ＳＩ18・19については、時期差は考えられるものの中期後葉～末葉の枠内に収めることができる。隆帯に沿って刺突文の施されるＳＩ18・19出土の第16図５は、小坂町はりま館遺跡ＥⅢ区（註１）（中期末～後期前半）、二ツ井町龍毛沢館跡ＳＩ04（註２）（後期初頭）などに類例がある。またＳＩ80は、破片資料のみであるが、中期後葉～後期前葉に位置すると思われる。一方ＳＩ110は、埋土中に前期前葉、中期後葉～後期前葉の土器が混在する状況（第14図）にあり、構築時期の特定は困難である。住居の形態から見ると、２段構造をもつ竪穴住居跡は、　小坂町はりま館遺跡ＡⅣ区ＳＩ332（註３）（前期、円筒下層ｄ2式）や能代市杉沢台遺跡（註４）（円筒下層Ｃ・Ｄ式）で検出例がある。ＳＩ43・55は、土器の出土がなく所属時期不明である。なお、竪穴住居跡の形態的特徴からすると、ＳＩ43は、上野と同時期に調査が実施された山王岱遺跡（第３次）ＳＩ189に規模、炉の形態など類似点が多い。

（２）土坑の分布・形態・類例

73基確認された土坑は、主に調査区西端部に集中する。しかも袋状・フラスコ状を呈する土坑は、ほぼ調査区中央部西側以西に限られる。構築時期については、出土遺物が極端に少なく、言及の材料に欠くが、土器ではＳＫ78確認面で後期前葉の深鉢形土器が、またＳＫ81、ＳＫ82埋土中位より前期前葉の土器片が得られている。この点と、遺構外出土土器から調査区西端部では、土坑の下限時期を後期前葉に求められ、主として前期前葉あるいは中期後葉の構築と想定できる。

また、土坑の形態にはバラエテーがあり、坑底面からの掘り込みの有無とその形態で次の6タイプに類別できる。(第20図模式図参照)

(a)＝掘り込み等なし。

(b)＝底面中央に1本の柱穴状の深いピットあり。1基。

(c)＝底面ほぼ中央に基本的に1本の浅いピットあり。10基。

(d)＝底面に(c)より小規模な浅いピットが複数あり、数字はその本数。2基。

(e)＝底面に小土坑様の深い掘り込みあり。2基。

(f)＝底面に小土坑様のごく浅い掘り込みあり。4基。

(b)タイプはSK117のみであり、断面形態と併せて「陥し穴」を想定できる。この種の円形の陥し穴は、米代川流域では、小坂町はりま館遺跡AI・II区、同EIII区(註5)、鹿角市太田谷地館跡(2次)(註6)、鹿角市下乳牛遺跡(註7)などに類例がある。大館市内では1991年に調査された上聖遺跡で1基の類例がある。

(c)タイプは、断面形が袋状もしくはフラスコ状を呈する比較的大型の土坑底面ほぼ中央に浅いピットをもつ。(b)タイプの様に柱穴状の深い掘り込みは認められず、深さの平均8.5cmである。同種の類例は、大館市上ノ山I遺跡(2次)(註8)(前期後葉)、比内町横沢遺跡(註9)(中期後葉)、鹿角市大湯環状列石周辺遺跡(註10)(後期前葉)、鹿角市太田谷地館跡(1次)(註11)などに求めることができる。

(e)タイプは、土坑のなかに小さな土坑が掘り込まれている形態であり、「子持ち土坑」とも言える。類例は、小坂町白長根館I遺跡(後期)(註12)、小坂町横館遺跡(註13)、鹿角市猿ケ平II遺跡(註14)、鹿角市北の林II遺跡(註15)、鹿角市天戸森遺跡(註16)(中期後葉)などにあり、中期後葉～後期の構築例が多いようである。

その他、(f)タイプは大館市上ノ山I(2次)SKF241(註17)で見られるが、(d)タイプを含めて類例は殆どないようである。

土坑、特にフラスコ状・袋状・筒状を呈する比較的大形の土坑は、その縦断面のプロポーションが比内町横沢遺跡の土坑に近似している。同遺跡では、(c)タイプの土坑も11基検出されていることと、地理的距離、時期(中期後葉)を考えれば、両遺跡間の交流、集団の移動等の想定ができる。

2．平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構と遺物については、それぞれに幾つかの点において特徴的と考えられる事項が存在する。

(1)遺構について

検出遺構は、竪穴住居跡と焼土遺構のみであるが、両遺構の立地に特異性が認められる。沢

内に立地している点である。竪穴住居跡については、その掘り込み面は必ずしも明確ではないが、火山灰（大湯浮石）が降下しその上に、黒色土（Ⅰ－b層）が2～3㎝堆積した後と考えられることから、当時の沢内部の地表面は、沢上部の地表面より1m前後下がっていたと思われる。従って台地の上から眺めた当時の住居の景観は、屋根の上半分が地面から顔を覗かせているような様を想像できる。

なぜこのような湿気が多く居住には適しているとは言い難い沢内に住居を構築するに至ったのであろうか。沢上部には幾らでも適地があると思われるのであるが。現場での調査中に感じたのは次の2つのことであった。その1つは風の問題、他の1つは生業の問題である。

沢上部での調査中には、ほぼ毎日のように南の沖積地から吹き上げる強風に悩まされていた。ところが沢内に入ると風は頭の上を通り過ぎる。この辺りに構築の経緯があったのかもしれない。また生業との係わりでは、すなわち竪穴住居跡の南東約3.5mに位置する焼土遺構（ＳＮ38）の性格である。本遺構精査時点では、竪穴住居跡及びその周辺部の遺物の存在が未確認であったため、「鉄」との係わりを考慮することなく調査を進めていた。その後、竪穴住居跡を検出し、その中から鉄製品の出土、更にカマド周辺からは鍛造剝片を確認したことから、ＳＮ38も鉄生産に係わりのある遺構ではないかと想定するに至ったが、その時には、本遺構は精査を終了し、この部分を下層に掘り下げていた。そのため、ＳＮ38での鍛造剝片の有無は不明であるが、掘り込み、焼土、白色粘土等の状況証拠から、鍛冶炉であった可能性を想定したい。これは周辺出土遺物の中に炉壁、鉄滓あるいは鉄塊が全く認められないことから、製鉄炉もしくは精練炉とは考えにくく、ＳＮ38の掘り込み規模（長さ62㎝、幅40㎝、深さ22㎝）から小鍛冶に伴う炉と想定したのである。壁・底面は黒色土中にあるためか焼土化した面は観察できなかった。このように竪穴住居跡及び焼土遺構が鍛冶に関連ある施設とすれば、この竪穴住居跡は居住環境を重視するより、風対策を念頭において選地された結果とみることもできる。

（2）遺物について

竪穴住居跡、焼土遺構及びその周辺出土の遺物は、その分布、出土層位からほぼ同時存在の資料と見て大過ないと考える。その年代については、遺物の出土した遺構が現在降下年代を10世紀前半と考えられている十和田ａ火山灰（大湯浮石層）を切り込んで構築されていることと、擦文土器・土師器甕の形態・調整、把手付土器の存在などから11世紀代と想定している。

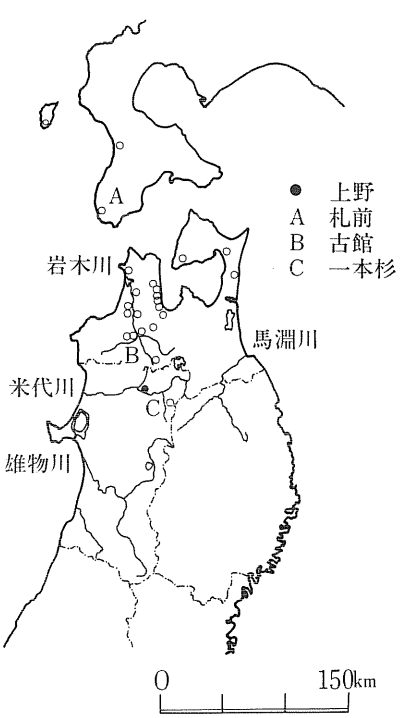
ここでは、まとまった形では秋田県内初見の擦文土器を中心に、その類例と年代について探って見たい。

上野遺跡で出土した擦文土器は、その分布の中心に位置する北海道の時期区分に従えば、おおよそ擦文文化後期にあたると思われる。しかし上野の土器は、横走する沈線文あるいは鋸歯状の刻文という要素を取り除くと、土師器そのものである。鈴木克彦(註18)氏が、このような土器を

（土師器と擦文土器）「両者の要素を併わせ持つ、或いはいずれともつかぬ土器として」「第三の土器」、「第四の土器」と仮称したことがある。これに従うと「第三の土器」は横走する沈線文土器であり、「第四の土器」は横走する沈線と鋸歯状の刻文をもつ土器になる。一方土師器の要素の部分については、共伴する土師器とは、胎土、調整が明らかに異なる。この点については、擦文土器の発生との係わりからふれなければならない。

擦文土器の発生について菊池徹夫氏は、「擦文土器は器形や整形法において〝父なる〟土師器の伝統を示し、一方、独特の直線的な平行沈線や幾何学的刻線文には〝母なる〟続縄文土器、とりわけ江別式系土器の面影を色濃く留めている」[註19]といい、その時期は、現在では東北地方での土師器との併行関係から7世紀後半から8世紀初頭と見ている[註20]。この時期に土師器と続縄文土器（北大式）が接触して新たな土器が生まれた。擦文という名は、器面に擦文＝刷毛目が施文された土器からきているもので、まさに7・8世紀代の土師器に普遍的に認められる手法を取り入れている。

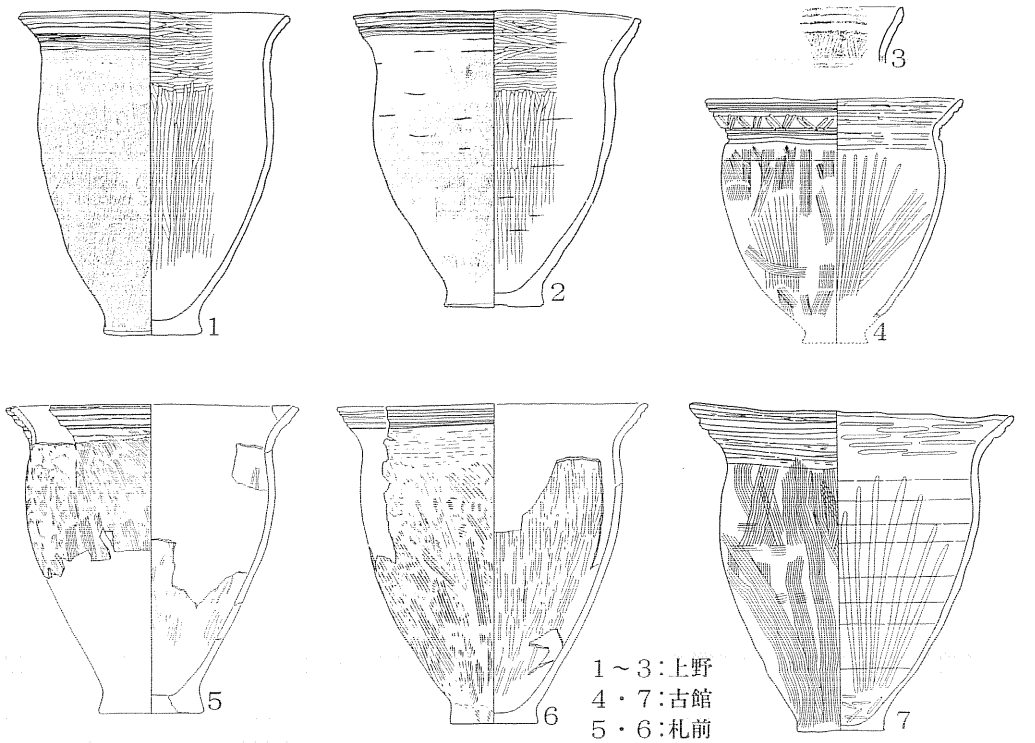
秋田県内では甕形土器に対しては、8世紀後半以降刷毛目調整を施す例は激減し、代わってナデやケズリといった調整手法が一般的となる。11世紀に入ると粗いケズリ（ナタケズリ）のみの甕も現れる。一方の擦文土器は、本例に認められるように伝統的な器形、調整手法（刷毛目）を保守しているのである。土器の胴部のみを見せられると8世紀代の土師器と見誤る程である。唯一の違いと言えば、8世紀代には認められないいわゆる砂底を呈する底部だけであろう。



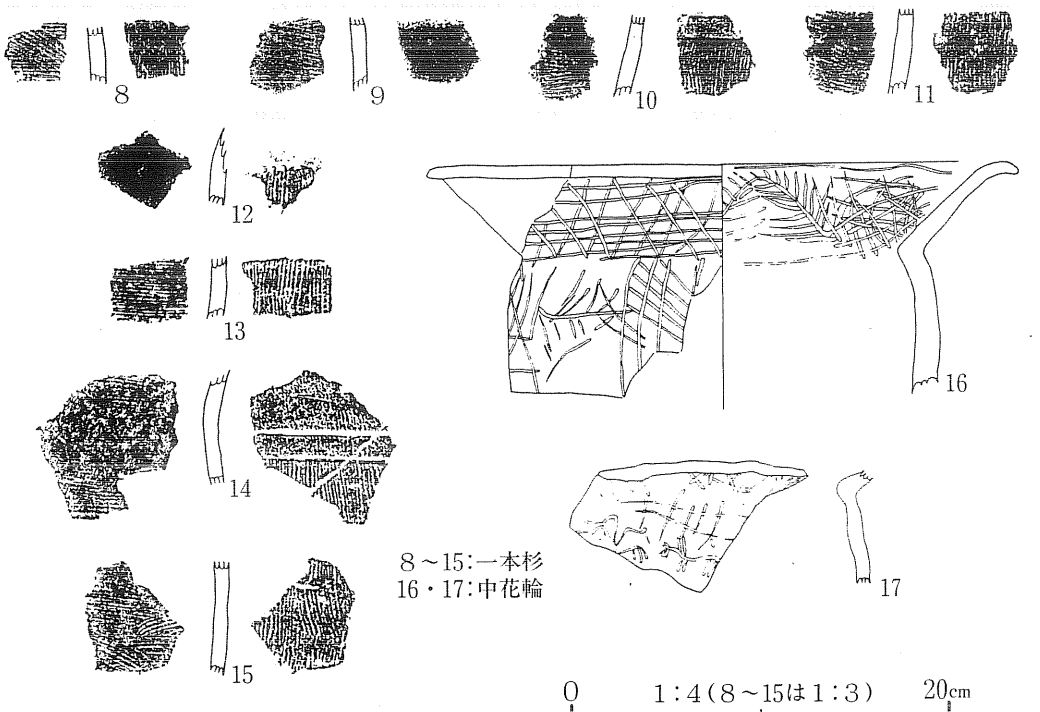
第66図　擦文文化後期の主要遺跡分布図

第66図は、擦文文化後期の主要な遺跡の分布図[註21]である。これを基に、本擦文土器の類例を調べると、青森県碇ヶ関村古館遺跡[註22]（第67図4、7）、北海道松前町札前遺跡[註23]（同5、6）などの遺跡名を挙げることができる。両遺跡とも、口縁部に横走する沈線文のみの文様を持つものが主体を占め、札前遺跡では刻文・鋸歯状の沈線文などの文様をもつ個体の出現率は「4％強でしかない」という。古館遺跡も数字（比率）としてのデータはないが、札前例に近似するであろう。

一方この2遺跡は、擦文土器以外でも本遺跡との類似点を抽出できる。それは把手付土器と鉄製品である。特に古館遺跡では、把手付土器と刀子、穂摘具様の手鎌（同報告書では「目釘式手鎌」）に類例がある。また札前遺跡でも形態はやや異なるものの北海道で唯一の把手付土器が出土している。



上野の擦文土器と古館・札前の擦文土器の比較



第67図　県内外の擦文土器もしくは擦文の影響を受けた土器

なお穂摘具様の鉄製品は、秋田県内では、上野遺跡に近い大館市山王台遺跡第4号竪穴住居跡出土に類例がある。「現長8.7cm、幅1.25cm、両端部に紐通し孔があけられ」ている。本例の釘式とは異なるようである。(註24) 時期的には9世紀後半～10世紀初頭を想定しており、上野遺跡とは100年（以上）の開きがある。また鹿角市太田谷地館跡・中の崎遺跡・案内III遺跡・歌内遺跡でも「手鎌」あるいは「穂摘具」として報告されている。(註25)

上野遺跡で出土した擦文土器は、擦文文化後期の分布圏の南縁にあたる。前述の碇ヶ関村古館遺跡のわずか南南西約26kmに本遺跡が位置しているのである。地理的にも擦文土器の分布圏に入ると想定されていた米代川流域でようやく擦文土器が確認できたことになる。秋田県では、雄物川河口部、日本海に程近い秋田市後城遺跡(註26)で擦文土器片が1点出土したことを唯一例（第68図4）としていた。時期的には、擦文文化前期にあたり、土師器のなかに擦文土器の鋸歯状沈線を取り入れたものである。上野遺跡出土の擦文土器の観察の結果から、既に調査済の資料を再点検して見ると、「刷毛目を持つ土師器」と報告されているものの中に擦文土器と目される土器が混在しているようである。

鹿角市一本杉遺跡(註27)（第67図8～15）では、ＳＩ001・002で2片、ＳＩ010で4片、ＳＩ012で2片のいずれも竪穴住居跡覆土出土の「土師器」として図示報告されている。10と15は外面に整形時と見られる段が認められる以外は、外面に刷毛目、内面にヘラナデの調整痕をもつ。共伴する土師器から10～11世紀と考えられる。同遺跡報告書作成にあたって内部では「擦文土器ではないか」との声も上がっていたが、当時（1981年調査）の状況では、小破片のみであることと、米代川流域での未検出等を理由に拓影図の提示のみに留めた経緯がある。

また、鹿角市中花輪遺跡出土の「刻文絵画土器」(註28)（第67図16、17）も格子目状の沈線文などは明らかに擦文土器の影響下にあるものとして認知できよう。

このように7・8世紀に発生した擦文土器は、土師器の美しい形と刷毛目による調整手法を手本に、刻文等の文様を付加して独自に発達を見せる。手本にされた土師器は、8世紀後半ないしは9世紀前半を境に伝統的な刷毛目あるいはミガキといった手法を切り捨てていく。簡略化というより手抜き、変質、退化と言えよう。それが顕著となるのが11世紀である。器形は8世紀当時の面影すらなくなる。まさにこの11世紀に「上野」の地で進む方向を変えた両者が〝土師器より土師器らしい擦文土器〟と〝土師器のなれの果て〟という顔で再会したのである。(註29)

註1　秋田県教育委員会『はりま館遺跡発掘調査報告書』（下巻）P654　1990（平成2年）
註2　秋田県教育委員会『竜毛館跡発掘調査報告書』P32　1990（平成2年）
註3　註1文献（上巻）P263～268
註4　秋田県教育委員会『杉沢台遺跡発掘調査報告書』1981（昭和56年）

註５　註１文献（上巻）Ｐ64、（下巻）Ｐ649

註６　秋田県教育委員会「太田谷地館跡第２次調査」『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』Ｐ52　1989（平成元年）

註７　秋田県教育委員会「下乳牛遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅺ』Ｐ264～265　1984（昭和59年）

註８　秋田県教育委員会「上ノ山Ⅰ遺跡第２次調査」『国道103号道路改良工事に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』Ｐ41～43　1991（平成３年）

註９　秋田県教育委員会「横沢遺跡」『味噌内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書』Ｐ33～47　1988（昭和63年）

註10　鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(5)』Ｐ34～38　1989（平成元年）
鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(6)』p48　1990（平成２年）

註11　秋田県教育委員会「太田谷地館跡」『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』付図３　1988（昭和63年）

註12　秋田県教育委員会「白長根館Ⅰ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅻ』Ｐ60　1984（昭和59年）

註13　秋田県教育委員会「横館遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅹ』Ｐ206　1984（昭和59年）

註14　秋田県教育委員会「猿ヶ平Ⅱ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』Ｐ41～42、60　1983（昭和58年）

註15　秋田県教育委員会「北の林Ⅱ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ』Ｐ27　1982（昭和57年）

註16　鹿角市教育委員会『天戸森遺跡』Ｐ347～348　1984（昭和59年）

註17　註８文献Ｐ42

註18　鈴木克彦「青森県の擦文文化－擦文文化の外縁圏における一様相」『どるめん』22　1979（昭和54年）

註19　菊池徹夫「擦文文化研究の現状と課題」『考古学ジャーナル』213　1983（昭和58年）

註20　横山英介『擦文文化』Ｐ24～26　1990（平成２年）

註21　分布図は、三浦圭介「古代における東北地方北部の生業」『北からの視点－日本考古学協会宮城・仙台大会シンポジウム資料集』Ｐ149　1991（平成３年）、及び註20文献Ｐ33を参照。

註22　青森県教育委員会『碇ヶ関村古館遺跡』1980（昭和55年）

註23　松前町教育委員会『札前－国道228号線改良拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書－』1985（昭和60年）

註24　大館市教育委員会『大館市山王台遺跡発掘調査報告書』1990（平成２年）

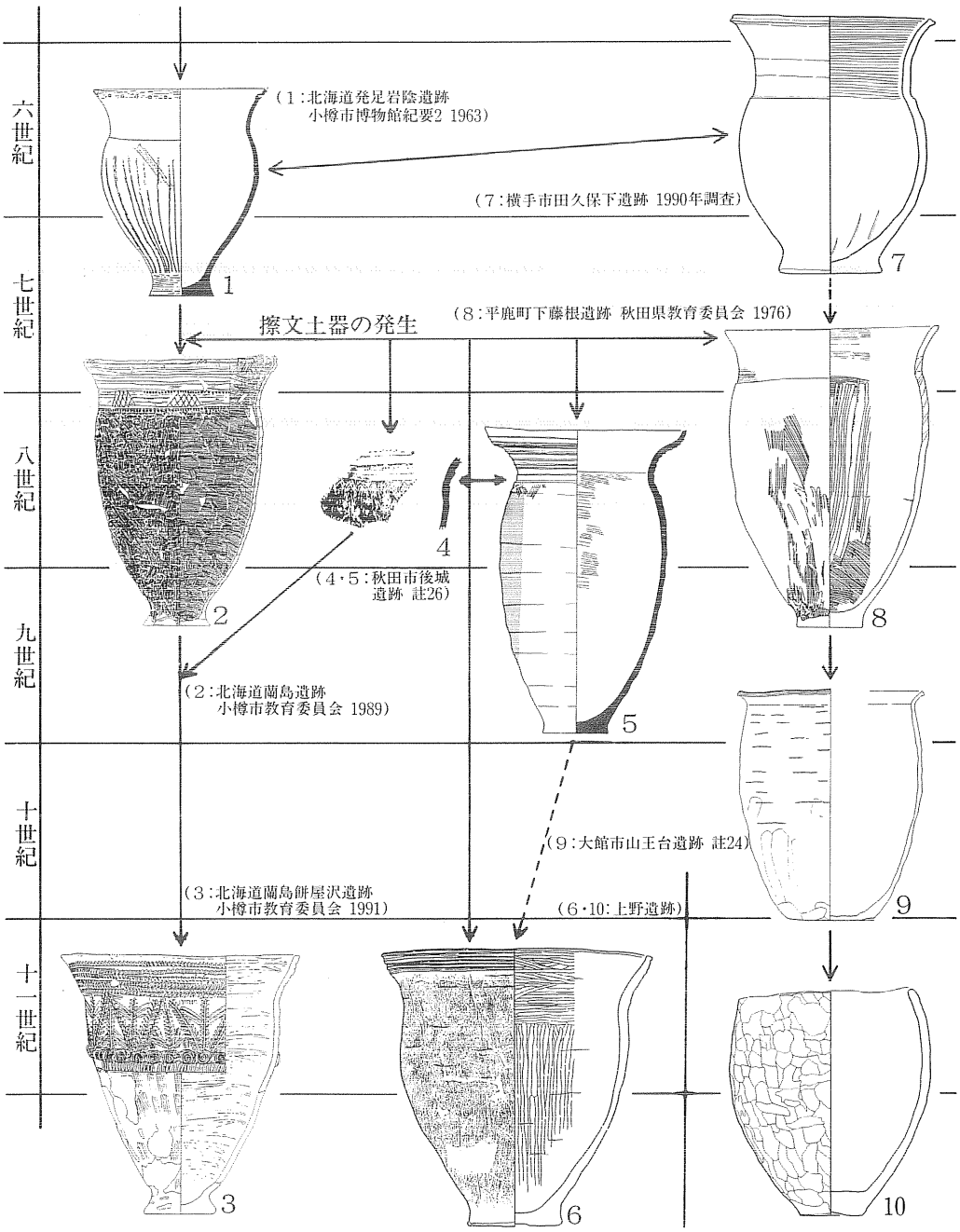
註25　太田谷地館跡は註11文献Ｐ63～68、中の崎遺跡は秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ』1984（昭和59年）、案内Ⅲ遺跡は、同『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』1983（昭和58年）、歌内遺跡は、同『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ』1982（昭和57年）、秋田県内では穂摘具様の鉄製品は米代川上流域の大館・鹿角地方でのみ検出されている。

註26　秋田市教育委員会『後城遺跡発掘調査報告書』1981（昭和56年）

註27　秋田県教育委員会「一本杉遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI』1983（昭和58年）

註28　藤井安正「鹿角市中花輪遺跡出土の刻文絵画土器」『考古風土記』第8号　1983（昭和58年）

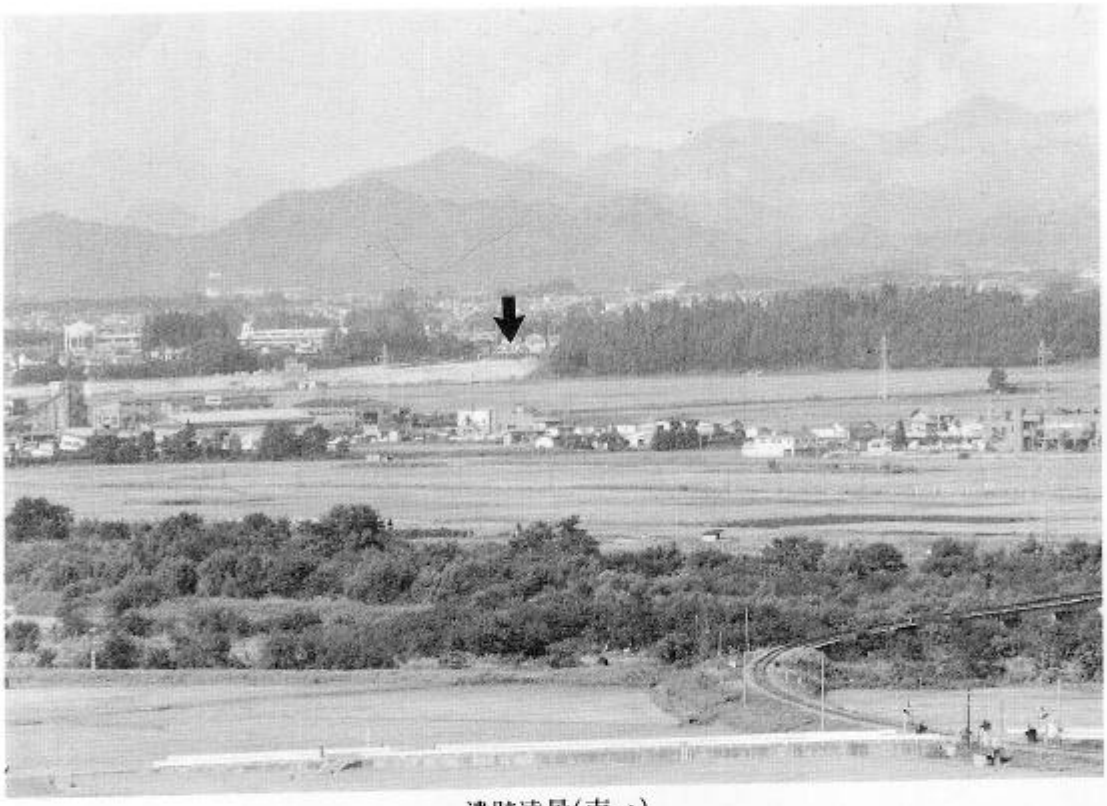
註29　土師器と擦文土器の歩んできた道筋を模式的に表したのが、下の第68図である。



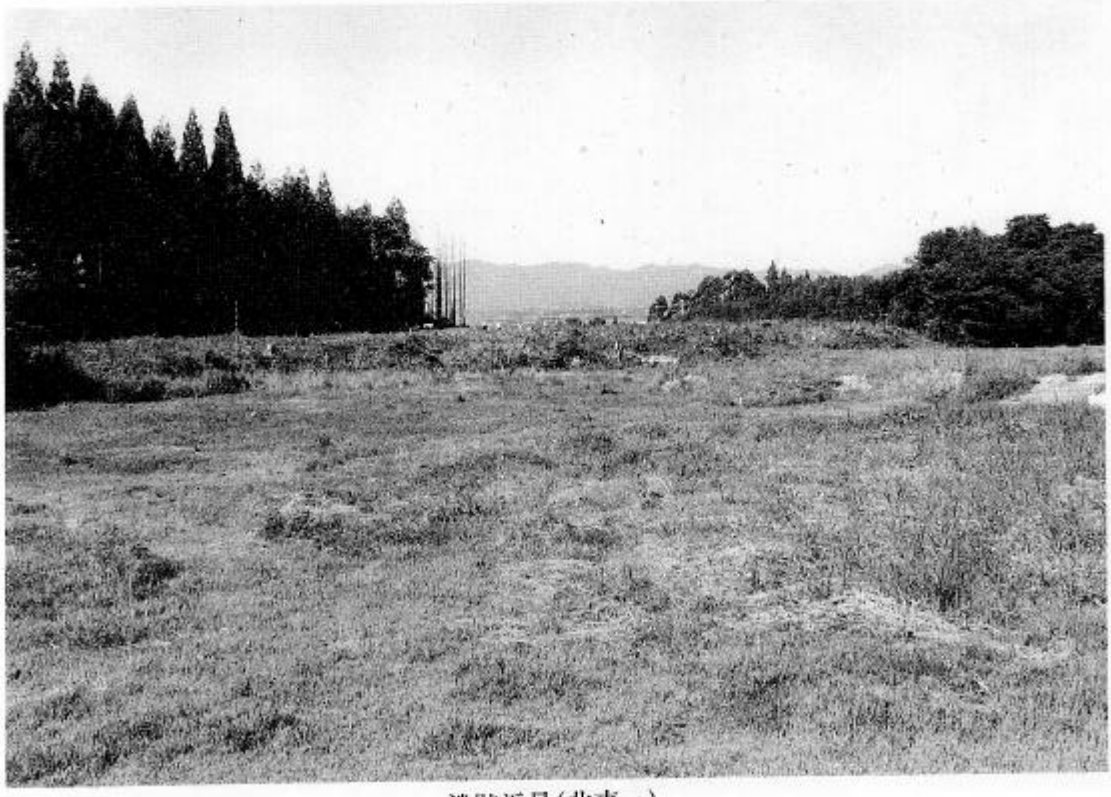
第68図　土師器の流れと擦文土器の流れ（概念図）

上野遺跡周辺航空写真

図版2



遺跡遠景(南→)



遺跡近景(北東→)

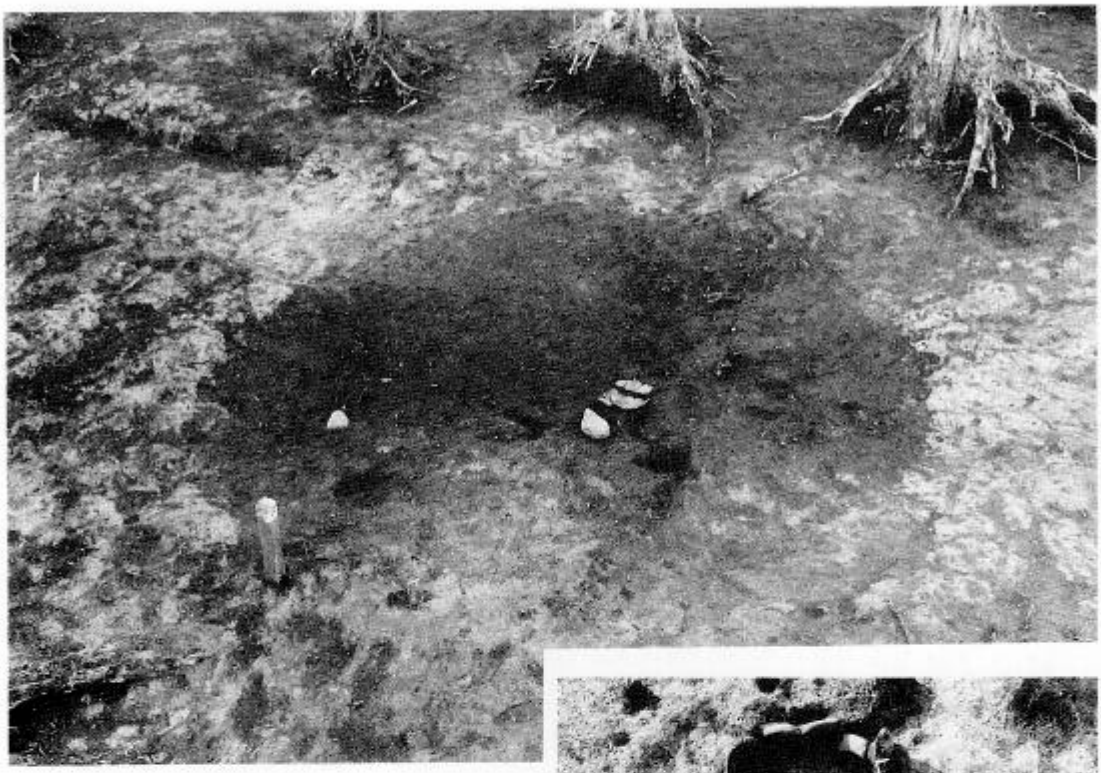
調査区西端部　調査前近景(東→)

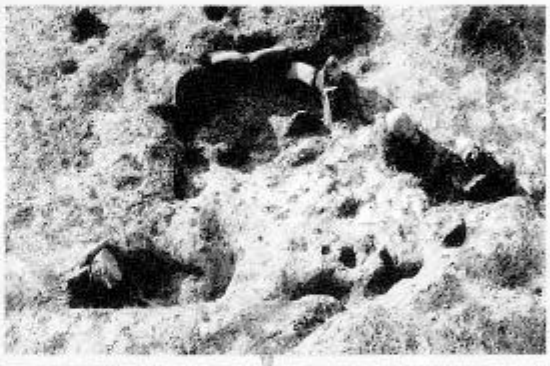
同上　調査後全景(東→)

図版4

調査区東～中央部　調査後全景(西→)

同上　(東→)





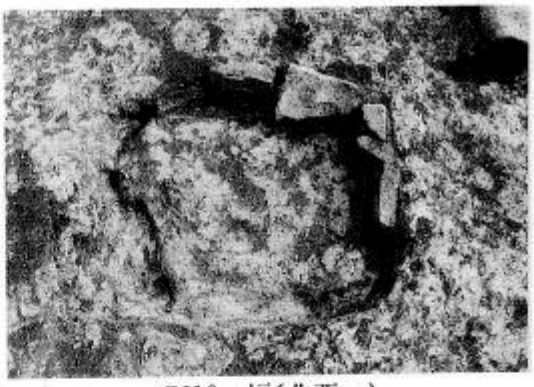
SI01　確認状況(上、南→)
同　完掘(下、東→)
同　炉　(右、東→)

図版6

SI10　確認状況(東→)

SI10・60　完掘(西→)

SI10　土層(西→)



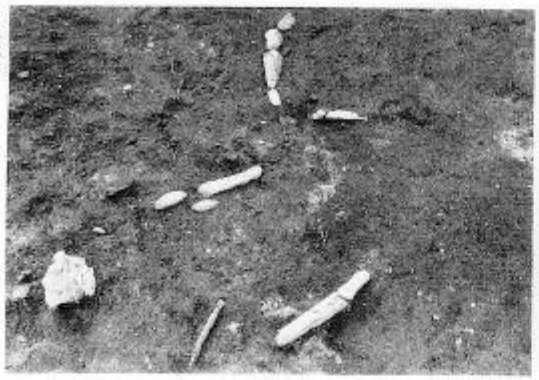
SI10　炉(北西→)

SI10　炉と立石(北西→)

SI60　完掘(南→)

SI18・19、SK17・20・22　確認状況(東→)

図版8



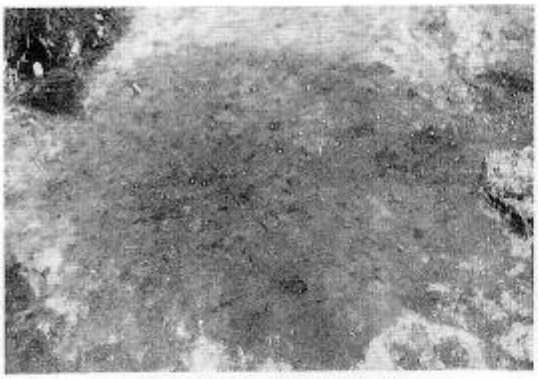
SI18・19　炉確認(東→)

SI18　炉土層(北→)

SI18　炉完掘(北→)

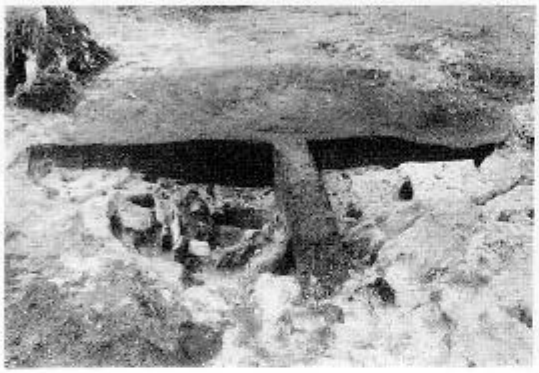
SI19　炉土層(東→)

SI43・55、SK51・52　完掘(東→)

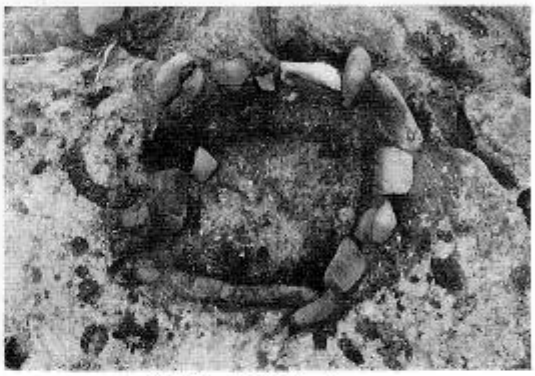


SI43・55　確認(東→)

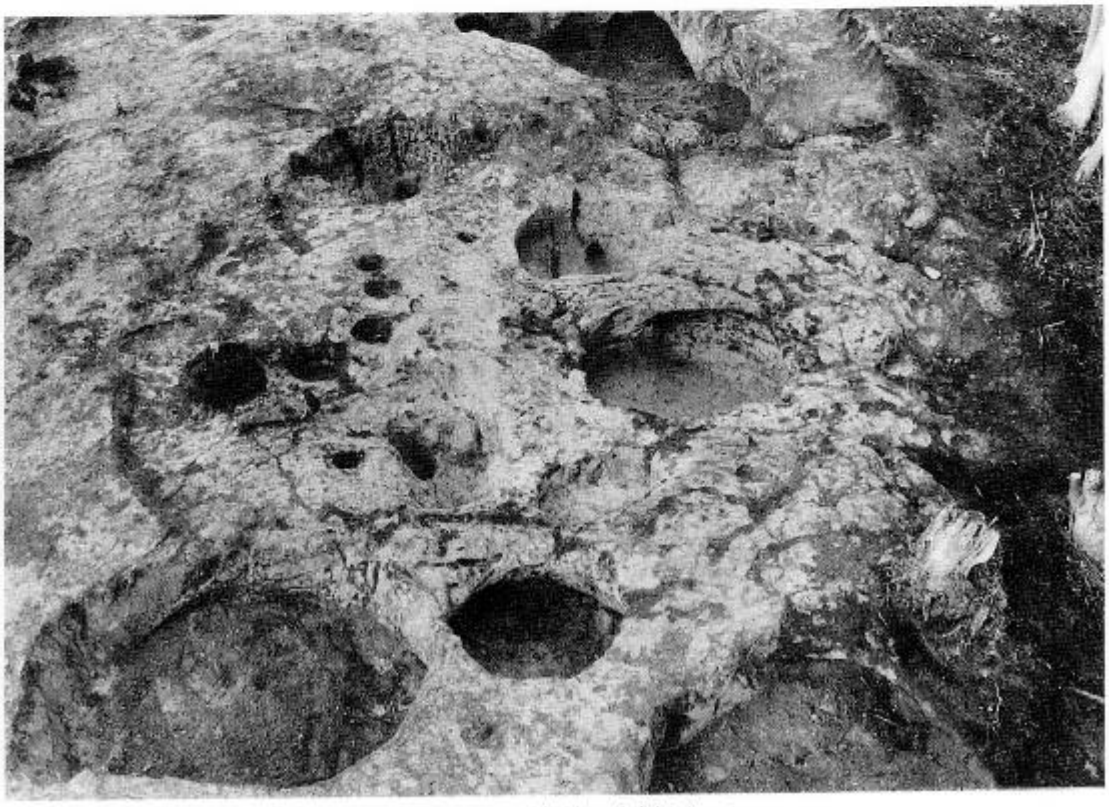
同左　土層(北→)



同上　土層(東→)



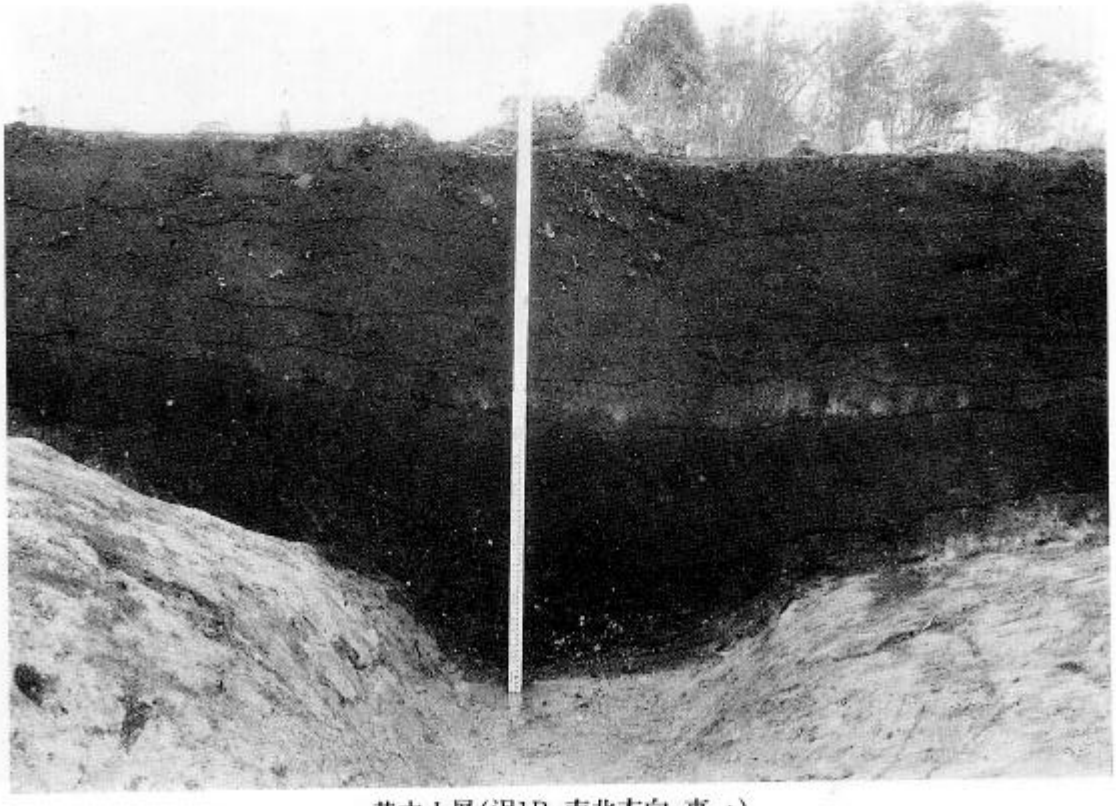
SI43　炉(西→)



SI80・87、土坑群　完掘(東→)

図版10

SI80　土層(南→)



基本土層(沢1B、南北方向、東→)

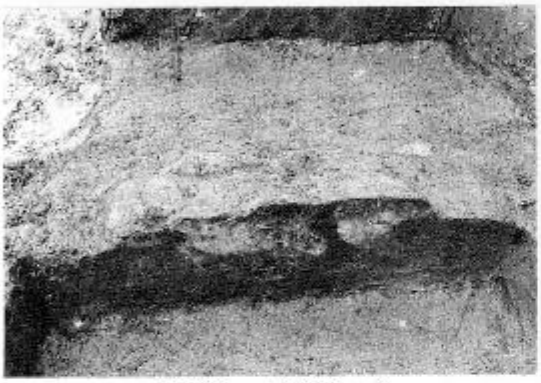
SI110・122(北半、南→)

SI110・112(南半、南→)

図版12

SN65　石囲炉(西→)

SN112　石囲炉(東→)



SN66　土層(東→)

遺物出土状況(MA52)

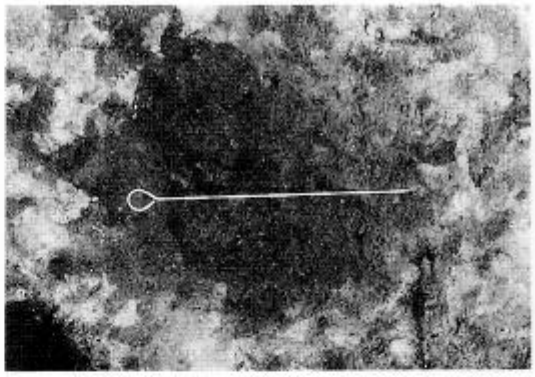
SK07　完掘(南→)

SK09　完掘(北→)

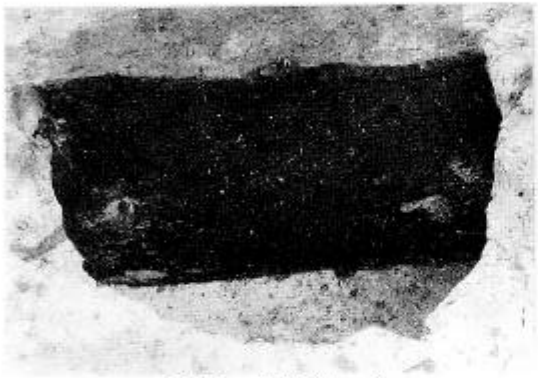
SK20　土層(南→)

SK29　完掘(西→)

SK33　完掘(北→)

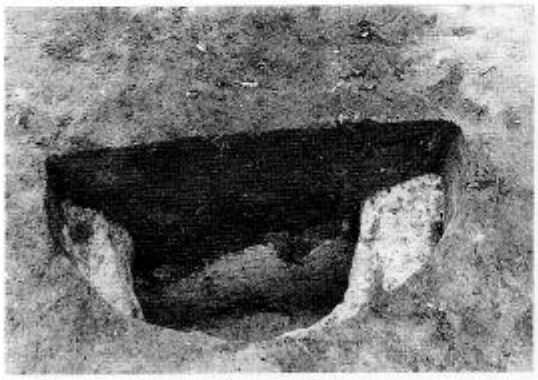


SK35　確認(西→)

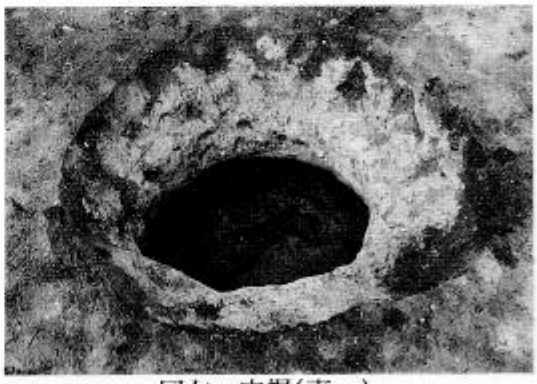


SK41　土層(北→)

同左　完掘(北東→)

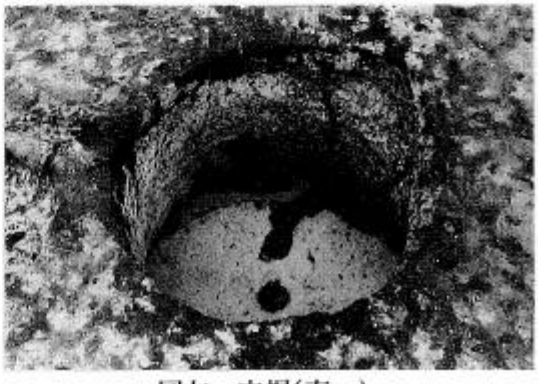


SK42　土層(南→)



同左　完掘(東→)

SK50　土層(南→)

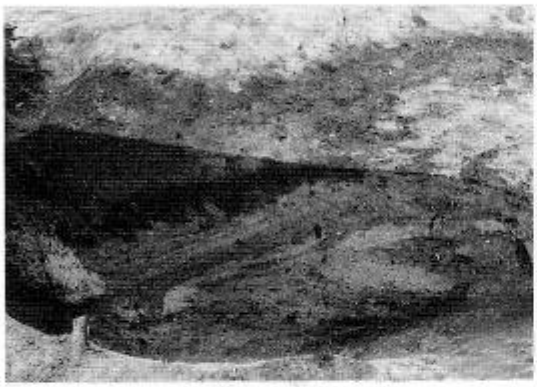


同左　完掘(南→)

図版14

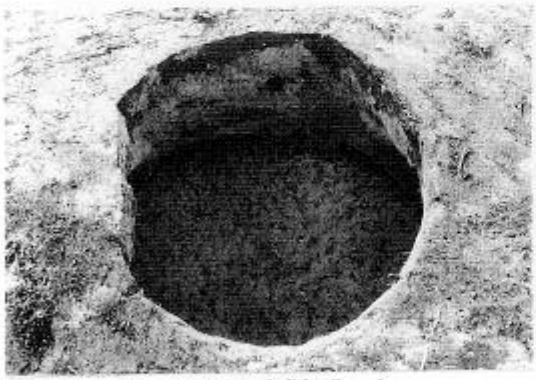
SK51・52　土層(東→)

SK56　完掘(南→)



SK61　土層(東→)

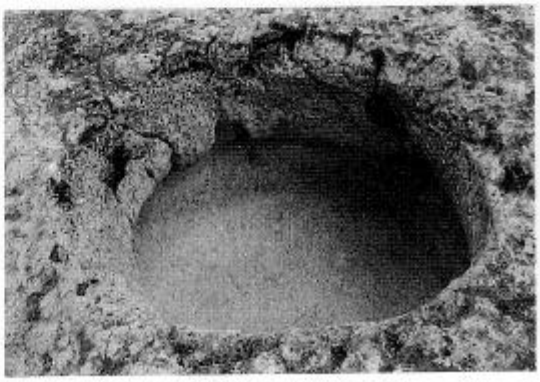
SK63　完掘(西→)



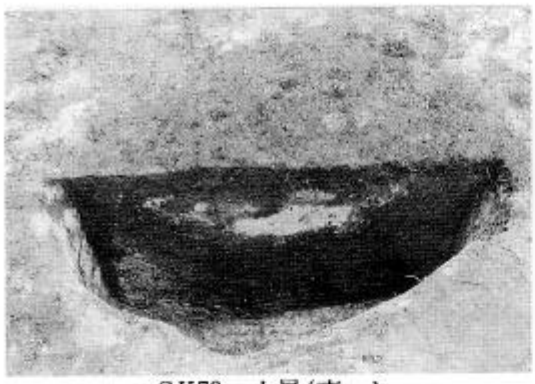
SK64　完掘(北→)

SK70　完掘(南→)

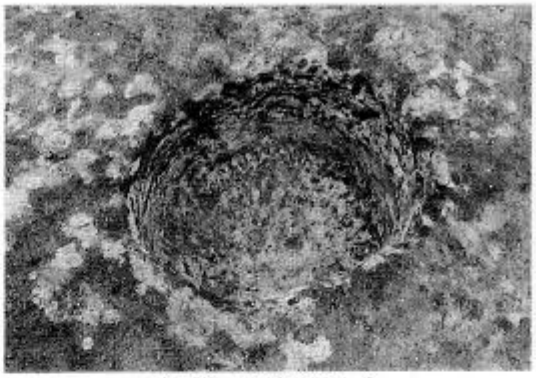
SK72　土層(東→)



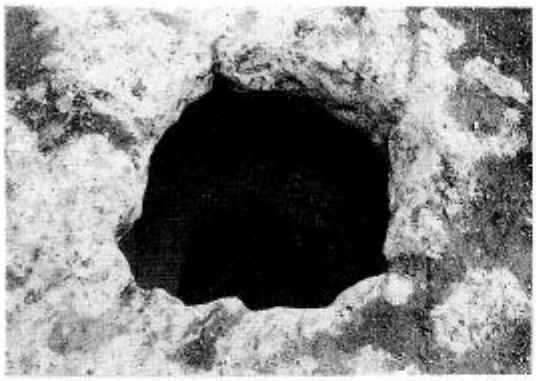
同左　完掘(東→)



SK73　土層(東→)

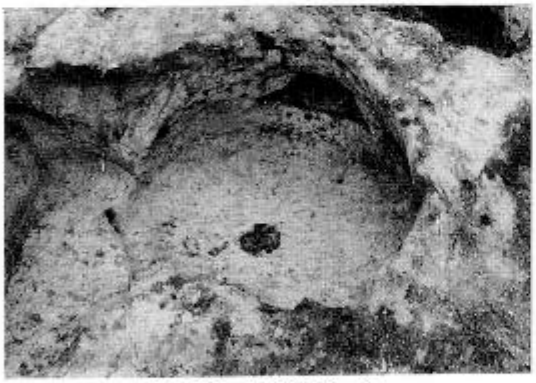


SK73　完掘(東→)



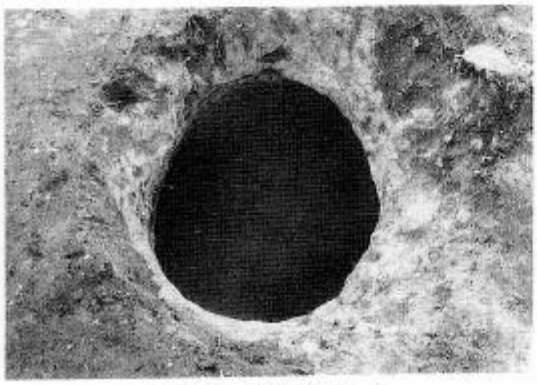
SK74　完掘(東→)

SK74･85　完掘(北→)

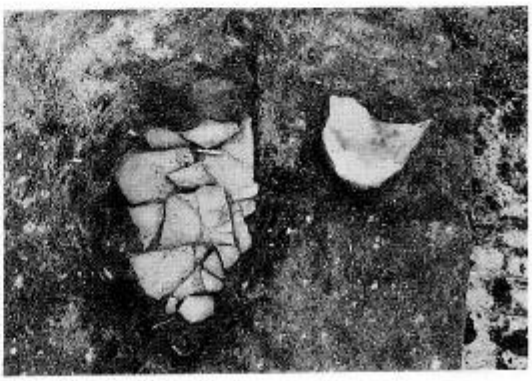


SK76　完掘(南→)

SK78　土層(東→)

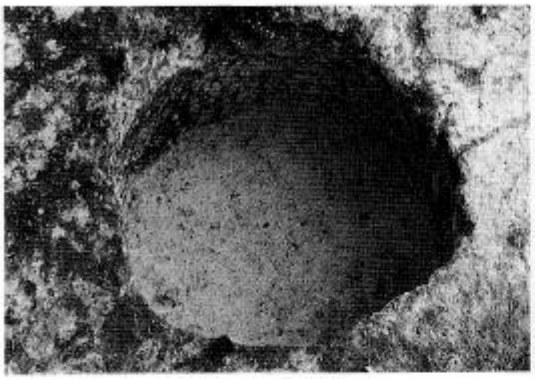


SK79　完掘(西→)

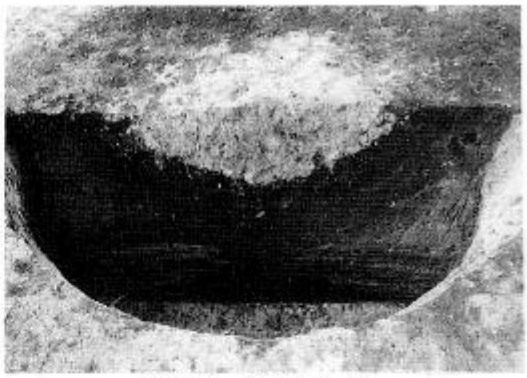


同上　遺物出土状況

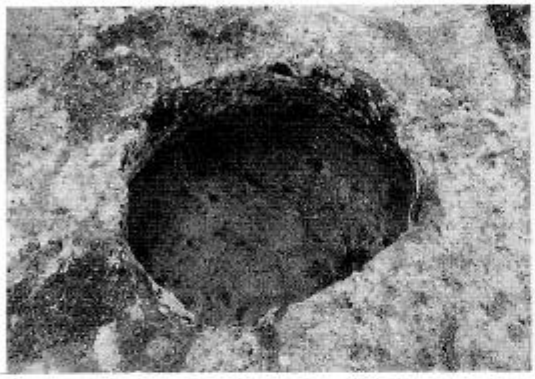
図版16



SK81　完掘(南→)



SK82　土層(東→)



SK84　完掘(北→)

SK90･97　完掘(北→)

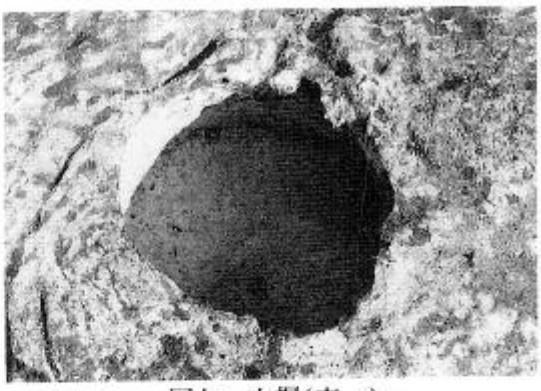
SK95　土層(東→)

同左　完掘(南→)

SK98　土層(西→)

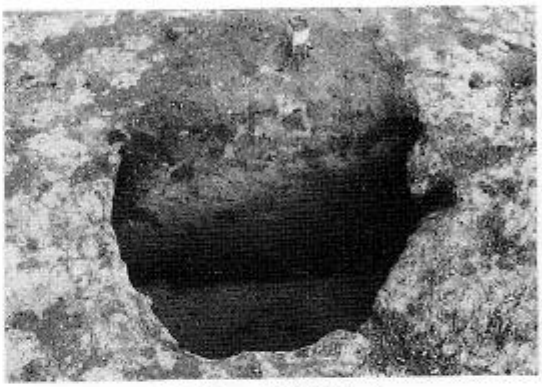
SK102　完掘(南→)

SK105　土層(南→)

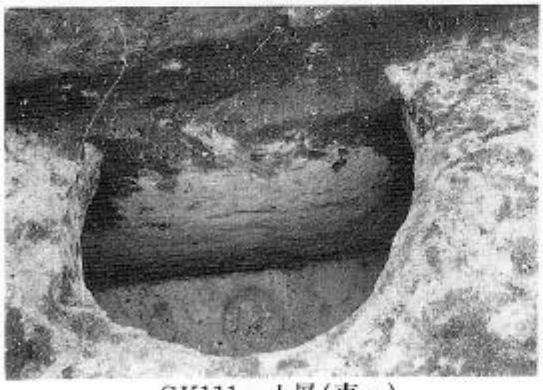


同左　完掘(南→)

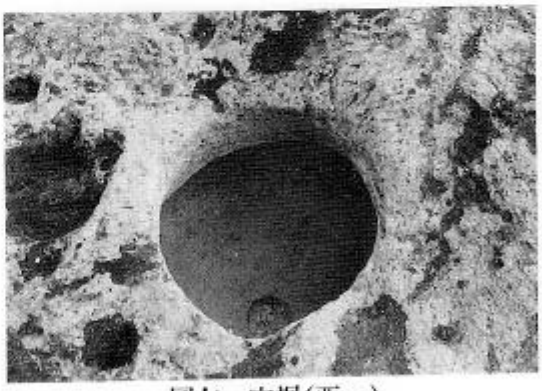
SK106　完掘(南→)



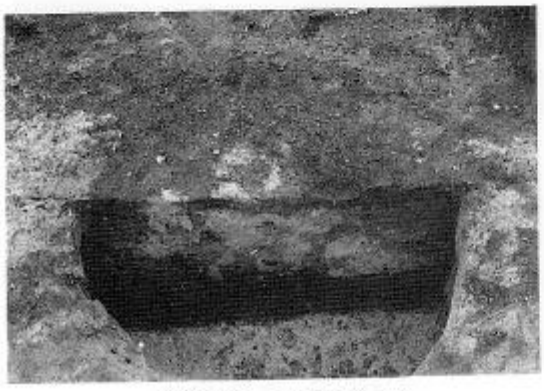
SK107　土層(南→)



SK111　土層(東→)



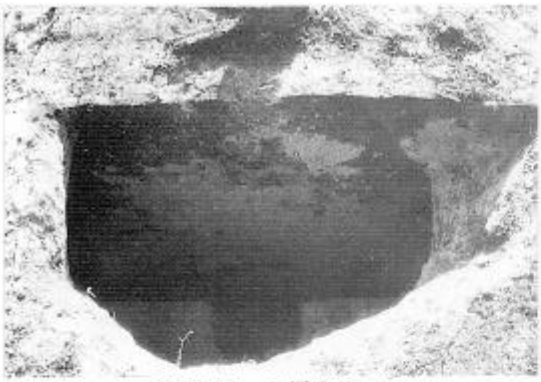
同左　完掘(西→)



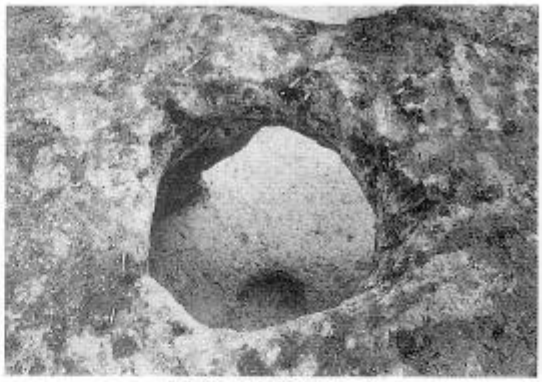
SK114　土層(東→)

同左　完掘(東→)

図版18

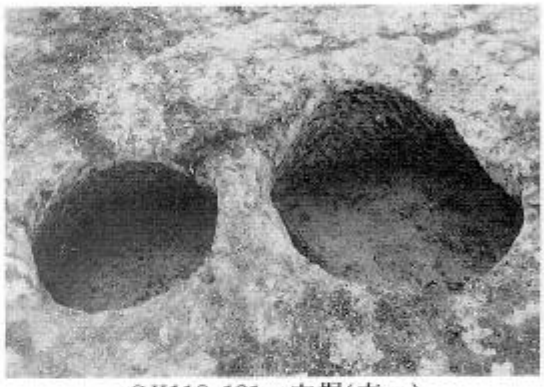


SK116　土層(西→)

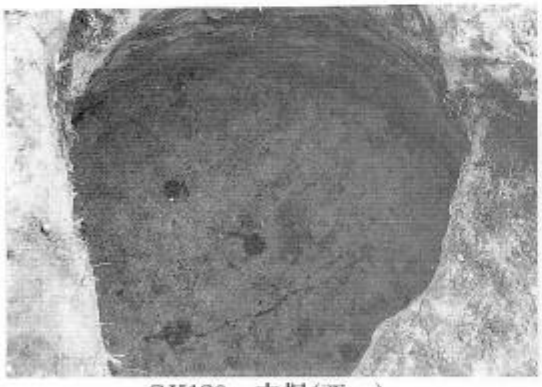


同左　完掘(北→)

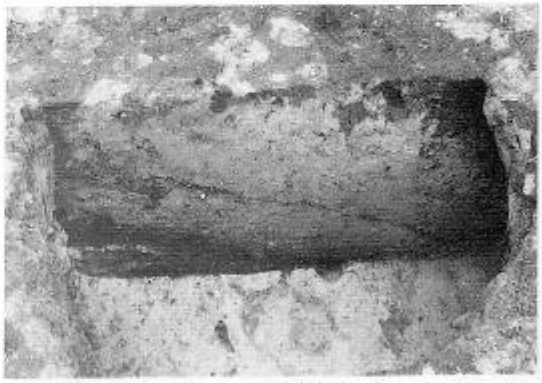
SK117　土層・完掘(南→)



SK118・121　完掘(南→)



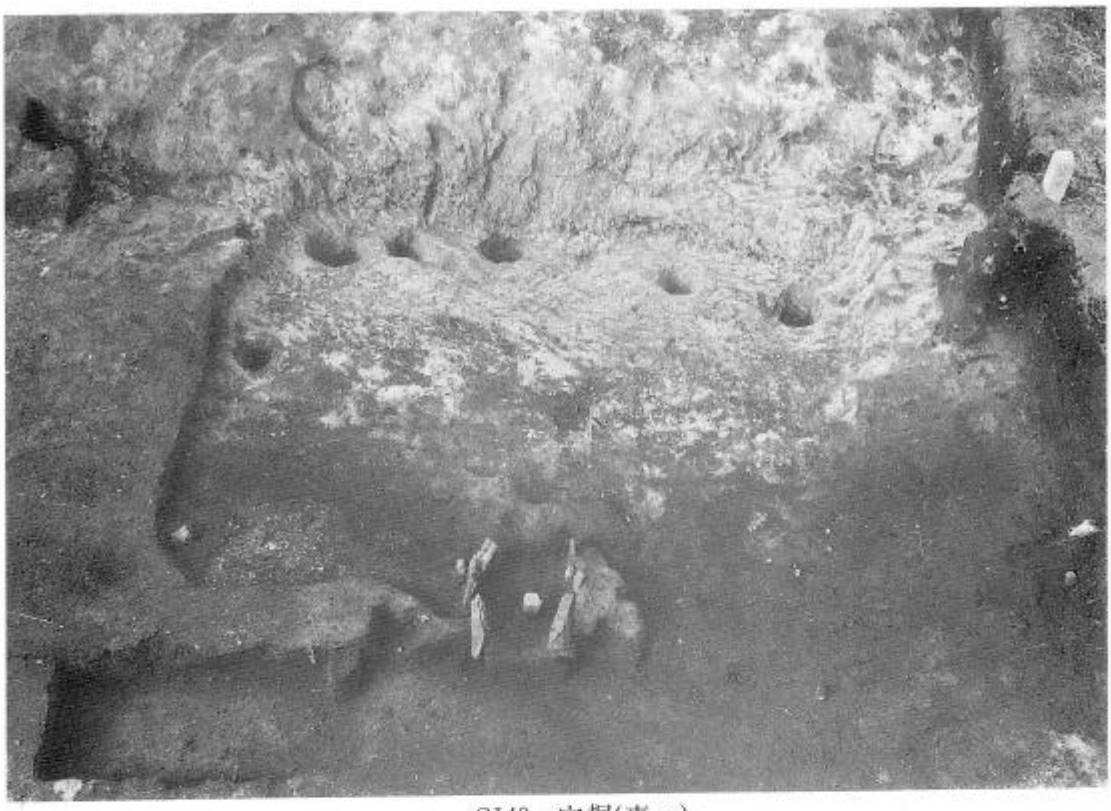
SK120　完掘(西→)



SK123　土層(西→)

SK124　完掘(南→)

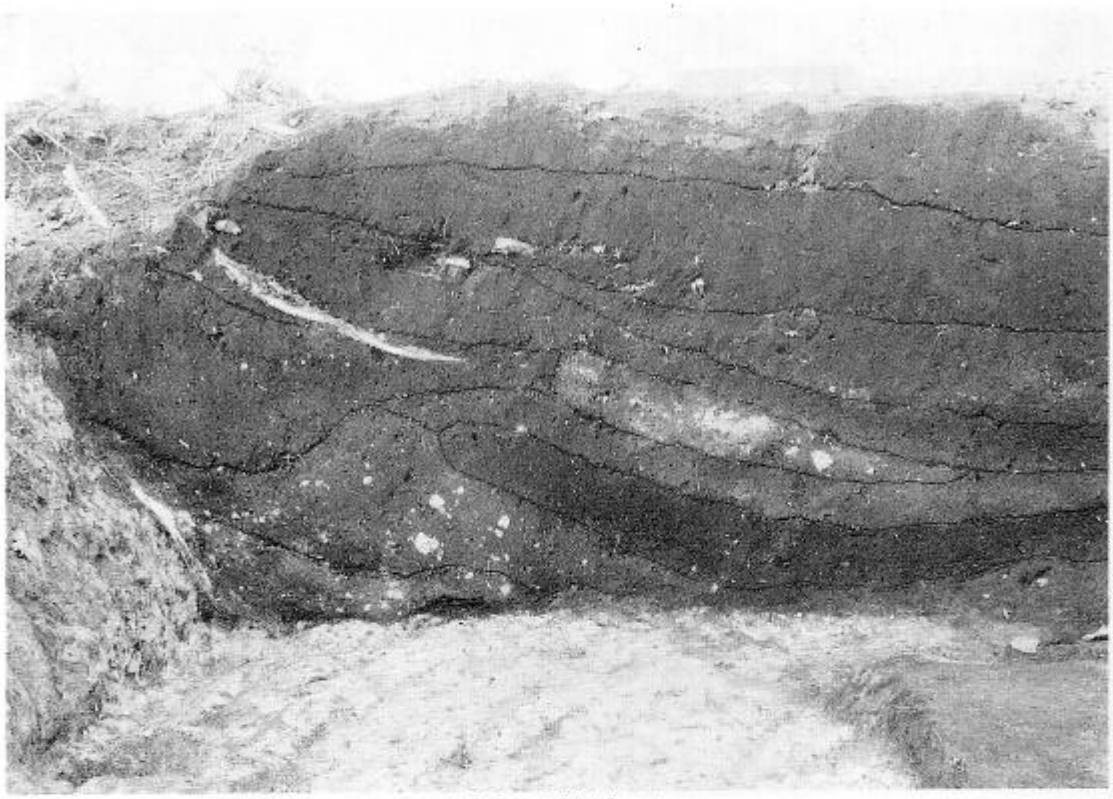
SD02・34　確認(南→)



SI40　完掘(東→)

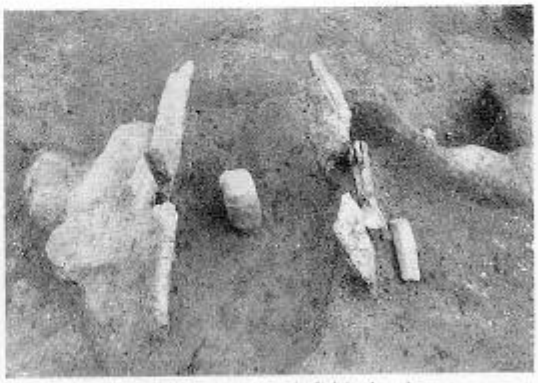
SI40　カマド及び遺物出土状況(東→)

図版20



SI40　土層(南→)

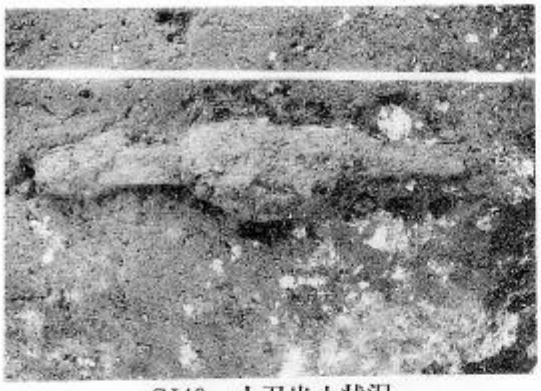
同上　カマド(南→)



同上　カマド完掘(西→)

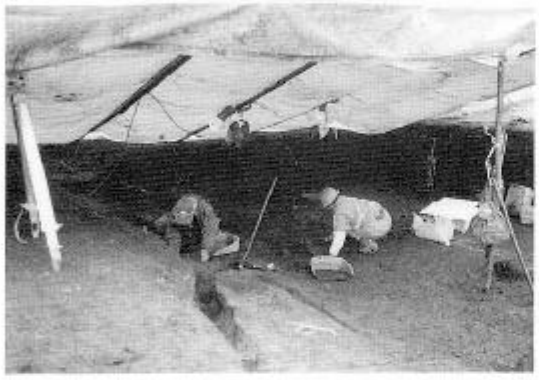
同上　遺物出土状況

同上　遺物出土状況



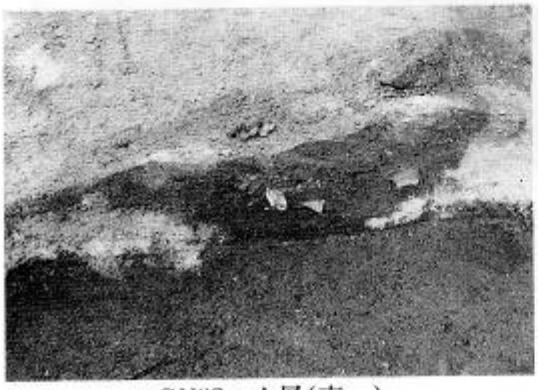
SI40　小刀出土状況

同左　炭化物出土状況

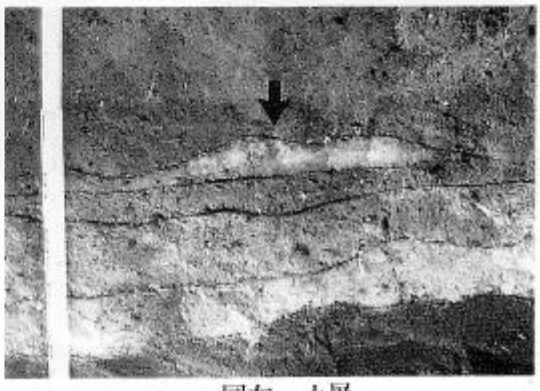


SI40　調査風景
この年は、天候不順の日が多く左のように例の屋根をかけて調査を行っていた。

SN38
擦文土器出土状況
擦文土器発見のきっかけとなった資料、撮影段階では「擦文」との認識はなかった。



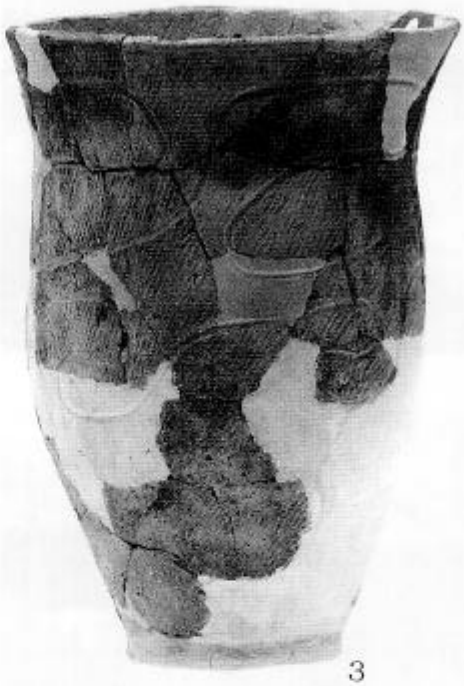
SN38　土層(南→)



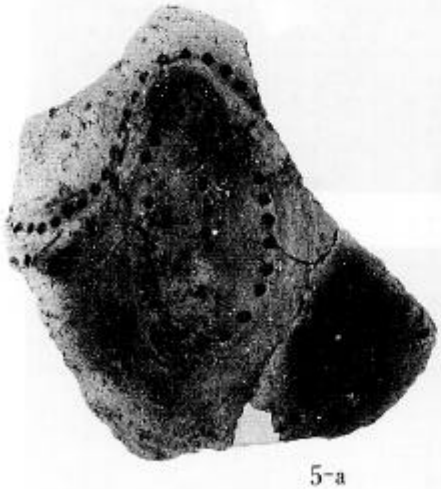
同左　土層

図版22

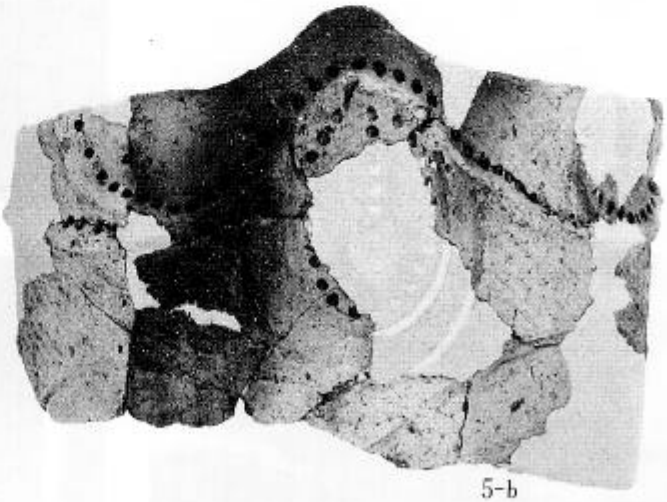
2



3



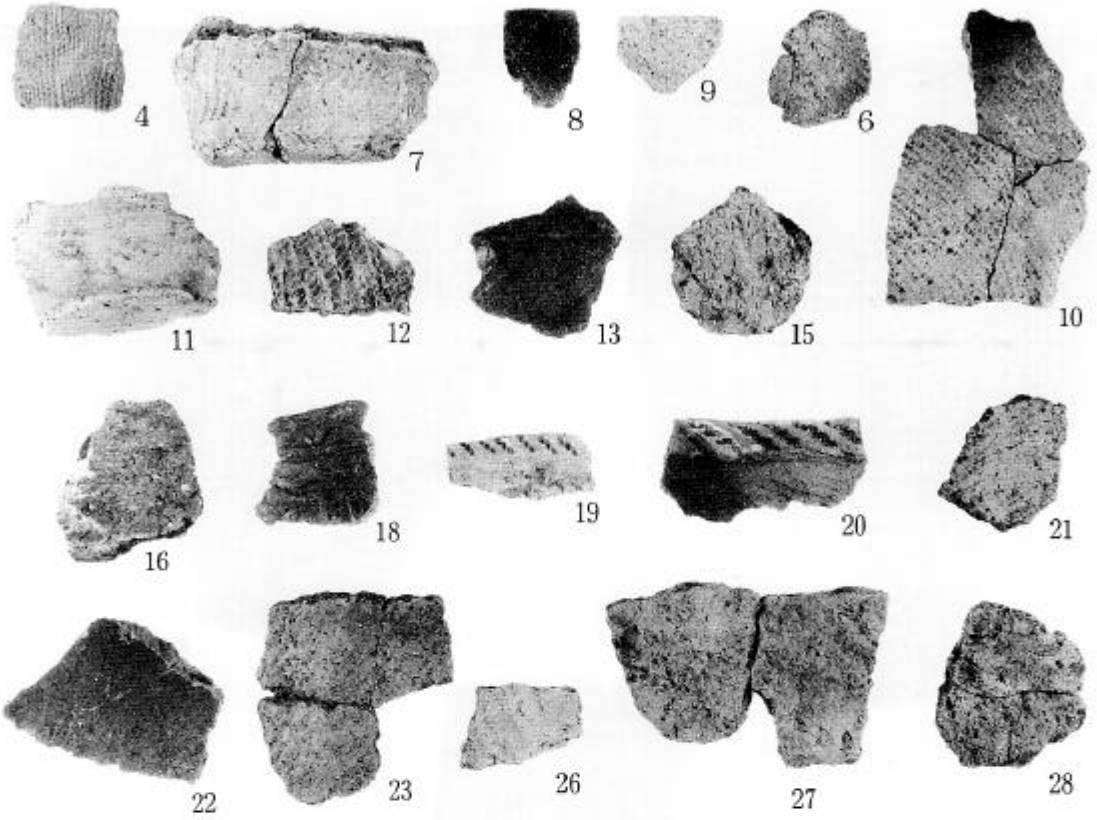
5-a



5-b

竪穴住居跡出土土器

2：SI01
3：SI10
5：SI18・19



1:SN65
4・7:SI10
6・8~10:SI18・19
11:SI80
12~23:SI110
26:SK81
27:SK82
28:SK99

遺構内出土土器

図版24

50

51

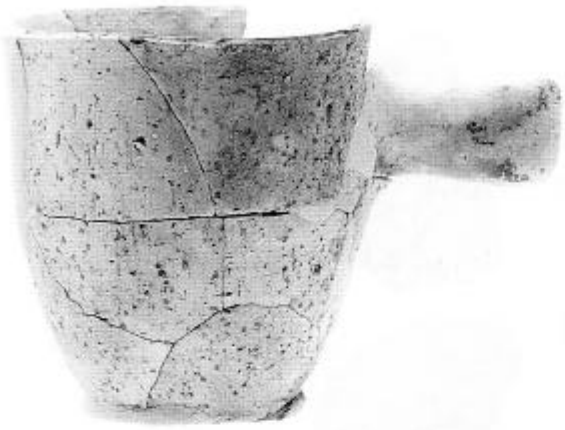
65

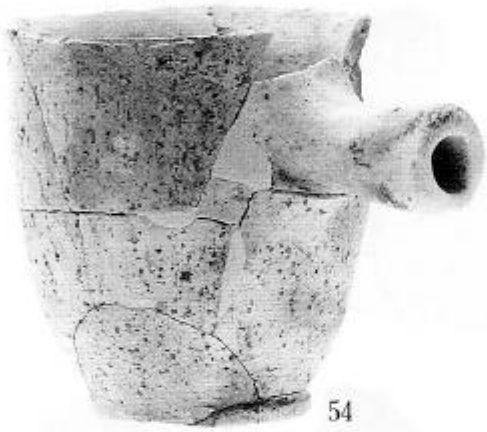
50・51・52：SI40
65：SN38
71：遺構外

52

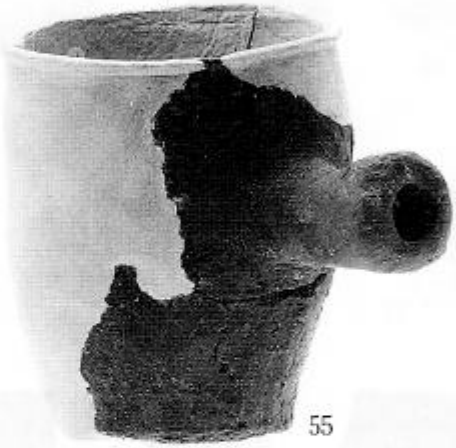
71

平安時代の遺物(1)





54



55

56

62

57

59

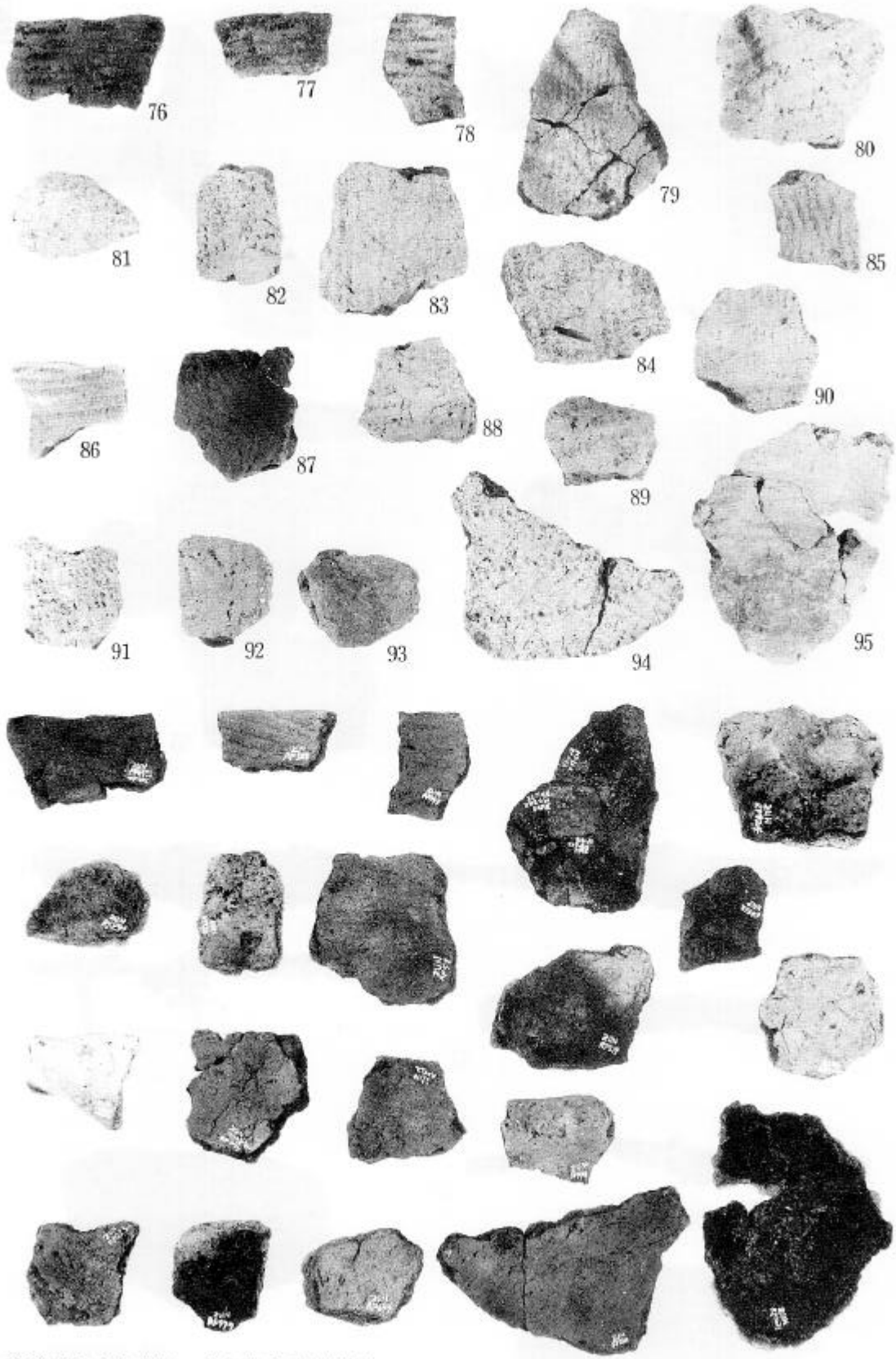
63

61

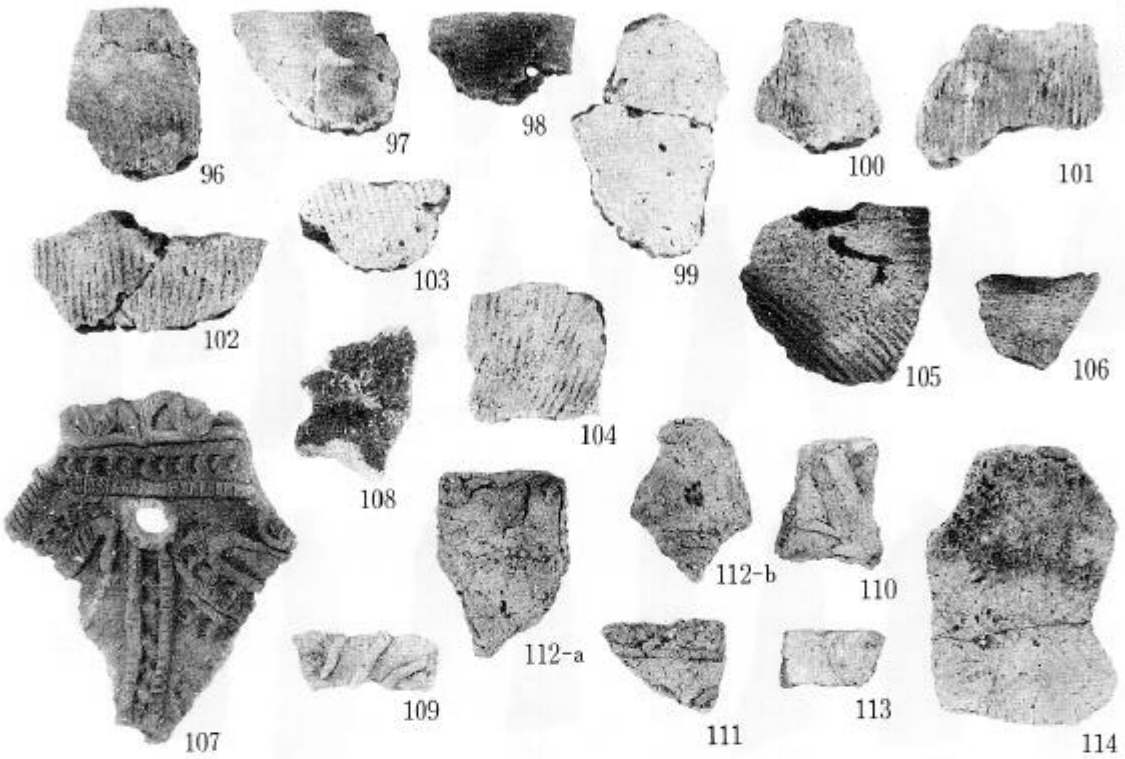
54～63：SI40

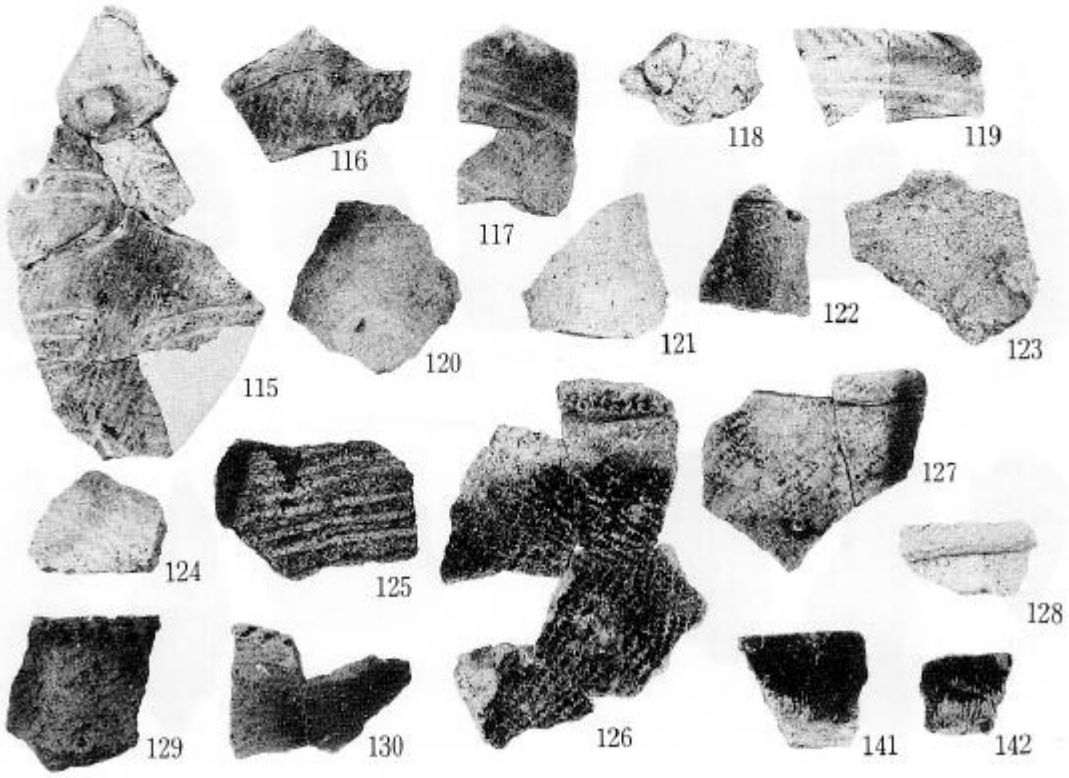
平安時代の遺物(2)

図版26



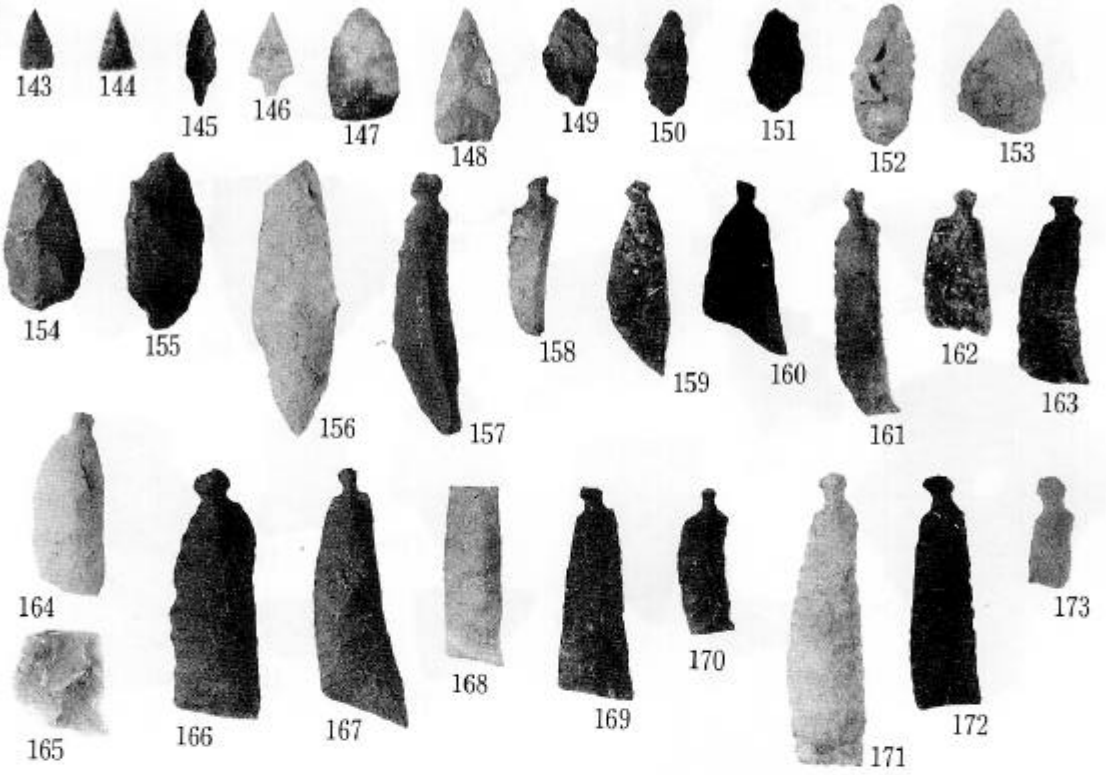
遺構外出土土器(1)　上(表面)下(裏面)

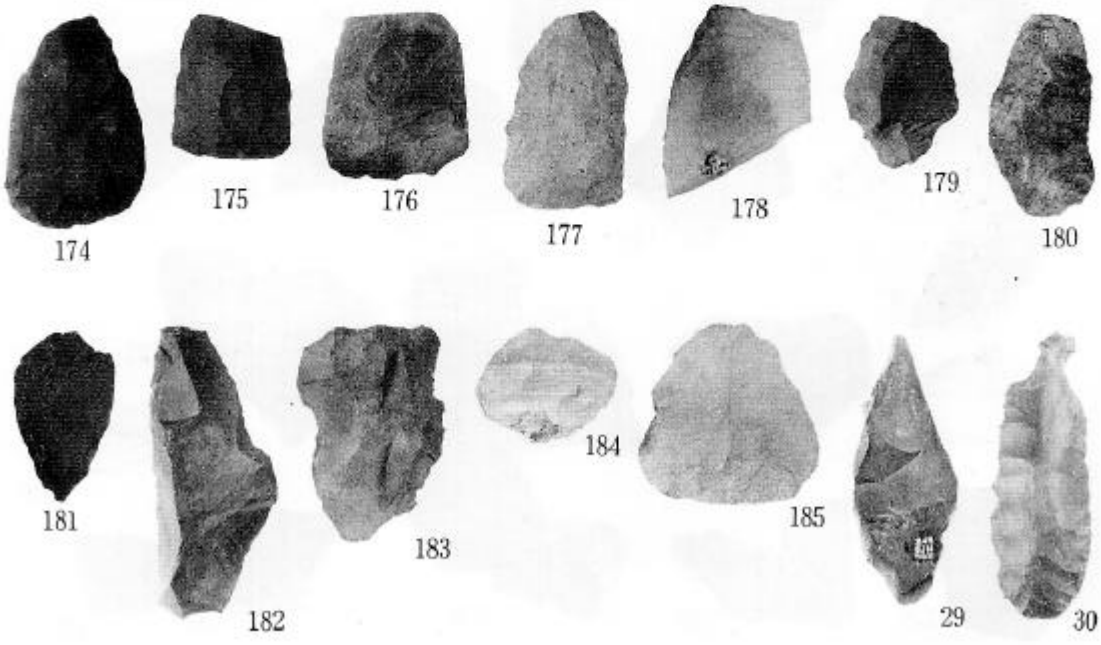

96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112-a
112-b
113
114


115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
141
142

遺構外出土土器(2)

図版28





29:SI01
30:SI110

遺構内外出土石器

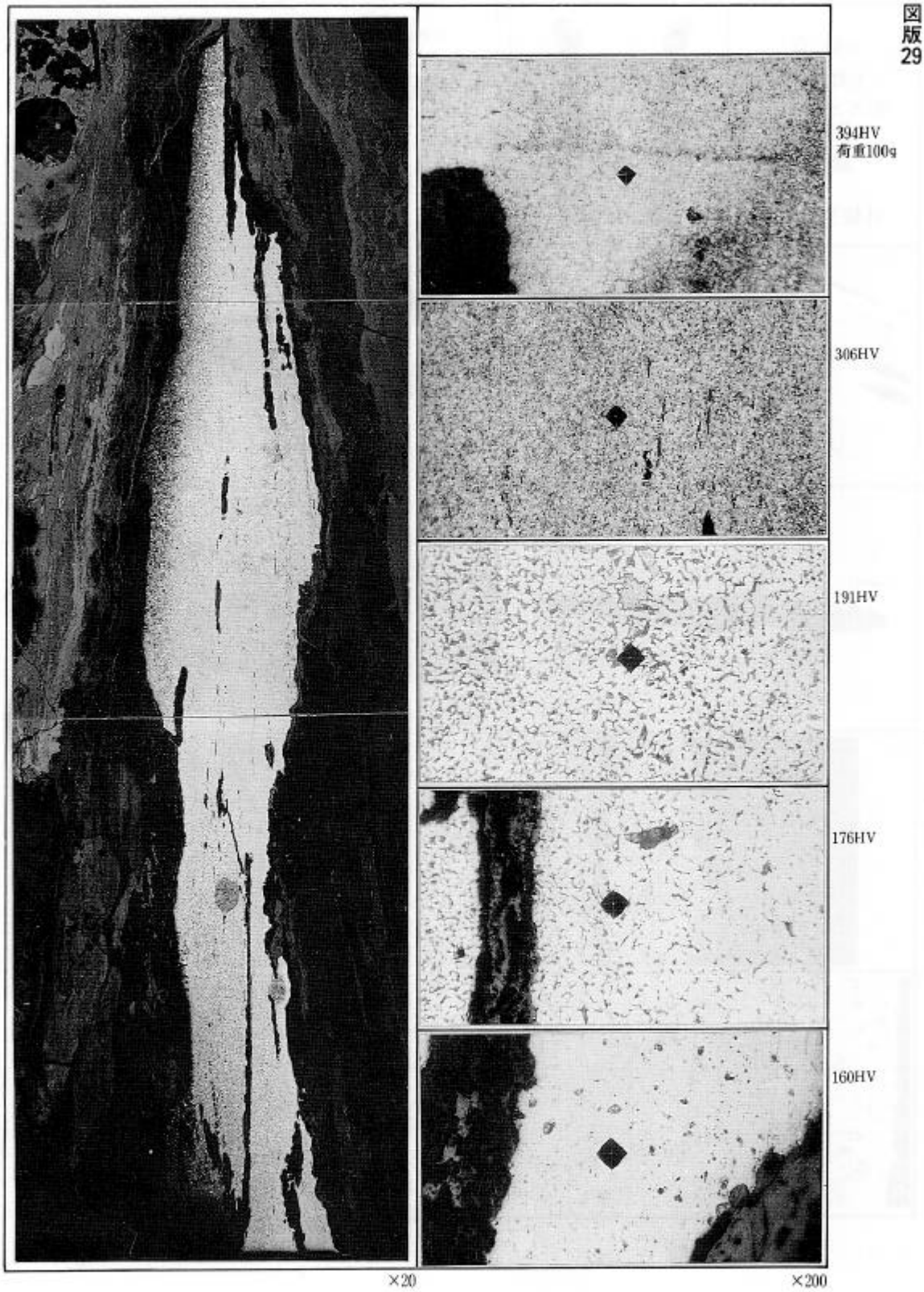


photo.1　上野遺跡出土鉄器(RM-33)のマクロ組織とビッカース断面硬度圧痕

図版30

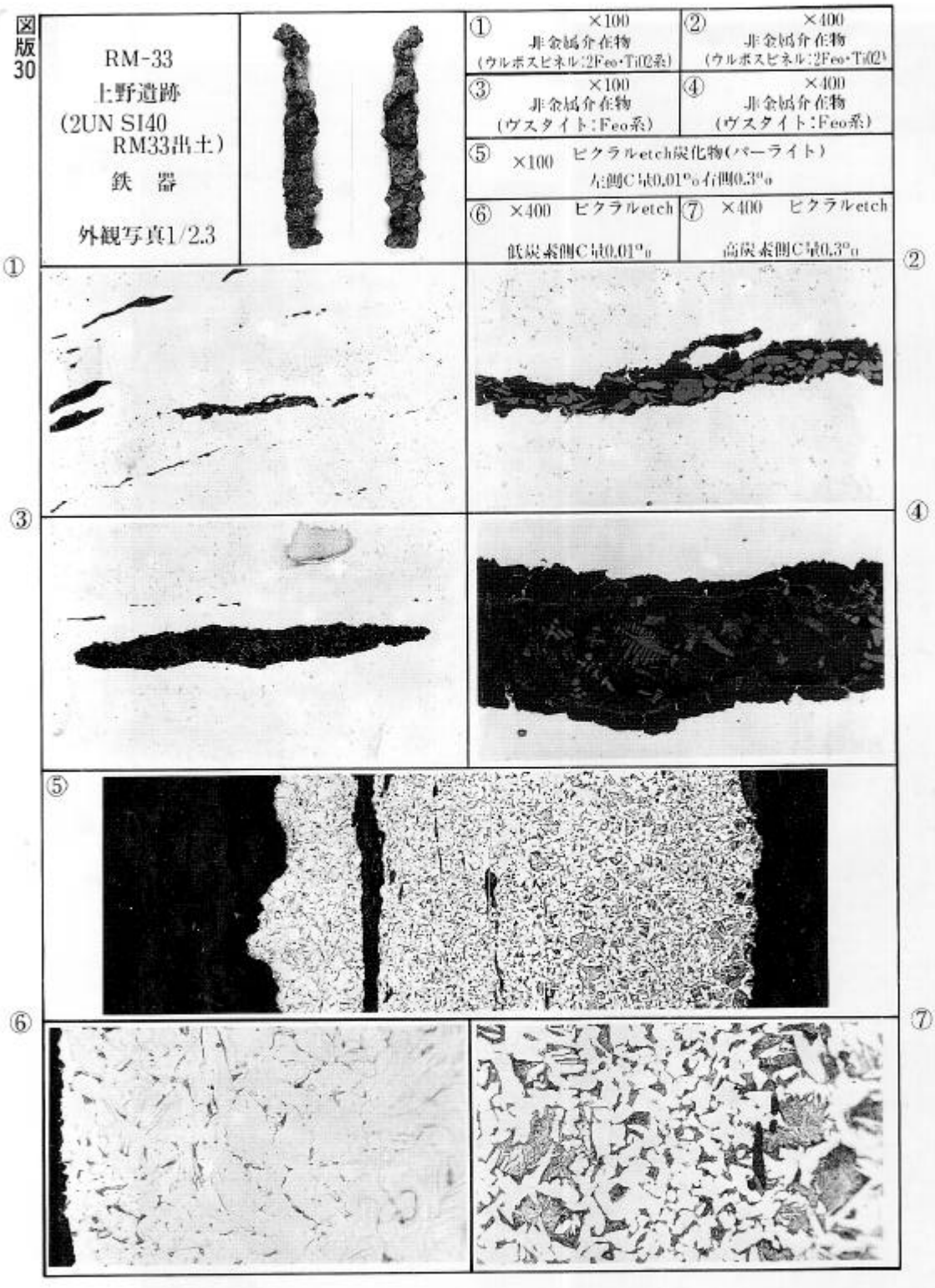


photo. 2　上野遺跡出土鉄器(RM-33)の顕微鏡組織